

おうみはちまん市民大学講座 シリーズ 地域学習講座

歴翁が語る わが郷土（まち）の歴史と文化

「こんなこと知ってる？意外と知らない近江八幡」

近江八幡市民としては、これだけは知っておきたいこと

～改めて知る、歴史と文化を中心にした幻の「近江八幡歴史検定」の話題～

秀次倶楽部会員

西川 秀夫



歴翁が語る「こんなこと知ってる？意外と知らない近江八幡地域学」

これだけは知っておきたい 近江八幡市の歴史

～改めて知る歴史と文化を中心にした「近江八幡歴史検定」の話題～

はじめに

「歴女」という言葉があるが、歴翁とは歴史好きの女子ならぬ、爺をもじったものだが、なぜ、このようなことを書いて残そうと思ったかについてお話しします。余談ですが「爺」とは、「旦那」とか中国では「ターレン 大人」の意味です。

私が生涯学習課にいた時、課内の話し合いのなかで「近江八幡検定」をしようということになりました。なぜかという、最近の事ですが、ある若い職員（もう中堅といえる方）と雑談をしていたとき、愕然としました。あまりにも近江八幡市の文化とか歴史を知らなすぎるのです。八幡城主の豊臣秀次のことは知っていても、二代目八幡城主の京極高次や「瓶割り柴田」の異名の源となった長光寺城主であった柴田勝家を知らないのです。もちろん今昔物語の安義橋の鬼女説話なども当然知りませんでした。（生まれも育ちも）近江八幡市の住民であるにも関わらずにです。あまりにも市民としての常識の範疇（雑学も含む）を知らなさすぎますし、ましてやリーダーとなるべき市の職員なのですが……。もっとも、私も旧安土町の部分が弱く、それはお互い様かもしれませんが。……そのことについても、旧近江八幡市と旧安土町が合併して3年になりましても、いまだ市内の色々なことをお互いよく知らない職員や市民もたくさんいます。そこで、私が所管していた生涯学習課では、わがまちの再発見とまちの活性化にも寄与することを目的として生涯学習（中央公民館）事業で「ご当地検定」事業の実施について検討することにしました。検定試験を実施することにより、世代を超えて文化歴史等を学ぶ機会を提供するとともに、市民の地域に対する意識向上を図っていこうと考えました。さらに近江八幡市の魅力をあらたに発見し、深く勉強しようと思っておられる方々にも活用していただけるように作成し、全国にも発信していきたいと思っておりました。なぜ、今頃ご当地検定なのか？と思われる方もあろうかと思えます。検定ブームは、もう去り、いまは全国的に低調になっているといわれています。しかし、問題は、そんなことではないのです。そこで、近江八幡市で、せめて今の市民には、私たち世代の常識といわれる知識レベルを維持してもらいたく、また、すぐ下の後継世代の方から次の世代にも伝えてもらいたいという思いが近江八幡市検定を企画した動機となりました。（これ本音です。）検定こそ一番手っ取り早い方法で知識を伝えられます。もちろん検定前には事前の対策講習会をすることも（計画に）折込済みでした。

私としては、安土宗論や安土セミナリヨの意味、また秀次事件の真相、なぜ信長が平氏なのか、新町通りの八幡商人の事績など、市民が歴史と文化をお互いを知る（勉強する）よい機会（これこそが生涯学習だと思うのだが……）だと考えたのです。

なにぶんにも、滋賀県は、京都・奈良に並ぶ遺跡の多いところですよ。近江八幡近辺にし

ましても、百濟寺に象徴されるように蒲生野周辺には百濟からの渡来人が住み、竜王には「ツヌガアラヒト＝天日槍アマルホコ」が引き連れてきた従者（技術者集団）たちが住み、弓削、須恵、鏡等の字名が残っている。苗村神社や「近江輿地志略」には、その縁起が残されている。信楽宮や天智天皇や弘文天皇の代には大津京まであったし、滋賀県には古くから開けていた土地なのである。平安時代には紫式部の石山寺や比叡山延暦寺、室町時代には佐々木六角氏や京極氏が近江を治めているが、足利家の内乱等で足利将軍が逃れてきたりしている。戦国期になると、織田信長が安土に城を築くと共に、長光寺には柴田勝家、坂本には明智光秀、長浜には羽柴秀吉、彦根佐和山には丹羽長秀を配置するなど、一時期、京をしのぐ都市になりかけた。それも本能寺の変により露と消えるのだが、庶民は再び、八幡商人としてよみがえるのである。琵琶湖放送が作成した「近江風土記」（DVD 6 巻）を購入して観たが、いまでも見ごたえがあった。このように近江八幡という地は重層的に古代からの渡来文化のうえに長きにわたって朝廷のあった京都に近く、平安～室町から近代に至るまで政治の中心に近く、古代には近江王朝、戦国期には安土城もあったほどであるから、近江商人発祥の土台になったのではないかと想定・推察されるところである。

なお、記述の手法だが、ベースに「自作の近江八幡歴史検定」の問題を中軸に、それについての解説という方法で記述することにした。ある程度の問題は、ジャンル別に整理し近江八幡市を中軸に記述しているが、他の地域（ほぼ県内）にも言及していることもある。問題整理の段階で、関連する問題がジャンルに含まれない場合もあるので、そのことをご了解して、読み進めてください。

歴史に埋もれた近江八幡

- 1、近江八幡市民もよく知らない「安義橋の鬼」のこと
- 2、亡霊となって、この世をさまよう「豊臣秀次」とその近習たち
- 3、近江八幡の歌人は商人でもあった
- 4、今に伝わる「伊庭貞剛」の教訓
- 5、青い目の近江商人
- 6、姉と嫁のおかげで出世した京極高次
- 7、坂本竜馬の嫁と再婚したのは八幡商人だった
- 8、前野将衛門長泰（長康）は川並衆の蜂須賀小六正勝と同期入社
- 9、琵琶湖の浮城 水茎岡山城の攻防戦
- 10、沖島と蓮如上人
- 11、住蓮坊遺跡と首洗池
- 12、熊沢蕃山と中小森村
- 13、朝鮮半島と日本の関係～朝鮮人街道～
- 14、第六天魔とは仏様なのですか
- 15、旧芝川町西山（富士宮市）の信長の首塚
- 16、近江八幡と柴田勝家の関係

- 17、異形者秀吉と松下嘉兵衛の関係
- 18、織田信長の側室だった「お鍋」の方と「お鍋屋敷」
- 19、額田王の姉は鏡王女で藤原不比等の母である
- 20、海外雄飛の近江商人
- 21、湖国法城の八幡別院
- 22、近江八幡の春の火祭り
- 23、市内の干拓地の歴史
- 24、昔、組合立の蒲生中学校が近江八幡にあった
- 25、「三方よし」の教訓
- 26、近江八幡の金田教会で育った若林信康
- 27、初代全国水平社委員長の南梅吉氏のこと

第1章 歴史に埋もれた近江八幡

歴女も多く来幡しているが、まず住民自身が郷土を愛するなら、その自分の住んでいる地域の文化と歴史を知らなければいけないと思うのである。しかし旧近江八幡市と旧安土町が合併して3年になるが、いまだにお互いの郷土の歴史と文化を知らない住民が多い。そんな中、歴史と文化を中心に「近江八幡市歴史検定」をしてはどうかという話がもちあがったことがある。「ご当地検定」を何をいまさら、と言われる方もあった。しかし全国に誇れる近江八幡を知ってもらおうという意図（構想）は捨てがたく、ともかく自力でできることはやろうと思った次第である。

なぜ 信長は 安土に城を作ったのか。なぜ八幡山では なかったのか。なぜ、織田信長の周囲には「津田姓」がいるのか。・・・・・・・・近江八幡市検定の問題から 問題を提起していきたい。とりあえず、「幻」の「近江八幡市歴史検定問題」です。腕試しにやってみよう！

特に第1章は、織田信長、豊臣秀次とその周囲の関係者を中心にした歴史編にまとめてみました。佐々木六角氏の観音寺城（織山）も含まれています。

安土山と八幡山を実際に見比べてみると、安土山は 八幡山より低く、織山（観音正寺）とも地続きなのである。自分が滅ぼした六角氏の居城があった山である。

「集中講義 織田信長」小和田哲男著：より

1. 水辺の城； 快速船で京都への日帰りが可能
 2. 岐阜と京都との中間点； 中京と関西の経済圏の両方の支配には適地
 3. 交通の要衝だった； 中山道が通り、八風海道の分岐点がそばにある
 4. 当時の軍事的要請； 石山本願寺との敵対の一方、北陸道の敵に備えるため（観音寺城が安土城の詰め城に位置付けられるとの主張もある。藤田達生氏説の紹介あり）
- 尚、一説に「安土」という地名が気に入ったこと；「平安楽土」に通じるので、ということ。（小和田さんはこの説には疑問を呈している）

「考証 織田信長事典」西ヶ谷恭弘著

1. 大型船を安土城に直接横付けできた（戦略上、湖東と湖西を直線で結合可能）
2. 地理的要因； 上記の2，3と同じ
3. 石垣の山城を築くのに最適；石材地と石工職人の技術が安土周辺に豊富に存在した。

◎ 山斜面を造成可能な山だった； 急斜面石垣が防塁になる

4. 観音寺城を安土城の詰め城に想定； 小和田さんの4項に通じる
5. 京の旧来の権力と距離を置き、冷静な判断と諸勢力との対応が実行できる
6. 安土山には守護佐々木・六角氏の祖先を供養する寺院をはじめとする寺社と霊域である

最近市内にも多くの観光客が八幡山・八幡堀を中心に増えてきた。日曜日などは観光客で溢れている。当然、近江八幡市は商人の街でもあり新町通りがメインであるが、八幡の城下町を作った「豊臣秀次」公と八幡山を抜きにしては語れないと思う。最近の傾向として地域活性化支援で日本全国で町おこしのために「ご当地武将隊」が多く結成されている。

ご当地武将隊で有名なところでは、イケメン揃いの名古屋おもてなし武将隊をはじめ、ふくしま八重隊（会津福島）・・・今度のNHK大河ドラマを狙ったものか。

熊本城おもてなし武将隊（熊本市）・・・ゆるキャラ「くまもん」も観光に一役

信州上田おもてなし武将隊（長野・上田市）・・・真田幸村と十勇士

風林火山甲斐の虎武将隊（甲府市一帯）

金沢百万石武将隊（金沢市）

丸亀城バサラ京極隊（丸亀市）

長久手歴史トラベラーズ（長久手町）

土佐おもてなし勤皇党（高知）

岐阜城盛り上げ隊（岐阜市）

岐阜おもてなし武将隊 信義徹誠軍（岐阜市）

関ヶ原東西武将隊（関ヶ原町、大垣市）

グレート家康公「葵」武将隊（岡崎市）

忍城おもてなし甲冑隊（埼玉・行田市）・・・のぼうの城でクローズアップ

越後上越上杉おもてなし武将隊（上越市）

山形おきたま「愛」の武将隊（米沢市）

白石戦国武将隊 奥州片倉組（白石市）

奥州仙台おもてなし集団 伊達武将隊（仙台市）

松江若武者隊（松江市）

安濃津戦国武将隊（津市）

ここから・・・女性ユニット・・・

長浜歴ドラ隊（長浜市）

あいち戦国姫隊（名古屋）、戦国武将隊姫隊（岐阜市）

まつえ舞姫隊（松江） などである。

新たな「まちおこし武将隊」が結成されていない他の都市においても氏郷まつり、彦根城まつり、光秀まつりなど既存の甲冑武者行列で武者隊ができているところは大阪城甲冑隊や上田甲冑隊をはじめとたくさんある。旧安土町においても「あづち信長まつり」を京都の高津商会など時代劇貸衣装専門店で借りて武者行列を実施してきたところであるが、今回新たに安土町観光協会では信長の南蛮胴具足1領を買いそろえたということも安土町観光協会の副会長から聞いたところである。「あづち信長まつり」に近江八幡の観光物産協会として、甲冑を着ての参加は歓迎とのことであり、両者でジョイントの行列イベントは可能である。これからは年2回（6月安土、11月八幡）は行列イベントを中軸にしての観光アピールで観光客の呼び込みが可能である。

全国的にも甲冑行列の戦国まつりは「ひこね城まつり」「小谷城ふるさと祭り」「長浜出世まつり」や亀岡市と岐阜県明智町の「光秀まつり」甲府市一帯の「信玄公まつり」などあるが、秀次や近江八幡に関係する武将の祭りだけでも、福井市の「越前時代行列（柴田勝家）」と「越前朝倉戦国まつり」ほか「上田真田まつり」、「大和郡山お城まつり（豊臣秀長）」「秋月・黒田武者行列（黒田孝高）」「上杉まつり」「青葉まつり（伊達政宗）」「蘭丸まつり（岐阜・可児兼山）」「姫路お城まつり（黒田・豊臣・池田）」「岐阜信長まつり」「名古屋まつり（信長・秀吉・家康）」「津まつり（藤堂高虎）」「熊本お城まつり（加藤清正）」「忍城時代まつり（石田三成）」「氏郷まつり（松阪市）」「丸亀バサラ祭り（京極高次）」「川内はんや祭り（島津氏、鹿児島・川内市）」「関ヶ原合戦まつり（関ヶ原町）」などがあり、その中のいくつかともジョイントできるのではないだろうか。当市夫婦都市の富士宮市においても（市町合併で）「信長の首塚」（西山本門寺）があることから11月（11日）に「信長公黄葉まつり」（商工会）がされている。そのことから富士山と琵琶湖の交流だけでなく、「信長公」での交流も今後はできるのではないだろうか。さらに、今「ゆるキャラ」の「らんまるくん」（安土）も「ひこにゃん」と一緒に全国的レベルでの有名人となっており、全国交流の展開も可能となろう。

そのような状況の中、いま近江八幡市においても、「豊臣秀次」公の見直しの機運があり、秀次倶楽部や郷土史会、資料館友の会、観光ボランティア協会、観光物産協会の皆が期待しているものに武将「豊臣秀次」公としての復活がある。

そこで、企画提案①であるのが、「秀次公」甲冑武者隊の創設である。当初の甲冑購入費に経費がかさむだけで、武者行列のイベントなどは、（観光協会等の）人がいれば即OKである。むしろ公募したら甲冑を着たい人が殺到すると思われる。

「秀次公」武将隊のメンバーは、家臣として、池田恒興、最上義光、真田幸村、田中吉政、山内一豊、中村一氏、木村重滋、前野長泰、舞兵庫（若江八人衆・・・義父三好康長・笑巖の居城東大阪の若江城時代からつけられた秀次の近侍のこと）、藤堂良政（若江八人衆）、森九兵衛（若江八人衆）、安井喜内（若江八人衆）、大場土佐（若江八人衆）、大山伯耆（若江八人衆）、牧野成里（若江八人衆）、高野越中（若江八人衆）、秀次と共に殉死した小姓の玄

隆西堂、山本主殿、不破万作、山田三十郎、雀部淡路守。秀次の叔父・兄弟には、豊臣秀長、豊臣秀勝（浅井の江の夫）、豊臣秀保、仲の良かった大名では、藤堂高虎、毛利輝元、堀尾吉晴、伊達政宗、細川忠興、浅野長政がいる。仲が良かったのかは分からないが秀吉の下で共に育った者として、福島正則、加藤清正、石田三成、大谷吉継、加藤嘉明がおり、また叔父兄弟の豊臣秀吉・秀長・秀勝・秀保をとりまく関係武将としては、丹羽長秀、佐々成政、蜂須賀小六、仙石秀久、一柳直末、森忠政、筒井定次、黒田孝高、長宗我部元親、小堀遠州、桑名重晴、島津義弘、島津家久、小早川秀秋、また二代目八幡城主の京極高次公関連では、妻お初の妹お江、姉の茶々姫（姫たちの戦国）関連では徳川家康・秀忠、織田信雄、織田秀信、豊臣秀吉、がいる。さらに 2 代目の弟の京極高知、嫡男の京極忠高、同僚の朽木元綱も関係者であろうし、島左近や前田慶次郎、直江兼続も登場願うところである。武将以外では千利休や雑賀衆も関係者である。

以上のこれら、関係者の武具甲冑の全部を取りそろえるのは大変であり、現存していない甲冑もある。そのため現在、丸武産業、サムライストアなどの武具屋で、当面取りそろえられる武将甲冑を購入するという案はどうか。

安土城址から、天気の良い日に遠望したことを思い出すと、確かにいいロケーションです。それも天主の上からなら、なおさらです。では、・・・・・・検定問題から始めましょう。

*解答欄は①～⑤の 5 問から 1 個だけ解答番号を解答欄□に書く。出題はアトランダムでジャンル別に整理できていません。

【歴史編】

1、近江八幡市民もよく知らない「安義橋の鬼」のこと

問題 1；鬼退治の源流とされる「今昔物語巻第二十七」本朝付霊鬼「近江國●橋鬼喰人語第十三」に出てくる鬼が出る橋はどこに架かっている橋ですか。市内にあります。1984 年にはその橋に出没するという鬼を退治に出かけた侍たちを描いたもので「今昔物語」の「○橋の鬼女」を映画化した「○○・鬼神の怒り」という中村久美、伊武雅刀などが出演している映画が造られています。若干ストーリーは羅城門の鬼に似ているが、こちらが源流です。ご存知ですか。

- ① 竜王橋 ② 岩倉橋 ③ 安吉橋 ④ 日野川橋 ⑤ 弓削橋

解答・・・・③ （倉橋部から竜王へ行く所の日野川に架かる橋・・・・安吉橋）

<解説>

「今昔物語集」の巻 27 第 13 には、安義（吉）の鬼の話が出てきます。「鬼が出るという安義橋へ駿馬に乗って行った男が、女に化けた鬼に会い、追われたものの逃げ帰る。その後、弟に化けて家にやってきた鬼を入れてしまつて男は鬼に喰い殺されてしまう。」と

いう物語である。この今昔物語に出てくる安義橋の鬼こそ、現在、馬淵学区にある安吉橋のことです。学生時代に今昔物語の中にこの鬼の話があって、まさか地元のことを記されていたなんて、とっても感動しました。この安義の鬼は、全国的にも羅城門の鬼と同じぐらい有名な鬼なのであります。映画にもなったことがあり、現在ではビデオ化されており、レンタルビデオ屋でも手軽に借りられます。関心のある方は、一度ご覧下さい。いまや鬼はマイナーな存在ではありません。大江町では酒吞童子を、岡山では桃太郎伝説と温羅（うら）の鬼伝説を、また茨木童子（羅城門の鬼の名）を中心とした町おこしが全国的にも有名ですが、本市の安義の鬼も、他の鬼説話と匹敵するぐらいの鬼なのです。全国的にも誇ってもいいと考えます。

「今昔物語集」は『今昔物語』と略称されることもあるが、本来は「集」が付く。「今昔物語集」の成立年代と作者は不明であるが、日本だけでなく中国・インドの三国の約 1000 余りの説話が三部（天竺部、震旦部、本朝部）で構成され収録されている。各部では先ず因果応報譚などの仏教説話が紹介され、そのあとに諸々の物話が続く体裁をとっている。『今昔物語集』という名前は、各説話の全てが「今ハ昔」という書き出しから始まっている事から由来している。巻 1 から巻 20 までは、仏教に関する説話で、釈迦や菩薩、法華経などの譚で構成されており、巻 21 から巻 31 は本朝世俗部であり、芸能や怪異譚、動物、恋愛、歌物語などが盛り込まれている。そのうちの巻 27 本朝付霊鬼（変化・怪異譚）に、今回の「安吉（義）橋の鬼」の話が入っている。作者は、誰が書いたか編纂したか分からないが、年代的には白河法王～鳥羽法皇の院政時代に成立したものではないかと推察されている。「今昔物語集」の話はすべて創作ではなく、他の文献（例えば竹取物語、日本霊異記）の引き写しもあると考えられているが、本朝世俗部の話には典拠の明らかでない説話も多く含まれるため、伝聞に基づき構成されたものもあったかもしれない。後世の説話文学の代表といわれる「宇治拾遺物語」にも影響を与えたとされる。また、「今昔物語集」から題材をとった、芥川龍之介の「羅城門」「鼻」は有名である。「今昔物語集」の特徴としては、よく似た物語を二篇（ときには三篇）続けて紹介する「二話一類様式」があげられるため、今回の「安義橋の鬼」も芥川龍之介の「羅城門」とよく似たストーリーとなっている。現在、竜王町字庄と近江八幡市倉橋部町の間の日野川に架かる橋は「安吉橋」と呼ばれ、「あんきちばし」と呼ぶ人もいるが、正規は「あぎばし」である。近江八幡市倉橋部町には「安吉」という姓の家があり「あぎ」と読むそうであるからして「あぎばし」が正解であろう。

今は昔のこと・・・で始まる「今昔物語」（平安時代末期に作られた説話文学）に近江八幡市のことが載っているのを見つけたのは、私が大学一年の頃だと記憶している。そのときは、我が故郷にも「今昔物語」に出てくる有名な場所があったのだと感激したものだった。「近江国安義橋」というのは、近江八幡市倉橋部と竜王町に架かる日野川の橋の名前で現在は「安吉（アギ）橋」と書かれている。今でも倉橋部町には、私の妻の恩師で今は民生委員をされている安吉（アギ）〇〇氏という方がお住まいになっている。あるとき妻

と安吉先生の話になったとき冗談で「鬼の子孫かもしれんで」といったら大層怒られた。そのときまで妻は「今昔物語の安義橋の鬼」の話を全然知らなかったらしい。妻は竜王町の林（安義橋から二つ目の在所）の出であるにも係わらずにである。またこのことは市役所に入ってから周辺の職員に尋ねても、全然しらなかった。それで「こりゃダメだ」と職員には何も期待もせず、その話はもうあきらめてしばらくせずにいた。ところが、あるとき市史編纂室の亀岡氏となんの話か忘れたがしていたら（おそらく馬淵の奇面踊りのことからだと思う）、安義橋の鬼の話がでた。さすがに亀岡氏は知っていた。（当然といえば当然であり、知らなかったら市史編纂を担当する資格を疑うところである）そのとき、「安義の鬼」の映画があるのを知ってるか。と聞いてみたら、さすがにこれもあることは知っていたが、見たことがないとのことであった。私は、すでにレンタルビデオでこの映画を（偶然だが）見ていたので、少し優越感をもった。亀岡氏も八方手配したが手に入らなかったらしい。私もネット検索を試みたがアマゾンでも在庫切れで無かった。（私が見たのは「レンタルビデオつたや」が堀上町にあった時で今はなくなっている。後日談だが、VHFの映画だがアマゾンで入手しました。）この映画は、早川光氏の監督・脚本で「アギ・鬼人の怒り」といった題名の1984年作品で、中村久美、伊武雅刀、天本英世などそうそうたる俳優陣が出演している。物語の舞台は近江国安義橋であるが実際は京都府八幡市にある木津川に架かる「流れ橋」をロケ撮影したものである。映画の内容（ストーリー）としては、次のようなものであった。

平安も末期の頃、近江国にある安義の橋に鬼が出没するという噂があり、誰もそこへ行こうとする者はいなかった。近江守の郎党たちは、太郎が美しい妻を持っていることをねたみ、彼をあおり鬼退治に行かざるを得なくする。太郎は馬に乗って安義の橋へ行く。そこで美しい女に姿を変えた鬼に遭遇、馬を殺され、命からがら逃げ帰って来た。床に臥している太郎の所へ、弟が尋ねてくる。しかし、この弟、本当は鬼で、太郎は惨殺されてしまう。近江守は太郎の死を聞くと怒り、郎党たちを鬼退治にさし向ける。太郎の妻は夫の復讐のため、同行を願い出るが断わられて家へもどり、はした女に姿を変えていた鬼にやられてしまう。安義の橋についての郎党たちに鬼がとりつき、彼らは互いに斬り結ぶ。朝がきて、生き残った郎党は一人だけだった。

本当の「安義橋の鬼」の内容を知らない人には、「今昔物語」の口語訳本をお勧めしておく。また、最近では、安部清明の「陰陽師」ブームではあるが、作家の夢枕獏氏の作品にも「安義橋の鬼」のリメイク版ともいえるべき作品が収められている本（「七つの怖い扉（新潮文庫）」「ものいふ髑髏」）があるので、お読みいただければ幸いです。私は聞いたことはないが講談でも旭堂小南陵氏が「安義橋の鬼」を語っているということである。

昔は、このあたりは「安吉郷」と呼ばれていたところである。そこで、もう少し、安義（安吉とも書く）のことにふれておきたい。余談ではあるが、近江八幡が大島郷、舟木郷、桐原郷といわれていた当時（和名抄）蒲生郡内の九郷の一つとして安吉郷があり、安吉郷内には倉橋部村、上畑村、弓削村、東川村、西川村、信濃村、須恵村の七村があったという。したがってこれら村内を流れる日野川を安吉川とも呼ばれていた。また舟木郷は琵琶湖の湖上交通において造船や船頭とのかかわりが深い。そのため早くから郡内の主要な港

としての機能を有しており、この舟木郷と安吉郷を結ぶ白鳥川は主要な水路であったと考えられる。また陸路についても湖岸道路と中山道（東山道）を結ぶ白鳥街道（白鳥川の水路沿い）は古代から湖東における主要道路であった。その（蒲生郡）政治の中心にこの安吉郷があったと思われる。またその安吉郷内の中心的位置にあったのが倉橋部町であった。滋賀県の遺跡地図でも現倉橋部町には倉橋部遺跡（古墳）、倉橋部廃寺跡（寺院跡）、安吉社古墳群（古墳群）、栗木山古墳群（古墳群）が確認される。しかし、この地が倉橋部という地名を有することから大化の改新以前の部民制に係わりがあったことにも留意する必要がある。さて安吉郷や安吉（安義）橋の名の元になった安吉氏は何者なのか。これは研究者の間では百済系渡来人であったとされている。大化改新政府が白村江の戦い以降、渡来人を近江国蒲生郡（安吉郷）の開墾に入植させたとある。倉橋部町には「唐畑」「上唐畑」「下唐畑」の地名が残っている。吉士長丹が安吉郷に食封200戸を得たとの記述もある。いずれにせよ「姓氏録」で見ると、近江の古代豪族「安吉氏」は秦系氏族の系譜につらなるもの（伊香我色男を祖とするともいわれる）とされ、狭狭貴山君（観音寺山）や日触礼臣（日牟礼・八幡山）羽田氏（雪野山古墳）と同時代（7世紀～8世紀）に活躍したと理解する。（「続後記」に承和七年（840年）九月、安吉郷出身の安吉勝真道が美濃国司に任命されたとある。）いずれにせよ、天智天皇などの蒲生野での狩猟行は安吉氏などの渡来人の勢力を背景に行なわれていたことは想像に難くない。そうした背景があって、「今昔物語」に「安義橋の鬼」が登場するようになったのではなかろうかと推察するものである。

なお、余談だが、同じ『今昔物語集』巻二十八第二話には、公時（坂田金時のこと）、貞道、季武の三人で加茂祭りの見物に出かけ、初めての牛車に三人ともひどく乗りもの酔いをした語が収録されている。源頼光と四天王（坂田金時に、渡辺綱、平貞道、卜部季武の三人を含む）が大江山の酒呑童子を退治に行く話は有名である。坂田金時（金太郎）はよく赤い童形で表されるが山姥が山の上で眠っていた時、夢の中で赤い竜が雷鳴とともに訪れた。目が覚めると身ごもっていて、それが金太郎であった。という生い立ち伝説（山姥の子ども）が残されている人物である。その出身には、諸説あるが滋賀県の坂田郡の出身であったという説が有力である。幼名は金太郎、二十一歳の時、刀鍛冶として働いていたが頼光に見いだされ（坂田郡の金太郎から）、坂田金時と名付けられた。三十六歳のときに酒呑童子退治に加わった、とされている。長浜市では、坂田金時は坂田郡の人であると伝えているが今も長浜市には足柄神社や芦柄神社が何カ所もあり、子ども相撲が今も連綿と行われている。なお、この地域は古代豪族息長氏の本拠地であり、金時はその一族であるという。王の文字はマサカリの象形文字で、腹掛け姿は鍛冶を象徴することから、いち早く鉄文化を手に入れた豪族というものである。なお、今に伝わる「金太郎物語」は、それ自体は江戸時代にできた物語だといわれている。

2、亡霊となって高野山（この世）をさまよう「豊臣秀次」とその近習たち

問題 2；江戸時代、上田秋成によって執筆された「雨月物語」の中には、高野山を舞台にした「仏法僧」という物語がありますが、登場する亡霊は誰れでしょうか。豊禅閣ともいわれ出家させられたうへの無念の切腹であったと聞いています。7月15日が命日です。

- ① 木村常陸介・重成親子 ②羽柴秀勝 ③木下秀俊 ④豊臣秀次と小姓 ⑤千利休

解答・・・**4**

<解説>

秀次公の話が書かれた「雨月物語」とは江戸時代、上田秋成という人物によって書かれた怪異小説集です。明和五年(1768)には完成していたと言われており、その後幾度か推敲が重ねられ、安永五年(1776)に刊行されました。その書名の由来は、序文にもある「雨霽月朦朧之夜」に由来します。その文章は読まれたことがなくとも、高校で習う文学史には必ずと言って良いほどその名が出てくるので、知っている方も多いと思います。ただしそれがどんな作品なのか、と問われれば、答えられる人は限られてくるでしょう。

『雨月物語』は九篇の小説から成る短編集です。具体的な作品名を記せば、「白峰」、「菊花の約」、「浅茅が宿」、「夢応の鯉魚」、「仏法僧」、「吉備津の釜」、「蛇性の姪」、「青頭巾」、「貧福論」がそれに当たります。

九篇に共通することと言えば、やはり「怪異」を扱っているという点が挙げられます。怖さの程度は様々なのですが、生霊、死霊、蛇精、金霊、魔王などなど、この作品では数多くの怪しい存在が跋扈し、時には人間を死に追いやったり、また時には議論を繰り広げたりと、それぞれが種々多様な振る舞いをします。この作は読本（文章を主体とした読み物）の先駆的作品と呼ばれていますが、それが実は怪異小説であったとなると、意外に思われる方も多いかも知れません。

しかし、いくら怪異小説の元祖だからとは言え、それが優れたものではなければ今日「古典」として認知されるわけがありません。本書を古典的名作たらしめるのは、やはり文章にあると思います。

そのうちの「**仏法僧**」は、時を江戸時代に設定している。：（物語のストーリー）伊勢国の拝志夢然というひとが隠居した後、末子の作之治と旅に出た。色々見て廻ったあと、夏、高野山へと向った。着くのが遅くなり、到着が夜になってしまった。寺でとまろうと思っただけで寺の掟によりかなわず、霊廟の前の灯籠堂で、念仏を唱えて夜を明かすことに決めた。静かな中過ごしていると、外から「仏法仏法（ぶつぱんぶつぱん）」と仏法僧（ぶ

っぷおそうという鳥の名)の鳴き声が聞こえてきた。珍しいものを聞いたと興を催し、夢然は一句よんだ。・・・「鳥の音も秘密の山の茂みかな」

もう一回鳴かないものか、と耳をそばだてていると、別のものが聞こえてきた。だれかがこちらへ来るようである。驚いて隠れようとしたが二人はやって来た武士に見つかってしまい、慌てて下に降りてうずくまった。多くの足音とともに、烏帽子直衣の貴人がやってきた。そして、楽しそうに宴会をはじめた。そのうち、貴人は連歌師の里村紹巴の名を呼び、話をさせた。話は、『風雅和歌集』にある弘法大師の「わすれても汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水」という歌の解釈に移っていった。紹巴の話が一通り終わった頃、また仏法僧が鳴いた。これに、貴人は、紹巴にひとつ歌をよめ、と命じる。紹巴は、段下の夢然にさきほどの句を披露しろ、といった。夢然が正体を聞くと、貴人が豊臣秀次とその家臣の霊であることが分かった。夢然がようよう紙にかいたのを差し出すと、山本主殿がこれをよみあげた。「鳥の音も秘密の山の茂みかな」。秀次の評価は、なかなか良いよう。小姓の山田三十郎がこれに付け句した。「芥子たき明すみじか夜の牀」。紹巴や秀次はこれに、よく作った、と褒め、座は一段と盛り上がった。

家臣のひとり、淡路(雀部重政)が急に騒ぎ出し、修羅の時が近づいていることを知らせた。すると、いままでおだやかだった場が殺気立つようになり、みな顔色も変ってきている。秀次は、段下の、部外者のふたりも修羅の世界につれていけ、と配下のものに命じ、これを逆に諫められ、そのうち皆の姿は消えていった。親子は、恐ろしい心地がして、気絶してしまった。朝が来て、二人は起き、急いで山を下った。後に夢然が瑞泉寺にある秀次の悪逆塚の横を通ったとき、昼なのにもものすごいものを感じた、とひとに語ったのを、ここにそのまま書いた、という末尾で物語をしめている。

一般に伝わる「豊臣秀次」公の概歴はこうです。

豊臣秀次は豊臣秀吉の甥、関白。永禄11年に秀吉の姉・ともの子として生まれ、幼い頃は宮部継潤や三好康長のもとへ養子として送られた。信長の死後は秀吉の数少ない縁者として重用される。賤ヶ岳の戦いに従軍して武功を上げ、小牧・長久手の戦いでは弱冠17歳にして三河侵攻の別働隊の大將となるが、徳川勢の奇襲を受け大敗してしまう。この戦いで軍勢はほとんど壊滅し、池田恒興や森長可まで討ち死に、秀吉からは叱責を受けた。しかしその後の四国攻めでは戦功を挙げ、近江国蒲生郡に43万石を与えられている。小田原の役では山中城攻めの大將として城を半日で陥落させ、尾張・伊勢100万石の領地を与えられた。葛西・大崎一揆や九戸政実の乱にも功があり、秀吉の実子・鶴松が3歳で病没すると養子となって関白を継ぐなど、とんとん拍子で出世していく。しかし秀吉に二人目の実子・秀頼が生まれると状況は一変する。鶴松の死去により、もはや子は生まれまいと踏んで甥の秀次を後継者に選んだのであるから、実子が再び生まれた以上、秀次は邪魔者でしかなかったのである。文禄4年、秀次は謀反の疑いをかけられ切腹

を命じられ、その首は京都三条河原に晒された。一族はおろか多数の家臣や妾に至るまで殺されたという。その晩年は酒色に溺れ、農民を鉄砲の的にして撃ち殺す、妊婦の腹を裂くなどの非道を繰り返し「殺生閔白」と恐れられたと伝わる一方、宣教師からは「穏やかで思慮深い」人物として賞賛されるなどその人物像は一定しない。

もう少し、詳しく秀次公について述べてみると・・・・・・・・

豊臣秀次公（豊禪閣と呼ばれた）が高野山で切腹させられたのが旧暦七月十五日、木村重茲、前野長泰、明石則実ら家臣も連座して賜死しています。八月二日には秀次公の家族ら三十九名が処刑されました。……これを「秀次事件」と云いますが、秀次公粛清の理由には様々な説があります。

豊臣秀次公の謀殺・千利休の切腹・豊臣秀長の病死・豊臣秀保の事故死の一連の事件の裏には、秀吉の無茶な「朝鮮出兵」（文禄・慶長の役＝壬辰倭乱・丁酉倭乱）に反対したから、殺されたという説もある。もしそうだとすれば朝鮮人街道を地名に持つ近江八幡市民としても「秀次」公と壬辰倭乱との関係も見過ごすことはできません。現代に生きる私たちは、長い年月の史実のなかで、どれだけ信憑性をもって語るができるのでしょうか。新たな発見や調査によって、多くの史実が判明する一方で、誰もが信じて疑わなかった歴史認識が、大きく変わってしまうことも珍しくありません。

歴史書といわれる書物のなかには、時の権力者によってねじ曲げられた史実が伝わっているのも多く、近年、歴史研究家たちによって、史実としての信憑性に多くの疑問が投げかけられています。誰もが信じて疑わなかった歴史年表も実は、新たな発見とともに書き換えられてきたものです。今後も様々な理由によって、さらなる見直しが行われることもあります。すでに周知の事実としてとらえられている事象に関しても、その事実が覆らないとも限りません。史実として認知されている出来事さえ、後世の人々による創作や潤色されたものかもしれないのです。豊臣秀次公もその一人です。・・

「殺生閔白」とされた豊臣秀次公の歴史認識を、様々な資料（図書）を読みながら多角的に検証してほしいと思っています。

豊臣家と豊臣秀次公を滅ぼした原因は「秀吉」の朝鮮侵略という無謀な野望だった……という説があります。これは 私が最も有力視する仮説です。

実際 秀吉—三成—（鶴松） 秀頼—淀—ライン（侵略派）と

秀長—（秀保）（秀勝・お江の二番目の夫）—千利休—秀次—ライン（侵略反対派）の 確執で、反対派が粛清され、かくして文禄の役（壬辰倭乱）、慶長の役（丁酉再乱）が起きたのです。このことが原因で、豊臣家子飼いの大名による確執の結果（誤算）が形として現れたのが「関ヶ原合戦」であるといわれています。秀長（病死）秀保（事故死）そして、千利休・切腹の謎。秀次謀反説も「殺生閔白」説も秀頼を後継にしようとする秀吉側のでっちあげで、秀長・千利休という後ろ盾を亡くした秀次が（後継）争いに敗れた結

果の汚名（濡れ衣）であることはまちがいないだろう。

歴史に if は ないが、もし秀長—千利休—秀次が生きていれば「壬辰倭乱」は起こらなかった。と言われている。この侵略反対派のラインの家臣団には、藤堂高虎、前野長泰（武功夜話）、木村常陸介、田中吉政、山内一豊、など層々たる面々が揃っているし、彼らを取り巻く仲間となる大名では、伊達政宗、最上義光、細川忠興、浅野幸長、毛利輝元。公家では菊亭晴季とその一門につながる真田昌幸・幸村などがいる。秀次公の家臣にも、異色の浅井長政の落し種といわれる浅井井頼や近江佐々木六角家の生き残りの六角義郷がいる。もし、秀次公が生きておれば、彼らの活躍も期待でき、関ヶ原も徳川幕府の日の目も無かったのではないだろうか。そして、無謀な朝鮮侵略や太平洋・大東亜戦争もなかったのではと・・・・・・・・・・悔やまれる・・

名君と謳われながら、秀吉の老醜と石田三成の奸計（最近、石田三成の評価が見直され、三成自身は秀次を庇っていたという人もある。実際、秀次の切腹後、彼の家臣を多く取り立て仕官させ、家臣はその恩に報いるため関ヶ原では西軍に加わり多くが三成と共に戦死している事実がある）により、無念の一生を閉じた豊臣秀次公。暴君論は果たして真実なのか？秀次公の切腹以後、秀吉を正当化する史料だけが残った。だが厳正な検証から、城下繁栄や学問・芸術振興における秀次公の功績が認められ、思慮・分別と文化的素養を備えた人物像が浮かび上がってくる。そして秀吉の後継者・関白の地位に就くも、汚名とともに処罰された謀反事件。それは豊臣政権の主導権争いの結末だったといわれる。秀吉の政治的戦略に翻弄された犠牲者であり、引き立て役として歴史上も否定され続けた「殺生関白」の悲劇。その復権にも挑んでみたいと思います。はたして秀吉への謀反は真実だったのか。史料を厳正に検証する中で浮上してきた冤罪説。歴史的に否定され続けた「殺生関白」の復権に挑んでみませんか。この「秀次事件」は後年の「関ヶ原合戦」に大きな影響を与えたとされています。もう一度、そういった目で「豊臣秀次」公関連の図書を読み直してみませんか。ひとつの提案です。

豊臣秀次公と壬辰倭乱の関係を検証する

私ごとですが、このたび、妻のお許しを得て、豊臣秀次公＝“豊禅閣”（←関白になった人が職を子に譲った者を“太閤”と言ひ、出家した者を“禅閣”と敬称します。秀次公は関白職を剥奪され、高野山に入山して出家しています。）が愛用したという「甲冑（朱塗黒糸素懸威二枚胴具足）」を入手しました。本物は現在は東京のサントリー美術館に所蔵されており、これはその甲冑のレプリカです。具足の兜は、烏帽子形兜で獅嚙（しそう）の前立と焰（ほむら）の脇立が付いています。胴は、朱漆である。正式には、兜は、『獅嚙前立焰脇立朱塗兜（しかみまえたてほむらのわきたてしゅぬりかぶと）』と云います。甲冑の重さは全部で25キロだそうです。もちろん鉄製です。有名な戦国武将の甲冑であるから高かったのですが、今しか入手できないと思い、思い切って買ってもらいました。最近2度程、着用する機会があったので、着用しました。私が既に購入していた甲冑も立派だと思ったのです

が、やはり前立てや脇立てが付いている甲冑は迫力が違います。値段相応ということでしょうか。思い切って購入してよかったです。では甲冑話はそれとして、秀次と朝鮮侵略の関係を検証してみたいと思います。余談ですが最近、私は市役所の同期の者5人で韓国の麗水万博に行ってきました。李舜臣の水営（水軍基地）があったところです。ソウルや釜山はいつでも行けるので、この機会に行ってきました。やはり期待通り亀甲船などの複製がありました。では・・・本論です・・・

豊臣秀次公（高野山で出家した秀次は『豊禅閣（ほうぜんこう）』と呼ばれています←関白になった人が職を子に譲った者を“太閤”と言い、出家した者を“禅閣”と敬称します。秀次公は関白職を剥奪され、高野山に入山して出家しています。が、7月15日には切腹を命じられています。）について、調べるなかで、朝鮮との関わりで 政権交代劇があったと記されている書がありました。そこで、もう少し詳しく 調べてみることにしました。それというのも、「殺生関白」という悪名を付けられ、出家までさせられながら、謀殺された「秀次」公の実像とは、どのような人物だったのか。秀吉を出世太閤記などと呼ばせたのは明治になってから日本帝国が大陸侵略に利用しようとしたからであり、いまは、その神通力も薄らいできており、その対極にあった「秀次公」の評価が見直されてきているからである。そこでもう一度、秀次公のことを検証してみようと思った次第である。通常戦国時代の常識でも、叛乱した武将も出家すれば、罪は許されるはずなのだが、この「秀次事件」は当時の常識からしても異常である。そこで、江戸時代に朝鮮通信使が通った朝鮮人街道の地名を持つ近江八幡市民としても、改めて彼にまつわる歴史評価を検証してみることにしました。

現代に生きる私たちは、長い年月の史実のなかで、どれだけ信憑性をもって語るができるでしょうか。新たな発見や調査によって、多くの史実が判明する一方で、誰もが信じて疑わなかった歴史認識が、大きく変わってしまうことも珍しくありません。

歴史書といわれる書物のなかには、時の権力者によってねじ曲げられた史実が伝わっているのも多く、近年、歴史研究家たちによって、史実としての信憑性に多くの疑問が投げかけられています。誰もが信じて疑わなかった歴史年表も実は、新たな発見とともに書き換えられてきたものです。今後も様々な理由によって、さらなる見直しが行われることもあります。すでに周知の事実としてとらえられている事象に関しても、その事実が覆らないとも限りません。史実として認知されている出来事さえ、後世の人々による創作や潤色されたものかもしれないのです。

そこで、ここでは、「殺生関白」とされた豊臣秀次公の歴史認識を大きく揺るがす衝撃の異論を、様々な資料を読みながら多角的に検証していきたいと思います。

名君と謳われながら、秀吉の老醜と石田三成の奸計により、無念の一生を閉じたといわれる豊臣秀次公。彼の暴君論は果たして真実なのか？秀次の切腹以後、秀吉を正当化する史料だけが残った。だが厳正な検証から、城下繁栄や学問・芸術振興における秀次の功績が認められ、思慮・分別と文化的素養を備えた人物像が浮かび上がる。そして秀吉の後継者・関白の地位に就くも、汚名とともに処罰された謀反事件。それは豊臣政権の主導権争いの結末だったといわれる。秀吉の政治的戦略に翻弄された犠牲者であり、引き立て役として歴史上も否定され続けた「殺生関白」の悲劇。その復権に挑んでみよう。はたして秀吉への謀反は真実だったのか。史料を厳正に検証する中で浮上してきた冤罪説。歴史的に否定され続けた「殺生関白」の復権に挑んでみたい。豊臣秀次は江戸時代に豊臣秀吉の生涯を描いた「太閤記もの」の流行、朝鮮に侵攻した秀吉を西洋列強の圧力に屈していた幕末や侵略美化を訴えた戦前の軍部が秀吉を英雄視した影響で人気者になったことにより、彼により切腹を命じられた秀次は「殺生関白」という汚名が着せられました。聚楽第（じゅらくだい）は安土桃山時代に豊臣秀吉が京都に建てた関白の政庁です。甥の秀次に関白職と共に聚楽第も譲りました。しかし、秀吉は嫡男秀頼が誕生すると我が子を後継者にした秀吉は秀次の存在が邪魔になり、彼を自害させ、秀次の痕跡を消すためか聚楽第も破却されました。聚楽第は歴史や京都に関する書籍等で紹介されることは多く、聚楽第という名前だけご存知の方も多いでしょう。しかし、聚楽第は現存せず、聚楽第の縄張り図や設計図に該当するものは未発見など聚楽第に関する史料は少なく、御殿の配置など具体的なことはほとんどわかりません。西本願寺の飛雲閣にその遺構が残されている程度です。近年ようやく発掘調査と諸史料に基づき聚楽第の推定復元図が作成されましたが、未だに聚楽第の正確な形がわからない状況です。秀次公の評価についても同じことが言えます。

彼の悪評に疑問を持つと近年では彼を再評価する動きが高まっていること、近年までの悪評のほとんどが根拠のないものだとわかり、彼のことを調べてまとめてみることにしました。

豊臣秀次公は豊臣秀吉の甥であり、秀吉が太閤を名乗った後に、関白に就任した人物である。天下最大の実力者・秀吉の甥であるとは言え、秀次が無能な人間であったなら当然のことながら関白と言う要職が勤まるわけがない。少なくとも、同じ秀吉関係の血縁人間・小早川秀秋とは桁が違うまともな人間だっただろう。

豊臣秀次は「殺生関白」と言う名のほうがわかりやすいかもしれない人物である。辻斬りをした（ようするに無差別殺人）、皇族ご用達の狩猟場に乗り込んで銃を乱射した、妊婦の腹を引き裂いて体内の赤子の様子を確かめたなどの悪行が知られている。本当にこんなことをしたのだろうか？私は当時の人間ではない（←当然）から、事実はわからない。が、こういった人物であれば関白になれるはずがない。そして、「殺生関白」に関する情報はある時期から発生している。そのある時期とは言わずと知れた、「お拾い（←後の豊臣秀頼）」誕生である。毫碌（もうろく）した秀吉が我が子可愛さで秀頼に後を継がせた

いと考えるのは自然なことである。となると、関白の秀次は邪魔である。それどころか、秀頼の最大の敵になる可能性を秘めている。よって、秀次を追い払いたかった。その秀吉の意図を察した側近（石田三成か？）が、あらぬ噂を流して秀次の追い落としを謀り、謀殺した。そのままでは側近衆は不利なので、噂を流し続け秀次の名声を叩き潰しておき、それが今まで伝わっていると考えた方が自然であると思う。しかし、三成は没落した秀次の家臣をとりたてて救済している実績もあるので、そこらあたりは詳細に検証する必要がある。「殺生関白」とは後世から見ても、かなりイメージが悪い。ということは、その当時では相当なものだろう。逆説的に言えば、そういった、かなりひどい情報（噂）を流さなければならぬ人物だったとも考えることができる。つまり、名君だったと・・・そして、それを裏付ける記録がある。秀次は近江八幡を治めていたときのことである。的確な町割を行い、租税も安く・統治をしっかりとしていたため、治安も安定し町には活気があったと。-spanは国ではなく町（今の都市）だが、民衆の心を掴んだ見事な政治をしていたことは間違いないようだ（家臣がやったのかもしれないが、そういった家臣を抱え・任せたとするやり方はよくあることだし、主君の心得の1つ）。篠原町～池田本町にかかる農業橋の欄干橋上には水争いを治めた秀次公の像が立っている。

そして、戦争が終わって領国経営に精を出す諸大名に金を貸していた（これが謀反追求されることになるのだが・・・）。これも、「基盤の安定化→経済の活性化→国（日本）の活性化」という流れを踏まえた経済政策である。悪意を持って見ない限り「関白としての政策の1つ」と取るのが自然だろう。こういった記録を見る限りでは、「秀次＝殺生関白＝どうしようもない人物」という図式は見えてこない。ここに「負け組みの悲劇」がある。歴史書は勝ち組みの人間が「自分に都合のいいように」書いていく。逆に言えば都合の悪い部分は消される。もしくは、嘘の情報と並べ立てられる。秀次は負け組みの人間であり、勝ち組みの秀吉から見たら（秀頼誕生後）都合の悪い存在となってしまった。だから、（本当にあったのかもしれないが）ありもしないことを並びたてられ人格を貶められた。それが、今まで伝わってしまっている。豊臣秀次は「殺生関白」ではなく、名君であったと思うのだが、いかなものだろうか？後世の江戸時代に書かれた「雨月物語」巻之三「仏法僧」の段に豊臣秀次とその小姓の亡霊が出てくるところがあるが、後世になっても、その秀次の無念さは民衆のなかに生きていたのであろう。また、秀次の家臣であり、秀吉の墨俣時代からの仕えた古くからの武将の前野長康（秀次に殉じて切腹・殉死した）の家に伝わる前野家文書（「武功夜話」として今に伝わる）にも、秀次事件が書かれているという。

「歴史群像新書」で、豊臣秀次のことについて書かれた本が2冊あった。また羽生さんが「豊臣秀次」の小説を書かれてニューオウミで「披露」があった。それらを検討するなかで、「殺生関白」という悪名からして「秀次」を陥れての謀殺であったことが浮き彫りになってきた。そこで、これまで通説とされてきた歴史認識を再検証してみたいのである。まず、頭に浮かんだのは「狡兎死して、良狗煮られる」という故事の例である。豊臣秀吉

は「太閤記」という物語では貧農から天下様にまで登りつめた出世物語として世に知られているところですが、秀吉に残酷な一面があったことを知る人は、よほど歴史に詳しい人です。自分の妹や実母まで人質に出すという行為まで行っているのですが、人質は、いざ両者の間で戦争になれば真っ先に殺される運命を担っていることを忘れてはなりません。徳川を臣下にして、名実ともに天下様となった秀吉に、唯一苦言を言えるのは、弟たる「秀長」です。だから、置毒を使って「秀長」を暗殺した。という説があります。事実、秀長の養子となった「秀保」（秀次の三番目の実弟）も原因不明の事故で亡くなっています。これは史実です。また最近のNHK大河ドラマでは「お江」の二番目の夫「秀勝」（秀次の二番目の実弟）も亡くなっており、その「お江」のドラマでは秀次は良い人に描かれています。逆に秀吉の身勝手さや残酷さが印象に残りました。ざまを見ろです。NHKドラマも徐々にはあるが、秀次公への評価を変えつつある。織田信長が本能寺で倒れた時、笑いをこらえた秀吉の姿をみて黒田官兵衛に言われた言葉で、自分の正体を見透かされたと思ひ、その後は、徹底的に官兵衛を利用するが、自分が天下様になった（＝敵が居なくなった）時には、彼を遠ざけている。竹中半兵衛も最終、秀吉にすり潰されて亡くなっている。そして、国内の騒乱が収まったとき、秀吉は朝鮮侵略と明国征服という途方もない妄想を抱くのである。常識的にみて、朝鮮侵略や明国征服は無理だと誰もが考えるだろうが、周囲の石田三成や加藤清正などの取り巻きは、秀吉の勘気を恐れて何も言えず、迎合するばかりで、唯一、秀吉の暴挙として侵略戦の反対を表明したのは、弟の秀長であり、千利休であった。秀次も関白に取り立ててもらってからは、太閤となった秀吉とは、二重政治で、対立を深めていった。（本来、太閤は関白の隠居名であり実権はなく、正式の政府の権限は関白にあった。しかし、天下様ということで権力を行使して、関白秀次とよく政策面で衝突したという。）そのために、秀吉の誇大妄想といわれた政策＝朝鮮・明征伐、大陸征服に反対だった弟秀長や千利休、秀次は邪魔になった。天下が収まった（北条征伐終了）時点で、彼らを「狗煮る」したのではないか。実際、巷では、豊臣家と豊臣秀次公を滅ぼした原因は「秀吉」の朝鮮侵略という無謀な野望＝老醜だった……という説があります。実際 秀吉—三成一（鶴松） 秀頼—淀 ライン（侵略派）と秀長—（秀保）（秀勝・お江の二番目の夫）—千利休—秀次 ライン（侵略反対派）の確執で、反対派が粛清され、かくして文禄の役（壬辰倭乱）、慶長の役（丁酉再乱）が起きたのです。このことが原因で、豊臣家子飼いの大名による確執の結果（誤算）が形として現れたのが「関ヶ原合戦」であるといわれています。

秀次謀反説も「殺生関白」説も秀頼を後継にしようとする秀吉側のでっちあげで、秀長・千利休という後ろ盾を亡くした秀次が（後継）争いに敗れた結果の汚名（濡れ衣）であることはまちがいないだろう。

天正19年（1591）に実子・鶴松が亡くなると高齢の豊臣秀吉は実子の誕生を諦めたのか、甥（姉の子）の秀次に関白職と関白の政庁である聚楽第を譲りました。

しかし、文禄2年（1593）に実子・秀頼が生まれると秀頼を後継者にするため文禄4年（1595）に「秀次に謀反の疑いあり」として高野山へ追放し、自害させました。

終戦までは侵略が美化され、朝鮮へ出兵した秀吉を英雄視していました。その反動で、歴史上の「英雄」である秀吉によって切腹を命じられた秀次は、秀吉の甥という血縁だけで関白職を継ぎ、秀頼誕生により後継者になれないことで自暴自棄に陥り、悪行を繰り返し後世の人々から「殺生関白」と呼ばれるようになり、処刑されたと考えられています。

最近では彼の「殺生関白」と呼ばれるような悪行には史料的裏付けがなく、作為的に作られたと考えられました。そして、彼の文化貢献などこれまで知られなかった彼の側面に注目し、再評価する傾向が強いです。

◆秀次の人生

○生い立ちから三好家へ養子入り

永禄11年（1568）に秀吉の姉と百姓の三輪（または木下）弥助の子として生まれます。3歳頃に宮部継潤へ養子（実情は人質）に出され、浅井氏滅亡により戻ります。

天正7年（1579）に12歳で織田信長に臣従した四国の三好康長に父子ともに養子に出されます。父は三好吉房、秀次は三好孫七郎信吉と名乗りました。

三好家に養子に出された理由は織田家中の権力争いです。織田から四国安堵の朱印状を授かった土佐の長宗我部元親（ちょうそがべもとちか）の正妻は信長重臣の明智光秀の家臣の斎藤利三の妹です。

長宗我部と信長の仲介役の明智光秀から四国主導権を奪おうという秀吉の目論見から四国の名門「三好」家に養子入りさせたといわれています。長宗我部は四国統一目前という大勢力になり、信長に従う三好家を攻撃すると信長は方針を展開し一変し長宗我部と手を切りました。

秀次の養父・三好康長は天正10年（1581）に四国討伐軍の先鋒として阿波へ出陣していましたが、本能寺の変により信長が討たれたことで討伐軍本隊が来ず四国で孤立し、彼は堺へ逃げ帰り、その後の消息がわからなくなります。

養父と過ごした時間は長くはなかったですが、多感な時期の秀次にとって茶の湯と連歌に造詣が深い養父の影響は大きかったようです。長康は津田宗及ら堺の茶人と親しく、当時を代表する連歌師・里村紹巴が参加する連歌会に何度も秀次と出席しています。

○羽柴・豊臣時代の秀次

天正12年(1583)に三好家から離れ、羽柴姓を名乗り、翌年には羽柴秀次と改名しました。秀吉が天正13年(1585)に豊臣姓を授かると秀次も豊臣姓を名乗りました。

秀吉の計らいで朝廷から高い官位を授かり、武家の公卿になります。天正16年(1588)の後陽成天皇の行幸では叔父の豊臣秀長、徳川家康ら武家の公卿と共に天皇の行列に供奉(ぐぶ)しました。秀吉は天正19年(1591)1月に弟の秀長、8月に実子の鶴丸を失い、12月に関白の座と聚楽第を秀次に譲りました。

大陸への合戦に専念する秀吉に代わり、朝廷と政権のパイプ役を務めていましたが文禄2年(1593)に秀吉の息・秀頼が生まれたことで両者の関係が大きく変わります。実子を後継者にしたい秀吉は秀次を後継者にした決断は誤りで彼が邪魔な存在となり、文禄4年(1595)に謀反の疑いで高野山で切腹させました。

秀吉は彼、秀次の切腹後、聚楽第の破却命令を下します。彼の子供と妻妾とその侍女34名(正確な人数は不明で説により人数の増減があります)を三条河原で処刑しました。

◆武将としての秀次

豊臣秀次の武将としての活躍は一般的には長久手の戦いでの敗戦のみの印象が強いです。しかし、あまり知られていませんが、それ以外はきちんと役目を果たしています。

彼の武将としての姿を振り返ります。

○小牧・長久手の戦いまで

初陣は天正10年(1582)の織田信長を討った明智光秀との戦である山崎の戦いと考えられています。

指揮官としての初陣は翌年の伊勢の滝川一益攻めが最初です。秀吉は伊勢攻めの軍を3隊に分け、彼に1隊の指揮官に任じました。彼は無事に役目を果たしました。

○小牧・長久手の戦いでの敗戦

天正12年(1584)に秀吉との関係が悪化した織田信雄は徳川家康と同盟を結び挙兵し、秀吉軍と徳川家康・織田信雄連合軍の戦いである小牧長久手の戦いが起こります。

兵力は連合軍約3万に対し秀吉側は約10万と云われています。数の上では秀吉側が圧倒的に有利でしたが、小牧山城に籠城した徳川軍を攻めあぐね、戦況はこう着してしまいます。

戦況打破のため秀吉は、秀次を大将とする別働隊を結成し、正面の徳川軍を迂回し、徳川の本拠地の三河国の岡崎城へ向けて進軍させます。秀吉軍は元信長配下というかつての秀吉の同僚達（＝池田恒興、森長可、等）が多く、羽柴一族である彼を秀吉の名代という意味合いを込めて大将にすることで別働隊に配属された元信長配下の者も従うという判断でしょう。

秀次の別働隊が壊滅したことでこの作戦の詳細な内容はわかりません。籠城した徳川軍に苦戦している状況から、別働隊は岡崎城へ向かう動きを見せることで小牧山城の徳川軍を城から誘き出すための陽動、もしくは徳川が陽動に応じず籠城を続けるなら岡崎城を強襲し攻め落とすという2つの意図があると推測されます。岡崎城が陥落すれば小牧山城の徳川軍は岡崎城奪還のため小牧山城を捨てて撤退するはずで、いずれかの方法で城から出撃した徳川軍を秀吉本隊が討つという作戦だったと考えられます。

徳川軍主力との戦闘は秀吉本隊の役目と考えられます。兵力の上では有利な秀吉ですらどうにもできない徳川相手に、若年で戦の経験が少ない秀次では適うはずもなく、まして秀次側は敵地への進軍という不利な状況です。別働隊単独で徳川軍主力と戦うことになれば、勝つことは難しいです。陽動という安全な役割だから数少ない一族である秀次を名代という意味合いを込めて大将に起用したと考えられます。

実際は別働隊の動きを察知した徳川軍は正面に対峙している秀吉軍に気づかれぬように小牧山城を密かに抜け出して出陣し、別働隊を奇襲し壊滅させました。秀吉より家康の方が将としては上手だったようです。

大敗した軍の大将という結果責任から秀次にも敗戦の責任はありますが、むしろ徳川軍本隊が小牧山城を密かに抜け出したことを察知できなかった秀吉に責任があります。特にこの作戦が別働隊の陽動により城から出陣した徳川軍を秀吉本隊が討つ作戦であるならば、徳川軍の出撃を秀吉本隊（軍師は黒田官兵衛だが、この時は中国戦線に張り付いており、不在であった。）が察知できなかったことは作戦の根幹を揺るがすような致命的な失敗です。

大将である彼が敗戦という結果責任から、秀吉から厳しい叱責を受けます。しかし、秀吉はこの敗戦以降も彼を指揮官に任じていることから、この大敗の原因が彼の指揮に重大な過失があったなど彼の指揮官としての資質が欠けているとは考えていないようです。

ちなみにこの敗戦以降も両軍の対峙は続いています。秀吉側は家康には勝てず、信雄との単独講和に成功し、信雄と同盟関係にある徳川が戦を続ける大義名分を失わるという外交的な勝利を得ました。家康も秀吉に講和し、臣従します。この時、秀吉の実妹と実母を家康に人質として、差し出しています。

○秀次のその後の合戦での活躍

天正13年（1585）の紀州根来衆攻めと同年の四国討伐の副将を務め、その功績で近江43万石（彼自身に20万石と秀吉から派遣された附家老ら23万石分）を与えられました。この頃の秀吉軍は秀吉が大將、秀長と秀次が副将です。秀吉が出陣しない四国討伐では秀長が大將、秀次が副将を務めました。秀次は豊臣家にとって欠かせない将でした。

天正15年（1587）の九州征伐には従軍していません。彼は前田利家と共に東国への有事に備えとして留守を任されました。天正18年（1590）の小田原攻めでは病身の秀長に代わり先鋒を務め、北条側の最前線という重要拠点の伊豆山中城をわずか一日で陥落させる活躍を見せました。天正19年（1590）に陸奥で起こった九戸政実（くのへまさぎね）の乱の平定軍の総大將を務め、その任を果たしています。小田原攻めからは徳川家康の補佐を受けています。

○武将としての秀次

後に彼が「殺生関白」説の流布により「秀吉の甥というだけで努力せず高位に就いた」など彼を不当に低く評価する風潮が広まると、長久手の戦いの大敗以外の武将としての功績は一切触れず、彼の無能さを示す例として長久手の戦いでの大敗のみが取り上げられ、敗戦の原因がまるで彼の重大な過失によるものと考えられるようになりました。勝利の影には補佐役の支えもあり、彼の将としての器量を示す逸話が残っていないことから彼自身の武将としての能力は正直わかりません。結果論で評価する以外ないですが、勝利を積み重ねた結果から、彼はけっして無能は武将ではなく、豊臣家の一翼を担う武将であったことは間違いありません。

◆領主としての豊臣秀次

天正13年（1585）に近江半国20万石（別に秀吉から派遣された山内ら附家老達の23万石で計43万石）を与えられました。近江八幡には城がなく、ゼロからの城下街作りが行われました。

焼け落ちた安土城の城下から商人を移住させ、碁盤目状の街路を作り、武家町と町民が住む区域を分け、職人と商人が住む区域を分けました。近江八幡には現在でも残る八幡堀

を作り、琵琶湖につながる運河とし海運で栄えました。近江八幡には当時では珍しい上下水道がありました。

豊臣一族である秀次は領主という役割以外に、京や大坂などで公家と諸大名達を饗応し豊臣家との友好関係を築く役割もあり、領国を離れていることが多く、秀吉から派遣された補佐役である附家老の田中政吉らが実務を担っていたと考えられます。個別の施策の立案が彼か附家老達のどちらによるものかはわかりませんが、数々の優れた施策には領主である彼の意向が反映されているはずです。彼が領主の時代に現在の近江八幡市の発展の礎が築かれたことは紛れもない事実です。

天正18年(1590)に仮想敵国である関東の徳川家康に対する構えとして、秀吉は彼に尾張一国伊勢五郡(旧織田信雄領)約100万石の領地を与えました。奥州への出兵や関白職を譲り受けた後は聚楽第で関白としての政務を執るなど不在領主の彼に代わり、実父三好吉房が領地を治めました。川の堤防建設と維持費の負担から税率が高く、実父は領主として頼りなかったという記録もあります。彼の領地であることを示す領地宛行状と知行目録がなく秀吉配下の奉行衆が尾張を検地しているため「単に預かっているだけ」という考え方もあります。

◆文化人だった豊臣秀次

養父・三好康長は茶の湯と連歌に造詣が深い文化人です。養父の影響を受けた秀次も高い教養を持つ人物でした。秀次は10代の若さで津田宗及ら堺の茶人が開く茶会、当時を代表する連歌師の里村紹巴主催の連歌会に出席しています。

聚楽第には公家や諸大名達との社交場の役割もあります。天正19年(1591)に秀吉から関白職と共に聚楽第を譲り受けた後は、聚楽第に里村ら文化人や公卿を招き、芸能鑑賞や茶会、王朝文学に関するサロンを形成し、彼らと共に文化政策を進めていきました。

秀次が豊臣一族や関白という地位であっても、教養と知識がなければ公家達から相手にされません。彼は彼らとの交流に不可欠な教養と知識を持っていたと推測できます。

21もある勅撰和歌集を集めて学び、書き写させ、連歌会を開くなど和歌にも造詣が深いです。特に公家達との交際に不可欠な連歌や和歌を詠むためには『源氏物語』や『伊勢物語』などから引用することも多く、王朝古典文学の知識が不可欠です。彼も習得していたと考えられています。他には『源氏物語』を奈良の僧侶に書き写させたことが知られています。

歴史に「if」はないが、もし秀長—千利休—秀次が生きていれば「壬辰倭乱」は起ころ

なかった。と言われている。この侵略反対派のラインの家臣には、藤堂高虎、前野長泰（武功夜話）、木村常陸介、田中吉政、山内一豊、など層々たる面々が揃っているし、それを取り巻く仲間となる大名では、伊達政宗、最上義光、細川忠興、浅野幸長、毛利輝元。公家では菊亭晴季とその一門につながる真田昌幸・幸村などがいる。もし、秀次公が生きておれば、関ヶ原も徳川幕府の目も無かったのではないだろうか。そして、無謀な朝鮮侵略や太平洋・大東亜戦争もなかったのではと・・・悔やまれる・・・「雨月物語」の巻之三、「仏法僧」の段には「豊臣秀次」とその小姓の幽霊が登場する話があるので、一度お読みください。また秀次の家臣には、浅井長政の三男の浅井喜八郎井頼や六角義郷（六角氏の一族）がいるので、面白い展開が臨めたのではないだろうか。余談だが、同小姓に不破万作という人物がいたが、現代にも同性同名の役者がいる。刑事役でサスペンスドラマによく出ているので、すぐ名前をみつけられるでしょう。・・・

秀吉の実姉で、秀次、秀勝、秀保の兄弟の母の名前は「とも」（瑞龍院日秀 智子）と云いました。尾張の百姓弥助（後の三好吉房）に嫁ぎ、三人の子供を産みました。弟の秀吉が出世すると弟に召出され、家族で秀吉の元に移ります。秀勝は文禄元年（1592）に朝鮮出陣中に亡くなり、文禄4年（1595）4月に秀保が亡くなり、同年7月には秀次が弟の命で切腹するなど次々と不幸が続きます。秀次が亡くなると剃髪して、秀次らの菩提を弔うため村雲の地に寺を建てます。彼女が住む寺には後陽成天皇から寺領千石と「瑞龍寺」の号が下賜されました。寛永2年（1625）に徳川幕府から500石を寄進されましたが彼女は同年に亡くなります。

尖閣・竹島では日本政府の弱腰外交が指摘されているところですが、その昔にも、ヨーロッパからの植民地主義的南蛮貿易に対抗して、戦国～安土桃山～江戸時代の初期（鎖国が始まるまで）には日本からも多く海外に雄飛して出国（商人や合戦浪人など）しており、ベトナムやタイには日本人町がつくられていました。彼らは江戸幕府の鎖国と同時に棄民となりました。歴史に if はないが、豊臣秀吉の「朝鮮侵略」が韓国ではいまでも悪として歴史で教えられています。しかし、信長一秀吉と継承された、アジア対南蛮（ヨーロッパ）の戦略としてはあながち間違いであったとは言いきれません。戦術的には、李朝朝鮮を相手にするより、頭角を現してきていた金国＝女真部族と同盟を結び、衰退著しい「明国」を両方で攻撃すれば、必然的に李朝鮮も明国も降せたとと思われる、のですが……。明治維新政府が太閤秀吉を持ち上げた理由もこのへんにあります。さて、文禄・慶長の役は1592年と1598年ですが、女真・建州族の愛新覚羅ヌルハチが明に最初の反乱を起こしたのが1983年で、建州女真を統一し明に対抗して後金を建国したのが、それから5年後である。この時期に明国や朝鮮国は動乱の嵐（文禄・慶長の役）に翻弄されている。だから、日本も豊臣秀長や千利休が生きていて、竹中半兵衛なみの軍師がついていれば、戦術さえ間違わなければ、「文禄・慶長の役＝朝鮮・明国との戦い」という愚かな合戦も無かったかもしれないのである。歴史の if が悔やまれる。

文禄・慶長の役において、豊臣軍4万人と明軍4万人が戦った「碧蹄館へきていかんの戦い」は有名であり日本軍も大将宇喜多秀家、副将小早川隆景、その他立花宗茂、黒田長政、小西行長、石田三成などの武将が率いた軍を相手にした明軍の大将を李如松という。彼の名は日本でも有名である。またもう一人明国の有名な人物がいる。それは、明国が滅亡するとき（日本軍の侵攻に防衛出兵して財政的に破綻したとされるが）日本に助けを求めた「明国」武将（鄭芝龍）がいた。日本ではその武将の息子を「国姓爺」といい、近松門左衛門の浄瑠璃「国姓爺合戦」として有名である、国姓爺と言われたその武将の子の名前を鄭成功という。

文禄・慶長の役は日本だけでなく、朝鮮国にも政治的、文化的に大きな変化をもたらした。日本では政治的には秀次・千利休を切腹させた豊臣秀吉が亡くなり、関ヶ原合戦へと続き政権が代わるのであるが、文化面でも、大陸の陶磁器の製法が持ち込まれ、特に有田焼・伊万里焼の代表とされる柿右衛門様式は、ヨーロッパに輸入され、「マイセン」陶磁器にも影響を与えたのである。また朝鮮国においても、政治的には明国の支援を受けた関係で、ますます頭が上がりなくなったし、文化的には、南蛮貿易によって日本にもたらされた農産物が、この戦争によって朝鮮半島にも持ちこまれ、現在でも、朝鮮の食文化には欠かせないものとなっている。それは唐辛子である。いまではキムチには欠かせない韓国料理の必需品である。

船木町にある 浄土宗宝池山西願寺は、豊臣秀次公を開基とする寺院です。上杉謙信を見習い武人の毘沙門天の信仰・祈願所として建立されましたが、今は阿弥陀如来や薬師如来もおられます。住職の金森昭憲さんは、特技の「琵琶による説法」で布教をされています。

しつこいようだが、もう一度、秀次事件を検証する。

文禄4年（1595）7月15日に豊臣秀次が豊臣秀吉の命で高野山で切腹した出来事は秀次事件と呼ばれています。

この事件の原因を「秀次が謀反を企んだ」、「殺生関白と呼ばれるように異常な人格」、「秀吉が我が子秀頼かわいさによるもの」などいろいろあります。

西洋の外圧を受けた幕末から終戦まで侵略が美化された影響により、桃山時代に大陸へ出兵した豊臣秀吉を歴史上の英雄として賞賛する秀吉ブームが起こります。その反動から「秀次は殺生関白と呼ばれる異常な人格者」という不当に低い評価が定着し、「秀次側に原因がある」と考えられていました。しかし、戦後に秀吉を英雄視する評価は薄れるに伴い、秀次を再評価しようとする動きがあります。ここでは秀次事件は何だったのか、後の影響など事件を考えてみます。

◆秀次事件を振り返る

事件が起こるまでを振り返ります。

○関白職譲渡から文禄4年より前の経緯

秀吉は天正19年(1591)に関白の座を彼に譲ります。秀吉は聚楽第を関白の政庁と位置付けていたようで、聚楽第も彼に譲り渡しました。ただ、豊臣家の城である大坂城や秀吉の持つ広大な領地などは譲りませんでした。また、石田三成ら官僚達の所属も秀吉のままです。徳川家康が秀忠に征夷大將軍を譲り、大御所として秀忠を後見するという意味合いとは全く異なります。

文禄2年(1593)8月に秀頼が誕生すると秀次は直後から10月まで湯治に出かけました。「秀頼誕生により自分の立場がどうなるかわからない」という不安を鎮め冷静に対処しようと考えたのかもしれませんが、しかし、湯治中に秀吉が秀次に日本の5分の4を与えるという案が示され、10月には秀吉から秀頼と秀次の娘の婚約話を持ちかけます。秀吉は秀頼擁立のためさっそく動き出しました。

また、秀吉は前年から豊臣氏の本拠地大坂と聚楽第がある京の間にある伏見の月見の名所である指月(しげつ)に隠居所として築城中でしたが、秀頼が生まれると秀頼の居城にするため本格的な城として築城します。

文禄2年閏9月に秀吉が大坂城から伏見城へ移住したのを機に、諸大名の伏見屋敷が作り始められ、翌年には山中長俊を町割奉行に任じるなど、伏見を城下街に変えます。諸大名は秀吉の命で伏見に大名屋敷を築きます。秀吉は諸大名の屋敷を聚楽第周辺から秀頼の居城となる伏見へ移させることで、秀次と諸大名の関係を引き裂こうとしたそうです。

また、横田冬彦「豊臣政権と首都」(『豊臣秀吉と京都/聚楽第・御土居・伏見城』編 日本史研究会 文理閣)の「表1 秀吉 秀次 家康の御成等があった大名屋敷」の秀吉が大名屋敷を訪れた回数を見ますと天正15年から秀頼が生まれるまでの期間と秀頼誕生から秀次事件までの期間では回数が圧倒的に違います。前田、蒲生、宇喜田、上杉など有力大名への御成には他の有力大名や公家を引き連れて行きました。何を話したのかわかりませんが時節柄、後継者問題が話題になったのは間違いないでしょう。秀次の立場から考えると秀吉の動きはこの上なく不愉快でしょう。文禄3年(1594)8月に秀吉の聚楽第御成が10月に延期されます。理由はわかりませんが二人の関係の悪化の一途がわかります。

○切腹までの経緯

秀次の右筆である駒井重勝は日記（『駒井日記』と呼ばれているもの）の中で文禄4年（1595）4月10日の記事に前後の記事と関係なく突然、聚楽第の広さを記します。秀次の側近として2人の関係は修復不可能なほど悪化し、秀次が悲劇的な最後を向かえ、聚楽第が壊されることを予測していたとも考えられます。

4月16日に療養中の秀次の弟・秀保が領国の大和十津川で亡くなります。『駒井日記』では死因は瘡瘡による病死とあります。若年での病死は当時としては珍しいことではありませんが、死因は自殺、他殺という説もあることから、正確な死因は不明です。嫡男がいない秀保の死去により大和豊臣家（秀吉の弟の秀長が祖）は断絶しました。家を存続させるならば秀次の息をこの家の養子にして継がせるという方法がありました。

7月3日に秀吉の奉行衆の石田三成、増田長盛、前田玄以、富田知信（『甫庵太閤記』では宮部継潤を加える）が聚楽第に秀次に「謀反の疑いがある」と糾弾してきます。彼らの求めに応じて謀反をする意思はないという七枚継ぐの誓紙を彼は提出しました。

それで疑いは晴れず、8日には秀吉は秀次の元へ使者を遣わし、伏見へ来るよう命じます。『甫庵太閤記』ではこの使者を山内一豊、堀尾吉晴、中村一氏、宮部継潤、前田玄以としています。彼にとって山内、堀尾、中村は近江八幡城主時代に秀吉から補佐役として派遣された附家老、宮部は元養父（人質という意味合いで彼は宮部家へ養子に出されていました）です。京都の行政を担う京都所司代の前田は、京都の聚楽第に住む彼とは役目柄会う機会が多かった人物でした。彼が疑いもなく伏見へ来るため、彼と関係が深い人物を使者に選んだとも考えられます。

伏見に到着した彼は伏見にある彼の屋敷ではなく秀吉の命で木下吉隆の屋敷に行き、秀吉との面会を待ちます。しかし、秀吉は彼に会うことなく、彼を高野山へ追放するよう命じました。7月15日に秀吉からの切腹命令が伝えられ、彼はその日のうちに切腹しました。

○高野山で切腹させたのはなぜ？

秀次を高野山に流した理由は昔の政治犯は大寺院に流されたからです。「領地と官職を奪い政治の表舞台から退場させる代償として、世俗の権力から離れた大寺院に蟄居させることで命だけは助ける」という不文律が日本の伝統としてありました。

例えば、関ヶ原の戦いで西軍に属した真田昌幸は徳川家康により高野山の寺領がある九度山に流され生涯を終えました。高野山へ流された秀次は世俗の地位を全てを失いますが高野山で残りの人生をおくるはずでした。

わざわざ高野山に流した後に切腹させたのは、この間に秀吉の気が変わったとしか言いようがありません。生かしておけば秀吉が亡き後、秀頼の反対勢力である何者か（秀吉は生前最も徳川家康を警戒していた）が彼を担ぎ出すのではないかという不安に捉われたのかもしれない。

○秀吉、秀次両者の行動から謀反は事実ではない

秀吉側、秀次側の行動から謀反が事実とは思えません。仮に彼の謀反が事実という前提で、秀吉からの糾弾の使者が彼と面会した7月3日から、彼が秀吉の命令で伏見へ行った8日までの両者の行動を考えてみます。

まず、秀吉側から考えると石田らを聚楽第へ向かわせ、謀反の疑いで秀次を糾弾した7月3日以前に彼の謀反の企てを察知していることとなります。この時点で送るべきは彼を糾弾する使者ではなく、謀反を未然に防ぐため首謀者である秀次らを捕らえる者です。謀反を企てている相手が主からの謀反を糾弾する使者に素直に会うとは考えにくです。

謀反を企てている相手へ謀反を糾弾する使者は、謀反を起こす決意表明のために殺される危険性があります。そのような危険な使者に石田ら重臣を選ばないはずで、豊臣政権の行政を担う石田と増田らを一度に失うことは政権にとって大きな損失です。そのリスクを背負ってまで、秀吉が彼らを糾弾の使者に選んだとは考えられません。彼が謀反を起こすと考えているならば、送るべきは糾弾のための使者ではなく彼を捕える者です。抵抗されることも予想されるため兵を伴うでしょう。

彼が蜂起する前に聚楽第がある京都周辺の要所に兵を置き、謀反軍を討伐するための兵を集めるなど軍事的な動きや諸大名に彼の謀反に加担しないようにするための説得工作など彼の謀反に対し何らかの手段を講じるはずで、しかし、この期間は特に目立った動きはなく、これから謀反が起こるかもしれないという緊迫感が全く感じられません。

彼に謀反の企てがないと秀吉側が考えるからこそ、石田ら重臣を糾弾の使者に選び、謀反への備えも行わなかったと推測できます。

一方、秀次側から考えると、7月3日に秀吉からの糾弾の使者が来た時点で彼の謀反の企てが秀吉側に露見していることがわかります。企てが露見した以上、決起するか秀吉に処断されるしか選択肢はないです。彼が謀反を起こすならば、彼が取るべき行動は秀吉が彼の居城である聚楽第へ討伐の兵を差し向けて来る前に、謀反に必要な武器や兵力を準備し、謀反に加担する大名達へ決起を促す使者を送るなど謀反への蜂起する準備です。しかし、そのような行動を取った痕跡がないです。

まして、謀反の企てが秀吉側に露見している状況にも関わらず、彼が秀吉の命令に応じて、伏見の秀吉の下へ弁明に行けば自ら捕まりに行くようなものです。身内とはいえ謀反を企てている彼を秀吉が許すはずはなく、彼が聚楽第に生きて帰ってこられないことは容易に予想できます。彼の側近が命を賭けてでも伏見行きを止めるはずで、彼が謀反を起こすつもりなら、伏見への出頭命令に来た使者を捕えるか命を奪い、伏見へ秀吉と一戦交えるだけの兵を率いて行くか、命令を無視して聚楽第で決起するはずで、

彼は謀反を起こす意思がないからこそ秀吉と直接話し合えば身の覚えがない謀反容疑が晴れると考え、秀吉の命に応じて伏見へ向かい、側近も伏見行きを止めなかったと推測できます。

7月3日から彼が秀吉の命令で伏見へ行った8日までの期間、両者の行動から彼の謀反が事実とは考えられません。

秀次や側近達は、高野山や預け先の大名の屋敷での自害です。切腹は死刑の中でも軽い部類に入り、「武士としての体面を保ち、自らの罪を自らの手で裁いた」という自裁の意味合いがあります。謀反が事実なら関ヶ原の戦いで敗れた石田らが市中引き回しの後に六条河原で群集の前で処刑されたように理由を明らかにし、公衆の面前で斬首か磔になるはずで、

『お湯殿の上の日記』の同年7月16日の項によれば謀反の疑いが無実とわかり、切腹となったとあります。謀反の疑いをかけられたことが彼の罪という解釈です。しかし、その容疑も秀吉側によるものと考えられます。彼の謀反容疑は冤罪の可能性が極めて高いです。そもそも、謀反容疑をかけられたことが切腹に値する罪とは思えません。

○狂気の処分

秀次とその男子を処刑しただけの処分なら「戦国時代によくある御家騒動の悲劇の1つ」と考えられ、秀吉の評価を大きく下げることにはなかつたでしょう。むしろ、「秀吉は自身の死後に起こるであろう秀次と秀頼の後継者争いを防ぐため、苦渋の判断を下した」と好意的に評価する人もいたかもしれません。

しかし、彼の妻子ら30数名（本によって人数は多少違います）を彼の首と対面後に処刑し、死体を塚に埋めさせた方法は異常です。通常、切腹した者の首を晒すことはしません。彼らが秀次の無実を訴えるのは目に見えているため口封じと無実を訴える者への見せしめ、朝鮮出兵などで秀吉に不満を持つ大名への脅しなど様々な意味があったと考えられますが、残酷すぎます。

さらに彼が住んでいた聚楽第と彼が城主だった近江八幡城（当時の城主は京極高次。この事件後に京極は加増される形で大津へ移ります）を破壊する行為は、秀次が生きていた証を地上から全て消したいとしか思えません。秀次事件での狂気の処分により秀吉は評価を大きく下げました。

ちなみに秀次事件後に豊臣家の血を引く男子は秀吉と秀頼のみです。結果的には秀頼は無事に成人しましたが、秀頼が成人せずに亡くなった場合は秀吉以外の豊臣の血を引く男子が絶えてしまいます。冷静な判断ができる状態なら、このような処分は行わなかったはずで

○連座した人々

彼の側近は自害、他の家臣は側室の親族でなければ改易です。『太閤さま軍記のうち』によると彼の補佐役と思われる木村常陸介のみが斬首です。木村のみ斬首の理由はわかりませんが『太閤さま軍記のうち』では彼だけが悪人として描かれています。その他の者は改易の上、他家に預けられた後に自害です。秀次の側近達が誰であるのかはこの時に処分された人からわかります。家臣以外の側室の親族では最上義光が謹慎、伊丹正親が追放です。

意外なところでは秀次重臣である栗野木工頭が元は伊達家に仕えていたことから「伊達政宗が栗野を通じて彼に通じた」疑いをかけられ、市中には娘が秀次の側室である最上と共に謀反を起こすという噂が流れました。

伊達は秀吉により没収された旧領大崎・葛西で起こった一揆を扇動した疑いがあり、秀吉にとって要注意人物でした。秀吉は秀次事件を利用し、秀次との関係から伊達と最上を取り潰し不安定な東北の問題までも解決しようと企てたようです。伊達は国許から急遽伏見へ向かい、秀吉と対面し許されました。

秀次が秀吉の養子となり関白職を継ぎ、秀頼が生まれるまでは彼が豊臣家の実質的な後継者と考えられていただけに、諸大名が彼と交誼を持つのは当然でした。そのことを秀吉が「秀次と通じていた」と考え処罰できるなら、ほとんどの大名を処罰できます。

細川忠興は娘が秀次重臣の前野景定に嫁ぎ、『新訂寛政重修諸家譜』によると秀次から黄金百枚を賜ったことで嫌疑がかけられ、「黄金は借りた」と弁明し、徳川家康から金を借りて返済し、疑いを晴らしました。

連歌師の里村紹巴は讒言により三井寺で塾居、秀次に仕える医師・曲直瀬玄朔（まなせげんさく）は追放です。

彼、もしくは彼の側近が謀反を企んでいたと仮定するなら、それなりの人数の大名が謀議に加担していたはずでしょう。改易された大名はいずれも彼の周りの大名が中心です。異常人格を理由にする割には連座した人物が多く、謀反にしては少なすぎるという印象を持ちます。彼の家臣達までも一掃したのでしょう。

○なぜか事件直後に加増された人達

秀次の切腹当日に秀次が近江八幡城主時代の附家老だった山内一豊は8千石、中村一氏は5千石加増され、石田三成らと謀反の疑いがあると秀次に糾弾した使者の富田一白は加増されて伊勢安濃津城5万石（2万石を息子に分地）になりました。

事件で重要な役割を果たした石田は加増されて近江佐和山19万4千石になりました。加増前の正確な俸禄には諸説ありますが小和田哲男氏の『石田三成』（PHP新書）に基づけば、事件後に9万4千石加増です。石田と同じ近江出身で石田と通じていたのではないかと考えられている田中吉政は翌月に3万石を加増（『寛政重修諸家譜』の田中吉政の項では秀吉の直轄地3万石を預けられたとあります）されています。

この時期に事件に関わった大名の加増は事件での貢献によるものと推測できます。

○実は戦乱の危険性をはらんでいた

大勢力の秀吉の前には適わず、やむなく豊臣家に随っている大名も多かったです。「天下統一で長年続いた戦乱の時代が終わりようやく平和な時代が来る」という期待感の中での朝鮮への戦争は政権への失望感を抱かせました。

戦争と数々の普請で過分の負担を強いられた諸大名は領民に重税を課さざるを得ず、領内は疲弊し政権の求心力が低下し、不満が高まったことが秀吉亡き後に政権を失った原因です。

伊達政宗など彼と深い関わりのあったと秀吉が考える大名への対処を誤り、彼らが国許で蜂起し、他の豊臣家へ不満を持つ大名も呼応すれば、戦乱の時代に逆戻りする可能性も考えられます。

◆首謀者は？

○石田三成達？

『甫庵太閤記』では殺生関白説を採りつつも、秀吉の奉行衆石田三成と増田長盛が秀吉に讒言したとあるように当時から彼らが首謀者と考えられていました。「秀次が後継者に

なれば秀吉の側近である彼らは失脚するから首謀者になった」と考えもあります。しかし、一時的に失脚する可能性はありますが、政権の実務を担う彼らなしでの政権運営は困難で、復帰するでしょう。

また、江戸時代では関ヶ原の戦いの勝者の徳川家康の正当性を強調するため、敗者である石田は実情以上に悪く描かれます。

江戸時代の「太閤記ブーム」の影響で主人公である豊臣秀吉を悪者扱いにできない事情から、物語上の構成上原因を石田達に押し付け、彼らが豊臣家滅亡の原因を作ったと考えられるようになりました。彼らが台頭してきた時期と秀吉の晩年が重なり「秀吉の人柄が変わった」とは知らない（もしくは信じたくない）当時の人々は秀吉の命令を執行する立場の石田が首謀者だと誤解していた可能性もあります。

秀頼生母の淀殿は石田ら官僚達の出身地の北近江の領主だった浅井長政の娘です。彼らは淀殿を拠り所にして派閥を形成しているため、秀頼が豊臣家を継ぐことに異存はないはずです。信長死後の織田家の後継者争いを見てきた彼らは後継者争いが政権存続の大きなマイナスになることは承知のはずで、何らかの手段を用いて後継者問題に決着をつける考えはあったでしょう。しかし、秀吉の強引な方法に心の底ではどう考えていたのかわかりません。

朝鮮出兵と数々の普請で多大な負担を強いられ豊臣家への不満が高まる中、追い詰められた秀次が本当に謀反を起こせば呼応する大名もいないとは言い切れません。そうなると政権にとって好ましくありません。石田らが秀吉に反対すれば、冷静な判断が下せない秀吉により、彼らが処罰することも予想されるため職務として執行しただけです。

秀次が切腹する3日前の7月12日に石田と増田は「秀頼に二心なく忠節を誓う」という起請文を提出します。彼らが提出することで諸大名の自発的な提出を促すためでしょうが、諸大名より先に出さなければならない何らかの事情が秀吉と彼らの間にあったようです。実の甥でも必要がなくなれば排除する秀吉の姿勢に、側近の彼らですら身の危険を感じたかもしれません

○やはり秀吉が首謀者

秀吉の意向がなければ、彼の子供や側室への狂気の処分を下すことはなかったです。

特に事件当時の京極高次が城主である近江八幡城を秀次が城主だったという理由で石田らが城を破却するように秀吉に提案するとは考えられません。京極は近江八幡から大津へ加増される形で移りました。京都に聚楽第のような拠点が必要だったのか、事件の三年後

には京都に京都新城を造営しています。財政を担う石田らが首謀者なら無駄なことをするとは思えません。

あまり触れられませんが、当時の感覚では高齢である秀吉はこの頃はすでに病にあったと考えられています。秀頼を後継者に指名しても、秀次が生きていれば他の者が秀吉死後に無視して幼少の秀頼ではなく彼を後継者にすることも想像できます。

遺言を残しても守られる保証がないことは戦国時代を生き抜いた秀吉がよく知っていたはずで、秀頼を後継者に据えるには秀頼以外の後継者候補を消してしまうことが最も確実な方法です。

そう考えると秀次事件の三ヶ月前に急死を遂げた秀保は他殺の可能性も否定できません。秀次事件で彼とその男子全員を排除できても、秀吉死後に秀保が存命ならば、秀保が秀頼と後継者の座を争うことが予測できます。同様の理由で秀保亡き後、大和豊臣家を秀次の息に継がせず、断絶させたと推測できます。秀保が亡くなった時点で秀次排除を決めていたとも推測できます。

◆秀次事件のその後の影響

○秀吉没後体制の確立

秀吉が関白職に就いたのは政権の正当性を朝廷に求めたからです。織田信長の孫・三法師（成人後は秀信）の後見人という名目で織田家の勢力を継いだため、彼が成人すれば彼に領地を返還する義務が生じます。秀吉はその問題を解消するため人臣最高位（天皇・皇族を除けばもっとも高い位）の関白に就任しました。全ての大名は関白の秀吉より自動的に地位は低くなり、諸大名が関白である秀吉の命に従うのは当然という論理になります。

天正16年（1588）の聚楽第行幸では諸大名に「朝廷へ忠誠を誓わせる」誓紙を出させることで間接的に「関白である秀吉に忠誠を誓わせる」という方法を使いました。秀次事件の直後には秀吉は直接、豊臣家と秀頼に忠誠を誓うという起請文を書かせます。秀吉は朝廷に触れを出すなど秀吉と朝廷との力関係が逆転し、豊臣家の力のみで日本を治められるようになりました。

秀次事件直後に秀吉が諸大名に秀頼に忠誠を誓わせたことで、秀吉は正式に秀頼が後継者であることを明確にしました。このことで世間はこの事件の本当の理由を悟ったはずで、

秀吉は政権の有力大名の徳川家康、前田利家、毛利輝元、上杉景勝、宇喜田秀家（秀吉の養女が妻）、小早川隆景（秀吉が亡くなる一年前の慶長2年に亡くなる）らの合議で政権を運営するようになります。前田と宇喜田が秀頼の傅（もり）役を務め、坂東は上杉と徳川、坂西は毛利、小早川が宰領し、石田ら奉行衆が実務を行う分権体制を作り上げ、秀頼が成人するまでの体制を整えました。事件の3年後の慶長3年（1598）に秀吉は亡くなります。

○関ヶ原の戦いへの意外な影響

あまり触れられませんが秀次事件の処分は関ヶ原の戦いの東軍勝利に少なからず影響を与えています。事件で処罰された多くの大名が関ヶ原の戦いで東軍に属しています。

秀吉から秀次事件を利用する形で謀反の疑いをかけられ窮地に追い込まれた東北の伊達政宗と最上義光は、事件での豊臣家や石田への恨みという私情ではなく、家康有利という冷静な情勢分析に基づく判断かもしれませんが、東軍に加わります。彼らが東軍に加わり、江戸へ攻め込む動きを見せた西軍の上杉景勝を抑えたことで、家康は本拠地の江戸を離れることができ、上方へ軍を進め関ヶ原で勝利することができたのです。

また、秀次事件で家康に助けられた細川忠興は石田への恨みからか、武断派に属し慶長4年（1599）には武断派の加藤清正らと共に石田三成を襲おうとしました。関ヶ原の戦い直前の石田と家康との対立では秀次事件で受けた家康への恩から東軍に味方します。

石田は大坂城下にいる諸大名の妻子を人質にすることで味方にする策を使いますが、忠興の妻ガラシャは人質になることを拒み自害したことで諸大名の石田への不信感が増し、東軍に味方するものが増え、策は逆効果になりました。忠興とガラシャの行動が東軍勝利の一因となりました。

近江八幡城主の京極高次は前城主が秀次だったという彼とは全く関わりのない理由で、城を壊され加増される形で大津に移ります。関ヶ原の戦いでは京極は東軍に属し大津城で籠城し、大軍の西軍を前に降伏しました。しかし、降伏は関ヶ原の戦いの前日です。京極が大津で敵をくぎ付けにしたことで大津城攻めの軍勢は翌日の関ヶ原での戦いに参戦できませんでした。大津籠城も東軍勝利の大きな一因です。

秀次事件で被害を受けた大名達は、その恨みを関ヶ原の戦いで晴らしたとも考えられます。

秀次事件により秀吉政権への不信感が増大しました。特に狂気の処分により秀吉の評価は大きく下がりました。また、この事件で嫌疑を受けた大名の多くが東軍に属したことで関ヶ原の戦いで西軍敗北につながりました。

当時の人々は秀吉からにらまれ、連座させられないように秀次を弁護するどころか関わった記録すら削除しました。そのため、秀次事件は秀次を弁護する史料がないまま、秀吉側の言い分だけによる冤罪事件だと思えます。

秀次が秀吉の考えをくみ取り、自発的に関白職を辞め、秀頼に従うという起請文を出せば助かったという考え方もあるでしょうが、晩年の秀吉がそれを信じる保証はなく、秀吉が彼の命を奪う前に亡くなる以外、彼が助かる道はなかったと考えられます。

結局、多くの人が考えたように「我が子秀頼可愛さに邪魔になった秀次を排除した」というのが事件の根底だと考えます。

6、秀次公の「殺生関白」説を検証する

「明智光秀がなぜ本能寺の変を起こしたか」や忠臣蔵の発端となった「浅野内匠頭がなぜ殿中で吉良上野介を斬りつけたか」など未だに真実がわからない謎について、いつの間にか「何となくそうであろう」と世間が納得できる理由で説明されているものもあります。

特に小説やドラマなどで理由がわからない事件を扱う場合は、理由を描かなければ話が進まなくなります。様々な推測により説明しています。

豊臣秀次の処刑の本当の理由は未だにわからず、処刑した側の豊臣秀吉の人气が江戸時代から現在まで高く、秀次に非があると考え、導き出した答えが「殺生関白」という秀次の人格性に求め、根拠として具体的な悪行まで形成されました。

作為的に作られた人格が世間に広く知られ、茶の湯や連歌、能を嗜み、数々の文化貢献をした彼の姿を抹消し「秀吉の甥だけで努力もせずに高位に就いた人物」と定義付けされました。

ここではどうして豊臣秀次が殺生関白と呼ばれるようになったのか、本当にそのような悪行があったのかを検証します。

◆殺生関白の成立

殺生関白が形成された過程を考えます。

○太田牛一の『太閤さま軍記のうち』

秀次を最初に殺生関白と書いたのは太田牛一が書いた秀吉の一代記『太閤軍記』からです。この本は現存せず、貴人の頼みで二巻のうち一卷を清書した『太閤さま軍記のうち』のみが残っています。秀吉が亡くなった直後から書き始め、慶長10年（1605）頃には成立したと考えられています。

この本は織田信長と秀吉に滅ぼされた秀次や三好、松永などの話の最後に必ず「天道怖ろしき事」と締めくくります。「信長と秀吉に天道があるから滅ぼされた」という勝者の論理で構成されています。天道は当時普及している思想です。「天道」を他の言葉で置き換えれば「運命」や「時流」などに近いニュアンスです。成立当時は関ヶ原の戦いが終わり徳川幕府は成立しましたが、大坂の豊臣家は存続しています。天道を何度も使い強調することで「豊臣に天道がある」つまり、「豊臣の天下が再びやってくる」ことを主張したかったと推測できます。

『太閤さま軍記のうち』が成立推測時期の慶長10年時点では家康は64歳です。当時の感覚ではいつ亡くなってもおかしくない年齢でした。家康は征夷大將軍の位を秀忠に譲っていますが、実質的なトップは家康です。家康が亡くなれば徳川に従う豊臣恩顧の大名が豊臣秀頼の下へ戻り、豊臣家の天下を取り戻すと希望を持ち続ける人も多かったです。しかし、家康は豊臣家を滅ぼした翌年の元和2年（1616）に75歳で亡くなります。

織田信長に仕えていた太田が書いた『信長公記（しんちょうこうき）』は正確な記述で一級史料として専門家に扱われています。しかし、『太閤さま軍記のうち』の序文に後陽成天皇と秀吉を称えていることから関ヶ原の戦い以降も仕えていた豊臣家の命で書いたのではないかと思います。

豊臣家に仕え、豊臣家の復権を願っていたであろう太田は当時の多くの人が考えた「秀吉が我が子可愛さに無実の罪で秀次を切腹させた」という豊臣家にとって不利なことを記すことは執筆の意図に反します。そのため史実を曲げて非は秀次にあるとし、「秀次が殺生関白という異常人格者だから処刑された」と創作、根拠になる数々の悪行を挙げたのではないかと思います。

○小瀬甫庵（おぜほあん）の『甫庵太閤記』

「秀次＝殺生関白」を決定的にしたのは寛永2年（1625）に執筆が開始された小瀬甫庵（おぜほあん）の『甫庵太閤記』です。小瀬は史実に基づいた『太閤軍記』の太田の記述を「愚にして直なる故（正直すぎてつまらない）」と批判しています。『太閤軍記』は知名度が低く、貴人の頼みで清書し贈った『太閤さま軍記のうち』が現存している程度です。

『甫庵太閤記』は江戸時代に何度か重版された人気作です。『太閤軍記』など他の史料と聞書きによる内容を下地にし、作品としての面白さを増すための脚色をしました。彼の『信長記』と『太閤記』は史書ではなく歴史を題材にした読み物と最近では考えられています。

また、「評曰（ひょうしていわく）」など作中に儒学思想を基にした小瀬の評論が多いのが特徴です。秀吉の一代記という体裁をとりつつ「秀吉の一代記を題材に儒学思想を基にした評論を展開する」ことが本当の目的のようです。脚色をして面白くしたのは自著が世間に広く読めることで持論を世間に広く知られるためだと思います。

そのため、財政論を語った7巻では普請狂の秀吉を暗に秦の始皇帝（中国を初めて統一した人物。万里の長城を築いたことで有名。豊臣家同様二代で滅びた）に例え、数々の城の普請と大仏建立や金配り、朝鮮侵攻をするより民のために金銀を使うべきだと手厳しく批判しています。

「秀次＝殺生閔白」を広める原因になった『甫庵太閤記』でありながら、8巻では秀次が家来に知行地を与えるため彼の領国尾張での検地では人を上手く使い、家来から不平の声が出ないようにしたことを褒めています。史料や聞き書きの寄せ集めに対して脚色と評論を加えているため、同一人物への評価が巻ごとに異なるなど全体的な内容に一貫性を欠いています。

秀次滅亡を描いた17巻「前閔白秀次公之事」の悪行の内容が「秀次の家臣が書いた話だから殺生閔白は事実だろう」と考えられています。しかし、17巻の内容を読めると『太閤さま軍記のうち』を下地にいます。秀次の家臣でありながら事件の実情は『太閤軍記』に頼らざるを得なかったようです。事件当時は秀次の領地である尾張にいたのかもかもしれません。

また、高野山へ流される秀次一行の身を案じた人達による見舞いの飛脚が次々と来たため、秀次は家臣を通じて高野山への見舞いを断ったという記述が加わります。殺生閔白が事実ではないからこそ、秀次の身を案じる人がいるのです。彼を異常人格者として描きたいならば、この記述は本来不要なはずで。

悪行に関する記述は『太閤さま軍記のうち』との違いは比叡山での狩に木村常陸介（当時の木村は朝鮮で従軍中）が同道していたことや『太閤さま軍記のうち』で北野神社に参る途中座頭を斬り、座頭が彼に言った悪口の具体的な内容が加わります。

『甫庵太閤記』は22巻までありますが本編は16巻で終わり、17巻以降は秀次事件、武将列伝、儒学思想、主家滅亡後、主家復興のために奔走し亡くなった山中鹿介の活躍、

秀吉の形見分けの品など本編と関係のない話が続きます。17巻は省いても進行に支障はありませんが、因果応報のわかりやすい例なので省かなかっただけなのかもしれません。

評論が目的の『甫庵太閤記』は江戸時代に何度も重版された人気作です。重版される過程で小瀬の評論は無視され、削除されたようです。『甫庵太閤記』は太閤記ブームの一端を担い太閤記は芝居や歌舞伎の出し物として演じられます。江戸中期には『絵本太閤記』が出版され庶民にも広く読まれます。太閤記ブームで主人公の秀吉が善という位置づけになったため「豊臣秀次＝殺生関白」が事実のように信じられていました。

◆殺生関白の悪行の検証

ここでは『太閤さま軍記のうち』を中心に殺生関白の悪行を検証します。

○有名な『殺生関白』の落首の真偽

『太閤さま軍記のうち』によると文禄2年（1593）1月に正親町上皇が崩御し、それからしばらくしてから鹿狩りをしたため

「院の御所にたむけのための狩なればこれをせつせう関白（関白の別称・摂政と殺生をかけてある）といふ」

という落首が詠まれ、当時の人は秀次のことを殺生関白と呼んでいたとしています。

しかし、殺生関白の根拠として有名なこの落首は、本当に当時詠まれたものか疑問を感じました。落首の辞典である『落首辞典』で調べると出典は『太閤さま軍記のうち』です。殺生関白の根拠として有名な落首ですが、当時詠まれたもののなら出典は『太閤さま軍記のうち』ではなく、当時の日記になるはずですが、落首全文までは記録に残らなくとも、当時の日記に○月○日に「秀次を批判する落首が詠まれた」という記録が残るはずですが。

自作の落首を「当時の人は秀次を殺生関白と呼んでいた」という根拠にするべく、当時のものと記載した結果だと推測します。

○比叡山での狩り

『太閤さま軍記のうち』では6月8日に女人禁制の比叡山に女人を引き連れ、殺生禁断の地で狩を行い、止めようとした僧たちの塩酢の器の中に獲った鹿肉を入れたとあります。何年の出来事かは記載されていませんが、前後の流れから文禄2年（1593）の出来事と考えられています。

これが事実なら比叡山の寺院にとって大事件です。当時の日記や比叡山の寺院の記録に残るはずですが。しかも、この一件に関して比叡山の寺院の記録などが引用された例はないです。また、「秀次が鹿肉を入れたとされる塩酢の器」など物的証拠が現存しているという話を聞いたことはありません。

山科言経の日記『言経卿記』では同日に「殿下へ参了、山里へ渡御了、サウメン・吸物・夕喰口（該当する漢字がPCにはないです）御相伴了、タン一檢校同参了、平家五六句程語了、申下刻ニ退出了」とあります。山科（招かれたのが山科1人だけかは文面だけではわかりません）を聚楽第の山里茶亭（山里町という山里茶亭を由来とする町名が聚楽第本丸跡地にあります）へ招き、夕食で持て成した後に山科と共にタン一檢校が語る平家物語を聞きました。この日の彼がいた場所は比叡山ではなく聚楽第ということがわかります。

このことから考えると事実と認定することは不可能です。

○千人斬り

秀次が文禄4年（1595）6月15日に北野神社へ参拝に向かう途中に座頭を殺したなど千人斬りと称して無実の人を殺したとあります。辻斬りは悪人の典型的な悪行の一つです。

江戸時代初期まで辻斬りは横行していました。秀次は足田新陰流の祖である足田豊五郎（文五郎とも）と富田流の祖の富田景政から指南を受けたなど兵法に関心を持っていました。そこから思いついた悪評創作話なのではないかと思います。

また、天正14年（1588）に宇喜田多次郎九朗が大坂、文禄2年（1593）に秀吉の家臣・津田信任（のぶとう）が山科で千人斬りの犯人として捕らえられた記録があり（信憑性に疑問あり）、殺生関白が形成の中で当時の事件の犯人がいつの間にか秀次にされた可能性があります。

個人的な意見ですが「殺生関白」は「大岡政談」の真逆にあると感じます。「大岡政談」が町火消し創設など町奉行として江戸の町に多大な貢献をした南町奉行大岡忠相の功績を後世に伝えるため「名裁き」というわかりやすい話にし、一例を除き古今東西の名裁きを彼の裁きとしました。

一方、秀次を「殺生関白」とするため「弓と鉄砲の稽古で民衆を的にした」、「妊婦の腹を割いた」、「気に食わない料理人の腕を切り落とした」など古今東西の悪行が彼に押し付けられた感があります。

このような事件の真偽は当時の日記等を調べればすぐにわかります。『太閤さま軍記のうち』では「秀次と関係のない罪まで負わされた」とあり、暗に彼の無実を訴えています。

秀吉が秀次を切腹させたことを正当化するため、秀次が殺生関白という異常人格者と位置づけられました。彼の悪行を強調したいため、民衆を弓矢や鉄砲の的にするなど古今東西の知っている悪行を付け加えられたと思われます。

当時の人々は秀吉からにらまれ、連座させられないように彼に関わった証拠となる記録を削除し、江戸時代に入り「殺生関白説」の流布で、彼に関わったことは御家の恥になるとして、諸大名は徳川幕府に提出する家譜にすら彼との関わりを記載しなかったため彼の無実を証明する記録が消滅しました。

「殺生関白」が事実なら秀吉は高野山に追放することなく、理由を公にして洛中で磔にするなど処刑したはずです。

彼を弔うため母親の瑞竜院日秀が村雲の地に寺を建て、後陽成天皇から寺領千石と「瑞竜寺」という号を賜りました。

寛永2年（1625）には徳川家光の上洛を機に500石を寄進され、二条城の客殿を移築されました。同年に日秀が亡くなると幕府の命で摂家の娘が代々貫首（かんじゅ。住職のこと）を務める尼門跡寺院となり、瑞龍寺は村雲御所と呼ばれました。「殺生関白」が事実なら彼を弔う寺に天皇と幕府が手を差し伸べるはずがありません。

なお、寺は昭和38年（1963）に彼が城主だった近江八幡城址の八幡山に移りました。また、行者順慶は処刑された彼の妻子が埋められた塚に庵を構え彼らの菩提を弔います。順慶亡き後洪水で庵と塚は崩壊しますが高瀬川を掘削していた豪商・角倉了以（すみのくらしらうい）が塚を見つけ慶長16年（1611）に瑞泉寺を建立しました。幕府に頼み大仏殿の遺材を寺に使っているため、幕府も彼を弔う寺を建てることは承知していたはずです。

彼の生前の姿を知っているからこそ順慶と角倉は彼を弔おうという気持ちが起こったと思います。特に角倉の弟は彼に仕えた医師です。弟から彼の実情を聞いていたからこそ、寺を建立しようという気持ちが起こったのでしょう。

「殺生関白」が疑いのない事実のように信じられてきましたが、戦後は秀吉を英雄視する風潮もなくなり、1970年代に入るとようやく彼を再評価する動きが生まれました。「殺生関白」という世間に定着した誤解が消える日も近いのではないかと思います。

「異説、豊臣秀次」にも「闇の系譜」という言葉を使っているが、近江国も産鉄地域（藤原秀郷の百足退治が有名＝ムカデは産鉄の象徴）であるから、「もののけ姫」の舞台は近江ではないかとの論を寄せたことがある。しかし、ある人は岡山県地方か丹波地方ではないかという人もいる。断定できる資料はないが、ダイダラボッチは中部から関東・東北にかけての物語であり、それだけは混在している。その他の考証は小豪族などが割拠していることなどの状況を併せると中国地方という結論になるらしいのである。ちなみに「中国」という呼び名は「白村江」の戦いで唐から郭ムソウ將軍らの唐軍（＝以後公家と称される）が進駐してきたところから「中国」といわれ、唐すなわち＝藤（藤原）であり＝桃（桃太郎）とされる所以である。

闇とは表の歴史には現れてこない歴史のことであり、その多くは当時の権力者によって削除されたり偽装（偽造）されたりした、タブーの歴史のことである。今でいえば同和問題である。「あの人は同和（地区）だ」ということはタブーとなっているように、たとえば、当時、豊臣秀吉は農民ではなく（農民に日吉丸という幼名があるはずではないか）サンカ系の出身（秀吉の母なかは美濃の関の鍛冶の出身である。また同朋衆とか御伽衆といわれた人々が後年の秀吉の周りにはいた。鉢屋衆のアヤタチムネやアラバギ衆の曾呂利新左衛門とかである）であった。とか、世良田二郎三郎という人物（上州新田郡得川郷）が徳川家康であり、松平元康とは別人である。とか、ないとか。これは眉唾物だが家康の先祖が世良田村の徳阿弥という時宗聖であったことは間違いない。あるいは本能寺の変を演出したのは秀吉と家康であって、踊らされた光秀は山科で死なず家康に匿われて天海（日光東照宮にその証拠がある）となった。などと当時は知っていても？タブーとして言えなかった？（殺される）状況があったと考えられる。それを闇といい、いまそれらを表に出すことを生きがいにライフワークで取り組んでいる人もいる。現実の歴史観（歴史家・郷土史家といわれる人達）では、書物に書かれていることを根拠に論を張るから、それら闇の歴史は異端として切り捨てられることが多い。しかし、存外、文字として書かれる物は権力者の意向に沿ったものしか残らないものである。文字として残されていない伝承・伝説のなかにこそ歴史の真実がある場合が多い。そういう謎解きをしていくのも楽しいものである。本市の八幡堀再生については筑後の「柳川物語」を参考にしているが、柳川の城主は元は近江の田中吉政であり、豊臣秀次の家老として八幡城下町の建設にも活躍した人物である。関が原では、豊臣秀次の遺恨もあり反石田方として東軍に付き逃亡中の石田三成を捕縛したことで有名である。なにか因縁めいたものを感じませんか。また（新聞で読んだ程度だが）最近発見された、大阪羽曳野市の庭鳥塚古墳に關係して思ったことだが、朝鮮南部の伽耶地域（日本の属領府の任那があったとされる）の問題もいまだ課題である。（＝伽耶が日本の出先なのか、逆に伽耶の出先が日本なのかという問題）古墳では、まだ箸墓古墳が誰の墓なのかも分かっていない。いづれ古市古墳群や百舌鳥古墳群が調査され

ることによって明らかとなるであろうが、それまでは＝歴史学で定着するまでは「闇」のなかで想像する以外にない。

私が、このような通常の歴史ではない「闇」とか「裏」とか言われる歴史に興味を持ったのは高校生時代に「八切止夫氏」の作品を読んでからである。まさに目から鱗というか、カルチャーショックというか、新鮮な驚きであった。いま、彼の書籍は古本屋にしかないが、幸いにも、HP（WEB）上に、掲載されているので、興味ある方は、是非ご覧ください。

そういった歴史の中で雑学として知っていて得する歴史の話を変えてみる意味でひとつとしておきたい。皆さんは「竹取物語（かぐや姫）」の話をご存知であろうと思うが、その作者は誰なのか知っているだろうか。種を明かせば、作者は「紀貫之（キノツラユキ）」である。紀貫之を知っている方も多いと思う。百人一首（古今和歌集や土佐日記で有名）に出てくる歌人である。竹取物語のなかで「倉持の君」で登場する人物は「藤原不比人」である。信じられない！と思う人もあろうが、それが今の時代の定説となっているのである。だから、闇（一般に知られていない歴史という意味で）の歴史はおもしろいのである。

こんなことを書き出したら、なんぼでも出てくる。現代に伝わる、節分に豆をまく習慣は、「追儼（ツイナ）の鬼」が原型であり豆は元は院内（インジ）打ちの石であった。とか、「おひな祭り」は「難除の流し雛」と白山の「おしらさま」信仰が混ざったものだとか、プラトンが言った幻の大陸アトランティスはアイスランドのことであったとか、山中鹿之助は戦場で人を殺さず「命の代金＝手形」をとって遺族はそれを元手に酒造業の「鴻池」を起こしたとか、桃太郎の鬼退治に出てくる犬・雉・猿の人物は本当だったとか、世界遺産に登録された熊野三山は黄泉の国（出雲と同じ常世の国）として信仰対象であったが、古代からいろいろな雑学の歴史が聞ける場所である。たとえば三本足の鳥（ヤタカラス＝鴨武角命が八咫鳥とされている。鴨＝加茂は出雲族）は元は長脛彦（長髓彦＝ナガスネヒコ＝東北で荒吐族となる（東日流外三郡誌）＝このナガスネヒコはニニギとは別系統で天孫降臨をしたニゴハヤヒの系統＝記紀神話ではこのニギハヤヒの系統（スサノオ・出雲系王国）が消されて、天照大神―ニニギ―カムヤマトイワレヒコ（神武）系が主流となっている。記紀の編纂が命じられたのは天武天皇だから当然といえば当然なのだが。見落としそうだがニニギの天孫降臨には棚機姫・タナバタの話が付いている。それで記憶しているのだが、彼女らは侵略・征服者に身をささげた者達である。オトタチバナやコノハナサクヤも同じ）を裏切って神武側についた裏切り者のことであったが、戦国時代には雑賀衆の旗印（今はJリーグのシンボルとなっているが）に使われたとか。同じくこの神武が熊野に上陸したとき、神武側についた者で饒速日命（ニギハヤヒ）の系統で物部氏の祖となる高倉下命（タカクラジ）というのもある。この高倉下命こそ熊野一党の開祖と云われている。また熊野には「徐福伝説」があったり、鎌倉時代の文覚上人のこと、あるいは

踊り念仏で有名な一遍上人と熊野三山の山伏や鉾山師との関わりの話も登場する＝これは賤民史観というべきか。あるいは壬辰倭乱の朝鮮における降倭である「沙也可（サヤカ）」とは、その雑賀（サイカ）衆のことである。このことは、まだ一説にすぎないが、そういう類のマンガ本が日本でも韓国でも読まれている。

などなど、天照大神から神武時代までの神話や俗説、伝説取り混ぜて、いろんな雑学の知識を得るには、たいへん為になることが多い。そのためには仏教や神道などの基礎知識は必須であるが…新羅は白木で高句麗はこま（犬）、拝火教は赤というのも面白い。

なお、私の別のHPに「一向衆」のことを書いているが、一遍上人の『一遍聖絵（いっぺんひじりえ）』に多くの非人、乞食とともに描かれているのが、尾張国甚目寺であり、今でも当時の面影を多く残しているそうです。（八切氏はこれを原住民系と呼ぶ。）この『一遍聖絵』にたくさん描かれている奇妙な非人・乞食についての考察は、網野善彦著『日本の歴史をよみなおす』（築摩書房 1991年刊）1100円がおもしろく、お奨めの一冊です。また、海外の話でいえば、日本では呂宋（ルソン）といわれた「フィリピン」は、当時イスパニア（スペイン）の国王フィリペ2世の島という意味で名付けられたこととか、「ブラジル」という意味は「赤い実」ということ、あるいは同じブラジルのことでブラジルでのキリスト教は「イエズス会」（＝そういえば日本にも布教にきたあのフランシスコ・ザビエルはイエズス会である）が布教の中心であったとか、いろいろと興味ある話もありますが、そういった雑学は、また別の機会に述べたいと思う。話がいろいろ飛んで長くなったので、ここらで終わりたい。多くのことを一度に書きすぎたように思う。焦点が何か分からなくなった。これでは著述業は失格だろうが、これが私流だと思ってください。「人類の最高の学問は歴史学」・・・誰が言った言葉か忘れたが、「人類（ホモサピエンス）にとって、最も高度な学問は何か。ということをおある学者が研究した。結論は歴史学であった。歴史を学ぶ者には優れた知性と高い好奇心、つまり恵まれた頭脳が要求される」そうである。ともあれ、こうした雑学は、好奇心がなければ身に付かない。残念なことには、そうした雑学を披露する職場環境なり、家庭・地域環境にないということ、いいかえれば、私の周辺には、そうした雑学（雑学はなにも歴史だけではない。台風とハリケーンは同じもの＝日付変更線と呼び名が違うだけなんていうものも雑学のうちだよ）に関心をもち、議論（話し相手にさえ）をする人がいないということである。残念である。

「闇の日本史＝異説とは」で、韓国の降倭の子孫が住む「沙也可の里」（友鹿洞ウロクトン）を少し紹介したが、2002年8月に私も訪問したことがある。（仲尾宏先生と「朝鮮通信使の足跡」を旅した時。）

「沙也可」についての歴史研究は、これからの日韓親善交流に、朝鮮通信使とあわせて、必要なツールとなろう。

説明文……「沙也可の里」とは……(韓国の新聞記事から引用) 韓国・慶尚北道は大邱(テグ) 広域市郊外の友鹿洞(ウロクドン。旧名・慕夏洞)に降倭・沙也可を訪ねる日本人観光客が増えている。今から四〇〇年前、豊臣秀吉が三〇万の大軍を出兵し朝鮮半島を侵攻した。韓国でいう壬辰倭乱(イムジンウェラン)、日本でいわゆる文禄・慶長の役である。この時、鉄砲の技術を備えた若い軍事集団が朝鮮への侵攻を正道にあらざと拒否、朝鮮王朝側に降伏した。彼らは鉄砲製造の技術を敵方である朝鮮軍に伝え、降倭領将として朝鮮側とともに豊臣軍と戦った。そのリーダーが沙也可(一五七一～一六四二)である。沙也可、時に二二歳。彼は朝鮮王朝の臣下としてその後もいく度か功を立て、金海金氏の名を受け、金忠善(キム・チュンソン) 将軍として称えられた。友鹿里には沙也可一四代金在徳さんを頭とする沙也可の子孫およそ三〇〇人が住み、ひとつの村をなす。慕夏堂(沙也可の号)を奉安祭享する鹿洞(ノクドン) 書院が朝鮮朝正祖一八年＝一七九四年＝創建され、今日に至っている。友鹿里と鹿洞書院に日本人観光客が来るようになったのは九〇年代に沙也可の物語が徐々に広まってから。「降倭」と紹介された当時の二文字が新鮮に映った。四〇〇年も昔の個性的な日本人の足跡をたどり友鹿里を訪ねる日本人観光客は〇〇年約一五〇〇人、〇一年二〇〇〇人と毎年二〇～三〇%の増加ぶりを見せている。今年も近江八幡市職員が立ち寄る予定。

沙也可(金忠善)は、どんな人物？

壬辰倭乱で豊軍に反旗。一五九二年四月、豊臣秀吉が朝鮮に侵攻した際、加藤清正軍の右先鋒として三〇〇〇人の兵を率いて同月十三日、釜山に上陸した。上陸のその日に直ちに略奪を禁じる軍令を下し、同二十日、反旗をひるがえして朝鮮軍に投降した。後の『慕夏堂記』には「釜山に上陸して殺戮を犯した」と記され、豊臣軍の侵攻を批判。「捨生取義」を叫んで礼と義の国・朝鮮に部下二四人ともに身を委ねた。三〇歳の時、晋州(チンジュ) 牧使の娘を娶(めと)った。沙也可は火縄銃(鳥銃)の製造と火薬の製法に明るい雑賀衆と言われ、その出身は瀬戸内海とも九州ともいわれる。火薬の製法伝授と火縄銃の製造によって戦局を好転させる功を立て、宣祖から金海金氏・金忠善(日本名・沙也可)の賜姓賜名を受けた。沙也可の投降の背景には雑賀衆は鉄砲が上手く「陣借り」して戦をした傭兵集団であったため、「自分たちを必要とするところなら秀吉でも家康でもよく、日本でも朝鮮でもよかった。一族の活路を求めて居着いた」という見方をする人もいる。

沙也可は弱冠二二歳で壬辰乱に参戦、秀吉の二度目の侵攻・丁酉再乱に対抗して二六歳で再び参戦。北防一〇年の戦闘、李の反乱、丁卯胡乱、丙子胡乱に志願し戦ったので「三乱の功臣」と称えられる。七二歳で死没。望郷の七言絶句を残し、故郷を懐かしんだ。

この文中に出てくる近江八幡市職員は私たちだが残念ながら2003年は私ではなかったが。なぜ「統一日報」の記事に、近江八幡市のことが載っているのかというと、近江八幡市国際(交流)協会が、この旅行を後援しているためであり、毎回、友鹿洞のすぐ近く

の「密陽市」と近江八幡市が、朝鮮通信使を通じて姉妹都市提携しており、市長の親書を持って行っているためである。

なぜ「密陽市」と朝鮮通信使と「近江八幡市」なのかというと、密陽出身の義僧といわれた「松雲大師」（韓国では四溟大師＝サンミョンテッサ）が、朝鮮通信使（最初は探賊使で来た）のきっかけをつくり、近江八幡市には、朝鮮通信使が通った街道「朝鮮人街道」が残されており、昼食休憩を八幡別院（本願寺派）で行なったという記録があることから、韓国・密陽市と近江八幡市は1994（平成6）年12月に姉妹都市提携を結んでいる。

なお「朝鮮通信使」や「松雲大師」のことは「仲尾宏先生（京都造形芸術大学）＝滋賀県大津市のお住まい」の著作物を読むことをお勧めします。なんせ先生は第一人者だと私は思っています。こんなことを私は実際に目撃しました。仲尾先生と「朝鮮通信使の足跡」の旅で、韓国釜山から船で対馬に渡るときの船中で、韓国の学生グループ（もちろん私たちのグループではない）の一人が、先生に話しかけ、先生に対馬での講演（ゼミ）を依頼したのです。私はそのとき先生の横の座席でした。その夜、対馬で一泊したとき、夕食のあと、先生は、例の韓国学生グループが泊まっている旅館へ、出かけていかれましたので、ああ、講演にいったのだなあ、と思いました。そのとき、韓国の学生にも知られている高名な先生（こちらは友達みたいに親しくさせていただいていたので、）なのだ改めて認識した次第である。

いま私が述べた「竹取から～サヤカ」のことを理解し話し相手になってくれる人は職場を見渡す限りいなかったし、どれだけの人がこのようなことに関心を抱いているだろうか疑問もある。同好の士も少ない。そのため、「近江八幡検定」を考えたのだが、まだあきらめきれずに、このようなことをしているのである。

回答にでてくる他の人物のうち、①の木村常陸介・重成親子は、豊臣秀次の家臣であり、常陸の介が秀次切腹に連座して死亡したことは、すでに述べたとおりである。木村重成は常陸の介の子供で、成長して豊臣秀頼に仕え、大阪夏の陣にて討ち死にする。②の羽柴秀勝は秀吉が長浜時代に産ませた秀勝（幼いころ病没）とその後、織田信長の四男を養子に貰い受け「秀勝」とした人物（この人も病没）と秀次の実の弟で、「江」の二番目の夫である秀吉の養子となった小吉「秀勝」の3人がいる。秀次の弟の「秀勝」は朝鮮の役の時「巨済島」で病没している。その兄は秀次であるが実弟は「秀保」といい秀吉の弟の豊臣秀長の養子となったが、この人も不慮の事故死をしている。③木下秀俊は木下家定（おねの兄）の5男として生まれたが、秀吉の養子となり豊臣秀俊となったが、秀頼が生まれたのちに、小早川家に養子に出され小早川秀秋と名乗った。関ヶ原の合戦では西軍から東軍に寝返ったとされる人物である。④千利休は云わずと知れた利休宗易であり、お茶（千家）の家元の祖である。利休の子の道安や小庵宗淳（道安の子という説もある）のときは、一旦落ちぶれたが、孫の元伯宗旦（三代目）の息子の二男、一翁宗守（武者小路千家）、三男、江岑宗左（表千家）、四男、仙艘宗室（裏千家）が三家を立て徳川家に茶

堂として召し抱えられて、利休の子孫に代々受け継がれ、現代の千家茶道につながっている。本流は三家であるが傍系はすこぶる多い。

【秀次の子孫】

●豊臣秀次の子孫が生き延びていたことを知っていますか。近江八幡市の洞覚院には秀次の娘「玉姫」の御廟所があります。おそらくそれは幼い時に亡くなったものでしょう。ちなみに、秀次には多くの側室と子どもがいましたが、秀次事件で、秀吉によってほとんどが処刑されてしまいます。そんな中で、秀次の正室一の台（菊亭晴季の娘、秀次事件で処刑）が生んだ娘だけが生き延びていました。彼女（隆清院＝なお又は清子ともいう）は、真田信繁、通称真田幸村に側室として嫁ぎました。娘、息子を一人ずつ授かり、大坂の陣で信繁（幸村）が討ち死にしてからも、秀次の母（とも）を頼って、瑞龍寺に身を寄せたりしながら、逃げ延びることができたようです。その隆清院の娘、お田（おたあさま、御田姫・顕性院）は、大坂の陣のあと徳川方に捕まりますが、江戸の大奥で3年間働くという比較的軽い処分です。大奥といえば、「お江」の居場所です。その江戸城に「大奥」を作り「お江」と対立した人物＝春日局がいます。春日局は名前を「お福」といい、明智光秀の家老であった斎藤内蔵助利三の娘（母は明智光秀の妹）であります。お福の夫は稲葉一徹の子の稲葉正成であり、関ヶ原合戦で小早川秀秋を東軍に寝返らせる役割を担った家老でもあります。

余談だが、本能寺の変のきっかけになったとも伝えられる料理「安土饗応（きょうおう）膳」が近江八幡国民休暇村宮ヶ浜で再現された。本料理は『続群書類従』所収の「天正十年安土御献立」をもとに再現したもので、天正10年（1582）5月15日、織田信長が安土城に徳川家康・穴山梅雪を招待したとき、もてなしたとされる料理である。家康を接待するため、光秀に饗応役を命じたこと、そして途中で饗応役を解任したことが本能寺の変につながっているとされている歴史的に重要な料理である。ところで、山崎の合戦で敗れた明智光秀は山科小栗栖で農民に殺されたとされているが、「天海」僧正として生き延びたとも云われている。また明智の子孫（庶子）も土佐に逃れて生き残り、幕末には船中八策を提案し、維新回天に功績があったという。その子孫とは坂本龍馬だといわれる。坂本家の坂本は大津の坂本城からとったと今も高知では伝承として伝わるお話である。

●徳川秀忠の正室お江（江与）の義理の兄＝秀次の孫に当たる娘さんが、巡り巡って「お江」のそばで働いていたのも不思議な巡り合わせです。大奥でのお勤めを終えたあと、お田は、出羽（山形・秋田）亀田藩藩主、岩城宣隆に見初められ、側室として嫁ぎ、跡継ぎを産みました。隆清院の息子、幸信も、姉のお田が嫁いだ岩城宣隆に引き取られ、亀田藩に仕えました。幸信は元服後、秀次が養子に行く前の元々の名字、「三好」を名乗りました。会うことさえ叶わなかった祖父の名前を、大事に守って生きたのです。隆清院・お田・

幸信は今、秋田県由利郡岩城にお田が開いたお寺、妙慶寺のお墓で眠っています。妙慶寺は、顕性院が真田家菩提の為、寛永6（1629）年に建立した寺であるという。悲劇的な最期を遂げた秀次ですが、その子ども、孫はどうか生き延びて、厳しい運命に立ち向かい遠い地でがんばって生き抜きました。秀次の生きた証は、ちゃんと次の世代に繋がっていました。さて、隆清院は真田信繁の側室でしたが、信繁の正室（竹林院）は大谷吉継の娘（信繁の義父）でした。信繁＝幸村の子ども（嫡男）に真田十勇士に数えられる真田大助幸昌がいるが大阪夏の陣で秀頼と共に亡くなりました。

お菊様伝説の研究

泉南から紀北にかけてを舞台にした悲惨な戦国末期の女性の伝説に関係する土地を廻ってきた。各地の立て札とサイトからの引用部分が多いが、阿菊顕彰会、泉南ライオンズクラブさんには敬意を表したい。国土交通省も地元対策なのか、随分詳しく各地の伝承をまとめている。そもそもお菊様は、豊臣秀吉の甥である秀次の側室、小督の局の子で、彼女は淡輪徹齋隆重の娘である。秀吉は淀君との間に秀頼が生まれてから秀次とは不和になり、要は自分の子を跡取りにすべく秀次は謀反の罪で切腹、遺児4男1女と正側室併せて39名を処刑した。（1595文禄4）小督（おごう）局も殺されたが、生後1ヶ月のお菊様は助命され、その祖父の弟の子で波有手（ぼうで、現在の阪南市内で南海本線鳥取ノ荘駅の北方約500m付近の海岸に近い集落）の豪族、後藤興義の養女となり、紀州山口（現在の和歌山市山口）の山口兵内に嫁いだ。

山口は字のごとく雄の山峠を越えて紀州に入ってすぐの街であり、今も歩けば旧家が並び山口姓のお屋敷も目立つ。昔から経済力があつたようだ。ここの代官の跡取り、たぶん当初は豊臣秀次麾下だったと思われる。嫁いでその数日後に兵内は大阪夏の陣で大阪城へ入ってしまうのである。さてお菊様は夫のために密書を携えて大阪城を訪ねた。紀州若山は関ヶ原後は浅野領である。浅野長晟が徳川家康の命を受け南方より大阪を目指そうとする一方、大野治長は一揆勢と呼応し南進を図る。若御料が密書を持って大阪を目指すとなれば内容は当然、反浅野＝徳川への一揆勢と大阪方の連携であろう。豊臣秀吉の紀州攻めが天正13（1585）、ここで根来衆や雑賀衆、太田党らが没落し、豊臣秀長等豊臣一族が知行することとなります。おそらくここで山口を治めたのでしょうが、関ヶ原の戦い（1600年）で、浅野幸長が紀州に入ります。その後15年間どうしていたのでしょう。面従腹背だったのでしょうか。お菊は雄の山峠でなく5km東の風吹峠へ迂回、途中堀河谷を東に山中に分け入り潜行します。新家方面へ坂を登り尾根沿い標高330m強の納経山で髪を切り男装し、松の根元に埋めたそうで、「お菊松」「お菊山」としてハイキングコースになっています。行って見ましたが、楽に登れるし眺めはいいので石碑も建てられています。関西空港がよく見えます。しかしお菊様の心中、さぞ悲壮であったことなのでしょう。大阪城へ入るのには成功したお菊様でしたが、夫との対面も東の間で、帰路山口一族の鎮圧斬首を知り養父母の後藤家に身を隠します。さらに4

月29日榎井川の戦いで大阪方は敗走、大阪城も5月7日落城で夫も討ち死にを知ることとなります。お菊様もやがて捕らわれてしまいました。嫁いで間もないことから浅野方も助命しようとしたのですが、彼女はこれを拒み、南穂村の紀の川河原で斬首されてしまいました。

今の和歌山市永穂（なんご）であろう、とすれば山口から南西方へ約3kmの近場であり、多分に見せしめの色彩が強い。後藤家は養女の菩提を弔うため法福寺にお菊の木像を納めました。当地には50節に及ぶ手まり歌も伝わっているそうです。「お菊寺」とも呼ばれるお寺ですが、境内には顕彰会の石碑もあります。後藤姓の名前が多く彫られており、ご子孫は続いておられるのだとか旧家が多いなと感心したり、歴史は何らかの形で残るから悪いことや恥ずかしいことはやめようと思ったのでした。鳥取ノ荘の駅から北東方に近いが通りは細くわかりにくい。

紀州から泉南にかけての豪族が大勢力の盛衰の中で翻弄されたことを強く感じました。そもそも淀君と秀頼のために小督も殺されたのにまだ豊臣について行かなければならなかったのでしょうか。徳川方も豊臣との何らかの係累はすべて絶つか没落させる気だったのは関ヶ原戦後の処理で明白ですから、山口もおとなしくしておれなかったのでしょうか。厳しい武家の習いというか権力闘争の実像を見ることができます。南海電鉄「淡輪」駅の北西約300m（直線）付近、「淡輪邸跡」を訪れる。掲示には、「城の藪」と呼ばれたという。小督（ここ）の局の生家となる。幼名「おこよ」。榎井川の合戦で戦死したのは、徹齋の次男で六郎兵衛重政。祖先は源義経の家来で勇名を馳せた佐藤忠信の子、小次郎重治、元久年間（1204頃）この地に地頭として定着とされる。佐藤継信・忠信兄弟は共に義経を守って戦死、その父基治は代々奥州藤原氏のもと信夫、伊達、白河あたりまでを支配していた豪族であるが、頼朝の奥州攻めで降伏したが許されている。

●柳生石舟斎は、松永久秀に仕えていたが、織田信長の命により足利義昭の剣術指南役にもなった。その後隠居したが、大和郡山城主の豊臣秀長に柳生の里の「隠し田」がバレテ所領没収になったが、のち豊臣秀次に100石を復活してもらっている。息子の柳生宗矩が徳川家康に仕え500石を賜り、関ヶ原以降、徳川将軍指南役となる。そもそも、「柳生新陰流」は、伊勢の住人、愛洲移香斎の「陰流」を祖（剣術の源流；移香斎—上泉信綱—柳生石舟斎）として、「陰の流れ」を伝えている。愛洲移香斎は、修験道の山伏や伊賀の百地と出会い「陰流」を創設したといわれている。（陰とは忍びの術である。）それでは、戦国時代にもう一人の武芸者（剣豪）である宮本武蔵が若い時に仕えた戦国武将の名前は誰か。晩年ではありません。関ヶ原合戦の時代に仕えた主人名です。なお宮本武蔵には複数説があり、二天一流を創始し、五輪の書を記した宮本武蔵は播州生まれで「玄信」と名乗っています。円明流を創始した美作生

まれの武蔵は「宮本武蔵政名」を名乗っています。鳥取藩に仕えた「宮本武蔵義貞」も文献に出てきますし、絵や書を残した武蔵は「範高」だということです。一体これはどう考えたらよいでしょう。

剣聖といえば、上記のほかにも宮本武蔵がいます。彼には謎が多すぎます。以下にその理由を記します。

吉川英治で有名な「宮本武蔵」のことは、ほとんどの人が知っているでしょう。それに比べたらレベルはまったくちがうが武蔵コミックとしての井上雄彦著『バガボンド』（講談社）は圧倒的におもしろい。2002～2003年にあったNHKの大河ドラマ（MUSASI）の武蔵本ブームの便乗本で出ていると軽く思っていたが、最近の武蔵小説の劣悪さに比すれば、それなりに読める。

しかし、その「宮本武蔵」なる者が、私の知っている限りでは4人います。これは歴史上のミステリーです。

晩年に「五輪書」を書いた宮本武蔵は「宮本武蔵玄信」と名乗っています。この「玄信」は「二天一流」を創始した、播州（兵庫県）宮本村の人だと伝えられています。養子になって小倉藩の家老になった宮本伊織の残した家系図にも播州とあります。播州の宮本武蔵は黒田家とのつながりもあったといわれています。

ところが、作州美作（岡山県）の宮本村にも、「宮本武蔵」生誕の地があります。名前は「宮本武蔵政名」といいます。この「政名」は、当初は新免武蔵と名乗っていたそうで、「円明流」（十手・手裏剣術）の開祖として登場しています。（これは私が実際岡山市に旅行に行った時に発見しました。岡山県には武蔵の酒までありました。）

現在、宮本武蔵の出身地には作州生誕説と播州生誕説の二つがあって、そのどちらもが観光名所になっていますし、出身地だとしています。私のつたない頭では、これでは宮本武蔵は二人いたと理解できるのです。

ところが、そのほかにも、鳥取藩に仕えた「宮本武蔵義貞」という人もいます。これらの人は空想ではありません。ちゃんとした文献に出てくるのです。また、絵や書を残した「宮本武蔵」は「宮本武蔵範高」だということです。一体これらは、どう考えればよいのでしょうか。

そこで、ふと疑問に思うのが、一乗下がり松の決闘で吉岡一門と対決したのは一体誰なのでしょう、ということです。一方の吉岡道場は「京八流」の正当な剣道場であったことは歴史的な事実です。そこと決闘した人物が架空であるはずがありません。また、佐々

木小次郎と下関の巖流島で対決した宮本武蔵はどの「武蔵」であったのだろうかということである。

少なくとも、宮本武蔵が、ある時点で有名になったとき、宮本武蔵を名乗る侍が複数出たことは、有名税のうちでと、なんとなく分かるのですが、歴史の根本的なものとして、誰が（どの武蔵が）なに（巖流島の決闘、吉岡道場との対決、二刀流の開祖、etc）をしたのか……。歴史に興味のある者としては、せめてそのぐらひは歴史的に明らかにしておきたいと願うものである。

実際、玄信、政名、範高、義貞のほかに宮本武蔵角平、宮本武蔵恒、宮本武蔵義経、宮本武蔵永禎、宮本武蔵忠躬などもあるという。（詳しくは調べていないが・・・）なお、作家五味康祐「二人の武蔵」は、作州浪人平田武蔵と播州浪人岡本武蔵が2人の武蔵で、岡本武蔵は播州米墮村（米田村？）の岡本新左衛門の子という設定になっている。

武蔵生誕の地も、諸説あり、各地に顕彰碑等がある。以下に紹介しておこう。

【岡山県美作市（大原町）宮本村】

武蔵の生誕碑は武蔵宅跡の前に建っている。「宮本武蔵誕生地」。明治44年建立。熊本（武蔵の入滅地）の武蔵顕彰会が武蔵誕生の地として確認。それを受けて町内有志が建立。宮本武蔵駅まである。武蔵の里として観光用に整備されている。

【兵庫県高砂市米田村】

承応2年（武蔵没8年後）に小倉藩筆頭家老宮本伊織（武蔵の養子）が故郷の氏神泊神社の社殿一式を再建した。その本殿に掲げられた棟札が武蔵生誕地の論拠となっている。伊織と田原政久（一族の一人）が寄進した石灯籠が社殿裏にある。

【兵庫県太子町宮本】

宝暦12年に書かれた「播磨鑑」に「宮本武蔵ハ揖東郡鶉ノ荘宮本村ノ産也」とある。これが論拠。石碑は石海神社前の公園の一角に建っている。隣接して武蔵生家跡やゆかりの井戸もあり、「剣聖宮本武蔵生誕の地」と書いた幟が立ち並んでいる。

●博労町にあった旧近江八幡市役所庁舎を桜宮町に移転したのが昭和45年です。その時、通称「官庁街道路」ができました。その官庁街道路の西には「石碑」が立っています。近江八幡市の中心部にありながら、車の通行量も多く、ひっそりと目立たない存在の「石碑」のいわれなどを知る市民も少なくなっています。碑にまつわる伝説は、豊臣秀次が八幡山城を築城した際に、秀次は腕利きの職人を広く集めたが、そのうち七人が、秘密工事

に携わることになったという。しかし、城の完成とともに、城の構造や部屋の配置などの秘密を知ってしまった七人の職人は処刑されてしまった。それを哀れに思った地元の住民が土を盛った土墳をつくり葬ったという。その「石碑」は（七塚之碑）と書かれています。石碑は今でも地元の人たちによって大切にされており、地元自治会は、毎年九月の「敬老の日」に、近くの寺の住職を招き、石碑の前で法要を営んでいる。周囲が開発され、住宅地や商業地に変わっても、先人に対する思いは変わらないようです。

3、近江八幡の歌人は商人でもあった

問題3；江戸中・後期の国学者・歌人で、本名、資芳。別号、閑田子(かんでんし)と称した近江八幡の商家出身の人は誰か。今に残る旧商家住宅は、近江兄弟社図書館としても親しまれました。彼の屋敷は今は教育財団教育会館の所有である。

- ① 蝉丸 ② 松尾芭蕉 ③ 伴蒿蹊 ④ 西川吉輔 ⑤ 北村季吟

解答・・・**3**

<解説>

伴蒿蹊（ばん こうけい、享保18年10月1日（1733年11月7日） - 文化3年7月25日（1806年9月7日））は、江戸時代後期の歌人・文筆家。名を資芳（すけよし）と称し、別号を閑田蘆と号した。生家は近江八幡出身の京都の商家で、8歳で本家の近江八幡の豪商伴庄右衛門資之の養子となった。18歳で家督を継ぎ家業に専念したが、36歳で家督を譲り隠居・剃髪し、その後は著述に専念した。著書『主従心得草』は近江商人の典型的な家訓、他に『閑田詠草』、『閑田耕筆』、『閑田次筆』など。『近世畸人伝』は、著名・無名な人物達の生活と意見が述べられ、17.18世紀江戸時代を知るのに有益な伝記集である。

新町通りの散策

天秤棒を担いで全国を歩いたという近江商人は、「売り手よし、買い手よし、世間よし」の“三方よし”と商売とは関係なく社会貢献をする“陰徳善事”を理念に商売をして、現伊藤忠商事を初め、丸紅、高島屋、大丸、西武グループ、日本生命、ヤンマーディーゼル、武田薬品、布団の西川産業、足袋の福助と近代まで綿々と続く大企業家を生んでいる。品薄の時に値上げをして利益を得るのを潔しとせず、社会貢献はするけどそれで“名前を売る”のを潔しとしないだなんて、昨今話題のIT社長に聞かせたい言葉ではあるけど、IT企業に限らず最近はこの“徳”って無くなった。

メンソレータムの近江兄弟社もこの地の出で、この町に学校を持っている。実際に街を歩いてみると、近江八幡は“天秤棒を担いで”には程遠い“豪商”が多いのがわかる。

伴家、西川家と言う公開されている豪商だけでなく、新町通りに軒を連ねる家はどれも軒の低い平屋か2階屋で建物は京都の大きなお寺の宇堂に匹敵する？と思う程大きい。通りに面した家屋は今もお住まいの民家ばかりで中を見ることが出来るのは資料館となっている

る旧伴家と旧西川家だけだけど、公開されていないお宅も含めてどのお宅も町屋としては大きい。「八幡 表に 日野 奥座敷 五個荘の庭」という言葉があるが、それぞれの地域の商人が金をかける家の場所を表している言葉である。また八幡は蚊帳から発展したので繊維系の商人が多い、日野は椀や薬の行商であったが、酒屋が関東に多い。後発の五個荘は近江麻布が中心だが商社系が多いと云われる。

伴家などは個人の住まいであった家屋が後に小学校の校舎や町役場として使われるほどの大きさだし、西川家は“奥”に至る“庭”の奥行きは 30m はある。大きな公営駐車場は、伴家の分家の屋敷跡だ。分家のお屋敷の跡が大型の観光バスが 30 台は停まれる駐車場になっているので、本家の大きさの程が窺い知れる。

伴家（本家）の住宅は確かに大きくて、ここの当主が本居宣長、上田秋成、与謝蕪村らと交流がある国学者であり歌人でもあった伴蒿蹊の家と知って観光に訪れる人も多い。伴家の向かいには市立資料館。ここは明治の洋館風なのだけど、昭和初期に建設された「旧八幡警察署庁舎」を考古資料館として公開している。裏手にある「歴史民俗資料館」、向かいの「旧伴家住宅」、裏手のそのまた裏に当たる「旧西川家住宅」の 4 館で“資料館”を構成している。ぜひ観光にお越し下さい。

「伴蒿蹊」 読み方：ばん こうけい

江戸後期の国学者・歌人。近江八幡生。名は資芳、別号に閑田子。有賀長伯・武者小路実岳に歌道・和学を学び、晩年には荷田春満に私淑する。和歌では平安四天王の一人。国学を知悉すると共に仏教・漢学にも詳しかった。文化 3 年（1806）歿、74 才。

他の回答に登場した人物で「蟬丸」は云わずと知れた平安時代の歌人で、「小倉百人一首」にその歌が収録されている。大津の逢坂の関の近くには庵をむすび、往来の人を見て「これやこの 行くも帰るも分かれつつ 知るも知らぬも逢坂の関」と和歌を詠んだという盲目の琵琶法師だったという説や皇室関係の人であったなど諸説がある。逢坂山には蟬丸を祀った「蟬丸神社」がある。滋賀県にはゆかりの人である。

松尾芭蕉は、三重（伊賀）の人だが、江戸時代前期の俳諧師で、「奥の細道」は有名である。「水戸黄門」とは同時代の人なので水戸黄門のドラマにもたびたび登場している。伊賀という出身地から隠密としての任務も請け負っていたのではないかとの推測もある。旅の途中で病んで大阪で客死したが、「墓は木曾殿の隣に」との生前の遺言で、大津膳所の「義仲寺」に木曾義仲の墓の隣に葬られた。⑤の北村季吟は、芭蕉の師匠であり江戸前期の歌人・俳人である。近江国野洲郡（野洲市）北村に生まれ、代々医者であったが、元禄 2 年、歌学方として幕府に仕えた。以後、北村家が幕府歌学方を世襲した。④の西川吉輔（にしかわよしすけ）は、近江八幡の商家、西川伝右衛門家の分家である肥料商の西川善

六家の出身で7代目であり、彦根藩士だったが、幕末維新时期平田派国学者として藩論の尊王への転換を計った。安政の大獄で捕まったが脱出し、京で足利三代木像梟首事件を起こした尊王攘夷派の勤王の志士である。禁門の変にも関係したとされるが、王政復古の明治維新後は、日吉大社の宮司や生国魂神社の宮司を歴任し、帰正館を創設し教導にも努め、伊庭貞剛などの明治期の近江商人を輩出した人物である。

4、今に伝わる「伊庭貞剛」の教訓

問題4；「住友」中興の人と言われた叔父広瀬幸平の後を継いで第2代住友総領事となり明治時代に東の足尾、西の別子とされた「別子銅山の中興の祖」と云われて環境問題にも心血を注いだ。別子銅山に植林した結果が今の「住友林業」に繋がっている。田中正造も称賛した近江八幡の西宿町出身の事業家は誰か。

- ① 塚本幸一 ② 山岡孫吉 ③ 伊藤忠兵衛 ④ 堤 康次郎 ⑤ 伊庭貞剛 □

解答・・・**5**

<解説>

伊庭貞剛は、当初、明治政府の官吏をしていたが、当時、住友の総支配人（総理事）をしていた叔父であった広瀬幸平氏により、住友に入社し、住友の別子銅山を運営した人物である。

伊庭貞剛の叔父である広瀬幸平は、文政11（1828）年5月5日、北脇理三郎の次男として近江国野洲郡八夫村（現滋賀県野洲郡中主町）で生まれた。天保5（1834）年、別子銅山勤務の叔父・北脇治右衛門に従って別子銅山に登り、その二年後、就業年齢に達してより住友家に奉公した。28歳のとき、住友家第10代当主・友視の推挙によって広瀬義右衛門の養子となり、慶応元（1865）年、38歳で別子銅山支配人となった。慶応4（1868）年2月、別子銅山の接収に訪れた土佐藩（現在の高知県）の川田小一郎に対して、別子銅山は確かに幕府領であるけれども、住友家が発見し、独力で経営してきたものである。しかるに、新政府がこれを没収し、経験のない者に任せるというのであれば、それは国益に反することである、と訴えたのである。広瀬の訴えは、同じ「草莽の臣」（そうもうのじん）である川田の心を動かし、両者の出願によって同年三月、新政府から正式に別子銅山の継続経営が許可された。川田は後に三菱の創設に参画し、日本銀行の総裁となった人物であるが、当時はまだ下級役人であった。しかし非凡な才能をもつこの両者の出会いが、その後の住友発展の契機となったのである。このことは、本宮ひろし作のコミック本「猛き黄金の国」に掲載されているので一読をお勧めする。（新居浜には広瀬幸平歴史記念館と旧屋敷が残されている。住友発展の礎を築いたので住友中興の祖とも言われている。）さて、本題の

伊庭貞剛のことであるが、近江八幡西宿の生まれで生家も西宿にあったが叔父、広瀬幸平の勧めにより住友に入社。3ヵ月後に本店支配人となった後も才覚を高く買われ、さまざまな役職を経験する。薩摩の五代友厚（大阪商工会議所や大阪造幣局、大阪証券取引所などの設立により東の渋沢、西の五代と言われる関西経済界の重鎮）と後の大阪市立大学校となる商業学校や大阪紡績（東洋紡）を設立している。住友銀行の創設もこの人である。明治23年滋賀3区から衆議院議員に当選。銅山の開発により荒れるがままになっていた西赤石山系の山々に「別子全山を旧のあおあおとした姿にしてこれを大自然にかえさねばならない」として、植林を施すなど、環境復元にも心血を注いだ。それらの山林は、後に管理会社として「住友林業」が設立され、今日まで住友の山として受け継がれている。田中正造は貞剛の一連の行動を評価し、別子銅山を「我が国銅山の模範」とまで言い切っている。引退後は、滋賀県石山の活機園【今も住友林業の管理である】に住まう。1926年（大正15年）10月22日、石山の自宅（活機園）にて没す。享年80。滋賀県近江八幡市に墓がある。

西宿町に伊庭貞剛の屋敷跡があり、現在は公園になっており、地域の方々が清掃などを行ない保存している。

さて、残りの人物について紹介しておく、塚本幸一（敬称略）はワコールの創始者である。山岡孫吉はヤンマー（商標のヤンマーは「やまおか」に発音が近いのとトンボのオニヤンマをかけたもの）の創業者であり、伊藤忠兵衛は「伊藤忠」や「丸紅」の創始者である。堤康次郎は云わずと知れた、「西武鉄道」の創業者である。彼らは、残念ながら近江八幡の出身ではないが、「近江商人」ではある。山岡は長浜（高月町）であり、伊藤は現在の滋賀県豊郷町に生まれる。初代忠兵衛が1858年「紅長」（べんちょう）の屋号で繊維小売業＝近江麻布類行商をなしたのにはじまる。伊藤忠・丸紅とも、この年をもって創業としている。堤康次郎は愛荘町の出身である。第44代衆議院議長を務め大津市の名誉市民でもある。「ピストル堤」の異名をもつ日本を代表する実業家でもある。今でも彼の子どもたちによる経済界での影響力はすごい。

5、青い目の近江商人

問題5；近江八幡市名誉市民第1号「ウィリアム・メレル・ヴォーリズ」氏は英語教師として来日後、建築設計、医薬品製造販売（メンソレータム）学校、病院経営などを手掛け「青い目の近江商人」と云われたが、占領軍ダグラス・マッカーサーとも親交があり「天皇を守ったアメリカ人」とも称されている。彼の出身地はアメリカ合衆国の何州の何という都市か。

- ① ミシガン州グランドラピッツ ②コロラド州デンバー ③アリゾナ州セドナ
④カンザス州レブンワース ⑤カリフォルニア州サンフランシスコ □

解答・・・・・・・・④

<解説>

ヴォーリズ氏に関しては、いろいろな本が出版されているので、解説についてはお譲りします。特筆すべきは、ヴォーリズ氏の妻となった一柳満喜子さんは、もと豊臣秀次公の家臣で小田原合戦で戦死した一柳直末の弟で家督を継いだ一柳直盛の子孫で、明治維新までは大名家の人だったことです。

6、 姉と嫁のおかげで出世した京極高次

問題6；初代八幡城主の豊臣秀次はよく知られているところだが、小田原征伐の功により第二代八幡城主で最後の城主となった人物の名は誰か。（彼が大津城へ移転の後八幡城は廃城となる）大河ドラマの「お江」の姉「お初」の夫と云えば分かるかな。関ヶ原後は大津城での戦功が認められて小浜城主となる。

- ① 田中吉政 ②山内一豊 ③京極高次 ④藤堂高虎 ⑤細川忠興

解答・・・・・・・・③

<解説>

京極家は、元々、近江守護の佐々木家から分かれ佐々木京極家が湖北を、佐々木六角家が湖東湖南を領していた。・・・・保元・平治の乱で源義朝に味方した近江源氏の佐々木秀義は源頼朝につき従い関東に流罪となったが、平家打倒の兵をあげた頼朝軍として参加。彼の息子の定綱、高綱、経高など兄弟は頼朝の側近として仕え、木曾義仲追討の宇治川の合戦や平家追討で名をはせた。定綱の四男の佐々木信綱は、承久の変の功により鎌倉幕府により近江他数ヶ国の守護に任じられた。そして彼の4人の息子に近江を分けて継がせた。このうち、江北（北近江）にある高島郡、伊香郡、浅井郡、坂田郡、犬上郡、愛智郡の6郡と京都の京極高辻の館を継いだ4男の氏信を祖とする一族が後に京極氏と呼ばれるようになる。なお、この時に江南（南近江）を継いだ3男の泰綱は佐々木宗家を継ぎ、六角氏の祖となっている。長男の重綱と次男の高信も坂田郡大原庄と高島郡田中郷を相続、それぞれ大原氏・高島氏の祖となった。その後、建武の新政により鎌倉幕府を滅ぼした足利尊氏に仕えた佐々木導誉（京極高氏）の活躍により、京極氏は室町時代に出雲・隠岐・飛騨の守護を代々務め、バサラ大名として繁栄した。応仁の乱の後には家督争いや浅井氏の台頭により衰退したが、京極高次・高知兄弟が戦国時代に織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えて家を再興した。徳川時代から明治維新を生き延び華族に列せられている。なお佐々木

導誉（京極高氏）の孫の高久が山名氏の起こした明徳の乱で活躍し出雲尼子郷を分け与えられ以後、尼子氏の始祖となる。

さて、京極高次の頃は、北に家臣であった浅井氏が起こり下剋上により京極氏に代わって戦国大名化していた。南は佐々木六角氏が観音寺城を拠点に、浅井氏と近江の領有権を争っていた時代である。京極氏は戦国末期には新興の浅井氏に追われて崩壊状態でした。

やがて織田信長によって浅井氏が滅ぼされると、当時京極氏当主の高次は離散していた家臣を集めて知行五千石で信長に仕えることとなります。しかし、かつての京極氏の栄光とは天と地ほどの差があったのです。1582年に主信長が本能寺の変に倒れると、高次は明智光秀のもとにはせ参じます。しかし光秀は秀吉にあっけなく敗れてしまい、高次は越前の柴田勝家、さらに若狭の武田元明を頼って落ち延びていきます。しかし、賤ヶ岳の合戦で秀吉は柴田勝家を破ると、余勢をかつて武田元明をも滅ぼし、高次は行き場がなくなってしまいます。さて、ここまで追いつめられれば自害して果てるか、もしくは敵将のもとに出頭して沙汰を待つかといったところが戦国のならいですが、高次はそのどちらもとりませんでした。高次は武田元明のもとに嫁いでいた妹竜子を秀吉に側室として差し出します。竜子はかなりの美貌の持ち主として知られ、一方秀吉は一角ならぬ女好き。秀吉は高次を許し、知行二千五百石を与えます。

やがて高次の妹竜子は秀吉の寵愛をますます受け（後の京極殿）、高次はついに近江大津六万石の城主となります。さらに秀吉の死の直前には従三位参議に叙任されるにいたります。こうして高次は見事に京極氏の復興を完成させますが、その出世の功績は秀吉の寵愛を受けた妹竜子の力によるところが大きいと言えます。つまり秀吉の死後は後ろ盾を失い、他の秀吉の寵臣達と同様没落の一途をたどる、はずでした。ところが……。京極高次の妻はお初と言い、浅井長政とお市の方の間に生まれた三娘のうちの次女にあたります。彼女の姉である長女茶々は秀吉の側室で、妹の三女お江は徳川秀忠（のちの江戸幕府二代将軍）の正室となっていました。豊臣秀吉の死後は五大老筆頭の徳川家康が台頭し、徐々に実権を握っていきます。こうしたなかで高次は、妻が徳川秀忠正室の姉である縁で徳川家に急接近します。そして関ヶ原の戦いでは大津に籠城して豊臣方と戦います。

結局大津では豊臣方に敗れていったん高野山に逃れますが、戦後はその軍功で若狭小浜八万五千石に封じられ、さらに翌年には七千石加増されて最終的には九万二千石の大大名となったのです。しかし高次はいきなり大津城主となったわけではなく、赦免された当初（天正十二年）は近江高島郡田中で二千五百石であった。しかし同十四(1586)年には高島郡で五千石、九州攻めの後には大溝城一万石、小田原攻めの後には八幡山城二万八千石と、まさにトントン拍子で出世することになるが、これには松の丸殿の存在が大きかったであろう事は想像に難くない。そして文禄四年に高次は大津城主となり、慶長元(1596)年には

従三位参議に任官し、以後「大津宰相」と呼ばれるまでになるが、周囲からは彼の功績などではなく妹の「尻の光」で出世したという意味から、蔭で「蛸大名」と囃かれた。

戦国の世にあって、武功によらず妹と妻という二人の女性によって九万石の大名にのし上がったというのは大変珍しく、おもしろい例と言えます。

なお、京極高次を大名にした彼の妻とその妹お江は、数十年前に京極家を没落させた浅井長政の娘達というのも大いに興味深いところです

なお、京極高次の弟に「京極高知」がいるが、彼も兄高次と同じく、秀吉に仕え、信濃飯田城6万石を領し、関ヶ原の合戦では東軍に属し、丹後12万石（田辺城・宮津城）を賜っている。子孫はのち但馬豊岡へ転封をさせられるが、徳川幕府内では若年寄を出すなどの中樞大名として活躍している。

また忠臣蔵で有名な大石内蔵助夫人「大石りく」は、但馬国豊岡藩京極家の家老石束源五兵衛每公の長女として誕生している。また、大石内蔵助良雄の本貫は滋賀県である。少し長くなるが、彼の生い立ちを見ておく。なお、

「良雄」は諱で、通称（仮名）は「内蔵助」。一般にはこの大石内蔵助（おおいし くら のすけ）の名で広く知られる。大石家は藤原秀郷の末裔小山氏の一族である。代々近江国守護佐々木氏のもとで栗太郡大石庄（滋賀県大津市大石東町・大石中町）の下司職をつとめていたため、大石を姓にするようになった。その後、大石氏は応仁の乱などで没落したが、大石良信の代には豊臣秀次に仕えた。秀次失脚後、良信の庶子にして次男の大石良勝（良雄の曾祖父）は京で仏門に入れられたが、京を脱走し江戸で浪人した後、浅野家に仕えるようになった。良勝は、大坂夏の陣での戦功が著しかったため、浅野長政の三男浅野長重（長矩の曾祖父で常陸国真壁・笠間藩主）の永代家老に取り立てられる。長重の長男・長直は赤穂に転封されたので、大石家も赤穂に移ることになる。

良勝の長男大石良欽も赤穂藩浅野家の筆頭家老となる。また良勝の次男大石良重も家老となり、浅野長直（長矩の祖父）の息女鶴姫を妻に賜っており、その子の二人はいずれも浅野長直に分知されて幕府旗本（浅野長恒と浅野長武）になった。

大石良欽は鳥居忠勝（鳥居元忠の子）の娘を娶り、その間に大石良昭を長男として儲けた。その良昭と備前国岡山藩の重臣池田由成（天城3万2,000石を領する大名並みの陪臣）の娘くまの間に長男として、播州赤穂城内に生まれたのがこの大石内蔵助良雄である。

このように、良雄の直系の曾曾祖父である大石良信（おおいし よしのぶ）は、戦国時代から安土桃山時代にかけての武将で、関白豊臣秀次の側近として近侍したが、秀次が切腹

したために浪人する。その後仕官したかどうかは分かっていないが息子の良勝の代に笠間の浅野家に仕官し大阪夏の陣で活躍したといわれている。京極つながりで、忠臣蔵の大石家まで言及したが、余談なお話でした。余談ついでに、私がNHK大河ドラマの「お江」で印象に残っているのは京極高次に嫁いだ浅井長政の二女「お初」役の「水川あさみ」が印象に残っています。

7、坂本竜馬の嫁と再婚したのは八幡商人だった

問題7：西庄出身の商人「西村松兵衛」が横浜で再婚した「西村ツル」は前の名は「榎崎竜」といい、寺田屋のお登勢女将（大津出身）や勝海舟や西郷隆盛とも顔なじみだったと云われる。この「竜」は前の夫とは九州にも新婚旅行に行ったといわれる。維新を目前に暗殺された彼女の前夫の名前は誰か。彼は明智光秀の子孫ともいわれている。その証拠に彼の家の紋は「桔梗」である。

① 中岡慎太郎 ②大久保利通 ③西郷小吉 ④福沢諭吉 ⑤坂本竜馬

解答・・・・・・・・**5**

<解説>

土佐の長宗我部元親と美濃斉藤・明智家は(明智光秀の家老であった斉藤内蔵助利三の妹は元親の正室である。)近い親類筋であった。そのため、山崎の合戦で豊臣秀吉に敗れた明智の一族が土佐に逃れ、「才谷屋」として商人兼郷士になったのは自然のなりゆきであろうか。土佐高知に行ってみると、竜馬の坂本家は明智光秀の子孫として、今も真実として語られている。明智光秀も生き延びて「天海」として徳川幕府の礎を築いた人であるとも云われている。そんな徳川家に大恩ある明智家の人物の子孫である坂本竜馬を、徳川は暗殺などしない。という説もある。そうすると暗殺はどこが指示したのか。船中八策で大政奉還をさせた中心人物であった坂本竜馬が邪魔になった勢力がいたということである。それは王政復古をなし武力による討幕を画策する勢力ということに必然的になる。

●「桜田門外の変」はご存じであろう。幕末の大老・井伊直弼を安政7年3月3日（1860年3月24日）に江戸城桜田門外（現在の東京都千代田区霞が関）において水戸藩、薩摩藩の脱藩浪士が彦根藩の行列を襲撃して暗殺した事件である。井伊直弼の首級を斬ったのは薩摩藩の脱藩浪士「有村治（次）左衛門」だが、彼自身も重傷を負い、逃げる途中で力尽きて自害している。彼の一家のうち長兄は後に貴族院議員となった海江田（養子に入る）信義（俊斎）である。次兄が雄助、次が桜田門外の変に加わった本人・三男の次（治）左衛門、そして四男の国彦である。問題は、その四男の国彦の子孫が現在も近江八幡市内に在住しています。血筋であろうか、現在の彼も政治家であり、彼の父も妹も政治家であったので市内の有権者なら誰でも知っているはず。

8、前野将衛門長泰（長康）は川並衆の蜂須賀小六正勝と同期入社

問題8；豊臣秀吉とは墨俣一夜城建設時のころからの知り合いで、川並衆と呼ばれた蜂須賀小六とは兄弟分であり一般に将右衛門と呼び、関ヶ原合戦で石田方で活躍した舞兵庫は甥になるという。豊臣秀次の家老となって小牧・長久手や小田原戦線で戦ったが豊臣秀次事件に連座して賜死（切腹）した人物の名前は誰か。

② 木村重成 ②真田昌幸 ③菊亭晴季 ④前野長泰 ⑤石見重太郎 □

解答・・・・・・・・④

<解説>

1、「川並衆」は「川童」か

「童子」とは昔から「鬼」につけられた名称である。茨木童子、伊吹童子、酒呑童子である。「川」に住む童子を「川童（かっぱ）」といたのである。山に住んだ人は「サンカ」「鍛冶師・鉾山（やま）師」などの「山の民」という。前置きはそのぐらいにして、前野と蜂須賀は秀吉が、織田信長に仕えていた頃からの最古参の家臣である。俗に言う秀吉の墨俣一夜城の築城に協力して、そのまま秀吉の家臣となったとある。しかし、実際は、秀吉ではなく織田家から給金をもらっており、織田信長の家臣と云えた。同様な人物に竹中半兵衛がいる。彼も秀吉ではなく織田信長の家臣である。

川並衆とは川賊である。水運を利用しての商売もしている。あまり知られていないが、後の豊臣秀吉——木下藤吉朗の出世の足がかりというのは、尾張北東部の野武士の棟梁であった蜂須賀小六を織田家に帰属させたことであった。

蜂須賀小六——本名を蜂須賀 彦右衛門 正勝と言うのだが、小六の方が人口に膾炙されていて通りが良い。蜂須賀氏というのは、もともと尾張の清洲から数里ほど西の蜂須賀村（現 愛知県海部郡美和町）というところに根を張る土豪で、信長の父 信秀の代には織田家に属していたらしい。が、どういう経緯かは解らないが信秀に攻められて蜂須賀村を捨て、小六が6歳のときに母 安井氏の実家である宮後村（現 江南市宮後町）へと移り住んだ。

宮後村に城を構えていた安井重継という男は、小六の母の兄——つまり小六の叔父にあたる人物で、木曾川流域に広く勢力を持つ独立豪族であった。『武功夜話』によると、安井氏というのは甲斐源氏の流れの名家で、数代前は美濃の守護である土岐氏の重臣であったらしい。小六は、この安井重継に育てられた。この安井氏が、木曾川流域に広く勢力を持っていた。この当時、川筋——とりわけ大河の流域というのは、特殊な人々が住んでいる。

河原というのは一般に人が住む地域ではないのだが、河川の多くが国と国、領地と領地の境になるために、誰からも支配されない緩衝地帯になることが多く、その結果として、逃散した農耕民や罪を得て国を逃れた者、諸国を漂泊する遊行民にとっては格好の住処となっていたのである。それらの人々は時代を経るにつれ、いわゆる「川の民」になってい

った。「川の民」というのは、現代でいうところの水運業者と商人を兼ねたような人々である。当時は一般に「渡り衆」と呼ばれ、たとえば琵琶湖のような湖や全国の巨大な河川の流域に住み着き、舟を使うことで川筋を道のように自在に往来し、多少の武力をもって自衛しながら人や荷物を運ぶことで生業を立てていた。いわば、「川賊」とでも呼ぶべき川の地侍である。もちろん、日本を代表する大河である木曾川にもそういう「川の民」がいて、この当時、「川並衆」と呼ばれていた。安井氏は、この「川並衆」と深く繋がりを持ち、これを利用することによって木曾川流域の水運を牛耳り、そこから莫大な利潤を得ていたらしい。小土豪に過ぎない安井氏が、それなりの影響力と富力とを持って独立していられたのはこのためである。安井重継という男は、よほどの切れ者であったのだろう。安井重継が住んでいた宮後城は、地元の人々から「安井屋敷」と呼ばれていた。これが、いつの頃からか「蜂須賀屋敷」と呼ばれるようになる。察するに、成長した小六の人間を見込んだ安井重継が、家督をこの甥に譲ったものらしい。

小六は一種の「徳」のある男で、一度引き受けた約束は何があっても守るような律儀さと男気があり、優しさと思いやりも持っている上、人使いが上手かったから、配下の者たちからも「川並衆」からも慕われた。小六の人柄を見込んで、近隣の地侍やならず者らが懐いてき、やがて小六は数百人の人数を動かせるほどの大将になっていた。平素は半士半農の生活をし、戦があればそれらの人数を率い、大名に雇われて戦場稼ぎをすることで暮らしを立てていたわけである。なお前野長泰氏は川並衆にも強い影響力を有していた名門である坪内氏は川並衆の政治的外交を主に担当し、実働部隊としての土豪である蜂須賀党の蜂須賀氏、前野氏（坪内為定が婚姻し、坪内光景が養子となり前野長康を名乗り、影響力を持っていた）等を指揮していた、とされている。

藤吉朗は、織田家に仕える以前、諸国を放浪していた時期があり、小六ともその頃に知り合ったらしい。知り合ったと言っても、実際は「蜂須賀屋敷」に居候をさせてもらい、小六の使い走りのようなことをして飯を食わせてもらっていたようなのだが……。信長没後、秀吉が天下人に上る過程で、兄弟分の前野長泰（長康）も山崎の合戦、賤ヶ岳合戦にも参加して武功を挙げ、出石 11 万石の大名になっている。しかし、「狡兎死して良狗煮られ、高鳥尽きて良弓蔵される」の例えのとおり、秀次が謀反の罪により秀吉に自害させられると、長泰も秀次を弁護したことから連座として罪に問われて切腹させられている。

新人物往来社から刊行された『武功夜話』のうち、**五宗記**は長（泰）康の日記であり、従来の学説を根本的に覆す歴史的にみても非常に貴重な史料と一時は注目された。

さて秀次には、賤ヶ岳の合戦以後につけられた家臣団が木村常陸の介であり、前野将衛門長泰である。さらに家老となる山内一豊や田中吉政彼らは、武将であり大名でもある。

【秀次の家臣団】

●豊臣秀次付きの家老であった『田中吉政』は、当初、宮部継潤の家臣であった。田中吉政と秀次との接点は早く、秀次4、5歳の時（宮部継潤が秀吉の調略により浅井長政から寝返った時）から秀次の養父（秀次からは第1回目の養子）となっていることから宮部家を通じて吉政とは深い交流があったと推測される。「田中」家はもともと近江人で、近江源氏佐々木信綱の4人の子のうち長男重綱が大原氏、二男高信が高島氏（朽木荘に住す＝のち朽木氏とも云われる）三男泰綱が六角氏、四男氏信が京極氏を名乗るが、「田中氏」は二男高島氏の末裔であると云われる。秀次の筆頭家老であった「田中吉政」は秀次事件ののち、関ヶ原では東軍側に立ち、石田三成を捕縛した張本人である。その功により筑後柳川の領地を与えられ大名となった。八幡堀を整備したのは「田中吉政」だといわれていますが、船下りで有名な柳川の堀割を整備したのも、田中吉政です。なにか因縁を感じます。なお、特に高島家庶系の朽木氏、田中氏、平井氏、横山氏などの高島七頭が西近江では勢力を持っており、戦国時代にも活躍している。この高島氏系統の同族の「横山」であるが（近江国横山村出身といわれる）「横山喜内」という人物がいる。彼は当初、近江国の六角氏に仕えていたが、織田信長に滅ぼされると、信長の家臣となった蒲生氏郷に仕えた。その時「蒲生」という姓をもらって「蒲生喜内」又は「蒲生郷舎」とも「蒲生頼郷」ともいった。蒲生氏郷が病気で亡くなると、彼はある人物に仕え、嶋左近清興と双壁をなし、関ヶ原の戦いで戦死する。小説「影武者徳川家康」の題材にもなっている。彼は最後、石田三成に仕え、関ヶ原で戦死している。

●同じく豊臣秀次付きの家老であった『山内一豊』は、「功名が辻」で有名な奥方の内助の功の逸話（安土に來た奥州の馬商人から、奥方のへそくりで馬を購入する話）が残されているが、もともと「山内一豊」の父は尾張の守護代であった岩倉織田氏の重臣であった。岩倉織田氏が織田信長に滅ぼされた後は、諸国を放浪したのち、信長・秀吉に仕え、長浜城主となり、秀次の家老となった。関ヶ原では東軍につき、土佐をもらう。一方、妻の「千代」は近江浅井氏家臣、若宮喜助友興の娘として弘治2年（1556年）に生まれた。幼くして両親を失い、近江坂田郡宇賀野（滋賀県米原市）で一豊の母に裁縫を習ったことが一豊との縁の始まりだといわれている。夫の功名をその優れた状況判断で支え続け、長浜、京、伏見、大阪等に転住し秀吉の妻おねと仲が良かったという。徳川の世になり、一豊が土佐一国を授かり、土佐に移るが、夫の死後は、京に住んだという。関ヶ原では山内一豊の部下であった田中孫作（米原市出身）に届けさせた石田三成の挙兵を伝えた「笠の緒の密書」が有名な話である。さて、山内一豊が移封された土佐藩は、前領主の家臣であった「一領具足」を郷土と呼び、山内家の家臣を上士と呼んで区別した。

●秀次の家臣で秀次事件に関連して、切腹した「明石則実」という播州出身の人物がいる。彼は、小寺官兵衛（黒田官兵衛）の従兄弟であり、官兵衛と共に秀吉に仕え、

のち秀次に仕えている。関ヶ原で戦った宇喜多家の明石全登は同族である。このように秀次の家臣にはすごい人がごろごろ居た。例えば秀次に剣術指南をした人物の、「神後宗治」（神後流）は、剣聖といわれた上泉信綱の弟子である。もう一人、同じく秀次に剣術を指南したのは「疋田文五郎景兼」という疋田陰流の祖となった人物である。上泉信綱の弟子・新陰流四天王のうち二人に秀次は剣を習っているのである。あとの二人とは「柳生宗厳」（柳生新陰流）と「丸目蔵人長恵」（タイ捨流）である。俗に秀次の親衛隊（精鋭部隊）を「若江八人衆」というが、秀次の死後、多くは石田三成に仕え、関ヶ原で討ち死にしている。同じく秀次の家老をしていたが「秀次事件」で謹慎させられた「おね」の親戚筋で、子孫には「忠臣蔵」で有名となった播州赤穂藩の藩主がいた。

●一柳満喜子女史を主人公にした小説が刊行されています。『負けんとき〜ヴォーリズ満喜子の種まく日々〜』上・下（玉岡かおる著 新潮社）です。彼女が地元の未就学児童を対象として始めた「プレイ・グラウンド」は「清友幼稚園」に発展、今日の近江兄弟学園へと発展。1969年（昭和44年）、ヴォーリズが逝去して5年後に彼女も永眠し、二人は共に同市北之庄町の恒春園に葬られている。さて「一柳満喜子」の家系（先祖）は「一柳直末」に始まる。元は美濃の土豪の出自。羽柴秀吉が織田信長に仕えていた頃から家臣だった古参の武将で、武勇に秀でていたことから「熊」の異名をとった。秀吉に仕えて各地を転戦して武功を挙げ、秀吉の黄母衣衆となった。天正13年（1585年）には田中吉政・中村一氏・堀尾吉晴・山内一豊らとともに豊臣秀次の宿老に任命され、美濃国に3万石を領した。しかし、天正18年（1590年）、小田原征伐に参加したが、その緒戦である伊豆国山中城攻めで戦死し、弟の一柳直盛が跡を継ぎ、近世大名へと繋がり、徳川幕府でも幕末まで続き、明治には子爵となっている。秀吉にとっても信頼されていた武将であり小田原の陣中にあった秀吉は黒田如水から直末討死の報告を聞いて「直末を失った悲しみで、関東を得る喜びも失われてしまった」と嘆き、三日間ほど口をきかなかったという（『一豊公記』）。家督は弟の一柳直盛が継ぎ、また、母らくにも直末の死を悼んだ豊臣秀次から800石の知行地が与えられた。この際の所領宛がい状は、女性相手というためか漢字がほとんど使われておらず、主にひらがなで構成されている（『一柳文書』）。岐阜県関市にある一柳城は直末が築城・改修し、一柳の名をつけた城である。祖先が豊臣秀次の家臣だったこともあり、ヴォーリズ氏に嫁いでも近江八幡市に居住しつづけたとも云われている。

●秀次の家臣になった者のなかには、変わり者もいる。「可児才蔵吉長」は、美濃の生まれで斉藤義龍に仕えたが、斉藤家が織田信長に滅ぼされると織田家に仕え、次に秀吉に仕えた。この経歴は仙石権兵衛秀久に似ているが、秀吉が秀次に付けた武将であるが、秀次が小牧・長久手の戦いで大敗したとき、混乱の中、徒歩で秀次が逃げていた時、馬に乗って逃げる家臣を見かけ、秀次が「馬をよこせ」といったところ、その家臣（可児才蔵）は「雨

の日の傘にて候」と答え、そのまま走り去ったという。つまり、自分が（逃げるのに）必要なものであるので、主君であっても譲ることはできない。と答えたという有名な逸話がある。秀次の怒りを買ったのは言うまでもない。当然その彼は浪人したが、その後、福島正則に仕えた。宝蔵院流槍術の開祖覚禅房胤栄に槍術を学んで「槍の才蔵」と異名をもつ、常に笹の指物を背負って戦い、倒した敵の首の切り口に笹の葉を入れたので「笹の才蔵」ともいう。

●豊臣秀次の家臣に、浅井 井頼（あざい いより）という武将がいた。通称は喜八郎。浅井長政の三男（または次男）で浅井万福丸の弟と伝わる。号は作庵。天正元年に織田信長によって浅井氏が滅ぼされたとき、信長の残党狩りから逃れた。1583年の賤ヶ岳の戦いで羽柴側に属し、その後に豊臣秀次の家臣となり、600石の知行を与えられる。1600年関ヶ原の戦いでは生駒親正の隊に属し、西軍に付いた。慶長19年（1614年）、大坂冬の陣で大坂城に入り、二の丸の東を守備し、落城後に大坂を脱出し、常高院（お初）を頼り若狭小浜藩の京極忠高の家臣となって「京極作庵」と名乗ったとされる。また、香川県丸亀市の京極家の菩提寺である玄要寺に浅井井頼と伝わる墓がある。

●戦国武将としての豊臣秀次の武功については、あまり語られていないが、初陣の小牧・長久手の戦いで徳川家康に惨敗したあと、小田原征伐においては、山中城攻めの大將となって戦ったとある。この戦いは激戦で「一柳満喜子」さんの御先祖である「一柳直末」が討ち死にしているほどであったが、半日で陥落させている。他の城攻めでは葦山城攻めに蒲生氏郷、細川忠興、福島正則、蜂須賀家政、下田城には九鬼、長宗我部などの水軍、松井田城には上杉景勝、前田利家が当たり、「忍城＝のぼうの城（映画）」攻めには石田三成や佐竹義重、真田昌幸が担当していたが小田原城が降伏するまで陥落させられなかったという。翌天正19年（1591年）奥州に出兵し、葛西大崎一揆及び九戸政実の乱鎮圧においても武功を挙げているが、そういうことはあまり聞かれない。特に葛西大崎一揆は伊達政宗が裏で暗躍していたといういわくつきのものである。秀次は同年（天正19年1591年）12月に関白となり、豊臣氏の長者なって聚楽第で政務を行なった。そのため秀吉との二元政治が1595年に高野山に追放されるまで続くのである。なお秀次には「若江八人衆」という精鋭の家臣団がいる。また「松花堂昭乗」という人物は一説では秀次の子どもという説もあるが大阪落城後も生き残り、江戸時代には「寛永の三筆」と称された。またこの人が考案したからその名がつけられた「弁当」を「松花堂弁当」という。

●近江八幡市安土町石寺。ここに我が国最大級の山城跡が残っている。古い時代から山頂近くに西国札所第三十二番の名刹、観音正寺があるので観音寺城という。そこは標高432mの山の東南側全体に巨大な遺構を残し、別名を佐々木城とも呼ばれる。鎌倉初期からの近江守護職、六角佐々木氏の居城である。一般に佐々木六角と呼ばれていた。応仁の時

代に築城され、弘治、永録の戦国時代を迎えるころ、佐々木氏の支配下にある近江南部の各武将がこの城中に屋敷を構え兵を置いていた。安土山と峰続きの織山に今も残る巨大な遺構は安土城後も観音寺城は廃棄されず詰め城として残された証左といえる。長政の義理の兄である織田信長に敗退後、一時期六角氏は歴史上から遠ざかるが、六角義郷が豊臣秀次に見出されて家臣となり1万石を与えられて六角氏を再興する。義郷と共に取り立てられた六角系家臣（元来は彼の家臣）の多くが秀次の直臣となっており、秀次の処断後、秀次付の家臣として連座切腹となった木村重茲（常陸介）は、その代表格である。

木村 重茲は、当初は、近江六角氏の家臣であったが、織田信長により六角氏が敗れて後は、織田信長に臣従し、賤ヶ岳の合戦では、羽柴秀吉に味方し、堂木山砦の守将を任された。秀次が八幡城主となったとき、その家老となり、小田原攻めでは北条氏の岩槻城攻めなどで功を立てた。しかし、秀次事件に連座して、賜死した。その子供は、同じ近江人で秀吉により復活して大名となっていた六角義郷にかくまわれ、豊臣秀頼の近習となり、大阪夏の陣で討ち死にした。その子が匿われて住んでいたのは馬淵村であったという。その子どもを「木村 重成」という。この木村重成をかくまっていたのが、元の主人で、秀次の家臣となった六角義郷だったといわれています。木村重成は、後日の大阪冬の陣、夏の陣で活躍しています。

●直接、近江八幡とは関係がないのだが、佐々木六角氏に仕えていた三井家は近江武士であったが信長の近江進攻とともに伊勢に逃げ屋号を「越後屋」として商売を始めた。それが今の三井・三越の始まりである。また、豪商鴻池についても、尼子氏に最後まで仕えた山中鹿之助という戦国武将の子孫が鴻池村で酒造りをはじめたのが最初である。その戦国武将は豊臣秀吉、織田信長とも縁がある人物で最後には裏切られるのであるが、……

●剣術指南と云えば徳川家康と柳生石舟斎・宗矩が有名であるが、「豊臣秀次」の剣術指南役は、柳生石舟斎よりも強かったと云われる「疋田陰流」の創始者疋田文五郎景兼である。「新陰流」の上泉信綱の姉を母に持ち、早くから信綱に師事して剣を学んだとされる。同門の「神後伊豆宗治」（信綱高弟）も秀次の剣術指南役になっている。このように「新陰流四天王」と言われた疋田景兼、神後宗治の2人に師事した秀次も相当な腕前であったといわれている。では、疋田景兼、神後宗治、柳生宗厳（石舟斎）と丸目蔵人を加えて新陰流四天王という。

【秀次の関係者】

●豊臣秀次公の一族の生き残りの一人に真田信繁（幸村）の側室（正室は大谷行部の娘）となった隆清院（秀次の娘）がいる。彼女は大阪の陣で父を亡くしたが、娘を産んだ。それが「顕性院」である。「秋田県由利郡岩城町にある日蓮宗の古刹、顕性山妙慶寺の一角に、大光院（真田幸村）を父、隆清院（豊臣秀次の娘）を母に持ち、数奇な運命をたどった顕

性院（御田姫）の墓がある。妙慶寺は、顕性院が真田家菩提の為、寛永6（1629）年に建立した寺である」と伝わっている。真田信繁（幸村）の残された家族では、三女阿梅が伊達家の片倉重綱の継室（泰陽院）となっている。豊臣秀次の関係では、秀次の娘である隆清院を母に持つ五女、なほ（御田姫）は秋田の佐竹氏支流の岩城宣隆に嫁ぎ出羽亀田藩主となる岩城重隆を産んでいる。同じ隆清院を母に持つ三男・幸信は実姉の伝手で出羽・亀田藩に仕えたとある。名も豊臣秀次の旧姓である「三好」姓を称し、三好左馬之助幸信と改名している。それはさておき、豊臣秀次と真田幸村に関係があったことに驚きを隠せない。

なお、伊達政宗の側近、片倉小十郎。その子である片倉重長に側室（継室）として迎えられた「梅」という戦国武将の娘が真田幸村の娘であることは世間的に有名な話である。

●豊臣秀次は、三回養子に出されている。1回目は3歳（治兵衛）の時、宮部継潤の養子となり、2回目は実父、弥助＝吉房とともに三好長慶の養子となり「孫七郎信吉」を名乗り、のち叔父、秀吉の養子となり「羽柴秀次」を名乗る。問題は第2番目の養父である「三好長慶（笑巖）」は、家臣に松永久秀を持っていた関係で、ある将軍と対立していた。その将軍とは「足利義輝」である。

●松永久秀は三好長慶の勢力が衰えると、織田信長の家臣となるが、第三次織田包圍網で毛利家や上杉謙信はもちろん、織田方であった別所長治や荒木村重が謀叛すると松永久秀もともに叛旗を翻した。結果的には、松永久秀は大和信貴山で鎮圧され、信長がほしがっていた宝物と一緒に爆死するのだが、松永久秀とともに失われた宝物とは「平蜘蛛の茶釜」という茶器である。

●豊臣秀次は、関白となって八幡城主から京都の「聚楽第」の主となるが、当時、京都は「お土居堀（洛中惣構・京廻りの堤）」によって囲まれていた。秀次の切腹と共に「聚楽第」は壊され、近江武士出身の豪商「角倉了以」により、高瀬川などが開削され「お土居堀」も壊される。しかし、「お土居堀」も一部は現存しており、「聚楽第」の一部も、現在、京都の「三閣（金閣、銀閣、飛雲閣）」の一つ、飛雲閣として残っている。その秀次が最後に過ごしたという「飛雲閣」は今は西本願寺の庭園にある。

●豊臣秀次の養母であった「おね」は、豊臣秀吉が亡くなって「豊国神社」に祀られたとき、剃髪して近くの「高台寺」に隠棲した。関ヶ原前夜には、加藤清正、福島正則、徳川家康等が高台寺詣りをしたという。この「高台寺」が再び歴史に登場するのは幕末である。壬生浪といわれた近藤勇を中心とした「新選組」を分かち「御陵衛士」として「高台寺党」を伊東甲子太郎が結成するのである。

(再び秀次のこと)

さて、その秀次であるが、この際、つづきを私の独断で想定文 (if の想像を交えて) で述べておきたい。

2、秀長—千利休—秀次 ラインが健在であったら

秀長だったら秀次と秀頼のどっちを秀吉の跡継ぎにするのかな？ 秀頼を立てるだろうが、秀次が無惨に死ぬことはなかっただろうな 確かに、秀長が生きていれば、朝鮮の役のような愚行を避けられただろう。結局、これで西軍の大名は力をだいぶすり減らされて (毛利など最大の被害者)、力を温存していた家康に根こそぎやられる遠因になったわけである。秀長存命であれば豊臣は確実に磐石だったか、それはどうだかわからない。なぜなら有能なナンバー2を脅威に感じて誅殺されていたかもしれない。朝鮮の役があったからこそ西国大名は強かったって説もあるが、秀長は大和の大名であり秀長が存命なら秀吉VS秀長と家中が分裂なんて事態もあったかもしれない。その話が歴史群像新書の「天正血戦譜」で述べられている。秀長が生きていても秀吉の精神異常は抑えられないと思うから、そういう非常の事態が発生する可能性も無い訳では無い。そこに石田三成の讒言を受けて秀吉が越えてはいけないう一線を越えてしまい……とか。もあったかもしれない。秀長死亡時の秀吉の落胆と、秀吉と秀長の仲を考えるとなさそうだけど、妹や実母を徳川の人質に出したこともあり、織田信長が本能寺で亡くなった時、黒田官兵衛に本心を見透かされたと感じ、その後、官兵衛を遠ざけている。秀長が生きていても秀吉の精神異常は抑えられないと思うから秀長死後、一ヶ月後に利休を切腹させ、半年で息子 (鶴松) が死んでその一ヶ月後に朝鮮出兵決断だから、むしろ、秀長の死をきっかけに精神異常を引き起こしたと思うわけである。肉親に恵まれなかった (数でも質でも) 男の唯一無二の血を分けた兄弟で天下取りまで辛酸苦肉を供にした、そんな弟が死んでしまったら狂うかも。秀吉にとって秀長は、自分の子 (鶴松) の立場を脅かしかねない人物だったのではないかと考えられたが、年齢から単純に考えて自分よりも秀長のほうが長生きしそうであったから、少なくとも豊臣家が完全に滅ぶことは無かったのでは。秀吉がそう考えたならもっと目に見えた冷遇をしてないだろうかカバーにしても利休にしても秀次にしてもわかりやすいことになってるし 大老筆頭を家康にやらせても秀頼後見を利家に頼んだってあたりで晩年秀吉の思考回路は読めてこないかい？最後の最後は尾張時代からの人脈が何より信じられる、と、そういう発想に至っていたのが秀吉の晩年だったわけで。そうなるなら誰よりも頼りにするだろう相手は……誰だかわかるよな？ 尾張時代の人脈<木下一族の血:神子田正治とか、尾張以来の譜代をもっと大事にしよ……。秀長が長生きしてたら、まず千利休の自害はない。鶴松の死に対しては、秀吉に秀次を跡取りにすることを薦めて心を慰める。三成ら奉行連中が提案した朝鮮出兵は頑固に反対。暗闘が続くが、秀頼の誕生により秀吉は狂喜、精神にガタがくる。

三成—文治派—秀頼VS秀長—武功派—秀次の派閥争い勃発。いかに秀長でも武功派、秀次の統制がとれず次第に分離→秀次事件、千利休はここで自害、秀長はさすがに身内だから高野山に蟄居ですむ。ひょっとしたら福島や加藤といった武功派の連中も（史実よりも深入りしているということ）肅清があるかもしれない。

邪魔者を一掃した秀吉は凶に乗って朝鮮出兵を計画。しかしある程度進んだところで心労により倒れる。さすがに秀頼の行く末を案じ、秀長の名誉回復をして後見を頼んで死去。秀長の新領土は小早川秀秋の旧領か？美濃・尾張あたりか？家康は裏工作に奔走（利家はいつの間にか死去）秀長は黒田官兵衛ら旧来の人脈を利用して対抗。しかし三成らとの連携がうまく行かず、豊臣陣営はやせていく。後は知らん顔の家康が「勝算あり」と判断して関が原が起こるか、秀長と「寿命比べ」をしてホトトギスが鳴くまで待つか……。秀長が70まで生きれば豊臣滅亡の可能性も薄くなったはず。身内だから我慢してみたい気持ちがあったのではと想定する。寄り合い所帯の豊臣政権だから上杉や佐竹みたいな親豊臣大名もそんな感じで不幸をこうむっている感じがする。何故秀吉と秀長が戦うわけ？実の兄弟かつ（異説あり）優秀で数少ない身内を冷遇する意味は無い。秀頼が生まれたとしても秀長と協力して育てれば史実よりマシに育つはず。過去レスにもあるが秀長死亡→秀吉精神崩壊に至ったはず。秀吉が生きてたら淀ももっと普通に秀頼育てられたんじゃないかな。よくも悪くも意思の強い家系のように……ってそうすると家光みたいになるのかな。

奉行連中は秀吉の朝鮮出兵の命令を具体化しただけ。むしろ加藤清正、福島正則らが自分の武勇を示そうと熱狂的に朝鮮出兵を支持しており、秀長はそうした加藤らに不快感を示していたのに、なんでそんな派閥構成になるんだって声も聞こえてくる。朝鮮出兵支持/不支持は、支持=奉行派/不支持=武断派みたいな単純な色分けじゃない。加藤清正、福島正則らが自分の武勇を示そうと熱狂的に朝鮮出兵を支持。アホか 国内で朝鮮の役に共鳴した武将など誰もいないよ。全員迷惑に思ってる。仕方なく「秀吉への義理立て」で兵を出してるんだから。朝鮮との私貿易をもくろんでた二人を除いて。そもそもそれが秀吉の夢想癖を刺激した原因だし。自分の武勇を示そうと、なんてのは歴史を知らないもいいとこだからそこにつっこむのは同意。

豊臣秀吉が「千利休」を切腹させたことは、小説やテレビドラマや映画にも取り上げられている。数多くの作家がこの利休の話を取り上げてきているが、端的にいえばも切腹をめぐっては謎が多く、決定的な理由は分らないので、小説家独自の想像力を働かせる題材であることは確かである。何らかの感情的な行き違いや経済的利害の衝突があったとしても、利休は所詮堺の商人であることは間違いないのである。ということは、秀吉の後ろ盾を失えば、権力を持っているわけでもなく、強力な軍事力を持っているわけでもなかったのである。ということになると、秀吉があえて利休を切腹させる必要はなかったのではないのかという疑問が湧いてくる。秀吉が利休に切腹を命じた理由としては、俗説を含め、いろんな説がある。

○ 「お吟様」として知られる利休の娘を、秀吉が側室に欲しいといったのを断られたのが理由との説

○ 大徳寺山門の楼閣に、利休が自分の姿を模した木像を掲げさせ、これに秀吉が激怒したという説

(これについては、利休追放の後、この木像は“磔の刑”に処されている)

○ 茶器の鑑定をめぐり、利休が不正を働いたという説

(茶の湯の第一人者利休が「ウン」と云えば、その茶器は圧倒的な高評価が得られる。それを良いことに、利休が経済的な利益を貪ったという理由)

○ 秀吉と利休の美意識の違いという説

(侘び茶の利休と、黄金茶の秀吉という、茶の湯の上での路線対立)

○ 豊臣政権内での権力闘争に利休が巻き込まれたという説

(利休は秀吉の弟秀長と親しかった。だが、秀長が病死してしまうと、後ろ盾を失ってしまう。さらに、利休は家康とも近かったので、石田三成の一派の策謀によって、秀吉は切腹を命じたというもの)

何れの説も、決定的な証拠が無いので決め手にはならない。考えられるのは、これらすべてのものが複合的に絡み合い、ついに秀吉が激怒したというのが真相に近いのかもしれない。

もう一つの説では、なぜ利休は秀吉から死を賜ったか？これまで幾つかの憶説があったが、説得力に乏しかった。謎を解くカギは、聚楽第と御土居の位置関係に秘められていた。「皇帝（あるいは天皇）になろうとした秀吉に協力しなかったため利休は切腹させられた」というのが、事件の真相であるとする説である。これまで利休の切腹理由とされていた諸事は、真の切腹理由の結果として派生した様々な現象とも似ているといえる。なるほどと思いました。光秀が本能寺で信長を討ったのも、結局、信長が天皇をさしおいて、自分が日本の皇帝になろうとしたのを光秀が阻止したのではないかと思っていましたが、信長の野望を受け継いだ秀吉も同じことを考え、それを利休が阻止したため、切腹させたということになるのでしょうか？

3、豊臣秀吉の死後、豊臣秀次が後継者になっていたら？

豊臣秀次（秀吉を次ぐ者だから「秀次」なのである）は、叔父であり養父である豊臣秀吉から関白を譲られました。その後、秀吉に実子・秀頼が誕生したこともあり、秀次は高野山に追放後切腹になりますが、もし秀頼が生まれず秀次が関白のまま秀吉の死を見届けていたら、秀吉の死後の豊臣秀次政権はどうなっていたのでしょうか？ 近江を拠点にした秀次が健在なら、岐阜の秀信から中村や山内らがいた駿河までの東海道が簡単に東軍化することも無かったと思われ、しかも上杉だけでなく、伊達や最上も秀次に付いていたと思わ

れる。さらに三成が中枢からいなくなり、武断派と三成の対立も起きない。

このことから家康の野望が成就することはない。秀次が関白のままだったら、家康に豊臣家の政治的権限が無いはずだから、家康どうこうっていうのは無くなるのじゃないか、普通に。秀次は子供もたくさんいたし、豊臣政権は安泰だったと思うよ。

五大老という役職自体秀次粛清で生じた政治的空白を埋めようとした苦肉の策だからなまあそれでも家康が淀と秀頼抱き込んで造反とかなったら侮れないと思うけど 秀頼が生まれずっていう前提でしょ。

もし秀次関白のまま秀頼が生存、秀吉死亡だとしても、秀次は家康がしたように、秀頼を廃して、後顧の憂いを断つだけだと思うけど……。長期政権にするためには徳川の力を削ぎたいところだが。伊達あたりがめんどくさいことしそうだし。徳川の後継者争いに介入して、秀康が徳川を継承することもあり得る。もし秀忠が徳川家を継承したとしても、今度は家光と忠長の後継者争いに介入する。福島正則の動向次第だな。秀次も家康も三顧の礼をもって自陣に引き入れようとするだろう。そもそも秀次の政治的能力はどんなものだったのだろう？全くゼロ？側近の操り人形？あるいは……大名が秀次の言うことを聞くのかが問題、近江を拠点にした秀次が健在なら、岐阜の秀信から中村や山内らがいた駿河までの東海道が簡単に東軍化することも無かったと思われる。豊臣秀次は近江→尾張に移封されているこの時点では……

尾張清洲→豊臣秀次

三河岡崎→田中吉政

遠江浜松→堀尾吉晴

遠江掛川→山内一豊

駿河駿府→中村一氏

秀次は……後世語られるような「殺生関白」な人ではない。だからと言って優れた政治能力を語る材料も無い。（見つかっていない）ただ古典文化には興味があるらしいので無能とは言い難い。家康が天下を狙うならどんな隙を作るかだが、普通の謀反じゃこれ幸いに討伐軍を派遣され終了になりかねない。そのため秀吉は秀次が有力大名達に金を貸しまくっているのが人気取りをしているとして糾弾していることから、秀吉の厳しいやり方から、かばってやったりしているので大名連中に人気はあったんだろうが。蒲生の家督の件でも前田と協同して秀吉に対立しているし 秀次が最上や伊達や浅野や細川（彼らは家康がかばったと言う）らと謀反を考えていると思わせるだけの危機感を抱かせるだけの能力はあったんだろうね。朝鮮出兵で反感を買っている秀吉に対して、大名達の支持により実際にク

一デターや謀反しようと言う気があったのかも知れん。軍事指揮能力も小牧長久手で良将になる為には必要な負ける経験をしているし、紀州や四国征伐や九戸討伐などで実績をあげている。秀次って秀長のポジションを継承したように思える。それで、秀長ほど秀吉から信頼されていなかったと。秀次じゃ家康に潰される。そもそも家康が強大すぎてどうにもならんわ。前田、毛利、上杉も全くダメだったな。秀次の娘達を徳川に置いて徹底的に押さえ込む。家康の指導力が突出したのは、豊臣首脳部の機能不全も一因だからなあ。つまりは秀吉の晩年の行いゆえなんだが…

近江八幡の領地はけっこうよく統治していたらしい。水争い裁きが銅像になって残っていたり、悪代官を自ら裁いたりしている。秀吉の後継者としての政治力があるかどうかは別として、決して無能ではなかったようだ。五大老の制度がアホ過ぎなんだよ。秀次個人の器量で豊臣衰退を食い止めるのは無理だろう。全然、衰退してない訳だが、秀次公のヤリチンパワーはマジ脅威。秀吉の晩年もアレだけど、元々、一門があまりいないのに、大和大納言家も秀次家も断絶で、一門級の有力武将の小早川隆景も前田利家も堀久太郎も蒲生氏郷も死んじゃってるし、家康にしてみれば、アレ？天下とれちゃうよ？って感じだったと思う。秀吉亡き後、秀吉の正当な後継者であり関白である秀次の命に背く大名がいるかどうか。背けば討伐軍を派遣&関白の命で朝廷から朝敵のお墨付きまでもらうぞ。成人した後継者が居るっていうのは大きいよ。秀次は人気あったからね。いくら家康でもどうしようもないだろね。そもそも家臣同士の争いだから豊臣秀頼を出陣させない淀殿と三成の分権が起きないだろうし。秀次は朝鮮の件に絡んでないから近江派の三成と尾張派中心の武断派の対立もないだろう。五大老の制度もなく家康は老衰して死ぬだけ。黒田官兵衛は円滑な家督継承を目的に長政のためにわざと家臣達に悪態をついて嫌がられたって言うけど。秀吉も晩年は権力者特有の傲慢さや悪態をつきまくってるから、秀次に人気あったのもわかる。三成のやり方への反発もあって、秀次待望論みたいなもんもあったんだろう。まあ豊臣を割ろうと画策するなら、まず手っ取り早いのが後継者問題を起こしてしまうことか。秀頼と違って血筋的には唯一無二の存在ではないから、「晩年の秀吉公の真意は金吾殿にこそあった」なんて言いがかりつけて別の神輿を担ぐ。唐入りをどうまとめるかで秀次の真価が問われるな。そこをやり損じたら求心力低下で足利末期みたいな状況になりかねん。秀次も武田勝頼ポジションだしな。付け込もうと思えば色々できる。秀次が生きていたら家康は天下をあきらめてただろうか。秀次は人気があったから、ただ世の中がよくなったかどうかはわからないけど他家に養子に出された金悟は難しいな。そもそも輝元の養女が正室だが、輝元に英断と統率力がない。この先は秀次謀反の際に巻き添え喰ったからだが、

史実通りに小早川の継承時に豊臣奉行最強とも言える山口宗永が送り込まれたら独裁されるからなあ。まあ子孫の山口多聞の方が有名だが。秀次健在なら家康も大名間の婚姻は堂々とやらなかっただろうし、秀次は子だくさんだから有利大名に送り込みまくりだろ。東海道は秀次の付くのは間違いないし、要衝近江は秀次の統治実績の地盤あるし、上杉・伊達・最上らが奥羽陣営も秀次だし、家康は手も足もでない。もしも武断派が三成ではなく秀次に反抗したら面白いけどな。上杉・伊達・最上らが奥羽陣営も秀次だし 上杉は伊達&最上と確執があるよ。どちらか一方は家康のテコ入れが入ると思う。関ヶ原合戦を天下取りの切欠に想定しているならこの要因は・・・

①文治派と武断派の確執

②北政所と淀君の確執

なので秀次が生きていても豊臣家の矛盾が解決されないまま。ところでまだ触れていないけど秀次が生きているなら前野長泰や木村重茲も生きることになるよね？ 彼ら的には三成と組んで家康に対抗するとも思えないんだがどうなのでしょう？ 秀次と家康が組んで淀君&文治派を一掃するという方向もありか？ 関ヶ原の要因に北政所と淀君の確執を含めるのはどうかなー さほど大きな要因じゃないと思う。取って付け加えた程度なのでスルーお願いします。近江派と尾張派の対立はあったんだから関ヶ原的な戦いはあったかも。三成が家康と組んで清正や正則の秀次と争うなんて展開もあったかも とにかく、秀次が生きていたら 家康の天下取りは難航したことは間違いない 家康につけ込む隙があったとしたら、秀頼が誕生して秀吉が秀次を排除しようとしていたときに、先に秀次がクーデターを起こして秀吉幽閉を行った場合ぐらいでは？ 家康が秀忠に、秀次と秀吉が戦って秀吉が敗死することがあっても、秀頼を擁立して秀次と戦え、なんて指示だしてるそう。

長期的にみても秀次側が不利だったのでは？ 秀次側に立つと天下がとれないからじゃない？ 秀頼を擁立すれば秀頼を傀儡として天下がとれる、と（あるいは史実通りの展開を狙える）単純にそれは家康は律義者で通っていたからじゃない？

秀吉も秀次も生きていたときに野心を表すようなことはしないだろ 家康は、図らずも絶好の機会が訪れたから、天下を拾っただけで、野心なんて持ってなかったと思うけどね 家康が野心を持ったのは五大老になってからだと思うよ。小早川隆景と前田利家が死んだ時点で確定だろうな。この二人が後10年長生きして秀頼が成長していたら諦めたかも。秀次は東北勢と仲がいいから家康は挟み撃ちにされて駄目だったかもね。小早川や前田に係は無いだろう。

豊臣政権の問題点の多さが家康の野望を決定付けたわけよ。たとえば・・・

①秀吉の葬儀を開かない異常さ（北政所 vs 淀君）

②唐入り問題（武功派 vs 文治派）

これだけでも充分なのに、③秀次 vs 秀頼 という要素も加われば、秀次は東北勢と仲がいいとは言っても東北勢が一枚岩でない以上挟み撃ちは無理 秀次さんのデカマラで家康も秀忠も掘っちゃえば問題無し！ それは無理だ 秀次は小牧・長久手で家康に後ろから突かれたトラウマがあります。秀次が後継者のままでいられた（だから秀頼が産まれない）という前提だから 秀次 vs 秀頼という構図はなくなるし、淀もたいして力はない。やっぱり唐入りが問題だよな。外国の例をみても、外征失敗がきっかけで弱体化した王朝・国家は数多いし、秀次の器量も、無能ではないが天下人クラスではなかったという評価だし。徳川幕府も本多正純や大久保長安の更迭事件起きてるし、幕府は忠勝ら武功家臣を政権中枢から排除してるし、三河武士ではあるが新参の井伊を重く用いたりしてるように、いろいろ不協和音は生じたりしている。政権の問題点なんて鎌倉幕府も足利幕府もたくさんあった。完璧な政権など期待するのが馬鹿。秀次政権でいろいろ問題が起きても、すぐそれが家康が利用する隙になるかどうかは限らない。唐入りは失敗とまでは言い切れない。秀吉の死が無ければ倭城を拠点に朝鮮南部地域を支配することは可能だった。秀吉が生きてれば戦況次第では、もしかしたら家康まで渡海させられていたかも知れない。むしろ、積極的に協力して執権位に収まる気がする。

秀次は秀長ポジションでうまくやっているような気がする。やはり本人も十分に成人して後見人が必要なく、さらに子供がたくさんいて、他家へ養子や正室として送り込める利点は大きいです。家康のいる地域はかなり秀次に固められているように見える。秀次の地盤が弱いのは西国方面、お前ら秀次を過大評価しすぎだろ。政権の安定には、必ずしも個人的な能力が必要なわけじゃないからね。秀吉死後の豊臣政権は、正にその個人的能力が求められる状況だったのだが。

そうだとすると、そうなった一因が秀次粛清にあるのだから状況認識からして違うような秀吉死後の秀次と、家康死後の秀忠じゃ状況がまるっきり違うんだよな。後継者問題もないし、有力大名との婚姻もあるし、優秀な部下もいる。秀次がいてトップが安定しているのに、七将が暴走するわけもないし、難しいことなんて何もない。七将でも福島正則は秀次のことを嫌っていたという逸話が残ってる。また、秀次が後を継いだ場合、秀吉政権で重きをなした奉行たちは、当然秀次家臣団にとって代わられるだろうから、彼らが不満を抱

く可能性も有る。

後継者問題が存在しない以上、家康が天下獲りに動くなら正則や奉行衆と連携するしかない。けどそれにしたって針の穴みたいに小さい可能性だし、元来慎重な家康はそんな分の悪い博打打つくらいなら大人しく一大名として人生を終えるような人なのだろうか。

正則は秀次だけでなく秀頼も家康も軽くみてない？規格外の漢だから仕方ない。前田利家が話題に挙がらない件について 勝った方に付くんじゃね→唐入りという負の遺産がどうしてもネックになるな。もっとも、秀頼と違って秀次なら、当事者なんだから責任は免れないんだが。主従関係の基本は、家来の功に正当な評価を与えることだが、あれだけ現場が混乱し、あいつのせいで負けた、こいつが報告を歪めやがったと諸将の言い分が食い違っている状況ではそれは不可能。どうしても不当な評価をされて不満分子へ転ぶ連中は出てくる。

- ・そもそも多大な犠牲を出して一片の領土も得られなかった骨折り損
- ・秀吉死亡による求心力の低下も避けられない
- ・不当な評価をされたと憤る大名には家康が近づく

形は変われども、関ヶ原のような内乱発生は避けられないだろうな。

秀次は朝鮮出兵にほとんど関わってないから武断派と文治派の対立は関係ないから、逆に安定する可能性の方が高いわけだが。養子だった小早川秀秋なら朝鮮出兵したかな。さすがに関係ないは通らんだろ秀次の立場考えれば。名目上は最高権力者、実質上でも共同統治者くらいはいいよ立場だろ。

そもそも関白秀次なら家康は豊臣家の政治的権限も持ってないから、家康に何が出来るのか、とふつうは思うはずだけど、家康って、不満という絆で結ばれた反秀次勢力が現れなぜかさして不満のない家康を担いで、当たり前のように関ヶ原的な決戦を起こして、秀次ごときに家康様に勝てるわけがないとかいう理由で圧勝して、なぜか徳川政権が樹立するとか言い張ってるんでしょ。もうね、とことん低脳でしょ 秀頼の後見を故太閤に頼まれたのを口実に好き勝手できない家康。秀次がいたら前田も豊臣から離れない。凡人の家康は天下は狙わない。力を削る必要がある。その分を政権基盤の強化と唐入りの不満解消に回す

4、関白秀次が生きていた場合

豊臣秀次は、叔父であり養父である豊臣秀吉から関白を譲られました。

その後、秀吉に実子・秀頼が誕生したこともあり、秀次は高野山に追放後切腹になりますが、もし秀頼が生まれず秀次が関白のまま秀吉の死を見届けていたら、秀吉の死後の豊臣秀次政権はどうなっていたのでしょうか？近江を拠点にした秀次が健在なら、岐阜の秀信から中村や山内らがいた駿河までの東海道が簡単に東軍化することも無かったと思われる。しかも上杉だけでなく、伊達や最上も秀次に付いていたと思われる。さらに三成が中枢からいなくなり、武断派と三成の対立も起きない。このことから家康の野望が成就することはない。そのへんは文芸作品によって大きくイメージが左右されるから。それらの人物を扱った傑作が生まれれば、評価なんてゴロツと変わる。

幼い秀頼一人残す危険性は秀吉も十分認識していたと思うから、相当な事情があったのかも。どうも当時豊臣政権に亀裂が生じていて、特に秀吉と秀長の関係が険悪になってたとも言われる。秀長の重臣を秀吉が殺したという話もある。秀長派という派閥が形成され、秀長、秀次、利休と その傘下の大名衆、伊達などだけど、秀吉の存在を脅かすほどになってた。秀長の死をきっかけに“秀吉派”が巻き返しに出たのでは？秀長＝兄を陰で支えた名参謀 見たいな話が好まれるようで どうもこういう説は不人気なのだ。

・武断派と文治派も秀次がお互いの不満を押さえる（関白権限で和解させる）から、対立は起こらない。

・仮に反秀次派が現れた場合、秀次は「家康に謀反の疑いあり」と家康に難癖を付けて、詰問する。

家康が全面降伏した時点で、反秀次派は一つにまとまる為に必要な担ぐ御輿が無くなり、秀次によって個別に撃破される。

・もし、反秀次派が挙兵したとしても、秀次は討伐軍を派遣して、大軍を持って潰すだけ。秀次体制は盤石だからおかしいことをする必要はないと思う。

反秀次派が現れた！！から家康潰すとか。大身だから家康潰すとか、意味わからないんですけど。家康が難癖つけて成功したから、秀次も難癖つければよいという考えもなあ。

パワーバランスを見極めた上で家康もやっていたんだが。秀吉健在で、唐入り起こす前の絶頂期でやるんならまだわかるが……。律儀者で通ってたからね 徳川家康や伊達政宗、黒田如水などが呼応して挙兵。秀次（小牧・長久手でも分かるように軍事的才能ゼロ）が二世武将を率いて出兵するも、戦国の生き残りの猛者には敵うべくもなく、二世組は壊滅。世は群雄割拠の時代へと一旦移行する。ただし、十数年以内には何れかが天下統一を果たす。家康が長生きすれば徳川、さもなければ伊達の天下となろう。長政が秀次に付くのは明白だと思うが親父がそんなことするかね？ 政宗は二世組どころか三世組だ。

伊達家の速攻壊滅は疑いようもないよ。こんな伊達が天下を取るなんて今川氏真が天下を取るよりありえないな。むしろ黒田長政は如水の命令に従う。如水と長政では器が雲泥の差だ そもそも、簡単に「明白」という奴には根拠が無い人間誰しも親はいるが、七光りや相続だけの者と自力で道を切り開くことができる者がいる。だいたい二世はバカなので

前者（輝宗を含む）だが、政宗は実弟抹殺と実父見殺しを通じて地歩を固めた後、蘆名を滅亡させ佐竹も首の皮一枚だった政宗は父（二世）を完全に超えているので政宗からカウントし直すべきで、そもそも、すぐ「疑いようもない」とか言う奴は思考力が弱い。おまえの思考力が皆無なのは充分わかった。なんだただのバカがDQN政宗を讃える為に名君輝宗を貶す使い古された手法を使ってるだけか。無知ってほんと怖い。秀次は小牧長久手の敗戦経験が彼を向上させたと思うよ。勝利経験しかないやつより、敗戦経験を経たやつの方がいい。信玄の村上戦や家康の三方ヶ原の戦いなど彼らにとって学び得たものは大きい。まったく知能の低い自演だな。チンカスは一生やってろ。何も知らない素人は威勢がいいですな 伊達はともかく黒田が呼応する根拠は無いし、「二世武将」の括りも不明、小牧長久手のみで軍事的才能が無いと短絡的に断定。と言うか二世じゃない武将なんてどれほどいるんだよ・・・

元就や早雲だって少なからず受け継いだものを上手く運用して拡大していったのに。

裸一貫スタートは秀吉くらいじゃないのか？

- 徳川 秀康が秀吉の養子
- 伊達 秀宗が秀吉の猶子
- 最上 駒姫が秀次の側室
- 池田 若御前が秀次の正室
- 毛利 秀吉の養子・秀秋を小早川家に迎える
- 宇喜多 秀家が秀吉の猶子
- 前田 秀吉の養女・豪姫、摩阿姫、菊姫

上手くいく、いかないはおいといて、何かやりそうなのは 政宗と如水、家康ぐらいじゃねーかな。その3人だけでも、秀次に抑えられる相手ではないと思うが。秀次ってのは現代の政治家に例えたら麻生太郎あたりが妥当だろう。秀次は無能ではないし、関白府として機能しはじめた辺りでの粛清だからな。諸大名と手堅く縁戚、政権ブレーンもかなり付いていたから政治も安定。あのまま秀吉死ぬ頃までつつがなく政権運用してたら、家康のついている隙は皆無。秀吉が生まれる前に秀吉が死んで秀次に交代していれば、唐入りもなく、政権は大安定だったろうなあ。うお、間違えた「秀頼が生まれる前」ね。秀頼が生まれる前に唐入り始まっているよ。秀頼ではなく鶴松では？内乱が起こるとしたら、秀頼誕生したあと秀吉が秀次に高野山追放を命ずる→関白である秀次が朝廷を動かして「太閤秀吉乱心ゆえに蟄居謹慎を命ずる」と勅命を盾に、秀吉にクーデターを起こすぐらいしかなさそうだが。当時の朝廷って空気を読むの上手いから秀吉に逆らうとは思えない秀次が正式に後継者に指名されたのは鶴松死後だから、ちとあれか。もつとも、

鶴松誕生前、秀康や秀俊(秀秋)が秀吉の養子だった頃も 後継者は秀次と目されていたわけだけど。なんせ、秀康が結城家に 養子に出される前の領地はよくわからず、秀俊が丹波亀山 10 万石という 時代に、秀次は近江八幡に 43 万石で、大和大納言家に次ぐ領土だし。それが出来るぐらいの権力を秀次は持てなかったわけで。秀次の権力は秀吉がいてこそのもだから、誰もついてきやしないわな。権力の引継ぎは順調に行われてたよ ただそれをぶち壊したのは秀吉だけだな。源頼朝→頼家 豊臣秀吉→秀次 いくら順調に政権が移行しようが、二代目の力量が足りなくて有力家臣に取って代わられる運命は避けられないと思われる 軍事センス皆無の秀忠が引き継いだ徳川幕府が磐石だったように きちんと権力委譲ができていたなら豊臣政権も磐石だったんじゃないか？ 秀次の資質は関係無しに成人した後継者がいるっていうだけで政権奪取は厳しかったのではないだろうか。秀忠の時は敵勢力は完全に壊滅していたわけで、同じ状況に置くのは無理があるよな。秀忠だって家康亡きあと生きるか死ぬかの修羅場に放り込まれたら厳しかったと思うよ。まだ戦乱が続きそうであったなら、そもそも秀忠が世継ぎにはなってなかったろうし。秀頼の時も敵対戦力なんて残ってなかった。仮に家康の後継者が幼君だったら伊達とか前田とかが黙ってないと思うんだけどな。家康だって豊臣の内紛からチャンスを持った訳だし徳川の内紛だってあったのでは？ 何で徳川ありきなのかわからない秀次が無能で、有力家臣が政権を篡奪があると、その有力家臣っていうのは浅野長政とか田中吉政だろ？ 長政は家臣と言うより目付けだな 充実しているのは武将クラスではなくてもっと下の方でしょ 秀信や秀頼が幼いことをいいことに秀吉にしても家康にしても論功行賞やら国人やら与力の知行安堵を好きに出来たからこそ 秀次がいればそれは出来ないからそこまで家康の好きにはならないはず 秀次関白で秀吉は死んでるんだから、秀次が豊臣家の当主で、浅野長政は有力家臣だろ政権内で決定権を持たなきゃ政権篡奪は出来ない それが出来た権力を握る可能性があるのは、浅野長政とか田中吉政とかその辺だっていう論旨なんだけど？ 秀頼の時も敵対戦力なんて残ってなかった。思いっきり戦時中だったんですけど。それも史上最大規模の海外遠征中。大陸じゃ離れ過ぎ 秀勝、秀保が生きてれば秀次の一族として活躍できる 秀次がいたら 家康は動かないな まず、最大のポイントになるのが前田利家の死。秀吉の死の翌年で、そのポストに誰がつくか？ で政権内で揺れる

当然、家康は伊達を推す。伊達自身、秀次とは関係が深かったので、秀次も容易に任命する可能性が高い しかし三成はじめ、他の五大老は反対。これにより家康が、秀次に反抗する勢力だ。秀頼成人後に秀次を亡き者にしようと企てる者だと吹き込み 見事に秀次を

担いだ家康、政宗たちが官軍として政権内を牛耳ることになりそう。三成は史実通り政権を追われ蟄居処分に。上杉、毛利などの大老は国替え、もしくは討伐の対象にされる可能性が高い。ここで秀頼擁する淀君がいきり立ち、全国の諸将に秀頼を守るように激を飛ばす。清正は史実とは違い、家康に対抗姿勢を見せ清正と繋がりが深かった如水や宗茂も秀頼方につく可能性が高い。逆に島津や長宗我部なんかは元々、外様でどちらに恩もない大名。これらは家康の誘いに乗り秀次派に属する可能性が高くなる。問題は史実で東軍に属した豊臣恩顧の大名たち。相手が三成ではなく、秀頼対秀次の争いという以上、非常に動向が読みづらい。北政所に恩のある尾張出身の恩顧大名たちは家康につく可能性も高いが、清正が秀頼方のため、露骨に家康を支持することもできず悩む。そこで家康が目をつけたのは、またしても小早川秀秋。黒田長政は父親と一緒に秀頼方についているので、代わりに北政所を差し向ける。そして秀次派に見事引き込むことに成功。秀頼対秀次というより、淀君対北政所という感じになるかな。いずれにしても家康の一人勝ちにはなりそうもない。

秀吉が秀次ぶっ殺した時点で徳川天下フラグが立ったようだな。なんで上杉や毛利が三成の肩もって家康と戦わなきゃならんのか。秀次がポスト前田に家康を任命したら右に倣えでみんな家康派になるだろ。前田の後任に政宗はくだらなすぎる妄想だな。思わず笑ってしまった。前田利家の後釜に伊達政宗って時点でありえんわ。つか、秀次がいるのに五大老制なんてありえん。秀次の関白時代、普通に秀次の奉行衆が政権を担当して機内を統治していたわけだし。秀吉が死ねば、二重権力構造が解消され、普通に江戸時代と同じように秀次の奉行衆により政権担当、外様は中央に口出しせずという体制になる。もし秀頼が生まれず秀次が関白のまま秀吉の死を見届けていたら、前提なのだから、五大老、五奉行制度もないと考えなければならんのではないか。どの小説読んでも大抵秀次は愚か者扱いだ。どっかで実はそれなりに優秀だったよとか評価しているやつはいないのか。秀吉が主人公なら秀次が品行方正で優秀だと何かと都合が悪い。「文武両道に優れていた」と言う人も居ます。確かに教授陣は超一流。でも先生がよければ生徒も良いと言うことはないわけで。仮に個人的に文武兼ね備えていても指導者としてどうかという話ではありませんね。淫行とか残虐の噂は確かにあったわけだからそういう傾向の人物だったんだろうという歴史書もあることもある。しかしあんなだけ大勢の大名・公家が連座すると言うのは尋常じゃありません。戦国乱世を渡ってきた奴らがそんなアホな賭けには手は出さない（政宗君はやるかもしれんけど伯父さんはやらないと思います）秀次は族滅しなきゃいかんほどやばい奴ではなかったんでしょう、たぶん。個人的には秀次がいても、いつか徳川

が公然と叛旗を翻す日が来たとは思いますが。史実ほど綺麗にはいかず、家康存命のうちには決着できないかと思えます。秀次が生きて政権が普通に運営されていたのなら、家康も政権の重鎮で過ごしたと思う。わざわざ下克上を狙う理由が生まれません。秀次が生きて政権運営するという前提だと、秀頼が最大の不安定要因になり、そこに外様大名が乗っかれば下手をすると応仁の乱の再来という可能性はある。とはいえ、その辺は秀吉と秀次次第になるけど。秀吉が秀頼を秀次の養子にすれば、秀次が実子を後継者にしようとしなくても無問題なんだけど。意味不明。史実ですら毛利や上杉は三成についてるし、それ以前に何をどう反論してんのか分らん。根拠は説明できないけど、有りえないとしか妄想できないんだな。思わず笑ってしまった。その理由は？小早川隆景の後に上杉なら有りえてるのに。前田の後に家康に推された伊達。有りえない話じゃないな。実際に5大老制とは、秀吉死後に有力大名たちの寄り合い制での政権補佐を目的にしたんだし、秀次と所縁ある政宗なら、あながちなきにしろあらず。けど秀次が秀吉から完全に認められ信頼されている状態での引き継ぎなら5大老制なんか、そもそもなかったと思うけど、秀頼は生まれているわけだろ？なら、どう足掻いても秀次の立場は武田勝頼みたいなもんなわけだろ。その場合、秀次の横暴を防ぐ為に5大老制がとられてないとも、限らないわけだよ。また前田のような有力大名が死ねば伊達や最上、細川など秀次の所縁ある武将が替わりに引きたてられるのも当たり前なわけで蒲生氏郷が死んだ時、息子に領地の引継ぎを認めた秀次と後から反対して上杉領とした秀吉こんな軋轢も秀吉死後、どう変えられるか分らないしね。秀頼が生まれずって書いてあるだろ？秀頼が生まれなければ秀吉は死ぬまで何も考えずに名護屋に留まって朝鮮出兵にのめりこんでいたわけだ それによって史実以上に増幅されるであろう秀次が不満にどう対処できるかが最大の鍵だろう。史実の場合は家康が恩賞として豊臣領を正しくばら撒き、三成の首を刎ねて解決したが秀次がそこまで責任を取って実行できるかどうか 史実でのヘタレっぷりは別として、利家が死んだ時点で壮年の息子がいたらそいつが後継じゃねえの？小早川の際は秀秋しかいない上に、他に豊臣政権成立に一翼を担った上杉がいたからそっちが入ったんだろうけど。宇喜多、小早川、毛利、前田、上杉、これら外様がおとなしく秀吉に協力したから豊臣政権があれだけ早くできあがったわけだし、同じ外様の有力大名でも伊達や島津がないのはそこだと思う。しかし秀次にとっての、その協力者的外様といえば伊達や最上なのは事実だよな。史実では利家死後、一応、五大老職は長男の利長が継いでいるんだけど。こんなの誰も知らないでしょ？多分、とうの大名たちも知らなかったと思う。むしろ、成人した秀次しか跡取りいないんなら無理に崩壊する構想立てる方がおかしい。明らかに内容が幼稚である。それ

より秀頼と秀次がいて、どうなるか考えた方が面白い。利家死後、利長が五大老を継ぐのなんて常識だと思っていたが。ふつうに史実として有名な話じゃないかなあ。

政宗が五大老とか何を言っちゃってんのって思った。小早川隆景の後、秀秋は五大老にはなっていないぞ。おまえの常識って根拠も社会通念性も皆無だな。普通は時の権力者が自分の都合の良い人材をピックアップするもんなんだよ。利家死後はその権力者が不在だったから利長に移行しただけで、秀次政権があるなら、人事は当然、秀次よりの人間ばかりになるだろ。伊達って奥州動乱の張本人だしさすがに五大老はないと思うんだけどな。自分勝手に頭悪いってどうしようもないなあ。勝手に妄想してろよ、アホ。政宗か仙台藩のどちらかに「本当は政宗が五大老に選ばれるはずだった」って書かれてて、要出典って貼られててワウ。当方、伊達好きだけど前田に代わって伊達ってのはちょっとムリじゃないかな？ 秀吉在世時より伊達が重用されるかもってのは同意だけど。まず、五大老から前田家を外すのが難しくないかな？ 他の人も言っているが、前田家には利長という40近くの跡取りがいるし（特に評判が悪くもないだろうし）、五大老の中では前田家と豊臣家の関係も古いし。特に秀次と前田家の仲が悪かったわけでも無ければ、誰を入れる以前に五大老から前田家を外す選択が無いと思うけど。その時点で、例えば上杉や宇喜多の当主が亡くなった場合は五大老の入替えがあってもおかしくはないだろうし、その時は伊達が選ばれて欲しいけど、前田家の場合はそのまま利長じゃないかな。伊達が入るなら島津でも長宗我部でもいいわけだ というか秀次に近いと言うなら最上のほうが近い前田家と秀吉の関係が深かったのは分るけど 同じように秀次にも親しい大名がいるわけで、そこに家康が梃入れしてくる可能性もないことはない。ま、推理といえば推理だけど、秀頼存命の場合、秀次もそれなりに保身に奔走し浸け込まれる要因にもなるんじゃないかと？ 最上はやや家格が落ちる。そして伊達でも最上でも推薦されるになるには、やっぱ家康の後押しがあって初めて可能 そういう点で最上より伊達の方が可能性高い。もともと、俺が教えなきゃ誰一人、利長が一応五大老継いでたことすら知らない有様で レアケースの奴とケンカするなら他にスレ立ててやれば？ あなたの書き込み見ると伊達以外の可能性を真剣に検討してるとも思えない 伊達ありきで理屈こねてるだけでしょ。確かに伊達ありきで語ってるけど、だから俺はその理由もあげてるわけで それに反対してる人は、反対する姿勢には固執するくせに、いっこうに具体的な反論材料を出してこないの、なら、やっぱり伊達が継ぐ可能性高いんじゃない？ と思ってしまうんだよね。はいはい、わかったからドンゴリは消えろ。書き込みは「利長が五大老になったという史実」を常識って言ってるんだけど。べつに利家死後は利長が継ぐっていう制度があるとか言ってるわけじゃ

ない。なんか変にヒートアップしてるひといない？ 意見がまっとうだと思う。前田家と豊臣家の関係の深さもあるし（養女や側室だしてる）家の格というか領土の広さにおいても十分じゃないかな 伊達は有力大名ではあるけれど、豊臣政権樹立において果たした役割がほぼないし、秀吉存命中も蒲生とケンカしてたりで、五大老の座に座るにはちょっとまだ早いつて感じがする。はっきり言って伊達以上にふさわしい格を持った大名は他にいないわけですね。

あと秀次が押すなら伊達より最上だろうし、家康が押すなら結城秀康 蒲生氏郷健在ならば氏郷 まあ5大老も5奉行も幼い秀頼のために急増したポストであって…

秀次が跡取りだったら存在しないな。まあそうね。奉行はいるだろうけどメンバー違うだろうね 前田玄以ぐらいいは残るだろうけど、残りは秀次付きの連中がやるだろう 蒲生と上杉が重要なんであって東北が重要なんではない その重要な大名を配置してるのは、東北が重要だから それと伊達も最上も家康に組して豊臣に危険な存在になるという点では対して変わらんし 家康が露骨に秀康なんか推すのも無理がある。そこんところが微妙なんだよな 秀吉の本音を言えば秀次には秀頼が成人するまで政権を守ってくれていけばいいわけで その後は邪魔な存在でしかないわけなんだよな。それは史実でも2重権力構造として両者の軋轢として出てるわけだし ただ、Ifの話として秀次が関白のまま生き残ってれば、秀吉死後権力を独り占めするのは秀次であって、秀吉や三成が、史実の家康を牽制したのと同じように、これまた五大老制で秀次の独走にならないようにするかも知れない できるとしたら、それは秀次の意思によってではなく、秀吉の意思なのだから やはり人選は秀吉の域のかかった者になると思うよ

それ以後は秀次の域のかかった者たちに替わるとしても。家康「あの『既に秀頼様の兄同然の余に、大老なんてむしろ格下げじゃ！』は良かったぞ」 秀康「あの関白の御顔、ご覧になられましたか？ やっご自身立場がおわかりというか」 家康「よしよし。では次は秀秋殿に声をかけ、『太閤御一門として』発言させてみるか」と、策をめぐらす二人が見えるようだ。無理。そもそも官位が低い伊達がなに言ってんだよ 一人相撲してる人いるんでもうアボンした 君さ、全く歴史のこと知らないんでしょ？

検討違いの食い下がりばかりしてるけど、どれも首を傾げたくなるような物だし・・・

家康って秀康を嫌ってた。重要な大名をおいているのは東北が重要な地だから、じゃないでしょ 蒲生が東北に配置されたのはあきらかにあぶなっかしい伊達の抑えとして、じゃないかな 東北という土地自体にはそんなに価値はないと思う 石高でいったら伊達もかなりのものだけだね。

並ぶのは島津、佐竹あたりかな。蒲生や堀が長生きしてたら、そっちになってたかもしれないけど いずれにせよ、史実では五大老制ができたのは秀次死後だし、どうにもなあ。そういえば三中老なんてのもいましたね。そういや最上の駒姫は秀次の側室（になりかけたん）だったね。秀次切腹事件さえなかったら、最上も縁戚としてそれなりの地位になってたんだろうか。蒲生が東北に配置されたのはあきらかにあぶなっかしい伊達の抑えとして、じゃないかな。そーいうのを重要な地というんだと思うよ。

家康と伊達の間に入る重要な土地だから蒲生なんてエリートをわざわざ差し向けたし、その後は上杉 東北自体は田舎の僻地であっても近隣の大名との兼ね合いで重要性があったのは事実だよ最上、伊達、細川あたりは秀次と関係が深かったしね、それ相応の要職についた可能性高いよね。上でバカが官位なんて言ってるけど、それだって充分もらえる可能性もあるしね それはないだろ。あんだだけ大勢側室がいたら、寵愛を得られるかは運次第。いくら美人でも相性はあるし、嫡男はすでにいたわけだから、よほどの強運がなければ無理。淀だって秀吉唯一の男児を産まなければ 所詮大勢の中の一人に過ぎなかつただろう。最上としては、正室腹の姫なんだから、秀次よりちゃんとした大名に正室として嫁がせるほうがうまい話だ。やっぱり秀次に強要されたんだろうな。せめて清華成してないとなあ。史実関ヶ原時のおいて従4位下で諸大夫成ではちょっと低すぎるな。もそも秀頼ってほんとに秀吉の子供だったのか。テレビではいろんな武将の父親説があるけど真田とか石田とか小西とか。だいたい政宗が景勝の官位に追い付いたのも景勝死後かなり経ってからじゃねえかよ。最上なんてさらに有り得ないわ。最上と伊達が五大老に連なるとかバカじゃねーの。つまり豊臣政権は伊達を危険視していたわけですね。

そんなヤツをなんで政権の中枢に入れて、他の一門や功績多大な大名たちを指図なんてできるとおもいますか？ はっきりいって政権樹立に功績があつたわけでもない、豊臣一門と縁戚でもない、官位も他と比べれば低い、領土も低いとは言わないが大きいとも言えない、年齢も 若輩と言っていい。そんな伊達政宗ごときを五大老にしたところで、他の外様大名の 押さえにもならず、豊臣政権を支える柱の一つになんてなれやしない。「格が足りていない」というのはそういうことなんだよ。

あと、家格がどうこう言ってるバカがいるけど、伊達家って藤原かどうかも怪しいだろうが ガチの清和源氏だぞ最上は 徳川幕府も成り立たないが、豊臣政権も徳川ほど長く続かないと思う 武断・文治派でもめにもめまくって、日本全国で2派に分かれて合戦開始 合戦もどちらか勝つのではなく睨み合い及び小競り合い程度で納まっているが 武断派がしびれを切らして関が原張級の決戦を始めて、各大名疲弊しきって 挙句の果てには宣教

師（工作員）に付け入られて植民地化してそう 秀次では豊臣家臣が言うこと聞かないからすぐ潰れる。そもそも朝鮮出兵にのめり込んでいる時点で、秀吉に秀次の後見をしながら支える気がないのは明らかだからな。どうせ実子でもないし、俺の死後にお前の首が取られたらお前自身が悪いんだよくらいの気持ちしかないだろうね。秀次も秀吉が死ぬ前に統治者としてきちんと成長しておかないとかなり厳しいだろう。危険視していたのは秀吉と三成であって秀次ではないな。政権樹立に功績云々なんて所詮は奇麗事で家康なんて元々は一番の抵抗勢力だったわけで、ようは、影響力の強い大勢力を飼い殺すための言い訳。ならば、秀次政権の確固たる安泰のために、関係の近い、そして大勢力である伊達を引き込もうとするのは、そんなにおかしい話じゃない。それと官位なんてもんも所詮は飾り。とうの関白自体が一介の農民から取りたてられたほどなのに域のかかった大名の一人や二人、高位につかすくらい権力者なら容易にできる。それも、必要なら・・・の話だけど。あと、若輩というなら宇喜多や上杉だって若い大名に入る。伊達だけ歳を理由に断られる方がおかしい。押さえになるかならないかなんて、権力者にして見れば条件がコロコロ変わる。晩年の秀吉のように、自分が死んでから守ってもらいたいと願うなら、信用できて勢力の強い大名を選ぶけど、秀次の場合はようは秀次チルドレン的な取立てに近い。こういった違いを考えずして闇雲に批判してもすぐに論破されるだけで無駄。オマエは自演ばっかで中身がなさすぎだ。それに家格というのは何も氏素性を差してだけ言ってんじゃない。この時代の家格と言えば勢力や武威の方がより重要。それを考えて最上より伊達の方が優れているんじゃないかというだけだ。そして後押しする存在が必ず必要で、それが家康なら尚のこと伊達を推すと言っている。自演をやめるかレスするのをやめるかどっちかにしろ。ボンクラ 影響力の強い大勢力を飼い殺すための言い訳。飼い殺しにするのに権限を与えてどうするんだ？何もしらずに言葉を使ってみたってただけだな。飼い殺しというのは俸給（領土）や地位は高いものを与えるが、実際の権力は与えないでおくこと。ちなみに伊達は、官位も低めに抑えられ、領土は削減されまくり。秀次政権の確固たる安泰のために、関係の近い、そして大勢力である伊達を引き込もうとするのは そんなにおかしい話じゃない。何故なら、伊達は大勢力じゃないから。さらにいえば、政権を固めるために大勢力を味方に引き込もうとするのなら、秀次にとっては政宗ごときよりも、もっと大身の優先して厚遇すべき大諸侯がいくらかもいる。それと官位なんてもんも所詮は飾り、飾り、というものの価値を理解できないのでは、何も論ずる前提の資格がありませんね。もう少しこの時代のことを勉強してきてからにしましょう。勉強というのは、漫画や小説やゲームではありませんよ。あと、若輩というなら宇喜多や上杉だって若い大名に入る 宇

喜多は豊臣との縁戚、また羽柴時代からの秀吉にとって多大な功績をもたらした。上杉は武威で言えば比べ物にならず、本能寺の変直後の初期の頃から秀吉に従い、その結果官位も上。比べれば政宗は年齢だけでなく、官位閥歴全てが下。秀次の場合は要は秀次チルドレン的な取立てだったら、それこそ身内の最上を取り立てるでしょうね。自分で自分の主張を否定してますよ。そして何度も言いますが、伊達ごときよりもっと大きな意味をもって優先して取り立てるべき人材は他にいくらもいます。最上より伊達の方が優れているんじゃないか。武威があっても信用できない外様を取り立てて中枢に入れて権限を与えるなんてそんな、愚考を秀次も家康もしない。そして、繰り返すが、伊達よりも家柄も家格も武威も優れている。諸侯は他にいくらでもいるのである。

結論として、関が原以前の伊達氏がどの程度の存在だったのか、後の江戸時代になってから大諸侯の姿をみて、昔から大諸侯だったんだと過大に勘違いしている。政宗が秀次政権で要職につく可能性があるか？なら。ある派も少なくないだろう。ただ利家死後に前田家に代わってだとどうだろう？例えば15～20年後なら今は他に経歴で勝る連中が死んでいて相対的に政宗の経歴の評価が高くなるだろうし官位や位階も徐々に上がるでしょう。例えば影勝死後の上杉の後や、利長死後に前田家が分割相続された場合など。でも1599だか1600の段階ではないと思うな。飼い殺しというのは俸給（領土）や地位は高いものを与えるが、実際の権力は与えないでおくこと。ちなみに伊達は、官位も低めに抑えられ、領土は削減されまくり。それを秀次がしたのなら言えばいい。でもしたのは秀吉。何故なら、伊達は大勢力じゃないから。五大老職についたことのある大名を除けば、伊達は島津と並んで一番大きな大名。秀次にとっては政宗ごときよりも、もっと大身の優先して厚遇すべき大諸侯がいくらもいる。前田を落としてはるかに格が落ちる伊達を取り上げるって時点で、ないがしろにしているよ。理由になってない。利家存命の間に職を入れ替えるわけでもなし、各家の石高や勢力が代によって上下するわけでもなし 結局、有力者が死ねば、他の有力者に職を回すってだけじゃん。慶長3年7月における11カ条の太閤遺言の3,4条において秀忠利長の次期大老職就位が要請されている。そのために利長には、前年9月参議、3年に従3位中納言と清華成をおこなわせて官位を引き上げている。太閤遺言か・・・微妙だな・・・

それがあんなら利長にしなきゃ角がたつのは確かだな、伊達政宗と前田利長、どちらの方が有力者かというとなら前田利長じゃないか？太閤遺言は知らなかったけど、扱い見ても徳川前田は豊臣政権でも別格かと。秀次が自分よりの大名に力を持たせたいとしても、秀吉死後にトラブル起きそうな人事を急速に行う必要はないと思う。仮想敵の秀頼は幼少で

すぐにどうこうではないし。前田が秀頼側に行かせる方が怖い。政宗が大老格になるには徐々に秀次が官位位階を含めて 政宗を引き上げ、島津や佐竹辺りより頭一つ上にして、景勝死後か大老の増員時に行うように思う。増員のタイミングは家康死後に徳川家を一部秀康に継がせて 秀康、秀秋を入れる時、とかかな。まァ、秀康は家康より先に死ぬけど。そこで伊達、細川辺りを押し込む、はできそう。10人程度なら人数が多すぎることもないだろうし。普通に考えれば利長有利は間違いないんだけど そこが、今、議論してる秀次の問題点なわけで、取り合えず、秀頼が幼少で、秀次は関白のままとして やっぱり自分の力を固める欲にかられると思うんだよね。そこが家康のような老獪な親父にはつけ入る隙なわけでき 秀次一人しか後継者がいないというなら、もっと安定もすると思うんだけど 現在の後継者と後の後継者が複数いると必ず、派閥が生まれ、それにつけ入ろうとする動きも出てくる。そういう想定を話しているのさ。前田が秀頼方につくのは避けたい。こんな気持ちは当然あるだろうね。しかし秀頼の母が淀である以上、北政所は必然、秀次につき、その結果、前田家も秀次派につく・・・秀吉は中国皇帝として全アジアを支配に置き、秀長を日本国王としたかった。秀次は長久手の失敗が痛すぎるわな。秀長にしても「蓄財魔」との悪評があり、秀長が金を貯めていたのは、領土内の不平不満を持っている寺社や豪族どもを金で慰撫するためとか、金に困ってる大名に貸し与えたり大名間の調整のために使ってたわけで、秀長自身の私利私欲のために使ってたわけじゃないだろう。蓄財魔＝倹約家で悪いことではない。蓄財魔と悪評判だった大名。徳川家康 黒田如水 羽柴秀長。大仕事した奴ばっか、イザと言う時に蓄えておくのは武士の心得なのだが、というか他の大名は金をためてなかったのか？普通の大名なら貯めるでしょ。馬鹿な大名は奢侈のめに浪費したり考えもせず恩賞などを与えまくって財政破綻。余談だが、秀次は疋田陰流の疋田景兼より剣術と槍術を学んだほか馬術、弓術もそこそこの腕前だったといわれています。また 伯耆流（居合）片山伯耆守久安も豊臣秀次の武術師範だったと伝えられています。

その時歴史が動いた。

もう一人の秀吉「豊臣秀長 太閤記（たいこうき）を演出した弟」では、・・・
少なくとも、秀長が秀吉より長生きしてれば秀吉が臨終の時に、家康に「息子を頼む」なんてことは言わずにすんだだろう・・・秀長が生きてる内は、豊臣子飼いの大名たちも分裂することはなかったのでは？そりゃそうだよ。みたけどたいしたこと無かった。それが秀長クオリティ まあ、地味な補佐役を地で行った人だか。家康 vs 秀長+ (秀次+秀家+秀康)の関が原を見てみたい。これじゃあ家康挙兵する気も起こらないだろうけど。

秀次、近江八幡の治世を見るとそれほど凡庸ではなさそうだし。若年で血気にはやった小牧長久手以外はそこそこ、そつなくこなしている感じ。それでもダメな奴はダメ。

その時歴史が…にもあったように、秀吉の弟・秀長思いのエピソードは、胸にくるものがあった。思うに、秀長がいきでいけば、と言うよりも、二人が仲良く協力している時期が長ければ、家康の付入る隙は無かったというのが正解ではないか、と思います。

やはり、天下を取る器は秀吉、舵取りで暴走を防ぐのが秀長、秀吉が出陣する秀長の兜の内側に秀長加護の札をつけてやる・・・この兄弟愛があればこそ、天下人にまで届く強運と、当時の日本人の後押しがあったんじゃないかと、思います。黄金の兄弟とでも言うべきか…。それが、ひとり秀吉が、肉親を失って、暴君になった時点で、家康ならずとも、“次”を狙いうる存在が、出てきたんだといえるのだと思われるのですが。

秀吉と秀長、種は違えど畑は同じ

大政所の再婚時期と秀長の出生時期から秀吉四人兄妹は共に同父というのが新説。

この兄弟の個人的な武名は、さほど高くないようだが、使い捨てにされる士卒時代に乱戦を戦った経験が多々あるので、決して弱かったわけでもないんだろうな。武士としての強さがないと誰も付いてこないだろうし。武芸は、むしろ劣るくらいだったろう。武士でなかったのだから。まあ、ここでいう武士も、江戸時代のように明確でないし、父親は鉄砲足軽といい、半士半農といえたらうから、ある程度の戦の訓練は受けていただろう。しかし、この兄弟は実質、事実上、農業に従事していたらう（秀吉は違うか？）から、ほぼ全く武芸の心得は無かったらう。が、秀吉の進軍の神懸りの速さ等、武将としての、所謂、軍事能力はやはり 相当、秀でていたらう。それを認めているからこそ、家康も従わざるを得なかった。それをサポート出来たんだから、秀長の将器も大した物だらう。ただし、家康などのように、実際、刀を振るう能力のある武士ではなかったらう。秀長で言えば、それを先頭で代行してくれる家臣が、藤堂高虎だったのであろう。賤ヶ岳や根白坂における采配を秀吉から罵倒されたという話だってあります。

しかし、賤ヶ岳 においては、家臣たちの前で、わざと兄に罵倒させたという話もあります。弟でさえ叱り付ける所を見せつけ、中川清秀の死に対する秀吉への反感、動揺を防ぐために。そういう、もし逸話にしても、この手の話が残ると言うのは、秀次と違う点であり、やはり器の大きな武将と言えましょう。 重盛みみたいな性格だと思う

朝鮮出兵反対

秀次切腹

千利休切腹 という自滅の素は秀長の反対で彼の存命中出来なかったから

上の3つは全て秀吉が秀長死後死後行った

秀次三兄弟（秀次、秀勝、秀保）はほぼ、同じ頃に死亡しています。秀次はご存知の通りで、秀勝は朝鮮の役で病死、秀保も家老だった藤堂高虎家の書物によると、小姓が抱きついて池に飛び込んで死亡（道連れ？）という記述があります。

いずれにしても秀長・秀次・秀勝・秀保と 1590 年代に相次いで豊臣の数少ない藩弊は世を去っており、秀吉の元には自分の血を継ぐのが秀頼しかいなくなっていた。寧々の実家の方の身内は秀吉の血が入っているわけではないので、それをやった三成は関ヶ原でよほど追い込まれていたといえます。秀次が生きているという前提の場合、秀次は関白であり、豊臣公儀の正式な後継者となりえます。この場合、成人の執行者がいる以上、家康が政権を委ねられるはずもなく、伏見城におかれることもあり得ません。当然、関ヶ原が起きるということはありません。

ただし、秀吉が死後の秀次公儀のもとで秀頼をどのように扱うかによっては政権内で乱がおこる可能性は高いといえます。

ゆえに、秀勝や秀保の暗殺疑惑は、充分あると思う。が、秀長の発病から死去は鶴松病死と秀次の関白叙任の間じゃなかったか？ すると、秀頼の為の、強引な粛清はまだ開始されていないので、秀長暗殺は無いとされているが、本当の歴史は闇の中でしょう。実際、秀吉は秀長を頼りにしてたようだが、ある事件（吉川事件：秀長の家臣吉川何某が熊野の材木を売った代金を着服したという事件）で、秀長を遠避けて面会等を拒否している。秀長は秀保（秀次の弟）を養子にしていた。剣術は、史実のとおり、不得手だったでしょう。つまり、さむらいとして、刀や槍を扱うは、不得手だが、軍馬を率いての将としての器は、抜きん出ている。そう言えるのでは？ 馬を操り、軍を差配する能力、いくさの戦略に優れていた。そうでなくては、小牧・長久手のときの家康との睨み合いは成立しない。百姓出身で、どうして？ という疑問がおこる。普通はこうなる、という答えは、同じ小牧・長久手の戦いで、甥の秀次が、身をもって示してもいる。そのギャップも面白い。ところで、この時、秀長は、どうしていたんだろう？ 必死に救援にあたってもおかしくないのだが。やはり、三河武士の勢いは、止められなかったのだろうか？ いずれにしても、出自の卑しい彼らが、どうしてそうなれたのか、そこが最も魅力的な所じゃないでしょうか？ 信長や家康だって槍働きでは有名でないんでねえか。むしろ護衛のいる殿さんよりこの兄弟の方が凄いな、卑怯に逃げて生きているなら誰もついてこないし、信長の目にもとまらない中入りの禁忌を犯した池田が垂ボーンしただけだし。家康だって信玄あいてに喧嘩売ってうんこ垂れたりガッツのあるところを見せてまんがな。ここで秀秋が登場ですよ。思えば、信長の五男だった秀勝が生きていれば、まったく歴史は変わっただろうな。しかし豊臣家は肉親が死にすぎである。・・・

近年の研究では、「秀吉の出自は武士階級」ということになっている。講談社日本の歴史 15 で、元々父弥右衛門は尾張の百姓で信秀に足軽として仕えたが負傷して帰村した。とあるのは間違いか？

小牧・長久手の時の秀長は紀伊攻めの総司令官。雑賀や根来の残党をつぶして家泰の同盟者を消し、同時に本拠・京大坂の安全を確保した。秀長が小牧長久手に来ていれば、第二軍団の指揮は 戦術レベルで何の不安もなかっただろうけど、紀伊を押さえることは戦略レ

ベルで必要だった。実際、家康が屈服したのは、こうした戦略レベルで味方になる勢力がつぶされていったからである。

歴史にifはつきものだが、もし、秀吉が関白じゃなくて将軍になっていれば秀吉が生きている間に秀吉⇒秀次⇒秀頼の将軍職継承がスムーズに出来ただろう。と想定してみた。

そうすれば秀次やその妻子を殺す必要も無く、秀頼&淀が無用の恨みを買う事も無く、豊臣恩顧の大量離反も招かなかった。将軍職は幼い者でも継承できたのに対して、関白はその性質や慣例上、幼い者は継承できない。だからいくら秀吉が秀次に「秀頼に関白を譲れ」と言っても秀頼が幼いうちは譲る事は不可能だった。秀頼が関白になれる頃には秀吉は確実に死んでいる。その時に秀次が秀頼に関白を潔く譲る保証はどこにもなかった。秀次の周辺にいた女性は、どれも名門の美女揃い。秀次追放時に彼女らを一人残らず殺してしまったから、豊臣家は彼女らの遺族の恨みを買うこととなった。それが原因で関ヶ原では豊臣家臣団が分裂して争ったのは承知のこと。

秀吉存命時にはその不満を表に出すことはできなかったが、死んでしまえばその限りではない。秀次の処刑が、豊臣氏没落を速めたことは疑いがない。秀次殺しが家康を目覚めさせたともいえる。秀次は小牧長久手で家康にやられた経験があるから執拗に警戒するだろうしね。秀吉死後も秀次が健在なら家康も容易には動けなかったかも知れない。結局、秀吉晩年の凶行が豊臣家の滅亡を加速的に速めたのは間違いない。家康が天下様になるには秀頼を担がなければいけないがここがハードル高い。家康の正義は豊臣政権の重役であるところだから、秀次に加担するのが筋。秀次と秀頼が相争うようしむけ、待ち、かつ秀次を失脚させることが可能かどうか。なんかどっちも死んじゃって收拾つかないからワシが出るというほうが簡単で早い気がするな。秀次が生きのまま秀吉が死ぬ場合、秀吉は「秀頼成人後は秀次は速やかに関白職を秀頼に譲ること」との遺言を間違いなく残すだろ。

だから合戦が起きるとすれば秀頼成人後も秀次が関白職を譲ろうとしなかった場合だろう。しかし秀次体制が10年以上続いたら、秀頼に跡継がせても傀儡になりそう。秀頼担いで合戦するより、秀次に取り入って実権握った方が確実性高そうだし 実子ではない秀次の統治体制を出来る限り磐石にする為に自分の死後を想定し秀吉が構築した次世代システムは隙がほとんど見当たらないんだよね。身分は関白にして豊臣氏長者、姻戚と与力大名を四国から畿内、東海一円にずらりと並べて秀次の実弟を美濃と大和に配置。目ぼしい大名だけでも池田、蜂須賀、浅野、前野、木村、中村、堀尾、山内。

徳川や毛利といった大身の外様大名がどうこう蠢動しようがない 秀頼が生まれなかったらと仮定したら、徳川が天下篡奪するのはかなり難しい。豊臣恩顧が徳川に付くなんて事はまず起こり得なかったし。秀頼が生まれたとしても、秀次の娘が秀頼に嫁げば別に問題ないと思うんだが、なんで秀吉は肅正なんてしたんだろ？

秀次だって、義弟で娘婿の秀頼を粗略に扱うようなこともないと思うし、秀次の息子たちだって御三家のような存在として残せばいいわけだし。秀次も、残された甲冑(サントリー美術館蔵・桃山時代の物で最高級品、豊臣関係者の物であることは確実)から判断する限

り、180 超、筋骨隆々の大男。秀吉は多分 150 程度の小男だったのに、秀次、秀秋、秀頼と皆大男なのは何故なんだろう。秀次と秀吉で戦いになった場合はどうなるのだろう。秀次が生きてる状態で、秀頼も秀次の元にいる状態で、どうやって家康が秀頼を擁するんだ？秀吉から正式に関白を譲られた秀次相手では、かつて秀吉が織田信孝から三法師を奪ったようにはいかないと思うぞ。秀次後継体制において徳川が少なくとも家康の代で政権中枢に入り込めるような隙はまるでないんだよね。徳川の影響下にあるのはあくまでも自領のみ小田原征伐以後の奥州仕置きに関しては秀次+浅野前田+石田で行っている。つまり天下人 2 代目と羽柴閥の筆頭と旧織田系大名の出世頭と羽柴近江系官吏の寄り合い所帯結果として秀次側室に最上家の駒姫、前田の組下のような南部、石田と縁戚の津軽という按配になっていた。なお甲信越は浅野森上杉で東海は秀次系与力大名。仮に東国で乱が起きても自領以外の東国を徳川がどうこう出来るはずもないし、実際に起きた豊臣秀吉政権下における小田原以降で最も大規模な内乱である九戸の乱では秀次、浅野、蒲生、石田+奥州諸大名で制圧している。秀頼さえ生まれなかったら、豊臣は続いていたかもしれない。確実に秀頼に継がせるにはああするしか無かった。関白はその性質や慣例上、若い者は就任できない。秀頼が関白になれる頃には秀吉は確実に死んでいる。その時に秀次が秀頼に関白を潔く譲る保証はどこにもない。秀次の政権が天下を治めたら、日本は鎖国せず、もっと違った日本が誕生していただろう。

- さて、この章の終わりに、フリーの百科事典「[Wikipedia ウィキペディア](#)」に掲載されていた「[豊臣秀次](#)」の項がうまくまとめられていたので参考に掲載しておきます。

天正 19 年（1591 年）8 月に秀吉の嫡男・鶴松が死去した。秀次は 11 月には秀吉の養子となり、12 月に関白に就任。同時に豊臣氏の氏長者となった。すでに天正 14 年（1586 年）11 月には、豊臣の本姓を、秀吉から授与されていた。

関白就任後の秀次は聚楽第に居住して政務を執ったが、秀吉は全権を譲ったわけではなく、二元政治となった。その後、唐入りに専念する秀吉の代わりに内政を司ることが多かった。

しかし文禄 2 年（1593 年）に秀吉に実子・秀頼が生まれると、秀吉から次第に疎まれるようになる。秀頼と秀次の娘を婚約させるなど互いに譲歩も試みられたが、結局文禄 4 年（1595 年）7 月 8 日、秀吉の命令で高野山に追放され、出家した。以降、出家した元の関白＝禅閣となり、豊臣の姓から**豊禅閣**〈ほうぜんこう〉と呼ばれた。同年 7 月 15 日に切腹を命じられ青巖寺・柳の間にて死亡。享年 28。辞世は、「磯かげの松のあらしや友ちどり いきてなくねのすみにしの浦」。

死後、秀次の一族・妻妾・息子・娘・家臣の多くが粛清され、秀次の首は秀吉によって京都の三条河原に曝された。遺臣の多くは石田三成、前田利家、徳川家康らに仕えた。

ただし、秀次の妻子が皆殺しにされたわけではない。豊臣十丸の祖母北野松梅院は死を免れている。直系の親族では、淡輪徹斎隆重の娘・小督の局との娘で生後一ヶ月であったお菊は祖父の弟の子の後藤興義に預けられ、後に真田信繁の側室・隆清院となった娘とその姉で梅小路家に嫁いでいた娘の同母姉妹も難を逃れている。

この秀次ら一族処刑に関して、その経緯を記した絵巻「瑞泉寺縁起」が京都の瑞泉寺に残されている。

秀次事件に関係し秀吉の不興を買った大名は総じて関ヶ原の戦いで徳川方である東軍に属することになる。笠谷和比古は、朝鮮出兵をめぐる吏僚派と武断派の対立などとともに、秀次事件が豊臣家及び豊臣家臣団の亀裂を決定的にした豊臣政権の政治的矛盾のひとつであり、関ヶ原の戦いの一因と指摘している。

秀次は秀吉晩年の豊臣家の中では唯一とも言ってもよい成人した親族であった。しかし、秀次とその子をほぼ殺し尽くしたことは、数少ない豊臣家の親族をさらに弱める結果となった。ただしその一方、後継者が確定しないなかで秀吉が死去した場合、覇権を巡り秀頼と対立し豊臣家内の分裂を引き起こした可能性もある。

秀次切腹の主な連座者

切腹者

- 木村重茲（助命後自裁）
- 木村志摩守（賜死）
- 前野長康（助命後自裁）
- 前野景定（賜死）
- 羽田正親（賜死）
- 服部一忠（賜死）
- 渡瀬繁詮（賜死）
- 明石則実（賜死）
- 一柳可遊（賜死）
- 栗野秀用（賜死）
- 白江成定（賜死）
- 熊谷直澄（直之）（賜死）
- 瀬田正忠（賜死）

その他

- 三好吉房（改易・流罪）
- 六角義郷（改易）
- 木下吉隆（改易・流罪）
- 里村紹巴（蟄居）
- 浅野幸長（流罪→のちに復帰）
- 増田盛次（蟄居→のちに復帰）
- 前野忠康（浪人）
- 滝川雄利（除封）
- 荒木元清（追放）
- 菊亭晴季（流罪）
- 土御門久脩（流罪）
- 小田友治（改易・逃走）

難を逃れた主な人物

秀次の家臣・与力大名等

- 田中吉政
- 中村一氏
- 山内一豊

その他の人物

- 藤堂高虎
- 毛利輝元（この事件の首謀者の一人と言われ、秀次から多額の借金をしていった）
- 堀尾吉晴
- 伊達政宗
- 最上義光（秀次の側室となっていた娘の駒姫が事件に連座し処刑された）
- 細川忠興
- 浅野長政（既に 1593 年に事実上失脚して、子の浅野幸長に家督を譲っていたため新たな処分はなし。のちに五奉行として復帰）

最上、細川、伊達らは徳川家康の取り成しで事なきを得た。

人物

秀次は通説として凡庸・無能な武将として評価されることが多いが、秀次の失敗は小牧・長久手の戦いの敗戦の一度だけであり、その後の紀伊・四国攻め、小田原征伐での山中城攻め、奥州仕置などでは武功を上げ、政務においても山内一豊、堀尾吉晴らの補佐もあって無難にこなしていることを考慮すると、そこそこの力量はあり、文武両道の人物だった。

- 秀次事件のとき、秀吉譜代の家臣である前野長康、さらには木村重茲（しげこれ）、渡瀬繁詮など多くの人物たちが秀次の無罪を主張して弁護していることから、秀次は諸大名から人望があったものと思われる。
- キリスト教宣教師たちは秀次を「この若者は伯父（秀吉）とはまったく異なって、万人から愛される性格の持ち主であった。特に禁欲を保ち、野心家ではなかった」「穏やかで思慮深い性質である」などと記している（ルイス・フロイス「日本史」など）。この点からも巷説の「殺生関白」は実像だったか疑問がある。キリスト教についても理解を示し、キリシタンであったのではないかとする研究者もいる。
- 秀吉と同じく男色を嫌っていた。
- 秀次は古筆を愛し、多くの公家とも交流を持つ当代一流の教養人でもあった。学問の上達ぶりを賞賛する公家の手記も現存する。
- 武術については、疋田景兼より剣術と槍術を学んだほか、長谷川宗喜や片山久安からも剣術を学んだとされ、切腹の際の介錯ができるだけの腕前があったという。刀剣の鑑定も行っていた形跡もある。このほか吉田重氏から日置流弓術を、荒木元清からは荒木流馬術も学んでいた。剣術試合を見世物として楽しみ、聚楽第で兵法者の真剣での試合を催すことがあった。秀次所用と伝わる「朱漆塗矢筈札紺糸素懸威具足」が、サントリー美術館に所蔵されている（サントリー美術館コレクションデータベースに画像と説明あり）。
- 古典の収集に励み、これを保護した。小田原征伐後、奥州に赴いた秀次は中尊寺の大蔵経を収集し、これを持ち帰った。このほかに、足利学校や金沢文庫の書籍をも、持ち帰っている。また、収集した日本紀、日本後紀、続日本後紀、文徳実録、三代実録、類聚三代格、実了記、百練抄などを朝廷に献じている。

9、琵琶湖の浮城 水荃岡山城の攻防戦

問題9；政変により水荃岡山城（城主：九里浄椿）に逃れて、そこで没した足利幕府の第11代将軍の名前を記せよ。

- ③ 足利義晴 ②足利尊氏 ③足利義昭 ④足利義澄 ⑤足利義政 □

解答・・・**4**

<解説>

楠正成が足利幕府軍を迎え撃った「千早赤阪城」は有名だが、時代は違うが、同じく足利幕府軍を向こうに回して戦った「城」が近江八幡市にもあったことを覚えておいてください。あとは、詳しくは、熟考中です。

10、沖島と蓮如上人

問題10；本格的に島に人が住むようになったのは、保元・平治の乱（1156～1159）による源氏の落武者7人が山裾を切り開き漁業を生業とし居住したことに始まると言われ、彼ら七家（南、小川、西居、北、久田、中村、茶谷）が現在の島民の祖先とされています。しかし現在まで沖島の寺に残る「虎斑の名号」を書いた有名な人物は誰か。

- ① 法然 ② 親鸞 ③ 蓮如 ④ 道元 ⑤ 教如

解答・・・・・・・・**3**

<解説>

近江八幡市の歴史は昭和初期に増補編纂された「蒲生郡志」が元となっている。そこに詳しく沖島の成り立ちが記載されています。最近できた「近江八幡の歴史」にも同じようなことが記載されていますので読んでください。

そもそも「蒲生郡」は古代律令制に「郡」が成立したといわれ、天智天皇の頃には「蒲生野」が万葉集に歌われている。近江国田原に住んだ「藤原秀郷」（俵の藤太）の末裔が「蒲生氏」を名乗っている。戦国期の蒲生氏郷は三上山のムカデ退治で有名な「俵の藤太」の子孫ということになる。昔（昭和の大合併以前、明治22年の町村制施行時には）、八幡町があったころ、「蒲生郡」は、八幡町、日野町と23の村（2町23村）があった。その後、宇津呂村と島村が八幡町に編入したのち、八幡町と桐原村、岡山村、馬淵村、金田村が合併し近江八幡市となり、蒲生郡より離脱しました。また安土村と老蘇村が合併し安土町となり、2010年安土町が近江八幡市に合併し、郡より離脱しました。でも現在でも「郡」制度は生きています。2012年の時点で「蒲生郡」に所属するのは、竜王町と日野町です。

大房、小舟木などはもっと昔（平安時代）は「舟木郷」と呼ばれていました。舟木郷から賀茂（加茂）、御神牧（岡山・牧）が分かれました。また津田郷は内湖を挟んで津田南、津田北、津田中があり今の南津田、北津田、中ノ庄です。北の庄、多賀などは大島郷と呼ばれました。その他に近江八幡市内では安吉郷、篠田郷、桐原郷がありました。なお安土地区においては鷓鴣という字が『近江輿地志略』には見られ「佐々木もと鷓鴣の御名によれり。佐々木は仮名書なれば、篠筥と相通ず。佐々木を篠筥といふにや」と記されるように、近江国蒲生郡篠筥郷や佐々木郷（鷓鴣郷）と呼ばれていた。鷓鴣はササキと読むがセ

キレイのことである。では「近江源氏佐々木氏」のことを専門に書いた昔の書物を「江源武鑑」といいます。

1 1、住蓮坊遺跡と首洗池

問題 1 1：法然の念仏集団を弾圧した後鳥羽上皇は、法然上人を土佐に、親鸞聖人を越後に流罪にただけでなく、死罪になった法然門下の弟子もありました。それを「承元の法難」といいます。市内の千僧供町には断首された 2 人の法然上人の弟子の墓（首塚・遺跡）がありますが、その二人の弟子の名前を教えてください。

① 一遍・一向 ②安楽・住蓮 ③松虫・鈴虫 ④弁長・信空 ⑤真仏・善鸞 □
解答・・・**2**

<解説>

「住蓮坊」の遺跡は、馬淵学区の千僧供町というところにある。（安義橋から歩いて5分ぐらいのところにある）この話は、地元の婦人会が紙芝居にして市民に広めたので、市民で知っている人も多いと思うが、「鈴虫・松虫」の物語といえば全国的に知っている方もあろうかと思う。

鎌倉時代の承久の変で活躍した後鳥羽上皇の御所女房（愛妾）であった「鈴虫・松虫」の二人が法然上人の弟子であった住蓮坊と安楽坊に入信して上皇に黙って出家（京都鹿ヶ谷の安楽寺に墓がある）してしまったことから、念仏弾圧の引き金となり、師匠の法然は土佐へ流罪、住蓮と安楽は死罪となった。（このとき親鸞は佐渡に流罪となる＝これを承元の法難または建永の法難という）安楽は京都河原で打首、住蓮も逃げてこの近江の地で捕まり打首となった。（住蓮坊が馬淵＝安吉郷出身だったという説もある）のち、関係者が安楽の首と一緒に住蓮坊遺跡に埋めて供養したということである。・・・それが今に伝わる住蓮坊（安楽坊）遺跡の物語である。京都にも住蓮山安楽寺というお寺があるが、江戸時代に建てられたものであり、千僧供にある石塔（御僧塚）も江戸時代に作られたものらしい。400年もたってから供養されたということは徳川家が浄土宗であったのとなにか関係あるのだろうか。それはともかくとして、浄土宗や浄土真宗では、法然や親鸞の足跡を旅する「聖跡巡拝」が行なわれているが、この承元の法難跡の一つとして住蓮坊遺跡も加えてみてはいかかなものかと考えます。おそらく浄土宗や浄土真宗系の仏教徒にとっては、魅力ある遺跡探訪のひとつとなるでしょう。また千僧供町の易行寺の赤松住職談によれば、住蓮坊・安楽坊の菩提を弔うために、僧侶一千人が集ったことから、この地は「千僧供」と言われるようになったということである。

近くには天智天皇や天武天皇と額田王の相聞歌「あかねさす むらさきのゆき しのめゆき・・・」で有名な「蒲生野」があり、また額田王やその姉で藤原鎌足の正室であったとされる鏡大王（かがみのおおきみ＝鏡王女とも書く・・・南都興福寺縁起には鎌足の夫人、鏡大王が興福寺の前身である山階寺を創建したとある。平城遷都に伴い現在の地に移されたが藤原氏の氏寺とされる。ちなみに奈良県桜井市にある恋神社の祭神は鏡大王である）の

出身地とされる鏡の里＝鏡山もある。（この鏡の里には源義経が奥州へ旅立つとき元服したと伝えられる義経元服池もある＝最近国道8号線沿いに道の駅が出来た。昔は東山道の鏡宿があつて賑わったところである）さらにつけ加えるならば、壬申の乱の時、天武側の将であつた鏡王（額田王や鏡大王の父？）が戦死して、先ほどの（住蓮坊安楽坊の遺跡がある）黒塚古墳とも言われている場所に葬ったとも（竜王町観光課によれば真照寺に葬られているとも）言われている伝承がある。

住蓮房、安楽房は親鸞聖人と同様、法然上人のもとで念仏の教えを喜ぶ仲間であつた。

1207年の「承元の法難」で、法然は土佐に、親鸞は越後に流罪になる。

住蓮房・安楽房は、死罪となつた。住蓮房が千僧供村で処刑されたのは、諸説あるが住蓮房が千僧供村出身だからという説が一般的。

因みに安楽房は京都六条河原で処刑されている。

言い伝えでは処刑の際、安楽房は、住蓮房と合葬してほしいと願い出たため二人とも現在の地に埋葬された。所在地滋賀県近江八幡市千僧供町の田園の中。国道8号線六枚橋交差点から東に約400m。

「象印」の工場の向かいの農道を100m入ったところにある。

高さ4～5mほどの小さな円墳の上に二人の石塔が並んで立っている。

「御僧塚」と称され代々近郷農村の門徒さんらによって大切に守られてきた。

この遺跡には、滋賀県教育委員会・近江八幡市教育委員会の説明が付されている。

この説明によると、円墳は今から1500年前～1400年前に作られたもので、墳丘の真下には古墳石室と鎌倉時代の墓も確認されている。

現在の住蓮房・安楽房の石塔は江戸時代に作られたものであるということであつた。

住蓮（じゅうれん）

時代：平安時代～鎌倉時代 年代：？年～1207年

鎌倉前期の浄土宗の僧。法然の弟子で元久元年（1204）の七箇条制誡にも署名している。

建永元年（1206）12月、遵西と共に京都鹿ヶ谷で六時礼賛を唱え、

その際に御所の女房が出家をしたので後鳥羽上皇の怒りをかい、

法然門下の専修念仏への弾圧も強まって、翌年近江馬淵荘で斬罪となつた。

遵西（じゅんさい）＝安楽（あんらく）

時代：平安時代～鎌倉時代 年代：？年～1207年

鎌倉前期の浄土宗の僧。少外記中原師秀の子。安楽房と号す。

法然の弟子として『選択本願念仏集』の執筆役を務めた。

また声明音楽に才があり、唐の善導の六時礼賛の称揚を広めた。

建永元年（1206）京都鹿ヶ谷法然院での別時念仏会では、同門の住蓮とその能声で多くの帰依者を誘い、御所の女房も出家をしたため後鳥羽上皇の怒りをかい、承元の法難の原因となる。このため師の法然は流罪、遵西は京六条河原で死罪となった。

住蓮房首洗池（別名住蓮池・念仏池）・・・墓所より西へ直線距離 200mに位置する
法然の死後、浄土宗は、彼の弟子たちによって、各地に布教が展開され、また「念仏聖」といわれる僧たちによって民衆仏教として定着していった。そのなかで、西山派、知恩院派などに分かれていったが、特筆すべきは、親鸞の浄土真宗と一遍の時宗であろう。いずれも浄土系であるがゆえに法然の浄土宗の一派とみなされていた時期もあった。

日本の歴史や宗教に関しても、特定の研究者や関係者にとってはごく普通の知識が、世間一般にはほとんど知られていないということが間々見受けられる。世間の1人である私にとって、例えば、浄土真宗がそうなのである。

真宗王国などと称される環境の中で生まれ育ったせいも、東派と西派の2つの本願寺派だけが浄土真宗だと、長いあいだ思いこんでいた。ところが実は、本願寺派よりもっと古くに成立した高田派や仏光寺派が今も存在する。また、福井県に四ヶ本山と呼ばれる三門徒派・誠照寺派・山元派・出雲路派が現存し、かつて加持祈祷（きとう）・踊り念仏・秘事法門が行われたものもあると知って驚いてしまった。

つい最近まで、私は、戦国期にあれほど活躍した「一向一揆」の中核は、浄土真宗の本願寺教団だと理解していた。確かに石山本願寺の顕如や教如などは織田信長や徳川家康の戦国大名に反抗し「一向一揆」を組織したと歴史教科書では教えられている。徳川家康で言えば、謀臣といわれる本多正信までが反抗した「三河一向一揆」、さらには織田信長に根絶やしにされた願証寺を中心とした本願寺（一向宗？）門徒の「長島一向一揆」や紀州の雑賀衆や毛利水軍を巻き込んでの「石山本願寺の合戦」は有名である。

だから、浄土真宗の門徒である我々でさえ「一向一揆」・「一向衆」と聞けば、条件反射的に「イコール=浄土真宗=本願寺」をイメージしてしまう。しかし、私の属する和讃講である時、「なんで一向宗ではなく浄土真宗なんや。戦国時代は一向宗と呼んでいて、今は浄土真宗というのは何でやね」という話題になった。なるほど、一向宗という名称は現在では聞かず歴史のなかでしか聞かない。常識的にいえば今の本願寺は一向宗とならなければおかしいな、とそのときは思った。そのとき居合わせた住職（大房・本願寺派金照寺・西川龍乗氏）から、「浄土真宗と一向宗は、必ずしも同じではないとの説があります」ということを聞いた。本願寺からは門徒衆に対して一向宗（一向一揆）に加わらないよう再三に涉って通達が出されていたという。この一向一揆という時の“一向”とは、一向宗のことだ。広辞苑を繰ると（一向に阿弥陀仏を信ずるからという）浄土真宗のこと、とある。ただし、一向一揆の頃（ころ）は、一揆方は悉（ことごと）く同じ浄土真宗の高田派と対立抗争していたから、精確（せいかく）には、かつての本願寺派だとすべきで、この呼称は微（かすか）に現代にまで

及んでいる。というのが常識だと、私は思いこんでいた。しかし存外にも、全く違った“一向宗”の顔を歴史は示してくれるのである。

今から20年前に、私は市役所の職員組合系の機関紙「解放」紙上に「時宗と真宗における被差別民衆のかかわりについての一考察」(PDF版で我がHPに掲載)というレポートを投稿した。その時に、真宗教団が拡大したのは時宗系の聖や民衆(その大勢は被差別民)を吸収したからだというように書いた記憶がある。しかし、一向宗と浄土真宗の関係については触れていなかった。そこで、改めて、引っ張り出した当時の原稿や資料から、以下の論を展開するものである。

一向一揆の性質について

1488年、加賀の一向衆徒が蜂起して守護富樫政親を倒し、以来、90年近く加賀国は「百姓の持ちたる国」となった。その後も一向一揆が国内のあちこちで戦国大名に反抗し武力蜂起を起こしている。そのため九州(薩摩・肥後)や関東(北条氏)などでは一向宗が禁止されたところもある。では、一向宗つまり浄土真宗は、支配者を脅かすほど過激な思想を持った宗教なのか。今、私は和讃講や仏教壮年会に参加して活動しているが、ついこの間も名古屋であった西本願寺の新門さまを迎えての第18回全国仏教壮年東海大会に参加してきたばかりであるが、そんなに過激な宗教とは思われない。昔と今では教義が違うのだろうか、とも思ったりしたが、中興の祖といわれる蓮如上人が、いつも我々門徒が拝読する「御文章(御文=おふみとも東ではいう)」のなかで、繰り返し次のように述べているのを発見した。

(意訳)『阿弥陀仏にひたすら帰依し、信心を深めるように。他の神仏に後生の(一大事)救済を求めてはならない。かといって他のいろいろな仏神を否定したり軽んじたりしてはいけない。世俗の慣習も尊重し、真宗では行わない物忌みにも同調するように。自分自身が念仏修行により信心を得たとしても、守護地頭を軽んじることがあってはならない。年貢・公事をきちんと納めること』と諭している。

つまり、排他的にならず他の宗派や支配者と協調するようにと穏健な教えを説いているのである。それなのに、なぜ各地の門徒は、支配者を武力で攻撃するような行動をとりつづけたのだろうか。一向一揆を研究している神田千里氏や辻川達夫氏、出口治男氏などによれば、真宗と一向宗は別物であるという。

「一向宗」という名称は、鎌倉時代つまり開祖親鸞聖人の頃からあったという。浄土真宗を、そう呼んだわけではなく、まったく別なところから成立したものだと言われている。

「一向宗」と呼ばれた宗派は、同じ浄土系の念仏宗ながらも土俗的な性格が強く、加持・祈祷・占いを生業として民衆の中に入り込むのを常としていた。山伏・念仏僧・琵琶法師などが多かったという。これは一遍上人の時宗を支えて構成した階層と同じである。ちなみに、これから語る「一向上人」の一向宗も当時は明確な宗派を確立しておらず、時宗系の一派とみなされていた。加賀一向一揆のときの一向衆のなかには白山の長吏も入っている

たとされる。彼ら一向宗徒は時宗（一向宗を含む）とも重なりを見せながら、諸国を巡り歩き、祈祷や占いによって民衆の心をつかみ、信仰を広めていったのである。そして彼らは、形のうえでは、真宗または時宗（大きくは浄土系）の組織に所属していた。つまり、浄土真宗の本願寺は、内部に大勢のこうした異分子を抱えていたわけである。15世紀後半に、浄土真宗（本願寺）が急速に信者（勢力）を増やしていったのは、蓮如の精力的な活動に負うところが大きい。だが、こうした「一向宗」の力がなかったならば、とても、これほどの発展は望めなかったに違いないと、前述の神田氏はいう。

本願寺教団は、たしかに蓮如上人の努力と一向宗（浄土宗の一宗派という位置づけ。時宗も浄土系一派とも考えられていた。もっとも浄土真宗自体も浄土宗一派である本願寺派と考えられていた。ここで本願寺というときは蓮如以降の本願寺教団をさす）をベースとした念仏衆徒（その多くは被差別民衆）に支えられ膨大な数の民衆を結集できるようになったが、蓮如が繰り返し唱える教義は、なかなか門徒には浸透していかなかった。ここでは「一向宗」が障碍になったのである。もともと「一向宗」というのは、教義のうえではあやふやだったから、ただ念仏を無碍一向に唱えて現世と来世のご利益を期待するばかりにとどまっていた。そしてその単純な考えが民衆にとっては蓮如の教え以上に受け入れやすかったのではないだろうか。（後段の参考文献を参照されたい。）当時はまだ一向宗や時宗の念仏信仰がベースにあった状況のなかでは、蓮如の「御文章（御消息ともいい本願寺からの通達文のこと）」も末端の門徒の行動をなかなか規制できなかったのであろう。逆に言えば、民衆の側は本願寺の貴種系譜（親鸞の出自は藤原氏につながる公家の日野家であると本願寺は教化に利用した）を逆手にとって、本願寺の権威を民衆が活用したといえる。蓮如が組織した門徒組織すなわち「講」をリードしたのは主に国衆・土豪であり、彼らの上昇志向は、守護勢力と衝突せざるをえなかったものであり、その下には真宗の教義とはかけ離れた多数の一向宗あるいは時宗の信者が現世の利益を求めて転向し本願寺教団に集まっていったと考えられる。またそのなかには信仰とまったく関係ない農民たちも、やはり現世の利益だけを求めて加わっていたに違いない。そうした一向一揆衆が加賀一向一揆を起し、他の地域でも大きな戦闘力を持つようになった時、戦国大名たちは、これを無視できなくなっていったのである。それでも本願寺は蓮如の三代後の顕如（11代）まで権力者への反抗を禁止しており、しばしば破門という奥の手を持ち出したとある。しかし、織田信長が上洛して石山本願寺を圧迫するに至り、本願寺も一向一揆の俗的な力を認めざるを得なくなり、顕如は、これまでの態度を一変させ、織田信長を「法敵」と規定し、全門徒に信長と戦うことを呼びかけたのである。本願寺から言えば一部の異端派＝「一向宗派」が中心になって起こした権力者への反抗は、ここにきてついに本願寺（法主）までも同調した形で、初めて本願寺組織はひとつにまとまったのである。これにより、本願寺の権力者への反抗は一向一揆と後世では呼ばれることになったのである。しかも、留意いただきたいのは同じ真宗系統であっても蓮如の本願寺系をそう俗称されたのであり、仏光寺派や高田派などは一向衆とは呼ばれていない。当時はまだ浄土宗一派とみなされていた

らしい。また本願寺教団が拡大する過程で、高田派や仏光寺派などの他の真宗各派の信者を吸収していったことは容易に想像できることである。ちなみに当時の仏光寺派や高田派の真宗門は一向宗とは一線を画しており、戦国守護の権力と力をあわせて一向宗と敵対したこともあるらしい。

さて、一向一揆の総集編とも言われる本願寺（教団）と織田信長のいわゆる石山戦争はまる十年も続いた。そもそも本願寺（法主顕如）にしても各地の一向一揆に対して為政者に対する反抗を止めよとの指令をたびたび出しており、上洛したての頃の信長の矢銭50貫の要求さえおとなしく出している。一方信長にしたって決して仏教嫌いではない。自分の権力に逆らいさえしなければ、それなりに保護してやるという姿勢であった。安土城下での浄土宗と日蓮宗の安土宗論をみればそれは理解できよう。（余談だが宗論はどちらが負けても釈迦の恥。という言葉がある）荒木村重の叛乱に係わっての高野聖の虐殺や比叡山延暦寺を焼き討ちしたのも、長島一向一揆を根絶やしにしたのも自分の権力に反抗したためであり、それは一人信長だけでなく戦国大名すべてについて言えることである。（虐殺は徳川家康や豊臣秀吉も同じことをやっている）信長と本願寺が衝突したのは一般的にとらえられているように、思想上の相違ではなく、信長が本願寺のある石山（大阪）の地がほしくて本願寺に立ち退きを要求したのが原因だといわれている。このことも、今回調べていてわかったことである。

念仏を称えざるをえない人々の側からの出発

一向一揆に時衆の影すなわち、「浄土真宗」内に旧「時宗」系勢力があったことは先述した私の「時宗と真宗における被差別民衆のかかわりについての一考察」にも触れたところであるが、浄土真宗と一向宗の関係についても若干整理しておく必要があるだろう。そもそも、法然の弟子であった一遍上人や一向上人の時宗と一向宗の違い、あるいは同じ浄土真宗であっても蓮如上人以降の本願寺系の東西本願寺派と本願寺から分かれた興正寺派（本願寺教団）を除く高田派、仏光寺派などの真宗7派は一向一揆にかかわりがあったのか、なかったのか、など疑問点は多々あるが、私なりの推論（根拠となる資料まで集められなかった）を展開しておこう。なお、引用文については文献名・作者等引用元を文中に明記する。

もともと一遍上人の時宗にしろ、一向上人の一向宗にしろ、その念仏を支えたのは、定住型の農民よりも非定住非農耕の人々である。時宗系（踊り念仏）と「河原者・散所・革多・非人」との関連は一遍上人時代から強いものがあつた。井上鋭夫氏の「一向一揆の研究」では①時宗は室町時代にはかなり北陸をはじめ地方に弘通しており②本願寺一門のなかにも時宗（衆）の者がいたが背信行為でなかったこと③真宗が時宗と混同され、一向宗と呼ばれたのはかなり古い時期からであること④北陸における本願寺教団の形成に大きく寄与した井波瑞泉寺や加賀二股の本泉寺では時宗の僧侶が重きをなしていた。ことから井

上氏は、時宗の念仏が真宗弘通の基礎をなしていたという。さらに時宗の参入とあわせ真宗他派から本願寺に帰参した門徒群が、本願寺教団隆盛の基幹をなしたともいう。井上氏は、蓮如以前の真宗を「古真宗」とし蓮如以降を「新真宗」と分けて考察するのが便利であるとしている。また赤松俊秀という方は「一遍上人の時宗について」という論文で、「中世に多かった時宗寺院の大部分は、蓮如以降、真宗が急激に発展した最大の要素は、時宗教団吸収によるものである」と述べている。その根拠として①蓮如以降の真宗に時宗の教義が進入し異安心の問題を引き起こしたこと。そのため蓮如はご文章でたびたび注意している②従来、外部から無碍光宗と称せられていた真宗が、蓮如以後、急に向宗と呼ばれるようになったこと④真宗内では本願寺門主の流れは本来親鸞廟の一留守職に過ぎなかったにもかかわらず、その一派の者をして絶対的な権威者の地位にのぼらせたのは、時宗の教義の影響であり、蓮如以前の真宗内部の伝統からは生じ得ないものである。と説明している。すなわち「古真宗」こそ一向宗の担い手であり、本願寺が浄土系宗派や真宗宗派に対抗して本山としての性格を示し始めたとき（＝すなわち蓮如による本願寺教団の成立）まず本願寺の傘下に結集したのが、時宗系の山の民や川の民であったのである。一遍は時宗の基礎を提供したが、一遍自身は一宗を立てる考えもなかった。あとを継いだのが一向俊聖上人ではなかったのだろうか（このことは資料がないので想像ではあるが）と思っている。だから「古真宗」は時宗の転宗というより「一向宗」からの転宗の一形態ではないかと考えるものである。逆にいえば「古真宗」は実は「真宗」ではなく「一向宗（時宗の一派という捉え方）」であったのである。そして蓮如のあらわれたあと、「一向宗（＝時宗）」は一斉に蓮如の「真宗（＝本願寺）」に転宗し、蓮如時代の本願寺教団のなかの一大勢力になるのであり、この本願寺内の時宗系一向宗（衆）の勢力が一向一揆の主力をなしていくのではないかと考えたのである。

すでにみてきたように、蓮如の本願寺派が教団にまで発展したのは、近江では堅田の馬借や湖族、北陸では白山系修験者、金堀り、散所に類する者などの当時は賤民とされた人々の「ワラリ」や「サンカ」＝山の民、川の民、海の民、遊芸・漂白の民が支えたからである。当然、本願寺教団に吸収された（結集した？）人々のなかには、時宗や一向宗からの転向組や同じ真宗でも本願寺以外の他派からの信者もいたと考えられる。おそらくこれらの人々が自らを「一向宗」と名乗っていたのではあるまいか。昨年、鳥越村（現在は白山市となっている）の一向一揆歴史館を訪ねたが、その印象としては山の民（白山系）の里という感じだった。あんな山奥に一向一揆衆の砦を築くなんて、山の民にしかできないことである。

蓮如が「ご文章」のなかで、一向宗について、次のように書いています。

「そもそも当流の名称を自他宗ともに、一向宗と呼ぶは大いなる誤りである。開山聖人より一向宗と仰せられたことはなく、その作られた文章には真宗とある。しかるに諸宗の方から一向宗と呼ばれることはなはだ疑問であるし、当流のなかで自分から一向宗と名乗

ることはもってのほかである。元来、一向宗というのは時宗の側の名称であり、一遍、一向がこれである。その源は江州番場の道場であり、これがすなわち一向宗である」と述べている。蓮如は「ご文章」のなかで一遍の流れをくむ一向宗を自分の真宗とは違うのだと強調しているのであるが、その「真宗＝本願寺教団」の内部には時宗や一向宗の勢力を内包して（取り込んで）門徒化＝拡大してきたのは前述したとおりである。それがゆえに、一向一揆の原動力となった一向宗徒の信仰は「時宗系（一向系ともいえるが、混乱するので狭義の一向宗をも含んで時宗系とする）」浄土真宗＝古真宗であったと推理するものである。そして本願寺自身も彼ら門徒を表向きには異端といいながら、教団拡大には必要とし利用したのである。それゆえ、後世、歴史のうえからも、他宗派から「本願寺教団の門徒衆」のことを「一向衆」と称したのは、あながち間違いではないのである、と私は結論するものである。一向宗の「古真宗」衆徒は、その戦闘性を堅持したまま、そのエネルギーを一向一揆へと繋いでいったのである。そのため蓮如時代には否定していた反権力の闘争エネルギーも、顕如や教如の時代には、反信長ということで、認めざるを得ない状況となったということである。本願寺が異端をみとめたということは、本願寺教団による反抗や本願寺門徒による支配者への反抗を「一向一揆」と呼ぶことを認めたということである。

12、熊沢蕃山と中小森村

問題 12 ; 江戸時代初期の有名な陽明学者で、元岡山藩池田家の家老まで務めた。若い時、中江藤樹の門下になるため、祖父の実家があった桐原村(中小森)で一時期を過ごした人物の名は。

- ① 広瀬淡窓 ②新井白石 ③荻生徂徠 ④頼山陽 ⑤熊沢蕃山 □

解答・・・・・・ 5

<解説>

市内安養寺町にある「上野神社」は旧桐原郷七か村の氏子の信仰を集めている。上野神社の創建は不詳ですが雄略天皇の御代に、桐原郷に住む狩人（桐原郷内上野山に住む蒲生物部の宿弥高比古という射術名人）が狩りに出た際、突如として雷鳴が轟き1人の老人からこの地の安寧と豊作の御神託がありました。狩人は神意と悟り社殿を建立したのが始まりと伝えられています。伝教大師最澄が訪れた際、神仏習合の神社として須佐之男命を勧請し境内には七堂伽藍を建立しました。以来、安養寺地区の産土神として信仰され、歴代領主からも崇敬庇護され社領の寄進や社殿の造営などが行われました。明治43年旧桐原郷七ヶ村の祭神を総氏神として合祀しました。社宝が多く、鎌倉時代に製作されたと思われる木造巢毘鳴尊坐像、大己貴命立像、菅原道真坐像が国指定重要文化財に指定されています。桐原にはもう一つ、「天目一命」を祭る由緒ある延喜式神明帳に列する神社があります。祭神は古事記にもみえる天津日子根命の御子が天目一命であります。この方の子孫の蒲生稲

置や菅田首が蒲生平野一帯を治めていました。和名抄にみえる桐原郷は菅田首が治めていたので、その祖先の天目一命を祖神として広くこの地域の人々が敬仰し、氏神として今日に至っているのです。尚祭神は鍛冶屋の祖とも伝えられていることは新しい技術を導入しこの地域の開発に後見された所以であります。弘仁六年（815年）の新撰姓氏録（しんせんせいしらく）に菅田首人（すがたのおびと）とあり、菅田姓を持つ一族は天麻比止津乃命（あめのまひとつのみこと・（同神）の末裔であると記されています。天目一箇命はその名の片目（目一箇）の神で示されるように、わが国の採鉄・鍛冶部族の祖神であり、筑紫忌部、伊勢忌部の祖と史料に見えます。また、天御影命は近江の三上祝の奉斎する祖神であり、ともに天津彦根命の御子と伝える事情などから、「天目一箇命と天御影命とは同神か」と記述しているの也有ります。「御影」とは鏡の意味であり、劍も鏡も鍛冶製品で、かつ天孫族の「三種の神器」にあげられます。

13、朝鮮半島と日本の関係 ～朝鮮人街道～

問題 13：江戸時代、隣国朝鮮からの使節団が通った道を「朝鮮人街道」といい、現在では野洲の広畑から彦根の鳥居元までが、その地名を残している。通算12回の李氏朝鮮からの使節団の正式名称を何というか。

- ①天正使節 ②遣新羅使 ③朝鮮通信使 ④百濟使節 ⑤琉球使節

解答・・・・・・ **3**

<解説>

近江源氏の「佐々木氏」は近江八幡市安土町を本貫地とした一族である。起源には二説あり、宇多源氏系の佐々木氏と古代豪族（朝鮮式山城の阿倍臣一族とされる。）狭狭貴山君（日本書紀の顕宗天皇の条に、「狭々城山君韓袋宿禰」（ささきやまぎみからふくろのすくね）が豪族狭狭城山公の祖とされてきた）の二説である。佐々木氏は、近江国を発祥の地とする宇多源氏の一流である。宇多天皇の玄孫である源成頼が近江国佐々木庄に下向し、その地に土着した孫の経方が佐々木を名乗った事から始まるとされる宇多源氏の中でも佐々木氏は特に近江源氏あるいは佐々木源氏と呼ばれて繁栄し、各地に支族を広げた。佐々木氏の祖となる佐々木秀義は保元元年（1156年）に崇徳上皇と後白河天皇が争った保元の乱において、天皇方の源義朝軍に属して戦い、平治元年（1159年）の平治の乱でも義朝軍に属して戦うが、義朝方の敗北により伯母の夫である藤原秀衡を頼って奥州へと落ち延びる。秀義の4人の子定綱、経高、盛綱、高綱は、乱後に伊豆国へ流罪となった義朝の嫡子源頼朝の家人として仕えた。治承4年（1180年）に頼朝が伊豆で平家打倒の兵を挙げると、佐々木4兄弟はそれに参じて活躍し（宇治川の先陣争いは有名である）鎌倉幕府創設の功臣として頼朝に重用され、本領であった近江を始め17ヶ国の守護へと補せられる。また、奥州合戦に従軍した一門の者は奥州に土着し広がっていったとされる。近江本領の佐々木

嫡流は、信綱の死後、近江は4人の息子に分けて継がれ、3男の佐々木泰綱が宗家となる佐々木六角氏の祖となり、4男の佐々木氏信が佐々木京極氏の祖となる。鎌倉政権において、嫡流の六角氏は近江守護を世襲して六波羅を中心に活動し六波羅評定衆などを務める一方、庶流の京極氏は鎌倉を拠点として評定衆や東使など幕府要職を務め、北条得宗被官に近い活動をしており、嫡流に勝る有力な家となる。京極氏の系統である佐々木道誉は、足利高氏の幕府離反に同調して北条氏打倒に加わり、足利政権における有力者となる。また、治承4年の頼朝挙兵時に平氏方につき、後に頼朝に従った佐々木義清（佐々木秀義の5男）は、初め「源氏仇方」であったため平氏追討以後も任国を拝領しなかったが、永年の功と承久の乱の時に幕府方についたため、初めて出雲、隠岐の両国守護職を賜い、彼国に下向し近江源氏から分派して出雲に土着したため、この一族を出雲源氏（隠岐氏、宍道氏、富田氏、末次氏などが末系統）という。この「出雲源氏」の末裔で有名な人で日露戦争に活躍した大將は乃木希典である。なお、京極家の分家で尼子氏（甲良荘尼子郷）がいるが、この京極尼子氏は「出雲源氏」には含めない。ただ京極尼子が出雲の守護代であったことから、戦国時代には出雲地方の戦国大名になった一族で、織田信長・豊臣秀吉とは大いなる因縁をもつ一族ではあるが……。また、山名氏も出雲を領したが、清和源氏ではあるが、「河内源氏」の系統である。

「狭狭城山君」については、安土町の「狭狭貴神社」の社伝にも、「沙沙貴」は少彦名神に起因するといわれており、上古にあっては、沙沙貴山君の一族の氏社として尊奉された。なお安土町図書館のある山（古墳）からは古墳時代前期の貴重な遺物、波紋神獸鏡や車輪石などが多く出て古代から開拓が進み、この地方に高い文化をもつ豪族が存在していたことを示している。古墳の被葬者は従来蒲生・神崎両郡最大の豪族狭狭城山公の祖とされてきた。しかし雪野山古墳（現八日市）や、中沢・斗西遺跡（とのにしいせき 現竜王町）における前方後円墳の発見から、これら当古墳の両翼に位置する古墳の被葬者こそが狭狭城山君（連合）の祖であり、当古墳はこの両者の谷間にあって、これら在地勢力とは異なる勢力を背景とする被葬者であったとも考えられるという説もある。当地はのちの東山道に近接し、地名が宮津であることや北西に江頭の地名が残ることなどから、湖上・陸上における交通の要衝であったことに間違いない。この山は繖山（きぬがさやま）より北西へ延びる支脈の屋根上、標高約114mの地点にあって、周辺平野部との比高は約25mである。県下最大の前方後円墳で国指定史跡である、この山（古墳名）を瓢箪山古墳という。近江守護佐々木六角氏の本拠地は、小脇館・金剛寺城（金田館）・観音寺城と変遷しましたが、3ヵ所はもっとも離れた小脇館と金剛寺城でも5kmあまりしか離れていません。今回取り上げる金剛寺城は、近江八幡市金剛寺町にあったと考えられています。六角氏の祖泰綱の子である頼綱は、晩年に別館を金田の館に住まいを移したことから「金田殿」と称され、その館は「金田館」と呼ばれました。その孫の氏頼が同じ金田に創建した金剛寺は金田館に近接していたか、これを元に建立した寺院と考えられます。応仁の乱の余波で勃発した六角氏と京極氏の争いに金剛寺も巻き込まれ、文明元年(1469)の合戦で焼失しまし

たが、同 18 年(1486)には再興されます。延徳 3 年(1491)には第二次六角征伐で將軍足利義材の陣所をおくため、近隣諸郡から人夫を徴発して金剛寺城へと造り替えられました。金剛寺町には現在の金田小学校の西北西約 150m に「古城」という小字と「寺ノ内」「大手」といった地名が残されており、ここが金剛寺城跡と考えられています。この周辺では室町時代の堀などが検出されていますが、全体像は明らかではありません。一方『近江蒲生郡志』では文明 18 年に再興された金剛寺の位置を、安土町慈恩寺の浄厳院から南西へ 100m あまり離れた「金剛寺」と呼ばれる畑地と推定しています。近江八幡市金剛寺町は「こんごうじ」と読むのに対して、こちらは「こんごうでら」と呼ばれます。この畑地の周囲には「北堀」「東堀」「南堀」と呼ばれる水田がめぐり、発掘調査でも 15 世紀末から 16 世紀代の堀・石積み・ピット群が見つかっており、全体像は判明しないものの城館跡に間違いありません。これが再興金剛寺だとすると、將軍が着陣したのはこちらということになります。金剛寺城跡には地名のみ、安土の金剛寺遺跡には一段高い畑地が残っているほかは寺・城の名残りは残されていません。しかし、観音寺城以前の六角氏守護所を明らかにするうえで鍵となる遺跡です。地名の元は「金剛禅寺」から来ていますが、金剛禅寺(臨濟宗)は夢窓国師の開山で観応三年(1352年)近江守護五世佐々木判官氏頼建立している。氏頼は貞和二年(1346年)8月26日41歳で亡くなった父時信の菩提を弔うため、建立したものと伝えられている。寺名については近江源氏の大祖・宇多天皇の御名が金剛覚であるので、金剛禅寺と付けられたが、後に村名となったものである。江戸時代は、大手村・九之里村という二つの村であったが、明治七年(1874年)に合併して金剛寺村となった。

日本古代史のなぞ ～韓流ドラマを観て感じたこと～

日韓の間に国境はあっても、日本人と韓国人の間に壁はない。例え壁があったとしても、簡単に乗り越えられる高さである。それもそのはず、日本語と韓国語は語順が同じで容姿は、明確に見分けられないほど似ている。けれど、21 世紀の扉が開くまで両国は「近くて遠い国」であった。理由はさまざまあるが、歴史問題が足かせになっていたことは確かである。私たちは不必要に歴史をがんじがらめにしてきたのではないだろうか。もっと歴史を自由にさせないと歴史は埋もれる一方で、未来をも閉ざすことになる。日本と朝鮮半島の間には 16 世紀末(壬辰倭乱)と 20 世紀前半(韓国併合)に不幸な時期があったが 2 千年という歴史を考えれば、おおむね友好的で平和な時代が長かった。それらも含めて古代には現代からは想像もできないほどの交流が行われていたのである。歴史は逃げていかない。「知れば知るほど面白い」のである。その一つが韓流ドラマ「朱蒙(チュモン)」は韓国のことやない日本のルーツのひとつである。といえは韓国時代劇のファンにはご理解ねがえるだろうか。2004 年、韓国の人々が驚愕する話が伝わった。それは中国が「高句麗の歴史は中国の一地方史(遼東地方)である。」という見解を発表したのである。つまり高句麗は中国に属した国家だということである。この見解を受けて韓国では猛反発が起こった。

なにしろ高句麗は韓国の人強い愛着をもった古代国家であり、自分たちの祖先の偉大さに誇りをもってきたのだから。中国が高句麗を自国の一部分とみなせば、朝鮮半島の正統な国家が否定されてしまうからである。その後に顕著になったことは韓国で高句麗を扱う歴史ドラマが急増したという事実である。「高句麗という国の歴史を中国に取られてはならない」という意識が製作につながっているとみている。

(当たり前の感情である。日本でも、白村江の戦いに負けた倭国は、「唐国」からの進駐軍を受入れ、GHQのマッカーサーに相当する人物で唐の「郭務悰」が占領軍司令官として赴任しており、その半年後に天智天皇が崩御し「壬申の乱」が起こり近江朝は殲滅し、その後「日本国」を名乗ったとある。そこから藤原鎌足は藤=唐である。との説もある。それを中国が主張してきたら、日本側としてはどうするだろう。国を挙げて反論するだろうか。)

韓流ドラマで「高句麗」がよく出てくる理由

韓国ドラマのペ・ヨンジュンが主演の「高句麗」を舞台にした「太王四神記」や高句麗建国の「朱蒙(チュモン)」あるいは、高句麗の後裔と称する「高麗国」の「王建(ワゴン)」をご存知だろうか。韓流ドラマは「チャングムの誓い」(李王朝時代劇)と「冬のソナタ」(現代恋愛ドラマ)以降、日本でも大ブームである。本題に入る前にその裏話を二つしておこう。1つは、日本でのTVドラマ等の制作費が高騰し、スポンサーも少ない中で、会社維持するために、費用対効果として制作費の要らない韓国製品を購入しているということ。もう1つは韓国の事情ですが、前述したとおり、最近、領土欲の激しい「中国」が、「高句麗」は「中国の一部での出来事」だと主張したためである。これは韓国が「竹島」を「独島」といい韓国領土だといい始めたことや、中国が「尖閣列島」を中国領だと主張することと同じ理屈である。だから、日本の気持ちも考えてほしいところである。韓国は国を挙げて「高句麗」を舞台にしたドラマを製作し高句麗—高麗・百濟・新羅の系譜は韓国の歴史だと主張をして、国民にも啓蒙しているのである。当たり前の感情である。日本でも、白村江の戦いに負けた倭国は、「唐国」からの進駐軍を受入れ、GHQのマッカーサーに相当する人物で唐の「郭務悰」が占領軍司令官として赴任しており、その半年後に天智天皇が崩御し「壬申の乱」が起こり近江朝は殲滅し、その後「日本国」を名乗ったとある。そこから藤原鎌足は藤=唐である。との説もある。それを中国が主張してきたら、日本側としてはどうするだろう。国を挙げて反論するだろうか。

八咫鳥(やたがらす)をご存知だろうか。それを知らないと話が進まないのであるが、簡単に解説しておく、和歌山の熊野神社に奉られている熊野の「シンボル」である。戦国時代は、雑賀衆(雑賀孫市が有名)の旗印でもあった。近年は、なでしこジャパンが世界カップで優勝したが、サッカーも男子だけでなく女子チームも今後は盛んになっていくだろう。ところで、男子Jリーグのサッカーの旗印は「八咫鳥(やたがらす)」という、日本サッカーのJリーグの「エンブレム」ともなっている。当時、韓国の関係者から八咫鳥

(やたがらす) = 三本足のカラスを「日本(サッカー協会)にとられた」と言っていました。その意味を、私は韓流ドラマの「朱蒙^{チュモン}」や「王建^{ワンゴン}」を観る中で、実感しました。なぜなら、朱蒙の「高句麗^{コクリョ}」や「高麗」から分かれた「百濟^{ペクチェ}」= くだらない人 = くだらでない人、奈良 = 韓国語で国という意味。): (朱蒙の夫人ソソノ「= 齊藤由貴 似の韓国女優ハン・ヘジンが好演」の第2子の温祚オンソが百濟を建国する)も共に「扶余」族なのであるが、彼ら扶余系国家のシンボルが「三本足のカラス」なのである。「高麗」の旗にも使われていた。その「三本足のカラス」が、日本史に登場するのは、神武東征である。神武天皇が和歌山に上陸した時、地元神の「長脛彦」等の抵抗に遭い難渋していたときに、助けに現われるのが道案内役としての八咫鳥(やたがらす)(= 賀茂の建角身命(たけつのみ) = 賀茂氏・葛城氏の始祖だといわれる。)であり、同じ天孫系だが別系統で天孫降臨した「ニギハヤヒノミコト」を祖先にもつ「物部氏」であった。この物部氏は河内、吉備、大和、尾張などに勢力を持っていたとされ、一部が「長脛彦」として抵抗し、一部は「物部氏」として神武天皇側に付いたということであるらしい。この「物部氏」の出自の謎についても複雑であり、本1冊では描き(説明し)きれないという。例えば「ニギハヤヒノミコト」の正式名は「天照国照彦天火明櫛玉ニギ速日命」という。つまり「天照」なのである。こちらは「アマテラス」ではなく「アマテル」と読むそうであるが、伊勢神宮の祭神とよく似ていると思いませんか。「天照」とつくのはこの2神しかいません。また猿田彦の神も神武東征に登場しますが、伊勢神宮に祭られています。なぜ祭られているのでしょうか。疑問です。

さて、ここでの話の主眼は「物部氏」ではなく八咫鳥(やたがらす)のことである。八咫鳥(やたがらす)はどこに祭られているかといえば「賀茂神社」(下賀茂神社)の祭神である。上賀茂神社には「建角身命」とその孫が祭られている。もちろん熊野神社のシンボルにもなっている。

それでは、何故、八咫鳥 = 「高句麗・百濟・高麗」なのか。

「高句麗・百濟・高麗」は八咫鳥(やたがらす)

右は「高句麗・高麗」のシンボル旗である。左は熊野本宮の鴉マークである。



「八咫鳥」といえば三本足の鳥(からす)であり、「高句麗」の旗である。韓国ドラマの「朱蒙」をご覧になられた方ならお分かりのことと思います。私もDVDレンタルで韓国TVドラマの「朱蒙」にはまってしまった一人である。第一話から最後の第81話の最終回まで観てしまった。

正式タイトル名は『朱蒙 チュモン- Prince of the Legend』（プリンス・オブ・ザ・レジェンド）。三国史記と百済本紀の分注の別伝に記された神話伝承を元に、高句麗初代の王とされる朱蒙＝東明王を主人公として製作された韓国の史劇ファンタジードラマで韓国では50%を超える驚異の視聴率を記録した壮大なスケールの韓国歴史エンターテインメントである。紀元前37年、その高句麗を建国したとする人が「朱蒙＝チュモン」であり、王名を「東明王」といいます。余談だが、その後の高句麗を舞台としたドラマとしては「風の国」（主役は朱蒙と同じソン・イルグク）や「大王四神紀」（主役はペ・ヨンジュン）がある。「朱蒙」のドラマの物語では……解慕漱（ヘモス）と柳花（ユファ）夫人の息子で、後に高句麗を建国した主人公の朱蒙（チュモン）役に、ソン・イルグクをキャスティング。また高句麗と百済の建国の中心にいた女傑、召西奴（ソソノ）役を、ハン・ヘジンが演じる。解慕漱（ヘモス）を裏切ることになる扶余の金蛙王（クムファワン）役にはチョン・グァンリョル、朱蒙（チュモン）と召西奴（ソソノ）の愛を阻む金蛙王（クムファワン）の長男、帶素（テソ）役にキム・スンス、解慕漱（ヘモス）の死後、金蛙王（クムファワン）に身を委ねて生涯、彼を支えた朱蒙（チュモン）の母、柳花（ユファ）夫人をオ・ヨンスが演じている。史実でも高句麗建国後の朱蒙と扶余国の帶素は対立を続けている。韓国ドラマでは「チュモン」の子は「ユリ王」でその子が「ムヒュル」（風の国）またその子が「ホドン」（幻の女王チャンミョンゴ）で、韓国ドラマで歴史を勉強できる。

私がこの韓国ドラマのうち「朱蒙」に興味を持ったのは、高句麗の歴史もさることながら歴史とあわせてドラマに出てくる「高句麗の旗」である。その旗は「八咫鳥」なのである。……（やたがらすは、日本神話に出てくる瑞鳥です。神武天皇が東征の時に熊野から大和に入る吉野の山中にて道に迷われ、その際に高皇産靈尊神が道案内としてつかわされる鳥が「やたがらす」です。一般的に三本足のカラスとして知られ古くよりその熊野の神々の使いとされる）なぜ高句麗に「やたがらす」なのだろうか。「やたがらす」は漫画「孔雀」で有名な熊野神宮の象徴でもある。また、八咫鳥（やたがらす）は現在では、Jリーグの旗としても知られているが、古くは雑賀鉄砲衆の雑賀孫一も、この八咫鳥を使っている。とにかく、この八咫鳥がなぜ、神武東征のときに道案内として登場するのか。といった疑問である。神武東征のとき、和歌山、熊野、大和で激しい抵抗をした族長の名は「長脛彦（ながすねひこ）」である。この「長脛彦」は出雲系で物部氏の系譜であったことは、よく知られていることである。（＝つがるそとさんぐんし）大和には大物主の神がおり別名「大国主」ともいう。「大国」とは多くの国を持っていたという意味である。おおものぬし＝ニギハヤヒを祖先とするのは物部氏である。……「八咫鳥」の旗はその後の後高句麗や高麗国でも使われている。韓国ドラマ「王建ワンゴン」に使われているからDVDを見てください。「ワンゴン」は高句麗の末裔を名乗り高麗国を建国するが、同時期に同じ高句麗の末裔を名乗る「渤海国」（＝テジョヨンが建国）も存在している。後に渤海国が金・蒙古に滅ぼされると、渤海から高麗に遺民が逃げ込んできており、高麗では彼らを厚遇したと伝えら

れる。渤海国は後に契丹の「遼」・女真の「金」に滅ぼされるが、渤海人は次の「元」の時代には「漢人」として優遇されたとある。

時代は下るが、朝鮮半島では「扶余」系の高句麗と百済が新羅に滅ぼされるのが 668 年ぐらいである。高句麗は中国の漢の時代に起こって、隋・唐時代には高句麗・百済・新羅とともに朝鮮半島では三国時代を形成した一つである。倭国との同盟国であった高句麗と百済を救うために「白村江の戦い」で新羅と唐の連合軍に敗れた日本軍は、その後、百済や高句麗からの難民を受け入れている。百済人は近江を中心とした近畿各地に、高句麗は武蔵を中心とした関東から東海にかけて配置されている。例えば、武蔵国高麗郡（現在の埼玉県日高市・飯能市）は高句麗の遺民たちが住んだところと言われており、高麗神社・高麗川などの名にその名残を留めている。また狛、巨麻の古代地名は日本各地に分布する。さらに言語も今の韓国よりも日本語に近いものであったらしい。

当然、韓国は昔の「新羅」である。朱蒙の高句麗、あるいはペ・ヨンジュの「大王四神紀」の「広開土王」（「好大王」と日本では呼ぶらしい）の高句麗を滅ぼしたのは、韓国人の祖先系である「新羅」ではなかったのか。むしろ高句麗の遺民たちは、日本にたくさん逃れてきており、日本人の祖先と化した人が多かったのではないかと考える。

百済・新羅系の渡来人氏族については既に幾つか紹介されている（秦氏・百済王氏・東漢氏など）。これらの渡来系大氏族に隠れているが、日本の文化に多大の影響を与えた高句麗国系の氏族があることを忘れてはならない。高麗（こま）氏・狛（こま）氏・大狛氏などがその代表である。これらの氏族は好太王碑で有名な、今でいう北朝鮮部から日本列島に渡来してきた氏族である。いつ頃日本列島に来たかについては未だその全容は分かっていない。しかし、その主な氏族は高句麗国が滅亡した 668 年以降に日本列島に来たとされている。

この高句麗のことを中国や日本では別名としてまた「高麗（こま）」と表記する場合があった。一方朝鮮半島には「高麗」と記して「こうらい」呼ぶ国名があった。これは高句麗国とは直接関係なく 918 年に「王建」という人物によって建国され、936 年には朝鮮半島全体がこの国により統一されたのである。この国は 1391 年まで、即ち季氏朝鮮が成立するまで続いたのである。この「こうらい」が朝鮮を表す「KOREA(コリア)」の原語であるとされている。

同じ朝鮮半島に「高麗」と表記した全く別の国が存在していたのである。古来日本でも多くの混乱記事があるとされている。「こうらい」と呼称する有名な言葉としては、高麗人参、高麗茶碗、高麗青磁、高麗縁（暈の縁）などがある。「とうもろこし」のことを関西では「こうらい」と呼ぶ、これも高麗からきた言葉か？「狛犬（こまいぬ）」という寺社にある一對の像については、やはり高麗と関係しておりそうだが、どうもこの文化は元々朝鮮半島にあった文化ではなく遠くインドあたりの風習が朝鮮半島を経由して日本列島に

渡ってきた文化らしい。朝鮮半島自体を「高麗」と呼ぶ場合もあるらしく、実にややこしいのである。日本での表記も「高麗・巨麻・巨摩・狛」など色々ある。ここでは高麗（こま）氏・狛（こま）氏及びその関連に限って話をしたい。

百済にしろ、高句麗にしろ、新羅・唐に滅ぼされるや、日本に亡命してきていることは明白である。ドラマ「テ・ジョヨン」にも百済流民がペクチョソン（村）として登場するし、渤海国を建国する高句麗の民と同じ人々は当然にも日本にも渡って来ていると考えるのが自然である。

古代出雲神族については、なぞだらけであるが、蘇我氏も物部氏も共に深く関わっている。蘇我氏と賀茂氏、葛城氏は同属であるならば、大和の葛城には蘇我氏も居たことになる。賀茂氏や葛城氏は物部氏ともつながっている。そうすると、蘇我氏と物部氏は同族とすることになってくる。訳が分からなくなってきた。私はこのように考える。（事前に私見・推論であることを断っておく。）すなわち蘇我氏・物部氏はともに、扶余系ではあるが、蘇我氏は百済からの遺民であり、物部氏は高句麗からの遺民であったと。便宜上分けてみた。蘇我氏を新羅系とする説もあるが、倭（日本）と戦争をした国からの遺民とは考えにくいからである。しかしである、「八咫鳥」の正体は誰なのか。「長脛彦・安日彦」が「物部」氏とするなら、彼らと敵対する「八咫鳥」は「蘇我氏」ということになるからである。なお「八咫鳥」の系譜は賀茂氏につながるものであることははっきりしている。また、出雲族のうち、物部氏の系譜につながる鹿島・香取は常陸の国であるが、熊野＝出雲（クマ・クモは同じ意味）から追い立てられた「長脛彦」＝物部氏が東北地方へ追い立てられた痕跡と考えれば納得がいくのである。

さて、朝鮮半島の歴史に詳わしくない方のために、若干解説をしておきたい。「朱蒙」が建国する「高句麗」は中国大陸にあった「漢」王朝の楽浪郡からと、父の居る「扶余」という国（扶余国は楽浪郡の支配下にあった）からの独立が手始めである。「漢」王朝はいわずとした秦の始皇帝の「秦」を倒して成立するのが楚の住人「劉邦」が建てた国家である。その経緯はドラマを觀てもらおうとして、「扶余」から分かれた朱蒙であるが、その朱蒙が活躍した国＝卒本（ソルボン）地方の「高句麗」から別れて「ソソノ」（朱蒙の第二夫人）の子ども（温酢オンソ）が南に建てた国が、「百済」である。だから、「高句麗」と「百済」は「扶余系」（ツングース）で同族である。だから言語も文化も同じである。ちなみに、今の韓国語は新羅に近く、高句麗や百済の言語は、日本語に似ているということである。新羅という国は、加羅などの地方豪族を集めて創った国であるが、やがて中国の隋や唐と組んで、高句麗や百済を滅ぼし「統一新羅」として朝鮮半島をまとめていく。この間には高句麗の「広開土王＝ペ・ヨンジュン」の大王四神紀のドラマが有名である。」の活躍や倭の遠征軍と百済軍対唐・新羅連合軍の「白村江の戦い」が起こっている。これを朝鮮三国時代という。（中国の三国時代＝映画レッドクリフが有名。とは異なるので注意。）韓国の公州市の近くに扶余郡があり、滋賀県の日野町と姉妹提携を結んでいる地域に行った事がある

が、白馬川（錦江）沿いの皇蘭寺（コランサ）には、そこから滅亡時の「百濟」王宮の女官が川に飛び込んだ（落花岩）という故事が残っている。

さて、高句麗と百濟を滅ぼした「統一新羅」はこの後 240 年間（676 年-918 年）続くのである（新羅は善徳女王など女性が王になった歴史を持つ国でもある）が、高句麗・百濟・新羅の三国鼎立時代を朝鮮では「三国時代」と呼んだが、「統一新羅シルラ・シンラ」の国力が弱ってくると、旧高句麗や旧百濟地方の豪族勢力が力を盛り返して「後高句麗コグリョ」「後百濟ペクチャ」をつくることになる。これを「後三国時代」ともいう。この混乱の中から、弓裔の「後高句麗」（皇宮のあった鉄原は南北朝鮮の 38 度線上にある。）のあとを継いだ「王健（ワンゴン）」が「高麗」を建国して朝鮮半島を統一するのである。「後高句麗その後、摩震マシと改名」した弓裔という王は、弥勒菩薩の生まれ変わりであるとして、弥勒信仰で国内を統一しようとしたことを、ドラマ「王建ワンゴン」では表現されていた。京都の広隆寺に伝わる秦氏寄進の仏像は「弥勒」であったことから、この時代は弥勒仏が信仰されていたことが伺える。またこの「高麗：コリョ」という呼び名こそが現在の「コリア」の元となったといわれているが、高麗は 918 年～1392 年続くのであるが、この間に、中国大陆では、唐のあとの宋・金を滅ぼして蒙古の「元」がモンゴル帝国として台頭してくる。そして、高麗を支配下に置き、日本に向けて「元寇」を 2 回繰り返すのである。元寇のため日本も鎌倉幕府が倒され足利時代となるのだが、同じように元の手先となった高麗国も国力を弱め、李成桂（女真族出身といわれる）の「李氏朝鮮」に倒されるのである。この「李氏朝鮮」が日本からの秀吉の「壬申倭乱」に耐え、「朝鮮通信使」の派遣から、日本の「韓国併合」まで続くのである。

そしてこの「李氏朝鮮」こそが、「チャングムの誓い（大長今）」の舞台である李王朝時代である。「イ・スンシン」や「世宗（セジョン）＝ハングルを創設した大王」が活躍した時代でもある。李氏朝鮮を建国した李成桂は、高麗の武将で、「女真」族だともいわれている。女真族は蒙古時代には「金」という国を作っていたがチンギスハーンに滅ぼされる。のち、明の末期に「女真族」から「アイシングョロ（愛新覚羅）・ヌルハチ」が出て「後金」を建て、さらに明国を滅ぼし「清」という国をつくるのである。だから、李氏朝鮮と清国は出自が同じ「女真」系であることを知っていてほしい。また古代朝鮮の扶余系の人も「女真族」に統合されているとしたら、話としては面白いと思う。当時は同じ旧高句麗系の「渤海」という国が高句麗遺民の「テジョヨン」（大作栄）によって建国され＝（渤海は高句麗に従属していたと「旧唐書」には高句麗の別種であると記されている。また、渤海は朝鮮の国なのか中国の地方政権なのか、いま領国で論争中でもある。私としては満州史とすべきか。今も満州国があったら当然そうなるであろう。）なお渤海はモンゴル系の「契丹」に滅ぼされるまで続いた。また、その契丹国（耶律阿保機）も「女真族」による「金国」が建国されると滅ぼされたということであるが、契丹古伝（秘史）という本には、ニニギノミコトが契丹からでて日本に渡ったと書いてあるらしいが、真偽は不明である。

さて、話は戻すが「八咫鳥」（やたがらす）とは、誰なのか？

『古事記』では、八咫鳥は高木大神（タカギノオオカミ）の命令で、神武天皇（イワレヒコ）一行を道案内するように命じられ、天より遣わされた。このような伝説が残っていることから、八咫鳥は道中安全の守り神として今日でも人々から篤く信仰されている。咫とは単位のこと、一字だけでは「あた」と読む。「やあた」が「やた」になり、大きな、という意味になる。太陽が東から昇り西に沈むのは、太陽の中で八咫鳥が飛び続け、太陽を運んでいるからともいわれている。

一説によれば「八咫鳥」というのは天建津命（アマノタテヅノミコト）又は建角身命（タケツノミのミコト）が率いた一族のことであり、イワレヒコが神武天皇となったとき、一部はその警護として奈良近辺に残り、一部は京都北部に拠点を構え賀茂一族となったといわれている。平成14年2月27日には奈良県明日香村のキトラ古墳の天井の天文図の太陽の中に三本足のカラスが描かれていたのが見つかった。それが八咫鳥かどうかはまだわかっていない。『新撰姓氏録』では、八咫鳥はカミムスビの曾孫である鴨建角身命（かもたけつのみのみこと）の化身であり、その後鴨県主（かものあがたぬし）の祖となったとする。奈良県宇陀市榛原区の八咫鳥神社は鴨建角身命を祭神としている。

『新撰姓氏録』では、八咫鳥はカミムスビの曾孫である鴨建角身命（かもたけつのみのみこと）の化身であり、その後鴨県主（かものあがたぬし）の祖となったとする。奈良県宇陀市榛原区の八咫鳥神社は鴨建角身命を祭神としている。

賀茂建角身命すなわち八咫鳥は、鴨一族であり、大国主の出雲族と言うことにつながってくる。鴨一族なら、京都の賀茂神社や鴨神社と関係が深いし、秦一族や葛城王朝との関わりもでてくる。さらには、「中臣の鎌足」（645年乙巳の変）という人物に突き当たってくる。「鎌足」は鴨足ではないだろうか。そうすると「藤原氏一族」の祖ともつながってくるのである。これは大変なことである。日本の歴史の根幹にまで「三本足のカラス」はかかわっているのだから。

一説には、「中臣鎌足」は百済からの亡命王「扶余の豊璋（ほうしょう）」であるとの説もある。扶余とは、高句麗の朱蒙が出身の地であり百済も同属である。ついでに記すと、白村江の戦いで倭国が負けて、この前の大戦のマッカサーのような人物が唐の進駐軍の司令官として「郭務 倞（かくむそう）＝郭 務宗」という人物が、倭国を占領する。そして、「倭国」から「日本」に国名が劇的に変わるのもこのときである。この白村江の敗戦で「倭国」は百済と共に滅亡し変わって「日本国」ができたという説が

ある。九州の「大宰府」はそのとき置かれた進駐軍の「総督府」である。大宰府から指令し日本の政治を支配したのである。一説によると、そのとき同時代にあった「金 春秋」という人物が「天智天皇」であるとする人もいる。「金 春秋」は新羅の人で、史実では新羅の「武列王」となるひとである。そして**郭務 倅（かくむそう）**は、「中臣鎌足」なのだそうだ。唐＝藤である。藤原の鎌足は唐の鎌足なのである。しかし、違う説では、天智天皇は百済からの亡命王で、白村江の戦い以後、新羅国から進駐してきた人は「大海人皇子＝のちの天武天皇」である。などと書いてある本もあって、歴史は複雑に絡み合っていて、面白いが、なにがどうなっているのか、複雑怪奇である。自分なりに頭の整理が必要である。韓国ドラマ「善徳女王」をご覧になった方はご存知だと思うが、三国時代の新羅国を支えた「27代善徳女王」次の「28代真徳女王」の次に「武列王＝金 春秋」が第29代目の新羅王となって、百済・高句麗を滅ぼして「統一新羅」を建国する人物となる。ある人の仮説によれば、この武列王＝金 春秋が天智天皇だということである。661年武列王即位、662年白村江の戦いがあり、668年天智天皇が即位しているのである。天智天皇が新羅人だとすれば近江に百済亡命人を多く住ませた説明に苦勞する。なにかしら関係性があるのかもしれない。しかし、あまり乱れた話は混乱するだけである。話を「三足鳥」＝やたがらす（＝日本では金鵒という金鵒勲章の金鵒である）にもどそう。「やたがらす」は葛城に住んでいた鴨＝賀茂氏のことだとする説がある。

『記・紀』神話の「神武東征」説話では、神武軍が「熊野」から「ヤマト」へ出ようと山道を進みあぐねていたとき「高倉下（たかくらじ）」と「八咫鳥」が現れたとあります。彼らは葛城地方の土豪であった可能性が高いと思われます。高倉下とは、『先代旧事本紀』によると、高倉下は物部氏の祖神、饒速日命の子となっています。さらに同じ熊野の地において、同じ様に天皇を高倉下と八咫鳥がお助けしていることから高倉下と八咫鳥の間にはなにか深いつながりがあったのではないかと考察します。もっと言うならば賀茂＝鴨氏と物部氏は古代においてなにか深いつながりがあったのではないかとことです。そしてもっとも衝撃的なのが熊野神社は昔スサノオを祭っていたという事実です。熊野神社は八咫鳥の根拠地であり、熊野神社がスサノオを祭っていた。物部氏の祖神はニギハヤヒであり、ニギハヤヒはスサノオの息子であるという伝承があります。このことから私は八咫鳥と物部氏さらに出雲族は同盟関係にあったという仮説を立てました。やはり、八咫鳥と物部氏はともに日本に渡来したのではないのでしょうか。

なお、葛城の鴨一族から「蘇我氏」が出ているとも言われる。蘇我氏は「武内宿禰」を祖とする新興勢力であったことは確かである。しかし、彼ら蘇我氏がどこから来たのかは正体は明らかではない。中臣氏の祖が天の岩戸隠れに活躍した天兒屋根命まで遡れるのに対して、彼ら蘇我氏の祖は「武内宿禰」でありそれ以上は遡れない。朝鮮半島からの渡来系の人（＝天日槍という説がある）というのが真相ではなかろうか。鴨氏は陰陽師の系統で土師・忌部氏とも関係が深い。さらに忌部氏は中臣氏（中臣の鎌足）につながるから、

面白い。(余談だが、織田剣神社は忌部氏であったが、近江八幡の津田郷から織田信長の始祖が婿入り＝養子に入ってより、織田氏は平氏であったと記録されている。)

蘇我氏は入鹿から数えて3代前の稲目から、突如として歴史の表舞台に台頭してきます。蘇我氏は、藤原氏と違い、政争にやぶれて、蘇我氏本家は滅びました。暗殺される蘇我入鹿、その親の蘇我馬子、さらに蘇我蝦夷、蘇我稲目と遡れるわけですが、稲目の父親の名前が高麗(こま)ということが分かっています。高麗とは「日本書紀」ではまさに高句麗を意味する言葉なのです。そうすると蘇我氏は「高句麗」系なののでしょうか。ここでまた「八咫鳥」との関係がでてきます。しかし、冷静な目で、蘇我氏の周辺をよく見ると、確かに高句麗色が強いので、全く出鱈目とは思えません。例えば、蘇我馬子が建立した法興寺(飛鳥寺)の建築様式は高句麗的です。それに仏教に傾倒していたと言われる蘇我氏ですが、高句麗の国教こそが仏教であるという事実も見逃せません。このように見てゆくと、蘇我氏と仏教の関係も、よく説明がつくと思います。また聖徳太子が蘇我氏であったということは、歴史の中では確かなことと認識されています。

さて、渡来人で、日本史に影響を与えた人物としては、近江に関係する人物で「天日槍(アマノヒボコ)」という人が居ます。その従者は、蒲生郡の「鏡邑、苗邑(アナムラ)」に住んだ」とされています。竜王町の苗村神社に残る33年に1度の祭りも「近江輿地誌略」という本に土器部、弓削、駕与丁などの「賤民の祭りなり」と記してあるが天日槍の従者が住んだ場所とある。その「天日槍」の足跡は、竜王町のみならず野洲市の兵主神社、草津市の穴村、北近江の「息長」氏にその地名を残しているところですが、天日槍は新羅系とも言われていますが確証はありません。また竜王町の鏡村からは、額田王や姉の鏡大王(かがみのおおきみ)姉妹が出た出身地であり、鏡大王は春日大社に祭られるように、藤原氏との関係が深い。(=藤原鎌足の妻・鏡大王(かがみのおおきみ)は、鏡氏の娘といわれるが、鏡氏は滋賀県 竜王町の鏡の里の渡来人系豪族である。鏡の里には、鏡神社のほか、古代に鉄や 陶器の製法を伝えた新羅王子・天日槍(あめのひぼこ)伝説もあり、渡来人の息吹が感じられる)天日槍は蘇我氏の祖とされる武内宿禰と同一人物ではないかとも考えられます。いづれにせよ蘇我氏と百済の関係、天武朝と新羅、天智朝と百済の関係などをもう少し調べて検討したほうが、すっきりするような気がします。なお天日槍はツヌガラヒトとも呼ばれているが、本当は金首露(キムスロ)の作った加耶国の人だといわれる。新羅の王子と日本書紀では記されているが「播磨国風土記」には加羅(韓)の国と記されており、私は加羅(加耶)だと思う。

『魏書』高句麗伝に、「扶余の王子が迫害を受けて故国を追われ、南下して高句麗を建国した」として記されており、百済の神話は、高句麗の建国神話を前提にして、高句麗の始祖東明聖王(朱蒙)の王子二人が高句麗の地を離れ、南のソウル地方にやってきて、弟の温示牟が百済を建国したとされます。実際に百済は、自らの出自を、高句麗とともに扶余族で

あることを対中国外交で主張しており、538年には、国号を南扶余としています。

なお、紀元2世紀ごろ、三韓時代があったが弁韓、馬韓、辰韓という。そのうち辰韓は「秦韓」ともいい、中国大陸の「秦」から流れてきた人たちだったとも言われる。つまり秦の始皇帝の圧迫から逃れた趙・楚・などの6国からの人々＝映画「墨攻」にその時の描写が詳しい。馬韓はのちに百済となり、辰韓は新羅となり、弁韓は任那（みなま）となったというが、韓国では任那とは伽耶国の中の倭館（領事館）ぐらいの認識である。朝鮮半島の南半分を三韓という。風俗や言語の違いによって分けられていたともいう。なお、高句麗はこの「三韓」には入っていない。

韓流ドラマで「鉄の王キムスロ＝金首露」というドラマでは、狗耶国で金首露が生まれて伽耶国（金官伽耶）を建てるまでの物語であるが、金首露の生まれた時代は、中国では後漢の時代である。物語は新の国を倒して後漢の光武帝がスロの父親（新に味方したため）を倒すところから始まる。鉄が中心の政治形態であり、まだ諸国は部族国家であったということと、私が興味が湧いたのは、新羅第4代目の王となるソク（昔）・タレ（ソクタレ；昔脱解）という人物である。この人物は、倭の国の「多婆那国」＝いまの丹波・丹後地方から流れ着いた捨て子であり、成長してスロのライバルとして登場しているので、興味のある方は「鉄の王キム・スロ」というDVDドラマを観て下さい。歴史ドラマを見るたびに、どうしても、その時代背景を詳しく知りたくなってしまふ私である。スロの妃となるのがインド・アユタラ国の許黄玉（ホ・ファンオク）であり、1番目の子には「金」を2番目の子には「許」の姓をつけようという台詞があるが、そこから「本貫」が同じで姓も同じ人とは結婚できないという風習が生まれたとある。また調べていくうちに2人の子どもの子が10人生まれるが、なんとその中に邪馬台国の女王卑弥呼もいるという説もあるんです。まあ神話ですから、首露王は158歳、妃は157歳で亡くなったというものもなんとも凄すぎる話ではあるが。

さて、滋賀県の蒲生郡には「石塔寺」があり百済人の渡来人が住んだ地域だといわれる。なお秦氏とは弥勒菩薩で有名な「広隆寺」の創建者であり、東漢人と並ぶ渡来氏族であるが、彼らは新羅系とされている。滋賀県の秦荘町や京都の「太秦」が有名である。四国の戦国大名の長曾我部氏も秦氏の子孫だとも言われている。また、埼玉県にある武蔵国「高麗神社」は唐・新羅連合軍に滅亡された「高句麗」の「遺民」が配置された地域である。

なぜ、執拗に渡来人の件を調べるかと言えば、高句麗と「八咫鳥」の関係性を調べているからである。後三国時代で「後高句麗」を建てた「弓裔；クンエイ」のあとを受けた、「王建（ワンゴン）」という人物が「高麗」国を立てるのだが、韓国大河ドラマで「太祖王建」というのがあったが、そのなかで「八咫鳥」の紋章が弓裔の陣営の場面でも登場しているのを記憶している、また王建の高麗国でも見受けられたのである。……レンタルで大河ドラマ「王建」は見られますので、ぜひご覧ください。

私の経験からいえば、韓国の歴史を知りたければ、韓流ドラマを観ることです。「朱蒙」

を]をはじめ、新羅時代の「善徳女王」や「ヨンゲソム」、後三国・高麗の「王建リゴン」さらには渤海を建国する「テジョヨン」そして李王朝の「世祖」など時代劇には事欠かないと思います。韓国ドラマ「テ・ジョヨン」を観ると、最初に唐の「李世民」と高句麗将軍「ヨンゲソムン」との戦いシーンがある。そのとき、高句麗軍は「三足鳥」の旗をおしたてて唐軍を撃退する物語から始まります。まさの「三足カラス」のオンパレードである。

繰り返しますが、中国の東北地方にあった古朝鮮史に出てくる「扶余国」と、そこから分かれた「高句麗」国さらに分派して朝鮮半島の南に拠点を得た「百済」国は同一の言語であった。「高句麗」の後裔とする「渤海国；高句麗将軍の子どもであったテジョヨンが建国した。」そしてその言語は、日本語に近いものであったという。新羅は辰韓・伽耶などの連合国であり、韓族といわれている。文化・言語的に言うならば区別されている。

タイトルに言う「朱蒙は扶余系ツングース族であり、現在の韓国人は韓族である。朱蒙の子孫は、百済を経由して倭＝日本に渡来している。それは大和朝廷の政権確立後の高句麗・百済の亡命渡来人（秦氏、東漢氏、狛氏）としてだけでなく、「八咫鳥」と関わってヤマト政権確立に貢献した蘇我氏や物部氏、更に葛城氏、鴨氏と藤原氏にまで連なる記紀神話の系譜と深く関係しているのである。現在の韓国は新羅人の子孫だとするなら扶余系ではない。だから、高句麗国のことを韓国人が熱く語ることはおかしいのである。彼らは高句麗を滅ぼした子孫である。あえて百済の子孫が韓国内に居るなら、その人は語る資格があるかもしれない。どちらにせよ当時の扶余や高句麗の地域は、いまの中国（遼東）にあった国である。

いずれにせよ、今、韓国と中国では「高句麗」をめぐる熱い戦いが始まっている。韓国は、「高句麗」を朝鮮の歴史と見ているのだが、中国では「扶余族」は漢族とも韓族とも違うところから、地方の少数民族の歴史「遼東史」として「金国＝金は蒙古（元）に征服されるが後に清国を建国するヌルハチが出る。」や匈奴と同じ扱いで見たいこうとするものである。いわゆる「高句麗」は中国の一部であったという理屈なのである。それでいうなら「大琉球（沖縄）」も「小琉球（台湾）」も中国となり、朝鮮半島自体も中国の一部と言う事になるではないか。これは、北朝鮮が崩壊したときに中国が介入するための伏線をいま張っているのではないかと考えられるのである。その延長線上に「尖閣列島」問題があるのであれば、日本人よ、気持ちをもっと引き締める必要がありそうである。

そこで、このタイトルにもどるわけである。いわゆる「扶余」および「高句麗」は中国の一部であった遼東半島の歴史という事実を韓国側は、朝鮮の歴史と位置づけてしまっていることからくる、「こじつけの史観」を批判しておきたい。これは「独島＝竹島」を韓国の領土だと主張する「こじつけ理屈」と同じであるから、容易に反論が可能であろう。そこからして、扶余系ツングース族は、中国大陸においては渤海、契丹さらには金国（女真族）＝清に吸収されていく運命であるが、漢族ではない。「高句麗」の一部が「百済」を経

て、倭＝日本にまで渡来してくる経過が、記紀神話でいうところの神武東征時の「八咫鳥」ということになってくるのであろうか。出雲と熊野の神々、神武に対抗した「長脛彦・安日彦」もまた「物部氏」の系統であり、東北の蝦夷の地に行つて「荒吐神（アラハバキ）」となつたと「津軽外三郡志」（偽書といわれるが）は示す。ここに「物部氏」は「内物部氏」と「外物部氏」に分かれることとなり、葛城系の蘇我氏＝百済系と出雲系の物部・中臣氏＝新羅系の政権争いは続き、最終的に百済系の人たちが新羅系の人を負かすという構図になっていくのである。しかし、最後には、白村江の敗戦により、唐＝藤の鎌足の子孫が政権を動かして、今に至るのである。記紀の創作は藤原不比等の影響を強く受けており、真実が書いてあるとは限らない。他の文献も含めて、比較検証しながら、推論していくしか方法がない。今回についても韓国ドラマ「高句麗」の朱蒙と「八咫鳥」の紋章を基軸に推論を重ねてみたが、推論の糸が絡み合つて複雑怪奇であり、私自身、蘇我氏は何者なのか。（＝おそらく天日槍の系統なのかと推理するが、明確な確証はない。）また「八咫鳥」の紋章に象徴される人々は何者なのか、分からずじまいである。一応「八咫鳥」を象徴する一族鴨氏の祖はタケツノミであるが、彼は出雲族なのである。出雲族はスサノオであり、大国主を祭る人々であり「物部氏」の系統といえる。（あくまでも記紀神話を信じればの、はなしであるが）物部は「モノ」＝鬼であり、「土蜘蛛＝出る雲」であり、「もののふ」となっていく。……このまえ関裕二氏の「物部氏の正体」「蘇我氏の正体」「藤原氏の正体」の3部作を読んだが、頭の糸はもつれるばかりである。つまりニギノミコトよりも前に天孫降臨したとされるニギハヤヒミコトを祖にもつ物部氏は神武の東征時に「八咫鳥」とともに東征に協力した者と敵対した者がいたということである。彼の「蘇我氏＝天日槍説」や「藤原氏＝百済王豊璋＝郭 務宗説」にも記紀神話では分からないことがあつて「目からうろこ」の部分があつたので、みなさんにもお読みいただくことをお勧めしておきます。

また、記紀では白村江の戦いより250年前の応神と神后が「三韓征伐」をしたとあるが、これをただの神話と考えていたら、「高句麗」の「広開土王」の碑が実際に出てきて、倭国の侵略で百済・新羅が占領されたので、高句麗王がこれを撃退したと書いてある。これは「大王四神記」のペ・ヨンジュン様が主人公のドラマにも出ているから実在の人物である。これを歴史的事実とするなら、倭国＝日本からは、四度、朝鮮半島を侵略していることになる。一度目は記紀神話の「三韓征伐」、二度目は「白村江の戦い」、三度目は豊臣秀吉の「壬辰倭乱」、そして明治・大正・昭和にかけての「韓国併合＝1910年」である。先の「韓国併合」の後遺症は戦後66年たった今でも（昨年は韓国併合100年であつた）続いている。それは38度線で南北朝鮮半島が分断されて今に至るからである。南北朝鮮は私たち日本人の責任でもある。一日も早い統一を望むものであるが、朝鮮半島の「高句麗」以降の歴史からみると、なかなか難しい問題である。一口に朝鮮の歴史というが五千年の歴史があるという。中国が四千年なのに、なぜ朝鮮が五千年なのかと詮索はやめよう。彼らの歴史では檀紀（檀君紀元）4344年の辛卯なのだから。日本でも平成23年は皇紀2671年である。（数え方は西暦に660年を加えるのである。）西暦とはイエスの誕生を起点にしての

2011年であり、イスラム暦では1432年である。檀紀とは檀君神話に基づく朝鮮独自の歴史のカウント方法であり、日本でも記紀神話に基づき定めた神武天皇即位を紀元とするものであるから、これを他の国の人が云々口出しをすることは止めておいたほうがよいと思うのである。たしかに倭国は任那に日本府を置いていたとか、通商のための倭館がプサン等に置かれていた。といった友好の歴史もあったのである。日本の歴史より朝鮮半島の歴史が古いのは当たり前のことだから、それに対しての考えは同意である。

いづれにせよ、韓国ドラマ「朱蒙」から連想される「八咫鳥＝三本足のカラス」は日本にも伝わり、熊野（＝クマとクモは同じ意味＝熊野と出雲は同系列ということになる）神宮の象徴となり、戦国時代には鉄砲で有名な「雑賀衆」の旗となり、現代では日本サッカー協会の旗印として伝わり残ったのである。また日本には「八咫鳥」の秘密結社もあるというが、漫画家荻野真が書いている「夜叉鴉」（熊野大社本宮を舞台にした漫画）の二番煎じか。私的には高野山を舞台にした「孔雀王」のほうが好きであるが……。なお、「新羅」を祖とする今の韓国人民にとっては「高句麗」は、日本人にとってのアイヌみたいな感覚なのであろう。とは言っても、同じ国内で起こった出来事であるから、「韓国ドラマ」として取り上げているのであろうから、「太祖王建」にしても、そうだろうし、ましてや、歴史的にみても韓国とは何の関係もない「竹島＝独島」を韓国領土だと主張するのだから、韓国も中国も大同小異かもしれない。

さて、「太祖王建」にも出てくるが、同じ俳優チェ・スジョンが演じた「大祚榮テ・ジョヨン」の「渤海」国についても触れておきたい。渤海国とは今の中国黒竜江省付近で旧満州国がそれにあたる。渤海国は扶余系ツングースで「高句麗」の遺民が建国した国である。実はこの渤海国は日本にも国書を送り、以降37回にわたって通信をしているのである。最初の日本への国書には次のようにある。

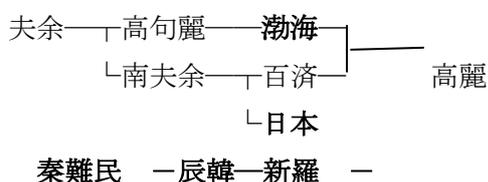
伏惟大王天朝受命、日本開基、奕葉重光、本枝百世。武藝忝當列國濫惣諸蕃、復高麗之舊居、有扶餘之遺俗

この文の中で、「国書」の主・大武芸王は、「復高麗之舊居」、つまり、渤海の前身・高句麗の領土を回復し、「有扶餘之遺俗」、夫余の伝統を継承したと言っているのです。ここに出てくる「夫余」こそ、日本・渤海の原郷一かつてあった「一つの国」の名なのです。中華帝国を主体に書かれている中国の「正統」な歴代史書では、夫余を北方の野蛮な国としてしか書いていません。しかし、この国はかつて、全満州からモンゴル、更に華北（北中国）や朝鮮半島まで、広大な領土を有する大国でした。殷周革命で殷王朝が、「中華思想」を「国是」とする周王朝に滅ぼされる迄、中国（殷）はむしろ夫余の「属国」と言った関係でした。しかし、秦の始皇帝による全中国の統一以後、これらの事実は悉く葬り去られ（これが世に言う所の「焚書抗儒」の一端です）、逆に中国が満州等の周辺諸国を「属

国」として来たと言う風に歴史を歪曲されてしまったのです。言い換えれば、「中華思想」とは、かつて「属国」の地位だった中国のコンプレックスの裏返しなのです。さて、その後、夫余は一体どうなったのでしょうか？ 「夫余」は、朝鮮史に登場する「檀君朝鮮」と同じ国なのですが、王朝交替の中で、「高句麗」と国名を変えます。そして、その高句麗の後身が、あの「渤海」なのです。つまり、「夫余（檀君朝鮮）→高句麗→渤海」という民族の継承と言う訳です。では、日本と夫余の関係はどうなのでしょう？ 実は、夫余にはもう一つの系統があるのです。そのもう一つの系統は朝鮮半島を南下した一派で、「南夫余」と呼ばれていました。この南夫余は朝鮮半島南部に定着し「百濟」を建国したのですが、中には更に南下し対馬海峡を渡って、日本に来た者もいました。そして、その時、日本に渡った南夫余の王・依羅が、崇神天皇になったとも言われているのです。

「依慮王、鮮卑（せんび）の為に敗れ、逃（のが）れて海に入りて還（かえ）らず。子弟走りて北沃沮（きたよくそ）を保つ。明年、子・依羅立つ。自後、慕容廆（鮮卑慕容部の首領で、燕国の王）、又復（ふたた）び国人を掃掠す。依羅、衆数千を率い、海を越え、遂に倭人を定めて王と為る・・・」

上に記した文は、朝鮮の史料『太白逸史』中の「大震国本紀」に依るものですが、南夫余の王・依慮はモンゴル系鮮卑族との戦に敗れ戦死？した（「還らず」が示唆している）、翌年、王子の依羅（依羅）が新たな王となり、北沃沮（地名）を領有したと言っているのです。更に、宿敵・慕容氏に再び攻められ、新王・依羅は国民を引き連れて対馬海峡を渡り、日本に入って「倭人の王」となったと言っているのです。そして、依羅（依羅＝イリ）が、御間城入彦（ミマキイリヒコ）、つまり崇神天皇だったとすれば、日本の皇室も又、夫余の流れを汲んでいたと言う事になるのです。



つまり、大武芸王は、安全保障上の理由だけでなく、「かつては一つの国であった」日本と、「兄弟」の誼（よしみ）を通じて、「お互い仲良くしましょう」と言った意味で、使節を派遣してきたのです。

天平時代の神亀4（西暦727）年12月20日、寧楽（なら）の都（平城京）に、遙か彼方・満州から使節一行が入京しました。当時、満州にあった渤海国からやって来た使節は宮中に参内し、渤海国王・大武芸（武王）の国書を、時の帝・聖武天皇に奉呈しました（下記）。

<原文>

武藝啓。山河異域、國土不同。延聽風猷、但増傾仰。伏惟大王天朝受命、日本開基、奕葉重光、本枝百世。武藝忝當列國濫惣諸蕃、復高麗之舊居、有扶餘之遺俗。但以天涯路阻、海漢悠悠、音耗未通、吉凶絶問、親仁結援。庶叶前經、通使聘隣、始乎今日。謹遣寧遠將軍郎將高仁義・游將軍果毅都尉將德周・別將舍那婁等廿四人、賚狀、并附貂皮三百張、奉送。土宜雖賤用表獻芹之誠、皮幣非珍、還慚掩口之誚、主理有限、披膳未期。時嗣音徽、永敦隣好。

<読み下し文>

武藝（渤海国王・大武芸本人）啓す。山河域を異（こと）にして、国土同じからず。延（ほの）かに風猷（ふうしゅう）を聴きて、但（ただ）、傾仰（けいぎょう）を増す。伏して惟（おも）うに、大王の天朝、命を受け、日本の基（もと）を開き、奕葉（えきよう）光重く本枝百世なり。武藝忝（かたじけ）なくも列国に当たり、濫（すべ）ての諸国を惣（す）べ、高麗（高句麗のこと）の旧居を復し、夫余の遺俗を有（たも）てり。但、天涯路（みち）阻（へだ）たり、海漢（ひろ）く悠々たるを以て、音耗（おんもう）未（いま）だ通ぜず、吉凶問うことも絶ゆ。親仁を結び援（あわ）せん。庶（ねが）わくば前經（ぜんけい）に叶（したが）い、使を通じて隣に聘（へい）すること今日に始めん。謹みて、寧遠將軍郎將高仁義・游將軍果毅都尉將德周・別將舍那婁ら二十四人を遣（つか）わし、状（のり）を賚（たま）い、并（あわせ）て、貂皮（てんがわ）三百張（はり）を付け、送り奉（たてまつ）らん・・・（以下略）

時の朝廷は、はるばる満州から、高級な貂皮等の「おみやげ」を持ってやって来た渤海国の使節に、右往左往すると同時に、「大国」日本に、「属国」の礼をとってきたものと勝手に解釈し、狂喜乱舞しました。そして、この時から延長7（西暦930）年1月31日の来朝迄、約二百年間に渡って、実に37回も渤海国使節が日本に来訪したのです。

改めて言いますが「日猶同祖論」というものもあります。京都の祇園祭の山車の絵などから、失われた「十支族」が中国大陆を横断して、日本に渡ってきたという説が、第二次大戦時に再燃していましたが、それと、秦氏、東漢氏との関連あるいは渤海国、百濟、高句麗などとの関連も今後は検討してみたいと思いますが、この稿については、ここらへんで終わりたいと思います。そうしないと、次から次とつづいていくことになりそう・・・

それから現代に続く過去の歴史のこだわりとして未だに大きくあるのは地域間での差別があるそうです。全羅道と慶尚道とかの対立が、表層的に現れています。全羅（チョルラ）道とは昔、百濟があった地域であり、慶尚（キョウサン）道は新羅があった地域である。ついでに余談であるが地域名について解説すると全羅道とは地方都市の全州（百濟の皇宮があったところ言わば首都である。）と羅州を合わせた言葉で、慶尚道とは慶州（新羅の首都であったところ）と尚州を合わせた言葉である。日本で言えば東京と横浜を合わせて「京浜」といい、京都、大阪、神戸を合わせて「京阪神」というようなものである。それに「道」をつけたのだ。

余談ですが、2011年7月9、10、11日と大房町3番組で家族も含めてのソウル旅行を計画し、全部で9名が参加しました。また2012年には、市役所の同期（「50同期会」という）で韓国旅行に行きました。メンバーのうち2名が退職するため、そのお祝いを兼ねて行こうという事になりました。場所については、私が幹事を引き受けることになり、日程は5月26、27、28日で行くことになり、場所は2012年に*麗水市で万博が開催されることになり、そこに行くことにしました。結果はよかったです。

14、第六天魔とは仏様なのですか

問題14；第六天魔王といわれた、その人は戦国時代の英雄とされ、その人の先祖は、平（津田）親実（ちかざね）といい近江八幡の津田郷から出て福井の織田剣神社の神主となり、その子孫が、守護大名斯波氏の被官となり尾張に来てると子の織田有楽斎（江戸時代には有楽町に屋敷があった）の家系図にある。またその人の母は「土田御前」というが市内の土田町という地名とも関係があるらしい。命日が1582年六月二日のその人物の名前は。命日に近い日曜日に安土地域では町民あげての盛大なお祭りがある。

- ① 津田信行 ② 織田信秀 ③ 津田信澄 ④ 織田信雄 ⑤ 織田信長 □

解答・・・・・・**5**

<解説>

八幡山を歩いて登ると「不動尊」があります。6月第1日曜には「八幡山地蔵尊まつり」があります。結構多くの人がお参りしています。また、伊崎の不動尊も竿とびで有名です。このように市内では「不動尊」や「地蔵」信仰は熱心ですが、不動尊（不動明王）や地蔵が仏教であることを知らない人もいます。また全国から長命寺や観音正寺に来られる方の観音霊場巡りでは「観音菩薩」も仏教であることを知らずに三十三か所のご朱印をもらうことに生きがいを感じている人もおられます。ここでご留意下さい。「仏の世界」では「如来・菩薩・明王・天部」と分かれるなかで、「如来」の種類には「阿弥陀如来、大日如来、薬師如来、釈迦如来、毘盧遮那如来」があり、「菩薩」には「弥勒菩薩、馬頭観音、観世音菩薩、文殊菩薩、勢至菩薩、日光・月光菩薩、地蔵菩薩、千手観音、聖観音、八幡菩薩」などが居て、「明王」の部には、「孔雀明王、不動明王、金剛夜叉明王、愛染明王、五大明王、降三世明王」などがあり、「天」部には「帝釈天をはじめとする十二天（四天王や韋駄天など）」、宮（金）毘羅をはじめとする十二神将、弁財天・吉祥天などの八部衆、八大竜王や阿修羅、八大童子、十六羅漢などがいる。これらを総称して「仏の世界」である。このことを知らずに仏教行為や観光をしている場合があります。特に近江商人の商いは仏教

=阿弥陀信仰の影響を強く受けている（商売を仏教から学んだ）といわれています。

仏教世界観の解説

皆さんの知っている仏教の十界は・十法界（じっぽうかい）ともいい、仏・菩薩・縁覚・声聞の四聖と天・人間・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄の六道に分かれます・そのうち地獄界、餓鬼界、畜生界の三つを総称した三界とは違います（これは三悪道とも称する。これに修羅界を入れた四界を四悪道とか、四悪趣（しあくしゅ）と総称する。また人界、天界を加えた六界を六道（りくどう）といい、残る四界（＝声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界を四聖（ししょう）という）この六道と四聖で十界ですが、法華経にいう「三界に家なし」の三界（欲界、色界、無色界・・・過去・現在・未来の三界ではない）観とは、合体して整合を図れるものなののでしょうか。私の疑問とするところは、欲界を六道までと理解すれば、仏・菩薩・縁覚・声聞の四聖は、色界と無色界のどこに属するものなのでしょう。逆に四聖は無色界を越えた存在であると考えられないことはありませんが、私自身その考えには無理があると思ひ、迷っています。なぜなら、二禪天の無量光天というのは「私たち真宗門徒は阿弥陀如来を無量光如来と呼んでいる」ものですから、阿弥陀如来もしくはその眷属の住んでいる処ではないかと思うからです。ただ、下図を見る限りでは、三界は六道輪廻の世界の範疇にあると考えられます。そうすると、空居の二禪天である無量光天（この無量光天が何者かも教えていただきたいのですが・・・）や四禪天や無色界に入った者さえも輪廻するのでしょうか。是非その点についても教えてください。法華経に詳しい人なら十界や三界のことも分かると思います。（あいにく私は浄土真宗なので法華経のことはよく分かりませんので・・・。）

六道とは、地獄界・餓鬼界・動物界・人間界・阿修羅界・天界の六つの世界をいい、地獄界・餓鬼界・畜生（動物）界・人間界・阿修羅界の五悪趣は、欲界のみに属するとし、一方、六道のうち天界は欲界・色界・無色界の区分に跨って存在しており、そこに大梵天や夜魔天などの各天がいる。さらに天界＝六道を越えたところに声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界の四聖があると考えてよいのでしょうか。それとも全く別物（抛る経典が違う）なののでしょうか。インドから中国を経由することで説く仏教が変質していったとも考えられなくはないです。そこらへんも含めて回答くだされば幸いです。

欲界にある地居天までは分かるとして、色界にある空居天の二禪天、三禪天、四禪天は、十界で云えばどこになるのか。あるいは無色界までを六道（輪廻）の「天」に含まれるものなのか。明確に説明できる人にヘルプします。下図で見る限りでは三界は六道に含まれているのですが、・・・ちなみに、須弥山（須弥界）の有頂天には初禪天の梵天（ブラフマ）が位置し、夜魔天は閻魔王とも言われている。地居天の三十三天や四天王は仏像によくでてくる天の神々である。観史多天（としたりん）は兜卒天（とそつてん）とも云われ

弥勒菩薩が住むところである。また、六欲天のうち上位に位置する他化自在天は「第六天魔王」とも言われる「魔」である。「魔」が四天王や三十三天の上位に位置するのも仏教ならではの考え方なのであろう。

三界六道一覽表								
三界	六道	(住処)	(小目)	(細目)	(読み)			
むしきかい 無色界	天	(非処)		非想非非想処	ひそうひひそうしょ			
				無所有処	むしょうしょ			
				識無辺処	しきむへんしょ			
				空無辺処	くうむへんしょ			
しきかい 色界		四禅天		しぜんてん	色究竟天	しきくきょうてん		
					善見天	ぜんけんてん		
					善現天	ぜんげんてん		
					無熱天	むねつてん		
					無煩天	むぼんてん		
					広果天	こうがてん		
					福生天	ふくしょうてん		
					無雲天	むうんてん		
		空居	さんぜんてん 三禅天			遍浄天	へんじょうてん	
						無量浄天	むりょうじょうてん	
						少浄天	しょうじょうてん	
			にぜんてん 二禅天				極光浄天	ごくこうじょうてん
							無量光天	むりょうこうてん
							少光天	しょうこうてん
		しょぜんてん 初禅天				大梵天	だいぼんてん	
						梵輔天	ぼんぼてん	
梵衆天	ぼんしゅてん							
よくかい 欲界	六欲天		ろくよくてん	他化自在天	たけじざいてん			
				樂變化天	らくへんげてん			

三界六道一覧表					
三界	六道	(住处)	(小目)	(細目)	(読み)
				観史多天 (兜卒天)	としたてん
				夜摩天	やまてん
				三十三天	さんじゅうさんてん
				四天王天	してんのうてん
	人 修羅 畜生 餓鬼	(各処)	しだいしゅう 四大洲	俱盧洲	くるしゅう
				牛貨洲	ごかしゅう
				勝身洲	しょうしんしゅう
				瞻部洲	せんぶしゅう
	地獄	(地下)	八大地獄	等活地獄	とうかつじごく
				黒縄地獄	こくじょうじごく
				衆合地獄	しゅうごうじごく
				叫喚地獄	きょうかんじごく
				大叫喚地獄	だいきょうかんじごく
				焦熱地獄	しょうねつじごく
				大焦熱地獄	だいしょうねつじごく
				無間地獄	むけんじごく

仏教では垂直方向で、考えます。私たちの住む閻浮提（えんぶだい）という大陸の地下に種々の階層の地獄があります。

閻浮提は須弥山の周りにある四つの島のひとつで、須弥山の南側にあります。南瞻部洲なんせんぶしゅうとも呼ばれます。

我々が住んでいる宇宙は無数の三千大千世界からなる。一須弥界が千個集まったものが小千世界。この小千世界が千個集まったものが中千世界。さらにこの中千世界が千個集まったものが三千大千世界（大千世界）である。

一須弥界は、風輪・水輪・金輪，九山八海，四州，太陽を司る神と月を司る神，星々を司る神，梵天（初禅天），欲界からなる。一須弥界は梵天とともに，生成・維持・破壊・虚

空を繰り返す。生成にかかる時間は二十カルパ（中劫）（時間の単位）（一立方由旬の大岩石の上へ、百年に一度天女が降りてきて、衣の袖でその表面をなで、そしてついにその岩が擦り切れるまでの時間。あるいは一立方由旬のの器に、芥子粒を満たし、百年ごとにそれを一粒ずつ取り出して、器が空になるまでの時間。一中劫は百京年を超える）、その後二十カルパの間維持され、次の二十カルパの時間をかけて破壊され、その後二十カルパの虚空が続くと、また生成が始まる。このような一須弥界の生成・消滅の反復の周期をマハーカルパ（大劫）と言う。・・・私たちが日常使う言葉として「億劫（おっくう）」「未来永劫」があるが、ここから来ている言葉である（単なる雑学として覚えといて）

この世界観を私なりに解釈すれば、一須弥界は「地球」、小千世界は「太陽系」、中千世界が「銀河系」、三千大千世界が「大宇宙」ということであろうか。三千大千世界＝大宇宙（＝六道）を超えた存在なのが、仏界などの四聖になると考えてもよいのであろうか。そこらへんのところが、どうもよく分からないところである。・・・

しかし、まあ天界や地獄あるいは輪廻云々と、宗教観自体が昨今では伝統的な他界観を知る機会も無いので仕方のない事ではなかろうかとも思います。俗に言う、「あの世」「この世」に関する見方を他界観（たかいかん）と申しまして死んだらどうなるかと言った事から文化・風習・善悪の判断基準や各民族のアイデンティティーなどを含んだ民族・集団としての根っここの部分まで関わる広範囲な概念で色々と引き合いに出すとそれこそ資料がいくらあっても足りない位の話になるので、仏教的な他界観に限定してちょっと書いてみようと思ったんですが・・・

いや、昨今…他界観がゴチャゴチャなのを良いことに、かなり無茶な事を言って人を脅すような輩が増えてきたので伝統的な他界観を知っておくのも良いんじゃないかと…

というわけで、仏教の他界観に限定して話をしていきますが・・・

まず基本中の基本になるのが、「輪廻思想」と云うヤツでして、これは仏教に限った話ではなく紀元前八世紀あたりにインドを支配していたアーリア人が確立したモノとされています。

輪廻思想の成立以前では

人は死ぬとヤマが統治する（閻魔→人類初の死者で楽園の王）

楽園でのほほんと暮らせると言ったモノでしたが、次第に「良いやつも、悪いやつも一緒ってのは違くないか？」といった具合になっていきまして、生前、他人様に迷惑をかけた人間は地獄行き生前の行いが良かったものは楽園行きとなりました

生まれ変わり死に変わりという輪廻思想自体はドラヴィタ人などアーリア人以前の先住農耕民族が既に持っていた死生観ですがアーリア人はこれに手を加え善悪の果報によって来

世の行き先が決定するという「因果応報」「自業自得」の考え方を確立しました。
以降、輪廻に関する哲学的考察は論理化され、歴史と共に洗練された一大思想としてインドを席卷し仏教の広がりと共に全アジアに影響を与えました

死んでも、その次があるというのは非常にお得な感じがしますが
よくよく考えて行きますと輪廻とは再生の考えであると同時に再死を繰り返すという考えでもあります

昨今では輪廻を再生と考えあたかも良いもののように捉える人も多いですが、古代インド人は「今の一生だけでも苦しいし、一度死ぬだけでも嫌なのに何度も死を繰り返すなんて酔狂な事をやってられるか！」と考えまして、輪廻を苦しみと考え輪廻の輪から抜け出る事を究極の目標とするようになっていきました

そういった思想背景があって、お釈迦さんをはじめ、多数の思想家が輩出され仏教と言う教えが成立した経緯がありますから仏教の他界観にはこの輪廻思想がどっしりと腰を据えておるわけで輪廻思想がなければ仏教は成立しなかったとも言えます

さて、仏教の世界観というか他界観を大雑把に分けますと

欲界（よっかい）色界（しきかい）無色界（むしきかい）の三界（さんがい）に集約されており生死輪廻に流転する迷いの世界を三段階に分けますが、基本的に何処に行っても苦しみの世界で悟りを開いて解脱しない限りこの三界の中をさまようと言われております

新興宗教でも霊能者でも〇〇界と分けていきますがそのネタ元中のネタ元でして非常に細分化されているので単純に、悪い場所・中間・良い場所といった三つに分けただけの劣化コピーを良く見かけます

この三界を見ていきますと、**欲界**→食欲・淫欲の二欲を有するモノの世界で下から

地獄

自分の行った悪業によって赴く苦しみの世界。八大・八寒・無間・孤独地獄などがあり各地獄の下に十六小地獄を置くともいわれ、どれだけあれば気が済むのか良く分かりませんが筆舌に尽くしがたい苦しみを受けるとされる

餓鬼

物欲・執着によって福德を失ったモノが陥る世界。常に餓えや渇きに苦しみ悩まされる餓鬼にも無財・小財・多財餓鬼と種類があって、飲み食いの出来る餓鬼も居るとされますが基本的に執着が強く満足を得ることが出来ない苦しみは共通

チベットでは幽霊だの守護霊だのという部類もここに入れるので非常に収まりが良い

畜生

禽獣・鳥魚に生を受け弱肉強食に怯え、性愚鈍にして世人に畜養・殺生されるを事とし生前、他を省みず本能のままに振る舞い、悪業の多いモノが畜生道に落ちると言われるこの地獄・餓鬼・畜生を指して、行きたくない場所のトップスリーと考え三悪趣（さんあくしゅ）とも呼ばれる

修羅

常に闘争を事とし殺し合いを続ける怒りの世界ともされますが、六道輪廻の一つとして見る場合は人間の心の世界で善意と悪意が対立・抗争し苦悩する様を差す場合もあり、修羅道の独立を認めず人道と併設であると数える説もあるが、基本的に殺伐とした人間が赴くとされる

人

生老病死の四苦に求不得苦・愛別離苦・怨憎会苦・五陰盛苦の四苦を加えた、四苦八苦に苛まれる世界ではあるが、苦を悟り、己を見つめ、反省・懺悔をし智慧を学び、福德を積むことができ、輪廻から解脱できる場所と言われる

とはいえ、娑婆＝堪え忍ぶ土地の名前通り、内に煩惱・外に寒暑風雨があり苦悩を堪え忍ぶ場所なので正気で過ごすのが難しい場所でもある

天

インド一般に信じられていた神々の住処。初期仏教の目的は悟りを開いた境地＝涅槃であったが在家の信者の為には生天（しょうてん）の教えが説かれた

仏教教団側は空間的なものでなく精神的な境地としての天を説いたが、一般には死後の樂園といった具合に受け取られた。道徳的に優れ善行を積んだモノの行き先とされるが、猶、迷いの世界であり天人五衰の例えの通り、生前に積んだ福德を使い果たすと地獄に逆戻りとされる

欲界の天は六欲天と呼ばれ、四天王天・三十三天・夜摩天・都史多天・樂變化天・他化自在天などを数えるも、欲界の各世界は通常・六道（ろくどう）と称される

色界→先の二欲を離れたモノの住むところで

物質（色）をやや離れた微細な世界とされる

下から

初禪天（しょぜんてん）

梵衆天・梵輔天・大梵天

二禪天（にぜんてん）

小光天・無量光天・極光浄天

三禪天（さんぜんてん）

小浄天・無量浄天・遍浄天

四禪天（しぜんてん）

無雲天・福生天・広果天・無煩天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天

以上の四禪・17処を色界とし欲界よりは、レベルが上であるとしながらもなお、苦がつきまとう

無色界→物質的な思い（色相）を厭い離れた状態で、四無色定と呼ばれる哲理に至ったモノが生を受ける場所であり三界の頂点。生前の果報の優劣によって四階級に分け**空無辺処・識無辺処・無所有処・非想非非想処**を数える

なお、非想非非想処は三界の頂点である事から別名を**有頂天**と称される

この境地は当時の仏教以外の思想家達が辿り着く最高の境地とされていたが、仏教では、まだ悟りを得ず、輪廻に苦しむとした。また、この三界そのもの、いわゆる世界全体も三千大世界と言って1つではなく10億以上存在しており、それぞれが、生・住・壊・空の四つのサイクルで常に出来たり消えたりを繰り返すと説かれています

一番最初の始まりが判らない位の昔から宇宙を含めて全部が無限とも言える輪廻を繰り返していると考えますから仏教には天地創造と言った概念は存在しません

ちょっと長くなりましたが、全ての**有情**（うじょう・命あるもの）は悟りを開いて涅槃の境地に至らない限りこの三界・六道の中で永劫とも思える輪廻を繰り返すと考えるのが、仏教の基本的スタンスといっても差し支えありません。

初期の仏教では悟りを開くまでは、輪廻の中で苦しむとされましたが、時代が下がって大乘仏教が成立しますと、**阿弥陀如来の西方極楽世界**などの、仏国土（ぶつこくど）が想定されるようになり、後に中国に入って浄土と言う考え方になりました。

これは、悟りと輪廻の間にある避難所といった感じで、「そこで修行を積んで、悟りを開いて下さいよ」と言う初期の生天がベースになっているように思えますが浄土系は専門でないので詳しいことは分かりません。

仏国土は悟りを開いた仏の世界で三界の外にあると考える説もあるので仏国土・浄土を三界の中を含むかどうかは意見の分かれる所であると聞き及んでおります。

また、時代が下がりますと、もっとシンプルに迷いと悟りの世界を分けた**十界**（じっかい）が提唱され迷いの世界である六道に、悟りの世界である・声聞・縁覚・菩薩・如来の四つを加え**六凡四聖**（ろくぼんししょう）を説くモノも出てきました。しかし、色々とバリエーションが増えれど仏教の他界観の基本は輪廻思想と三界・六道を基本として考えますので解脱か輪廻か、どちらかの状態しか存在しません

次に、仏教的に死んだらどうなるかを紹介していきます。ポイントは**中有**（ちゅうう） 梵・アンタラーバヴァー・antara-bhava または

中陰（ちゅういん）と呼ばれ、俗に四十九日と言われている状態についての話です

仏教では有情（うじょう・命あるモノ）の生死を、

死有（しう） 前世における死の瞬間

中有（ちゅうう） 死の瞬間から次に生を受けるまでの中間

生有（しょうう・せいう） 次の世に生を受けた刹那の瞬間

本有（ほんう・ほんぬ） 生を受けてから死に至るまでの間

以上の四つのサイクルに分けておまして、死の瞬間である死有の状態を過ぎますと

中有（ちゅうう）と呼ばれる、生きてるでも無く・死んでるでも無い、意識だけの状態を迎えることになると説かれています

身体の動きが止まっても潜在的な余力によって、心の働きが暫く続く状態を指し、車の急ブレーキのようなモノでタイヤの動きは止まっても、なお車体が動く様に例えられます
いわゆる命の残り火のような状態で心の相続によって辛うじて意識が残留しておりモノを見たり・聞いたりする事が出来ると言われ自分の葬式を見たり、行きたい所に行けたりとかなりナイスなシチュエーションだと思われるんですが、経論では、次の行き先を必死で探す状態であり、考えようによっては一番苦しい期間であるとも言われます

この中有の状態についての記述は「阿毘達摩俱舍論」や「大乘阿毘達摩大毘婆沙論」などに詳しく書いてあるんですが、1サイクル＝7日で、最大7サイクル＝49日残留する事が出来ると言われております。この残留期間が長いか短いかは人によるわけですが、それを決定するのは何かというと、自らの心に薫習（くんじゅう・蓄積）された**業（ごう・カルマ）の力＝心に染みついた習慣や癖**これが、中有の滞在期間&次の行き先を決定するとされます。語弊はありますが簡単に言いますと、極悪人→身に付いた悪業の習慣によって問答無用で地獄行き、悟った人→同じく、習慣と善業の力によって速やかに解脱確定。

こんな具合でして、良くも悪くも極端な人は、死の瞬間に次の行き先を選択すると言われてます。では、可もあり・不可もある我々一般人はと言いますと、アッチをうろうろ・コッチをうろうろと非常に落ち着きが無く、早々に慌てた挙げ句、最悪の選択をしがちであると言われます

ここまで書いて薄々感づいた方もおられるかと思いますが、本来・仏教では閻魔様がお裁きを下したり、天使に連れて行かれたり第三者が介入することは無く、**全て自分の心に染みついた習慣の力によって、自分にとって居心地のよさそうな場所に赴くとされています**

蛇足ながら…輪廻で生を受けるのは自己の業の果報と見なすので、思春期の定番「生んでくれと頼んだ覚えは無い！」と言うのは仏教的には通用しない理屈となっておりますか

ら、将来に備えて憶えておくのも一興かと・・・

これは自分の意思で決定するのは違ひまして、完全に癖とか習慣のレベルで決定してしまう訳です。経験則によって自分が意識してあれこれ考える前に足が動いてしまうのと同レベルの話でございます。これが業（ごう）の恐ろしさと云うヤツでして、我々が普段、無意識に選択して行動した行為の影響をずっと留めているが故に意識する前に身体が動いてしまうと言う厄介な側面を持っています。他人と接するときの心の動き・口のきき方・行為など・・・・です。

思い遣りや慈しみを動機としたものなら、良い習慣になるから結構なんですけど、妬み・そねみ・誹謗・中傷・陰口・敵意・殺意 etc…こういったよろしくない習慣が潜在的に蓄積されていきますと、その結果、深く考えなければいけない局面でも脊髄反射で今までの行いをトレースしてしまいます。まして中有の状態、次の生を選択する局面などは、心だけの状態であるが故に、非常に業の影響を受けやすく敏感なので、自分が心にどういった習慣や癖・傾向などを持っているか？

また、それを自覚・反省しているか？などが重要になってきます

仏教の葬儀で死者に向かって戒を授け、戒名を付けたり、通夜の時に枕元でお経を早口で読んだり、四十九日までの一週間毎にお経を唱え説法をするのは、亡くなった人に対して慌ててマズイ選択をしないように、中有の期間一杯ギリギリまで引き留め、仏さんの教えを聞いて、心を落ち着けて、自分の心についた悪い癖を自覚し反省し懺悔して、少しでも良い境遇を選択するように話しかけている訳です。

ともあれ、この中有の状態が終了しますと（満中陰）俗に言う「旅立ち」という形になり前世で得た大量の経験情報は消滅し、業による性質のみを引き継いだ、新たな生命として輪廻・再生を果たすとされますので、まずは一段落となります

故に、自縛霊だの幽霊だの守護霊だの輪廻を果たさず、ウロウロしているモノは仏教の分類上認められませんから、あれらは全て餓鬼道に落ちた結果という事になります。実際、徳島などでは、その手の怪は餓鬼仏（がきぼとけ）と呼ぶ地域があるので、暇があれば色々調べていただきたいモノです

まあ、そういった個人的な尻の座りはともかく、一時期流行した「チベット死者の書」などには、この中有の状態を詳しく説明してあるので興味のある方は一読するのも良いかと思えます。

さて、また長くなりますが、この中有と輪廻のバリエーションとしての、十王信仰・十三仏など日本の伝統的な「あの世」観についても、若干書いておこうと思えます

中有の考え方では、死の瞬間の心というのが非常に大切だそうで、いかに満足の思いを抱いて死ぬかも非常に重要とされています。そこで、自分的に満足の行く死に方を考えてみたんですが・・・どうも地獄行きは確定のようでございます

さて伝統的な日本の他界観の代表としては、十王信仰や十三仏信仰があります。中有と呼ばれる死から生ままでの中間状態については触れたわけですが、インド発祥の伝統的な経

論では（俱舍論・毘婆沙論・阿毘達摩集論・瑜伽師地論 etc…）この中有の状態について様々な見解を述べておりますが日本で言われるような、三途の川とか、橋渡しとか、奪衣婆などそういった牧歌的な表現はされておらず、死の瞬間の光明と呼ばれる状態から、意識が身体より抜け出し、意生身（いじょうしん）と呼ばれる、中有専用の身体を作り、その中有の身体で次の転生先を選択するとされております。

面白いのは、意識が身体から出るときの場所によって、転生先が決まるといった表現がされており、

地獄に生まれるなら肛門から

餓鬼に生まれるなら口から

畜生に生まれなら尿道から

修羅に生まれるなら鼻から

人に生まれるなら目から

欲界の天に生まれるなら臍から

成就天・乾闥婆に生まれるなら耳から

色界に生まれるならば眉間から

無色界に生まれるなら頭頂から

まあ、こういった具合の事は書かれているんですが、巷間言われておるような、死出の旅路といった具体的なイメージは無く、業の力によって、あれよあれよと言う間に、慌ただしく、次の輪廻を選択するといった感じで書かれており、なんとというか全体的に、フワフワって抜けて、ゴーって来て、ガーってな感じでございます。インド的にはそれで構わないんでしょうが、やはり、中央アジアからこっち、良くも悪くも情緒と風情を重んじる文化圏の人間としては、ちと、味気ないような、気ぜわしいような感じを受けてしまいます。恐らく中国人もそう感じた…かどうかは知りませんが、中国に入りますと、この、ややあやふやな中有の状態に、現実の延長のようなディティールが付加されて参ります。

唐時代の末に、

『預修十王生七経』や『発心因縁十王経』といった、偽経が作られますと、道教の他界観と仏教の中有を融合させた、**十王信仰**と言うモノが成立いたします。・・・初七日から一周忌までの十回の節目ごとに冥界を司る裁判官・十王が死者の生前犯した罪を裁くとされるようになりまして、死者は中有の状態に入ると 一里＝533m 全長八百里＝約400kmの道のりと言われる長い死出の旅を歩き途中の関所で一週間ごとに取り調べを受け、七×七日＝四十九日で結審し六道のいずれかに送られます。その後、ジャンピングチャンスとして、百箇日・一周忌・三回忌の日に追善供養を行えば不本意な輪廻、曰く、地獄・餓鬼・畜生などの三悪趣から亡者を救い上げ修羅・人・天に居るならば、善業が福德として加算されるという、日本でもお馴染みの「あっち側」の雛形が確立します

この十王信仰は平安末期に日本入りしまして、三途の川や、渡し賃の六文銭（中国の紙銭

の影響か?) 賽の河原など日本独自のオプションを付加しつつ、日本仏教独自の他界観を形成する事になります。後に地藏信仰や阿弥陀信仰などと合体し、微妙に細部を変更しながらも死んだら、あの世でお裁きを受けるといった、基本路線は変わらずに受け継がれ、鎌倉・南北朝と時代が下がっていきますと、十王が十仏、十仏に大日如来を足した十一仏と変化し阿シュク如来・大日如来・虚空蔵菩薩などが加えられた、**十三仏信仰**が江戸期に成立し現在に至っております。(十三佛さんのお札を神社の宮仕が配っているのもおかしなことですが・・・)

かなり大雑把な説明になりましたが、成文化され確固たる思想的な形を持たなかった日本古来の祖霊観は外来思想の儒・仏・道を参考として融合・発展し独自の他界観を生み出しました。その全てを網羅する事はかないませんが、仏教的な他界観の一部を見ることによって「あ、アレのネタ元はここからだったか!」などと思いついて貰えれば幸いです。割と長丁場になってしまいましたが、三界と十界に関わった、他界観の説明ですが、これで以て終了とさせていただきます。

【織田信長のこと】

「洛中洛外図屏風」(上杉本)は狩野永徳が描いた屏風絵を織田信長が上杉謙信に同盟の証しに送った当時の風俗を知るには貴重で大変歴史的に有名なものである。同じ狩野永徳に描かせた金箔屏風に「安土城之図屏風」がある。安土を訪れたイエズス会宣教師アレッサ・ヴァリニャーノからローマの教皇庁にその「安土城之図屏風」が送られたと、同じ宣教師のルイス・フロイスの「日本史」に記載がある。ヴァリニャーノが離日するとき、同行した日本の使節団がいたが、彼らを天正遣欧少年使節団と呼ぶ。彼らは九州のキリシタン大名大友宗麟や有馬晴信の名代としての伊東マンショを正使とする使節団であるが、安土のセミナリヨで学んだ生徒の中から選ばれていたといえます。なおセミナリヨ(神学校)は当時は安土にしか存在していません。なお同時期後半に伊達政宗が「慶長遣欧使節団」を送っています。

支倉常長を中心とする「慶長遣欧使節」を派遣したのは、豊臣秀次と仲がよかった(秀次が秀吉に反乱をしていたら必ず秀次に味方したといわれる)青年戦国大名であった伊達政宗です。彼は、南蛮貿易が、東シナ海、インド、マダガスカル、喜望峰をめぐる海路であったのに対して、太平洋貿易を試みて、ヌエバ・エスパーニャ(メキシコ)廻りでスペインに行つて外交を実施している。

織田信長が当初、安土城下で保護したキリシタンはポルトガル系のイエズス会でしたが、やがて、スペイン系フランシスコ会の宣教師などが、日本人を奴隷として海外へ売り飛ばしている事実を知った豊臣秀吉は、キリシタン布教を禁止した。そのときの南蛮支配地といわれる東アジアの国々のなかで、スペイン王の名前を冠した国が「フィリッピン」である。その時の王の名は「フェリッペ2世」といいスペインの無敵艦隊をもち太陽の沈まな

い国と形容された時期である。現在のフィリピン諸島はスペイン人により「ラス・フィリピナス諸島」と命名されたことに起源を發する。

狩野永徳が描いた「安土城屏風」が天正遣欧少年使節の手によりローマの教皇グレゴリウス13世に渡り、以後行方が分からなくなっているが、同じく織田信長が狩野永徳に描かせ上杉謙信に送った「上杉本、洛中洛外図屏風」は国宝に指定され現在まで残っている。さて、上杉謙信は、関東管領を、後北条氏の圧迫から逃れた山内上杉の憲政に譲られて「上杉」を名乗るのだが、関東では、山内上杉家のほか扇谷上杉家、古河公方足利、堀越公方（鎌倉公方）などが争った享徳・永享・長享の乱・永正の乱が有名である。その時、山内上杉の家宰として越後守護代の長尾為景の同族であった長尾景春がいれば、同様に扇谷上杉家には家宰として、川越城や江戸城を作った人物で「七重八重 花は咲けども 山吹の実の一つだに なきぞ悲しき」の歌で有名な人物がいた。現在では豊島区神田川橋の近くに「山吹の碑」がある。足利学校で学んだとされている、扇谷上杉の家宰を務めたその人物は「太田道灌」という。その人物は、文明12年、関東より上京せし時、老蘇の森にて「きわねただ 老曾の杜の秋風も 心にかよふ 袖の上の雲」と和歌を詠んでいる。

織田信長の家系は「平重盛」から始まり「平資盛」そして越前国織田劍神社に養子に入って「織田親真」が織田家の始祖となり「織田親基」―「親行」―「行広」と続くが、織田親真からは越前守護職の斯波氏に仕え、その後、織田家は尾張守護職でもあった斯波氏の家臣として尾張に行き織田信秀―織田信長と続きます。いわずと知れたことですが、織田信秀は織田信長の父親である。織田家の概要としては織田氏は越前国にそのルーツがあり、越前・尾張・遠江守護を兼ねた斯波氏の家臣として尾張国に入ります。室町時代の斯波家は管領を出す家柄で、当主は基本的に在京でした。織田氏は守護の代わりに在国し、留守を守ります。この守護の代わりに役職を守護代とよびます。守護代織田家は戦国時代に入って内訌を起こし、尾張国八郡は上下に分かれて二人の守護代が尾張国を治めました。北側の上四郡を織田伊勢守家が、下四郡を織田大和守家が担当することになります。斯波家は戦国時代に入って家運が傾き、越前国を朝倉氏乗っ取られに、遠江国を今川氏に奪われました。永正年間に在京をやめて尾張に腰をすえた斯波義達は遠江奪還を志します。この頃に織田信秀が生まれました。尾張下四郡守護代には三名の奉行衆がついております。因幡守家、藤左衛門家、弾正忠家の三家である（清須宗論に記載あり）。信秀はこのうちの弾正忠家の出です。弾正忠家は信秀の父の信定の代に津島・勝幡を領しておりました。尾張国下四郡守護代織田大和守達勝は清洲に根拠地をもち、上四郡守護代伊勢守を圧倒し始めます。達勝の手足となって戦働きをしたのが、織田弾正忠信定などの三奉行である。もともとは、尾張守護斯波氏の被官である織田家が清須織田家（大和守家）と岩倉織田家（伊勢守家）に分裂し勢力争いをし、清須織田氏の家臣であった織田弾正忠家から信長が出て尾張を征したということである。このように織田家では昔から織田家同士で勢力争いをし

ていたわけで、織田信長が尾張を統一する時にも、最大の敵になったのは、血を分けた弟の「織田信行」であった、最終は織田信行を騙し討ちにした形で尾張の政権をとるのだが、その後も信行の子ども（津田信澄＝明智光秀の娘婿）は、戦国武将として近江の大溝城に領し、明智光秀の娘婿となったが、信長の息子、織田信孝と丹羽長秀により本能寺の変のどさくさに殺されている。

●織田信長が世に出て名を他の戦国大名に知られるようになったのは、「桶狭間の合戦」で今川義元を打ち取ってからである。今川義元は北条早雲の妹の孫にあたり、早雲の直孫である氏康とも鳩子であり且つ義元の姉（瑞溪院）は妻である。織田信長に敗れるまでは戦国最強の武将と云われていた。では今川義元は教育係兼軍師であり、京都五山での修行中に松波庄九郎（後の齊藤道三）とも面識があったといわれる。今川の武将＝僧は「太原雪斎」という名前である。また、織田信長の義父である齊藤道三は松波庄九郎と名乗っていたが、その前は日蓮宗の妙覚寺の法連坊といった。父の長井新左衛門尉も美濃の出で京都の妙覚寺の寺侍であったといわれるが、とにかく京で油屋の経営を足掛かりに、彼は美濃にくんだり、守護大名の土岐頼芸に仕える。かつて（妙覚寺時代）は「法蓮房」と呼ばれた庄九郎は、土岐氏を美濃から追い出し、美濃を手中に入れるのであるが、道三の娘婿である織田信長も同じように尾張の守護大名＝斯波氏を追い出し、戦国大名となっている。

15、旧芝川町西山（富士宮市）の信長の首塚

問題15；本能寺で討たれた織田信長の「首塚」が静岡県の西山本門寺の境内にある。本能寺の変のとき本因坊日海の指示により信長の首を埋めたとされるお寺がある、そのお寺（西山本門寺）がある都市の名前はどこか。近江八幡市とは富士山と琵琶湖の縁で夫婦都市提携をしていますが、妙な因縁を感じます。

- ① 松前町 ②密陽市 ③富士市 ④富士宮市 ⑤静岡市

解答・・・

<解説>

信長に関係する寺院と云えば、総見寺である。総見寺は安土城築城と同時期の創建で丹羽長秀が織田信長の命令により織田家の菩提寺として安土城郭内に作ったとされる。いまは「総見寺」は臨濟宗妙心寺派の寺院である。本尊は織田信長であり、二王門（楼門）、三重塔は重要文化財である。住職は代々織田家の関係者が勤めていた、近江八幡市安土町にある寺院である。

現在の安土城天主「信長の館」は1992年にスペインのセビリア（アンダルシア州）で行われたセビリア万国博覧会に日本から出品された日本館（安藤忠雄が設計）の安土城天主閣（原寸復元）を万博終了後に、当時の安土町がゆずり受けたものです。コロンブスゆかりの地セビリアでは、1492年コロンブスが新大陸を発見して500年に当たるのを記念して開催されました。

なお、近江八幡市内にも、「信長の首塚」というものがある。織田信長が浄土宗の僧貞安を開山として、安土問答で勝ったご褒美として信長が安土城下に1580年に建立したお寺ですが、八幡城下町を作る際、豊臣秀次が現在地（八幡城下）に移転したとされています。そのお寺の境内には「五輪塔」があり「織田信長の墓」だとされています。

キリスト教史学会常任理事を務めておられた故助野健太郎・聖心女子大学名誉教授の蔵書を寄付していただいて「安土文庫」が安土図書館にできている。さすがにマニアには垂涎の的である。これらの蔵書を活かしきれていないのが残念です。さて安土といえば「信長サミット」が1984年に第一回が安土町（当時）で開催されて以来、28年になる。参加自治体も天童市や岐阜市、大垣市、清須市などが参加し、益々拡大している。それとは別に森蘭丸のキャラクター「らんまる君」があちこちに出没しているという噂です。岐阜市可児の「森蘭丸祭り」には必ず参加しているらしい。また歴史では「森家」は甲賀五十三家と関係があり、織田家の諜報部門を担当していたとの話もある。さて、安土城址にも森蘭丸の屋敷跡があるが、本能寺で蘭丸・力丸・坊丸の三兄弟は討ち死にしている。残った次兄の森（勝蔵・武蔵守）長可は「鬼武蔵」と呼ばれた武将であったが、豊臣秀次（秀次と長可は池田恒興の娘を妻にしている）も関係している徳川家康との合戦で討ち死にをしている。その合戦を「小牧・長久手の合戦」といい、その時の総大将は「羽柴秀次」であった。

フランシスコ・ザビエルは日本に来た宣教師ですが、山口市には「ザビエル教会」もあります。しかし、眠っているところはインドのゴアというところですよ。こうした宣教師も含めて、植民地主義的な海外進出に乗り出しますが、「大航海時代」の幕を開けたバスコダガマはポルトガルの国王に命令されてでした。では、ヨーロッパ諸国がこのように「大航海」に乗り出した直接の原因は、オスマントルコによってアジアからの通商が陸上からでは困難になったから「海の道」を開拓したと云われていますが、アジアからヨーロッパに持ち込まれた産物でヨーロッパが必要としたものは「胡椒」だと云われています。

織田信長の三大合戦のうちの一つ、姉川の合戦は「織田信長」と「浅井長政」が戦ったことで有名ですが、そのとき、羽柴秀吉が、小谷城が見える場所に城（出城・付け城）を築くことを織田信長に命令され、秀吉の「出世城」といわれました、湖北の城を横山城といか。山麓には石田三成の故郷石田村がある。のち秀吉は横山城から長浜城へ移転しました。

また、賤ヶ岳の合戦は、羽柴秀吉と柴田勝家の戦いだったが、織田家の勢力を二分しての戦いであり、これに勝利した秀吉が信長の作り上げた権力と体制の継承者となるのであるが、この時「賤ヶ岳七本槍」といわれた武将が七人いる。「福島正則、加藤清正、加藤嘉明、脇坂安治、平野長泰、糟屋武則、片桐且元」の七人である。このうち浅井長政の家臣であった近江出身の武将は脇坂安治と片桐且元の2名がいる。この七名のうち、関ヶ原の合戦で、唯一西軍に味方した武将（大阪の陣で反豊臣方になったものも含む）は平野長泰だけである。

16、近江八幡と柴田勝家の関係

問題16；信長亡き後、勝家と秀吉が戦った賤ヶ岳合戦で、敗れた柴田勝家は北の庄城（福井市）で滅亡しますが、柴田勝家が北の庄城に移る前は（天正5年北陸の上杉氏に対抗するため転封）近江八幡市内の城を居城としていました。永禄11年に足利義昭を擁した信長が入京のため近江に侵入以降、近江平定に、秀吉が長浜城、明智光秀が坂本城、佐和山に丹羽長秀を配して分封支配した頃です。そして勝家の居城のあった地を現在でも『瓶割山』と呼ぶ。彼の異名ともなった「瓶割り柴田」が居城とした市内にあった城の名前はなんですか。近年、南隣の東近江市羽田地区においては、この時の柴田の異名の元となった「柴田勝家」と「六角善治」の戦いをモチーフにした「雪野山歴史まつり」を開催し「水鉄砲」合戦が行なわれている。

- ① 野山城 ② 岩倉城 ③ 馬淵城 ④ 長福寺城 ⑤ 長光寺城

解答・・・・・・・・⑤

<解説>

「瓶割り柴田」の異名と瓶割城（長光寺城）のこと

「元龜元年(1570) 織田信長は朝倉攻めの途中、浅井長政に背後を突かれて、急遽越前から京へ退却。

その後岐阜へ戻るが、その途中六角承禎、義弼父子によって襲撃されたこともあって同年5月、信長は諸将を江南の城に配した。その時、長光寺山の守備を命ぜられたのが柴田勝家で、勝家は古城を修築して、長光寺城に入った。

同年6月、伊賀に潜んでいた六角承禎は、敗残の兵を集めて一向一揆を扇動し、浅井とも同盟を結んで、5000余の軍を率いて、柴田勝家の立て籠もる長光寺城を包囲した。勝家は800余名の兵と共に城を堅く閉じ、ひたすら籠城策をとった。

これを攻めめぐんだ六角承禎は城の水源を断ち、ころを見計らって配下の平井勘助を使者に出し城内の様子を探らせた。ところが案に反して城中では水は潤沢で、馬のからだを水で洗うという豪勢さであった。だが、これは勝家の苦肉の策で実際のところは、飲料水にも事欠く有様であったのである。

こうして六角勢の意気を挫いた勝家は同6月23日を期して城を打って出ることとし、その前日、籠城戦と食料の欠乏のため、ゆるんだ志気を高めるために、勝家は城兵を前にし、

長刀の柄で最後の水を貯めた瓶を割って見せた。
つまり、このままむなしく死を待つか、それともここを先途と打って出て活路を開くか、この決断を促したのである。

23日未明、総勢800余名を引き連れた勝家は城門を開くと、山を揺るがすばかりの関の声をあげて六角軍の本陣をめがけて、打って出た。

不意をつかれた六角軍は総崩れとなって、300余名が戦死したという。

この時以来、柴田勝家のことを「瓶割り柴田」と呼び、長光寺城のことを「瓶割城」と呼ぶようになった。))

これは、戦国史の中でも有名な話である。現在、長光寺山を「瓶割山」と呼ぶことに、何の疑問も持っていない市民が多くなっている。嘆かわしきことである。なお、余談だが、福原教育長が住んでいる、彦根市肥田町は、近江の戦国史のなかでも特筆すべき「水責め」が戦国歴史の中で最初に行われた城があったところである。秀吉の毛利攻めの時の備中高松城の水責めは有名であるが、それに匹敵する水責めの戦いが展開されたのが、この近江の地であったことは覚えてほしい。ちなみに野良田合戦は浅井氏と六角氏が戦った合戦場として有名である。合戦で言えば毛利と大内が覇を争った厳島の戦い、今川と織田の桶狭間の戦いぐらいに有名ははずなのだが、肝心の地元の人知っている人は少ないのは残念である。

瓶割山（別名：長光寺山）は、湖東平野の田園地帯に盛り上がった里山です。隣に双耳峰のような位置関係で岩倉山（標高：約220m）が並んでいます。登山道は、①北側の工業団地近くにある神社近くから登り、岩倉山の鞍部に降りるルートと、②南側上平木町にある日吉神社から、水道配水タンクの管理用道路（通行禁止）を伝うルートがあります。山域には長光寺城址の遺構があり、掘割跡や石垣・井戸などが散見でき、往時のよすがが偲ばれます。応仁年代（1467～69）の頃、佐々木氏の築城と言われています。その後、織田氏の支配となり、六角氏との戦で、守将の柴田勝家は籠城戦を取り、水瓶を割って士気を鼓舞したことから「瓶割柴田」の異名が付けられました。瓶割山の名前の由来は、これによると伝えられています。瓶割山南側中腹と岩倉山には、現在の水瓶である水道の配水タンクがあります。

柴田勝家には長光寺城主時代から六角氏の旧臣が多く家臣となっている。これは長浜城主の豊臣秀吉と同じく城持ち大名として近江出身者を多く雇用した結果である。柴田勝家はこれら家臣の他に北陸軍団長として大名級の「与力」がつけられている。前田利家、佐々成政、佐久間盛政などである。拝郷家嘉（はいごう いえよし）も、尾張出身の織田氏の家臣だが、柴田勝家の与力として北陸戦線で功績を挙げ、加賀大聖寺城の城主に任じられた与力の一人である。主君の織田信長の死後、勝家と羽柴秀吉が天下の覇権を争った賤ヶ岳の戦いに出陣し、勝家方の将として佐久間盛政の攻撃隊に参加したものの、盛政・柴田勝政・山路正国らとともに退却する際に福島正則に近江柳ヶ瀬にて討ち取られた。その子孫は徳川家に仕えたとされているが、ここに登場するのが「拝一刀」である。「拝家は織田信長に仕えた武将、拝郷家嘉をルーツとし、一刀は家嘉の子である孫十郎の子、正直の子である。拝の姓は、拝郷が武士が見せてはいけない「背後」に通じ

るとして、拝郷の「郷」を取って拝とあらためたという。」というように劇画『子連れ狼』においては、拝家がどのような家柄で、どういう歴史を持つかについては、詳しく描かれている。これはフィクションではあるが、現実に拝一刀の使う剣術＝流派（水鷗流）を今も静岡県下を中心に命脈を保っている古流剣術＝水鷗流があるという。

- 仏教の四天王にちなんで、優れた者を指して徳川四天王とか織田四天王と云われる。徳川家康の四天王は酒井忠次・本多忠勝・榊原康政・井伊直政を言い、織田信長四天王は柴田勝家・滝川一益・丹羽長秀・明智光秀を言う。ここに羽柴秀吉を入れた場合は「五大将」という。では、織田四天王のうち、近江国（滋賀県）の出身でありながら近江に城がもらえず、関東を中心に戦った軍団長で、その昔、服部氏と双璧をなした伴氏の流れをくむ人物に滝川一益がいる。彼の出身地は今の甲賀市とされている。親族には前田慶次郎利益がいる。

また、近江八幡市の有名人で検索すれば、戦国武将で言えば豊臣秀次や織田信長だけでなく、「浅井長政」もヒットした。それもそのはずで、「浅井長政」は、浅井氏が六角氏に従属していたころ、浅井久政の嫡子として観音寺城下の浅井家屋敷で生まれて育っているからである。当初の名前も、六角義賢の「賢」をもらって「浅井賢政」と名乗り、最初の妻も六角氏の重臣平井定武の娘を嫁にしている。その後、小谷城で、反六角の姿勢をとった彼は六角義賢の偏諱である賢を捨て、信長の長をつけ「長政」と改名している。

織田信長は、平清盛の子孫であって「平信長」だと名乗っています。なぜなら平清盛の長男が重盛でその子が平資盛であり、信長の出た織田氏はその資盛の末裔だとされているからです。NHK大河ドラマで承知でしょうが、平清盛は南都六宗を焼き討ちしています。また、織田信長も比叡山延暦寺を焼き討ちしています。それに信長の部下になった松永久秀が多門山城の戦いで、東大寺の大仏の首を落した事件は有名です。

17、異形者秀吉と松下嘉兵衛の関係

問題 17 ; 「太閤素生記」に伝わる秀吉が最初に仕えた今川家の家臣の名前は誰か。彼の先祖は、もともと近江佐々木六角の一族で、市内の円山城の城主であったが、その子孫が三河国松下郷頭陀寺に住み着き「松下」姓を名乗った。家紋は佐々木氏と同じ四つ目結である。秀吉との出会いにより、今川家没落後は、家康に仕えていたが、秀吉が貰い受けて大名となった人物の名は。領地であった茨城県伊那町には国の重要指定無形文化財で『小張松下流綱火』というロケット弾のような花火が伝承されている。2006年の年末ドラマスペシャルの「サルと呼ばれた男」で中井貴一が、その人を演じていたが、記憶されているだろうか。

- ① 大原雪斎 ② 大久保忠教 ③ 松下嘉兵衛 ④ 松平元康 ⑤ 岡部元信 □

解答・・・③

<解説>

松下嘉兵衛は頭陀に住んでいたが今川家の透破を統括していた今川家の情報組織の長であったという説がある。秀吉も彼（松下）に仕えており、情報収集のため織田信長に接近していたが、桶狭間でまさかの今川義元が戦死したため、やむを得ず、そのまま織田信長に仕えた。ということである。すなわち秀吉は忍者であったという。そこから忍者＝異形者という図式ができたのであろう。弟とされる秀長＝小竹の正体も、甥の秀次も異形者だということである。そこで、異形者＝豊臣秀次公に関する一考察についてという文を書いておいたので、この際、ここに掲載しておくので、お読みください。

1)、さて 一般的に、人々が知っている「豊臣秀次」公像は、醜聞としての「殺生関白」であったり、また政治的に「謀殺」された悲劇の宰相としての認識であり、また秀吉の甥であるがゆえの苦勞しらずの若殿様像であったりする。

しかし、滋賀県内では、いや本市にては、いまや秀次倶楽部の諸氏が中心になり、八幡山下町開町の祖「秀次」公の顕彰をキーワードにして全国に八幡山下町を売り出そうと一生懸命である。大河ドラマのなかで「秀次」公を偉人・善玉だったとして描いてほしいという署名も集めて陳情もされたこともあります。

豊臣秀次は、我が町の開祖のことであるから、りっぱな人であってほしいという感情は理解はできますが、通史として歴史に残っていることを、それは間違いだったと覆すにはよほどの反証資料が必要でしょう・・・・・・・・

(そもそも秀次や秀吉のおいたちは何者であったのか) そのことを、解明していこう。

2). 異形の者 (=秀吉) のこと

秀吉の出生については諸説あるが、「絵本太閤記」・「太閤記」・「真書太閤記」など後世に創作されたものであり、そのほか秀吉が関白になったとき右筆でお伽衆の大村由己に書かせた「関白任官記」や「天正記」、その他では「太閤素生記」、「豊鑑」(竹中半兵衛の子重門の作) などがある。通常、研究家が秀吉の史料として参考にするのはそういった書物であるが、こうした文献にはねつ造が多いと言われる

ちなみに「太閤素生記」という書物があるが、述者は稲熊助右衛門という中村代官の娘で幼時、秀吉の姉「とも」やその弟らと遊んだ人で、彼女は老後、その養子の土屋知貞に自分の村から出た稀世の運命のもちぬしのことを語り、それを筆録させたものという。

貧しい農家に生れ、天下人となったこの人物の素姓はほとんど分かっていない。秀吉について確実な史料が現れるのは、1565年（永禄8年）秀吉が28才になってからだという。この年、織田信長が出した知行安堵状の副状に、始めて木下藤吉郎秀吉の名が登場するのである。従って、あれこれ想像する余地は十分あるのだが……。

さて、史料に基づいて秀吉の系譜を探っていくと、まず秀吉の母の「なか」であるが、彼女は「太閤素生記」によると尾張国愛智郡御器所（ゴキソ）村出身で、関弥五郎兼定の娘であるという。御器所から椀などを作っていた山の民（木地師）を連想するのはたやすい。さらに、関氏は鍛冶師であったとする所伝もあるが、どちらも異能集団としての山の民である。この関弥五郎の系図をひもとくと、長女が杉原家（秀吉の正室お禰の実家＝お禰の父は杉原定利）に嫁ぎ、三女は青木家（その子は紀伊守となる）四女は加藤家（加藤清正がでる）に嫁いだことになっています。ですから「なか（仲）」の姉からみれば孫にあたる「お禰（禰々・祢ともいう）」を、妹の長男・藤吉郎に嫁がせたということになります。

余談だが、福島正則の実父・星野新左衛門は秀吉の実父とされる「弥右衛門」の兄弟であることが『落穂集』に記述されている。すると弥右衛門は木下という苗字ではなく星野ということになる。また、秀吉の正室お禰の実家＝杉原家は別称を木下といますがこれは、後日、秀吉から与えられたものだ（お禰の兄家定が秀吉から木下姓をもらう）ともいわれていて、実際のところよく分からない。

晩年、秀吉は自分の母は萩の中納言の娘で禁中にも使えたことがあると「天正記」に書かせたぐらいであるからして・・（当然これは嘘だと思うが。）

また、正史では、この木下家定の子に秀俊という者がおりその後、秀吉の養子になる。（のちの小早川秀秋となる人物）さらにお禰や木下家定の妹に「やや」という人がいて、浅野長政の嫁となるのだが、……。とにかく、秀吉が「異形の者」であったことは確かで、秀吉の指が6本あったとかいう類いの身体的異能ではない。しかし「異形の者」とは、かわった風体をしている人とか異能者（不思議な能力を持った人）を指している言葉であり、すなわち「まつろわぬ民」＝漂泊者・山の民・海の民或は鬼といわれた人々のことなのである。後年、千利休が秀吉のブレーンとして登場するが、彼の出身地「境（堺）」もまた鬼のアジールであったことを記憶に留めていただきたい。

さて、話をつづけると、「なか」が再婚した相手は織田信秀（信長の父）の茶同朋であったとされる「竹阿弥」なる人物であるが、これはねつ造だろう。秀吉らしい経歴詐称というべきで、多分と想像するが、竹阿弥とはずばり竹編みの意味を指すのではないかと考える。つまり竹を編んで竹細工をつくる職業の者のことである。「茶せん」「ささら」者といえは賤民の別称となるのである。

このように「太閤素生記」の記述を読むと、その言外に、さりげなく真実が隠されているのがわかる。たしかに異端の説だが、少なくともそう解釈することは可能であ

る。

一方「太閤記」などを元とした秀吉側の親族はというと、姉の「とも」とその夫の「弥助」＝尾張国大高村の農夫（のちに秀吉から三好武蔵守一路と、名を変えさせられて尾張犬山城主となる）、そして二人の間に、「秀次」「秀勝」「秀保」の三人の子が生まれている。上二人の「秀次」「秀勝」は秀吉の養子となり、「秀保」は秀吉の実弟の「秀長」の養子となっている。また秀吉の実妹の「旭(あさひ・あさとみう)」は中村在の百姓源助（のちに秀吉により佐治日向となつるが）に嫁いでいたが、長浜に移住してまもなく夫・佐治日向が亡くなり、お禰の叔父の杉原七郎左衛門家次（長浜時代の羽柴家の家宰をしていた）の世話により秀吉の家臣の副田甚兵衛と再婚したが、政略により別れて徳川家康の室となる。

そのほか、秀吉の養子達として前述の「秀次」「秀勝」「秀俊（秀秋）」の他に「(結城)秀康」「(宇喜多)秀家」「秀勝（織田信長の四男・於次丸）」「八条宮（智仁親王）」と淀殿との間に実子「秀頼」がいる。「鶴松」なる子もいたが三歳で病死している。

なにはともあれ、「太閤記」などが、ねつ造であるという部分は、「幼名は日吉丸と云ぬん」の箇所からも分かつる。貧しい水呑み百姓の子に「幼名」などあつるはずがない。明らかに後世の創作である。容貌が「猿」に似ていた所以か、もしくは自他ともに「猿」と称したことへのこじつけで、日吉山王権現につなげたとは考えられないだろうか。（尾張愛智郡と近江国愛智郡を関連付けて何か関係があるのではないかという説や秀吉は日吉神社の猿丸系勸進聖であつたという説もあり、少なからず秀吉は長浜城主になる以前から近江とは関わりの深い人であつた。また、秀吉の側近となる武将の殆どは長浜時代に召し抱えた近江人だつたというのはよく知られているところである。）

「太閤素生記」にいう『(松下嘉兵衛)浜松ニ至ル道ニテ猿ヲ見付、異形ナル者也。猿カト見レバ人、人カト思ヘバ猿ナリ。嘉兵衛笑テ吾ニ奉公スベキカト聞ク、畏ル由、夫ヨリ浜松ヘ連行ク』こうして、少年の頃から38種類もの職業を転々として生きてきた秀吉は遠江国の頭陀寺城の松下嘉兵衛に3年間仕え、下っ端から出納役にまで昇進し「菊」という女性まで嫁とつたとある。また嘉兵衛から尾張中村の出身なので中村藤吉郎という姓までつけてくれたとある。しかしやがて、松下家を出て、信長に仕えるのである。一説には、秀吉の能力を見込んで、今川家（松下嘉兵衛は今川家の家臣）の「らっぱ」として尾張織田家に潜入させたとも言われるが確証は無い。しかし戦国時代では、勝馬に乗るための裏切りは当り前のことである。多分そうなのだろう。後年、秀吉はその恩義に報い小田原戦後、嘉兵衛を1万6千石の大名に取り立てたのは有名な話である。（このことは、後述の検定問題の中にも登場する。）

秀吉の出世の大きな契機となつたのは、墨俣城の築城と稲葉山城の奇襲であるが、その成功を支えたのは川並衆の蜂須賀（小六）彦右衛門正勝や前野将右衛門のはたらきであり軍師の竹中半兵衛重治である。なぜ彼らは、信長からの仕官の誘いを断り、

当時はまだ名もなき足軽頭である秀吉（藤吉郎）の幕下に加わったのか。墨俣築城では2000人からの川並衆をはじめとする川の民や木地師などの山の民の異能集団がいきなり秀吉の部下となって活躍しているのである。不思議な事実だが、以後注意してみると必ず秀吉の周囲には異能者集団がブレインとしているのである。黒田官兵衛にしても元は近江佐々木氏の庶流で江州伊香郡の出であったとしても祖父の重隆までは目薬の製造販売をしていた薬師である。以上これらが正史では光の当たらない秀吉の「陰の系譜」というべき部分である。とりあえず、これらのことを伏線として念頭において話を「秀次」のことに進めていきたいと思えます。

3)、青年「羽柴秀次」時代と近江八幡に関係する人物たちの事

羽柴秀次（当時はまだ、羽柴孫七郎秀次と名乗っていた）と近江八幡の関わりは、紀州雑賀及び四国の長曾我部攻めの功により、天正13年（1585年）に当地に近江43万石の領主として入部してより、天正19年（1591年）に、「関白・豊臣秀次」として京都の聚楽第に入るまでの6年間（28歳の全生涯のうち18歳から24歳までの6年間）である。

前年の天正18年には、小田原戦役平定により全国で大掛かりな国替えが実施されそれに伴い尾張・伊勢100万石・尾張清洲城主に転封（加増）となっているが、小田原戦後そのまま引き続いて奥羽平定に向かっており、京都に凱旋しているのは翌年の11月であり、その12月に秀吉が太閤となり、秀次が秀吉の後継ぎとして「関白」を宣下され、京都の聚楽第の主となっており、尾張清洲城には一度も落ち着いていないことになる。

豊臣秀次のことについては、後でもう少し詳しく述べたいと思う。そのまえに、秀次というより秀吉に関係する二人の人物が、この近江八幡市と関係していることが、今回これを作成するため、書籍を調べていたら判明したので、（余談だが）先にそのことを述べておこうと思う。

一人は、秀吉（藤吉郎）が最初に仕えた今川家の家臣「松下嘉兵衛之綱」である。松下家は、宇多天皇を祖とする近江源氏の六角佐々木氏から出ており、六角佐々木氏の庶流で近江丸（＝円）山城（現在の近江八幡市円山町）の城主であった西条氏から高長（たかなが）という人物が、三河国碧海郡松下郷に住み着き「松下」を名乗ったとされている。家紋は、佐々木氏の四ツ目結である。そして秀吉が仕えた松下屋敷には津毛利神社がありご神体は住吉大社と同じ海の神様である。天竜川を利用しての水運も発達していたといわれている地域でもある。総合すると頭陀寺には湊が置かれ、曳馬城の外港的役割を担っていたと指摘する人もいるぐらいである。そうすると松下氏の性格も単なる土豪ではなく水軍と解釈されるべきであろう。秀吉が常に川や山の民と関わりを持つ姿がここでも見られるのである。秀吉が非農業民であったとする説が強いが（私もそう考える一人である）それゆえ、水軍を持つ松下氏を奉公先に選んだとは

考えられないだろうか。松下氏は当時のハイテク技術を持った職能集団を抱えていたと史家に見られているからである。なぜなら、「松下嘉兵衛之綱」の子「重綱」は、現在、茨城県伊奈町に国の重要指定無形文化財となって伝承されている『小張松下流綱火』というロケット弾のような花火を作ったという史実があるからである。

松下嘉兵衛之綱は今川氏滅亡後は家康に仕えていたが、そのことを知った秀吉は自分の家臣としてゆずりうけ大名にしたのである。しかし、之綱なきあと重綱は関ヶ原合戦では山内一豊らと共に東軍に加勢し、常陸国小張（現在の茨城県伊奈町）の城主となる。この時、領民に伝えたのが上記の花火である。また松下氏は重綱→長綱→長光と二本松、三春と栄進し、その後、高家旗本として明治維新までその血流はうけつがれたのである。すべては「秀吉」との出会いからである。なお余談だが嘉兵衛之綱の末娘は柳生十兵衛・宗冬の母となる。このことから松下家は今川家の透破を管轄していたという説も納得できる。そのうちの一人としてサル（後の秀吉）がいたのではないだろうか。さて、もう一人の近江八幡と関係のある人物とは誰れであろう、秀吉の主人となった「織田信長」その人である。

織田氏の出自が、越前国丹生郡織田郷の『織田剣神社』の神官であったことはいまや定説となっている。社伝によれば、弘安四年（1281年）元寇の役で功あった織田剣神社の神主・忌部親行が後家人となり織田荘の地頭を務めることとなり、その後、守護大名の斯波氏に従って尾張に進出、親行から六代目の織田常昌が尾張八郡の守護代となり、尾張織田家は主家分家など多く別れたが、信長はその常昌から11代目にあたるとされている。

当時の神職は、明治以降の神官と違い加持祈祷もする修験者のようなものまで含んでいたことと考えあわせれば、信長の祖先は金属技術集団と深い関わりがあったことになる。まず、地名の丹生からして製鉄・金属との関係を推測させるものである。また中世にあっては金掘りは船をあやつる川の民でもあった。つまり、信長の祖先がそうした存在であった場合、秀吉に関わる人は「山の民・川の民」の系譜にみなつながるのである。そのことを留意しておいていただきたい。そしてまた、話をつづけていこう。

当時はまだ、源平交代思想というものが世の武将達に信じられていた関係かよくしらないが、織田信長は「平氏」を名乗っている。それは、織田氏系図によれば、織田氏の始祖は平資盛（すけもり）から出ている「平親実（ちかざね）」が初代であるということからである。

平親実は壇ノ浦で死んだ平資盛（平重盛の二男、重盛は平清盛の嫡男）の第二子であるが、平家滅亡のとき生後ほどもない乳幼児であったが、その母某が津田の豪族の娘であったことから、親実をふところに抱いて近江にのがれ、近江津田郷にかくまわれた。その後、越前織田剣神社の神主が（津田）親実の境涯をあわれみ織田の養子にしたというのが、織田信長が祐筆に命じてつくらせた系図である。

歴史書を読んでいると、織田信長の周りには津田信澄（信長の甥・弟信行の子）をはじめとして津田姓の親族衆が多く登場してくるので、ご記憶に留めておいてほしい。当初は私も、なぜ「津田」姓なのかと疑問にも思っていたが、家系をひもとくと、その理由もなんとなく分かった次第であります。

近江の「津田郷」とはすなわち現在の近江八幡市である。北津田町と南津田町のどちらだったかということまではよく分からないが・・・。（推測で云えば南津田町ではなかったらと思う。現に、郷土史家の南津田町の西川新五良さんが、顕彰の碑を建設している。ついでに言うと、中ノ庄も本来は津田中ノ庄である。）

とにかく、秀吉に関わる二人の人物の出自が近江八幡市に関係あったのだということ、覚えておいても損は無いだらう。

さて秀吉に関わる人物で、秀次以外にこの近江八幡市に城をもった人物をご記憶だろうか。この人物は一時的な城主であり、この近江八幡市に深く関わっていないことから、本市の歴史のなかでも埋没させられていることが多い。その人の名は柴田勝家である。

永禄11年（1568年）に足利義昭を擁した信長は入京のため近江に侵入以降、近江平定に、坂本に明智光秀、佐和山に丹羽長秀、長光寺に柴田勝家、安土に中川重政、野洲永原に佐久間信盛、長浜に木下秀吉、安曇川に磯野員昌の七部将を配して分封支配したとある。この間、元亀元年(1570)の姉川の戦いや、元亀2年(1571)の比叡山焼き打ちなどもおこっている。その後、安土については信長の居城がつくられ、中川重政は元亀3年で失脚し、長光寺城の柴田勝家については、天正5年(1557)北陸の上杉氏に対抗するため転封（長光寺城は廃城）させられていくことになるのであるが。…いまに伝わる「瓶割柴田」の名はこの長光寺城に由来する。そしてその城のあった地を現在でも『瓶割山』と呼ぶ。このことは、別に「検定問題」として項を興しているの、後述することになろう。さて、寄り道はそれぐらいにして『秀次』の事に移ろう。

『秀次』は、尾張国大高（鷹）村にて、母瑞竜院日秀（秀吉の姉「とも」）と弥助夫婦の子として誕生している。そのころの名は「次（治）兵衛」といった普通の百姓の子として育てている。

しかし叔父である秀吉が出世して大名になると、7歳で両親とともに長浜城に引き取られ、すぐ秀吉の配下であった宮部継潤の養子となり武士の子としての教育を受けている。その頃になると安土の城づくりも行なわれており、秀次は実際に行き見聞もしている。12歳の時、秀吉の御伽衆であった阿波の名族三好康長（盛んな頃は京に武威を振るっていたが信長に駆逐され、没落し秀吉に老残の身を寄せていた）から姓をもらい『三好孫七郎秀次』（弥助・とも夫婦を養子にし、夫婦だけでなくその夫婦の生んだ子も孫にし、三好家のあととりとし世襲名である孫七郎を名乗らせたのである）と改名する。父の弥助も三好武蔵守吉（長）房（一路浄閑）と名を与えられる。

その後犬山 10 万石の諸侯となるも『秀次切腹事件』に連座して讃岐に配流となるがこれはもっと後のことである。

ともかく、秀次は幼き頃より叔父秀吉の庇護のもと、厳しく武士として育てられたことは確かである。秀次は奇運の恩沢をうけはしたが、彼なりに努力もしているのである。

叔父の秀吉に伴われて十代の半ばから合戦に参加している。むろん最初から一方の大將である。本能寺の変(1582)以降、天正 11 年(1583) 16 歳で元服したのちは、伊勢の滝川一益を攻め、また近江賤ガ岳合戦で柴田勝家と戦い、河内二万石の所領をもらっている。しかし、こうした合戦には、補佐役としての老将達が全てとりしきっており大過はなかった。また大功もなかったので賤ガ岳七本槍ともいわれる合戦史の中には名さえ載っていない。

彼が戦局を・・・というより歴史を左右するほどの行動をもったのは、翌年の天正 12 年秀吉と家康が対戦した小牧・長久手の合戦のときである。この時、秀次は遊撃軍の総大將であったが、田中吉政など老将(秀次付き武將)の進言を聞かず、木下利直・利匡兄弟、や池田勝入父子、森長可などの猛將を戦死させて敗戦したのである。

この時、勝っておれば後の徳川幕府は無かったともいわれるぐらい重要な戦いであったのである。この秀次の失敗に対して秀吉は激怒し、強烈な訓戒の手紙を秀次宛に送っている。

また、翌天正 13 年(1585)には紀州雑賀や四国攻めの功により近江八幡 43 万石に封じられるのであるが、しかし、前の合戦に懲りた秀吉は、秀次にはいずれも秀吉が織田家の將校の頃から手飼いにして仕立てあげた、中村一氏、堀尾吉晴、一柳直末、山内一豊の四人の大名を宿老として付けたのである。そのおかげで紀州・四国攻めにも大過なく勤められ羽柴の姓も許され、近江も与えられたのである。余談だが「功名が辻」で有名な山内一豊の妻「千代」は近江町の出身であり、田中吉政も北近江出身ということを入念に入れておいてほしい。さらに言えば、秀次の教育係＝家老は、蜂須賀正勝の弟分であった前野長康(秀次切腹時に殉死している)であった。

さて、『秀次』の八幡山築城であるが、地政学的にいうと、秀次が八幡の地を選んだのではなく秀吉がここに城を配することを決定したのであろうことは容易に推測されるところである。この年、秀吉は関白に就任しており、近畿一円に一族と近臣配置しその政権基盤を固めた秀吉は自身が信長の後継者であることをアツピールするために、一族の居城に織田家しか使用できなかった「金箔瓦」を使用させている。

この秀吉の「金箔瓦」の全国ネットワーク網は政治戦略としてもあったことが近年判明しているが、「かわらミュージアム」でそのことを秀吉・秀次にちなんで展示してもおもしろいと思うが・・・。

八幡山築城と同時に進行した山下町であるが、この築城や町割は主に宿老の田中吉政(後の徳川時代には筑前柳川城主となる)、堀尾吉晴などが担当したといわれている。

る。廃都となった安土の城下を移転させ、近郷の住民を集めて職人町や問屋町を作ったとされている。そしてこの時の町の形態が現在の近江八幡の基盤となっているのである。ゆえに、近江八幡の市民は秀次をして開祖と呼ぶのである。

ちなみに、後年秀次という保護者を失った八幡山下町の住民は、活路を行商に求め天秤棒を担いで全国に行脚し「近江（八幡）商人」の発祥の地となったと当市の観光パンフ等には載っている。これに水をさすわけではないが、すでにこの時代以前から、近江商人は全国的に有名であり、通商に影響力を持っていたことは歴史家の間では常識である。

古代より近江は日本の中心にあり交通の要衝であり、琵琶湖から全国八方へと道はつながっていくのである。（**であるからして** 『古事記』ではここを「天の八巻（やちまゐ）」と呼んでいるのである。）主な街道だけでも十指を数え地理的好条件にあったが、中世には、これらの街道に数多くの市庭（いちば）が開かれるようになる。この市庭の発達とともに室町時代には座商人の活躍がみられるようになる。早いものでは枝村（現豊郷町）の美濃紙商売本座や横関の御服本座が有名である。なかでも戦国期には佐々木六角氏や延暦寺の保護をうけ近江の座商人の覇者となったのが得珍保の保内商人である。しかし、この保内商人を中心とした近江商人の発展も思いもかけずに頓挫する。すなわち織田信長の近江侵入と楽市楽座の定めであった。これにより特権的座制度は廃されたが一面それは自由な商業活動を促すことにもなった。

織豊時代には、商業活動の中心は一時期、堺商人の手に移ったが、江戸時代には再び経済活動は近江商人の手に握られていくのである。すなわち近江は「近江（八幡）商人」の出現を待つまでもなく商業・経済活動の中心であったのであり、以前からその土壌があったということになる。堺商人が没落していく原因の一つに近江出身の武将石田三成が堺奉行になったことにあるという人もいるが、真相は定かでない。よく関ヶ原合戦を評して豊家の「近江派」と「尾張派」の戦いであったというが、戦で負けて実をとったということであろうか。これは太平洋戦争で負けた日本が経済で勝ったということと似てはいないだろうか。これは差別用語として死語になっているが「江州泥棒伊勢乞食」という言葉があった。江州商人の通ったあとには草も生えないという悪口と同じであるが、なぜ、このような偏見が生れたのか探る必要はある。強い財力、猛烈な勤労精神を持つ近江商人の進出によりつぶれてしまった商人がいかにか多かったかという、その証ではないだろうか。自由経済の原則に従えば商売は競争である。競争に敗れた商人の方が悪いということになる。競争に打ち勝った近江商人こそが称賛されるべきである。事実この江州商人の商業道徳や商道哲学は江戸期以来の商人の手本ともなり、今日の日本の経済界にもその思想は流れているのである。ゆえにいま日本は世界中から憎まれ袋叩きになっているのでは……。歴史は繰り返すである。もういいかげん意識を変えてもよいと思うのだが……。先見性も近江商人の特性の一つであったことを忘れないようにしてほしいと思う。

秀次の町づくりは、八幡山の一画を切り崩して沼地の水を抜き、町の西半分を占める沼地を埋め立て、埋立地の町並には上下水道を作るなど、広範な土木工事を伴うものであった。秀吉も八幡築城についてはなみなみならぬ関心を寄せ工事の進捗について書簡（秀吉朱印状・京大所蔵）を寄せている。秀次時代には「八幡山下町（さんげちやう）」といい、京極高次の時にはじめて「八幡町」と称している。周知のことと思うが、町は商人の住むところ、村は農民の住むところ、山は武士の住むところという観念が支配していたと考えられるのである。秀次は安土の住民（主に楽市楽座によって保護されていた商人）に呼びかけて八幡の町づくりに参加させている。現在に残る町名には安土の地名が多いのはそのためである。また先規により当八幡山下町も「楽市・楽座・諸役免除」とされ、これが後年、八幡城が廃城となっても、既得権として長く効力を発揮し、当地の発展に大きな影響を及ぼして行くのである。特に信長や秀次に従った商人達は楽市楽座令によって保護された政商であり、ゆえに進取の気性に富んでおり安南屋・シャム屋などの屋号をもつて海外にも進出していったのである。彼らを第一期の近江八幡商人とするなら、江戸期～幕末の近江商人は第二期と考えてよいかわれる。ついでに地名のことで言えば、宇津呂は、全国で播磨と近江の二か所である。播磨の宇津呂は陰陽師の一大中心地（芦屋市の芦屋は陰陽師の芦屋道満からきている）であったことから、当地もその系統を引くものと考えられるのである。芦屋道満のライバルと言われたのが「恋しくばたずねきてみよ・・・」で有名な葛の葉狐伝説の安部保名・清明親子である。なぜ、陰陽師のことを触れるのかということ、秀次あるいは千利休事件では、秀吉・秀頼を呪狙したとの嫌疑がかけられていたからあえてその脈絡に言及しておこうと思った次第である。

さて、天正13年に近江八幡（八幡山城）の城主となった秀次は、翌天正14年に、池田恒興の娘を妻とし、（後に亡くなり、後述するが、大納言菊亭晴季の娘一の台といわれた資子（とこ）を正室とした）、今に伝わる八幡山下町定書を発布している。

この天正13年から天正19年に関白となり京都に住むまでの6年間の八幡城主時代の（天正18年には尾張清洲100万石に転封となるが、奥州に出陣中であつた。実質は5年間ともいえる。）『秀次』はまさに、青年武将であつた。小田原や奥州や九州鎮圧に一軍の大將として転戦して武功をあげている。後年噂される「殺生」関白とは、まったく違った人物像として町民には映っていたであろうし、本市に伝わる資料等にもそのことはうかがわれる。市の観光パンフや郷土史研究会の方々の執筆されたものにもそのことはくわしく書かれているので興味のある方は参考にご覧ください。ようお願いします。

さて、秀次に悲劇がおとづれるのは、関白となり京都に住んで以降のことである。

4)、「関白・豊臣秀次」としての悲劇

天正13年、秀次が八幡城主となる年に、秀吉は『関白』となっている。これには後年、秀次の義父となる右大臣菊亭大納言晴季が朝廷に働きかけたとされ、また前大政大臣近衛前久の養子に秀吉をし「藤原」姓を与えて『関白』となしたとある。のちに朝廷から「豊臣』姓を賜るのであるが。とにかく菊亭晴季の働きにより秀吉は「関白」となりまた「太閤」となるのである。そして秀次はというと秀吉の後継ぎとして豊臣姓に改め「豊臣秀次」として「関白」を宣下されることになる。

当時の武将の間では、源平のどちらかが「征夷大將軍」となるという慣習があったが、秀吉はそのどちらも継いではいなかった。そのため武家最高の称号「征夷大將軍」のかわりにと、菊亭晴季が忠言し、奔走して前代未聞の「関白」となることができたのである。秀次のことに触れるにはもうすこし、この大納言「菊亭晴季(はるすえ)」のことについても述べなければならないだろう。なぜなら、秀次の切腹事件にこの人も重要なキーマンになるからである。菊亭晴季をして朝廷内の豊臣派プロデューサーともいう。

菊亭晴季の朝廷内の努力によって、秀吉が藤原秀吉となのり「関白」となることができ、また朝廷から「豊臣』姓を賜り「太閤」となることができたのも史書の示すところであるが、この菊亭晴季という人物の関係者には、なかなか面白い人々が周囲にいたのである。まず、お菊御料人と呼ばれる「菊亭晴季の妻」であるが、彼女は武田信玄の妹である。武田信玄の正室は公家清華三条公頼(さんじょうきみより)の娘である関係から武田信玄の妹が傍系の晴季に嫁いだものだろう。さらに晴季とお菊御料人との間には子がいて、そのうちの一人の娘は真田昌幸の妻であり、真田信之、幸村の母である通称「山の手殿」といわれた人である。またもう一人の娘は、秀次の正室となる一の台・資子(ともこ)である。秀次は当初池田恒興の娘と結婚するが病死してしまい、その後添として一の台・資子が正室となるのであるが、その娘ともども秀次事件に連座して三条河原にて打ち首となる運命にある。

菊亭晴季は、血縁だけでなく交友関係も、広くすごいものをもっている。例えば、吉田神社の神主吉田兼見、連歌師の里村、権中納言の観修寺晴豊、前関白の近衛前久など。この四人は「本能寺の変」のときの陰の人物たちである。また、千利休・千宗易などとも交流している。であるからして、秀次の切腹事件の裏には、この菊亭晴季が秀次の義父であったことも関係しているのではないかと考えられるのである。つまり菊亭晴季が秀次の後盾となっているかぎり、関白・秀次政権は安泰となるからで、それを恐れた一派による謀殺とも考えられなくはないのである。

では、秀次を陥れた一派とは誰なのかを、これから推察していくことにしよう。

秀次の悲劇は、お拾(おひら)のちの秀頼が誕生した時からという人もいるが、私は近江八幡城を去ったときからと考える。すなわち、天正18年の全国平定に伴う配置転換がそれである。秀次の家老として付けていた水口の中村一氏を駿河の駿府城へ、佐和山城の堀尾吉晴を浜松城へ、山内一豊を遠州掛川城主へと四人の宿老を秀次から離

し、代りに近江出身の武将木村常陸介重滋（大阪夏の陣で活躍した木村重成の父、木村重成は馬淵村に居住していたとも言われている）を付けたときから始まったと考えるものである。

また、実際の秀次公の切腹の真相というものも詳しくは分からない。秀次公が「殺生関白」と都人に呼ばれるようになったのは、正親町天皇が崩御し、その喪のあけないうちに比叡山で狩りを行なったからだと言われているが、それがどうも後年の偽造くさい。彼は白銀 5000 枚を朝廷に献じておりまた、教育文化活動にも熱心に取り組んでおり、秀次を処罰する程の理由は見当たらないのである。これは秀次の事件と相前後しておこった千利休切腹事件にもいえることである。なぜ秀吉は豊臣政権に必要なこれらの人材を切り捨てたのであろうか。これは裏話として伝わっていることだが、すでにこの時期秀吉は梅毒に侵され正常な判断が出来なくなっていたというのである。これにはなんら証拠はないが、後年、秀吉は目を患い、幾度か有馬温泉に出かけているのが気に掛かるのである。

秀吉が寝小便を垂れたというのもこの頃である。有馬温泉に秀吉はよく通ったというがこれは病気の治療ではなかつたろうかとも言われている。

とにもかくにも秀吉は朝鮮出兵計画に専念する必要から、自身の政務負担の軽減を図って養子の秀次に関白職を譲り国内の統治を代行させたのである。だが、ここにきて秀吉の弟の秀長の死、それに続く、秀長の養子で秀次の弟にあたる秀保の急死、また岐阜宰相とも呼ばれた秀次の弟で同じく秀吉の養子となった小吉秀勝（秀勝という名によほどの未練があるのか秀吉は三人の養子に同じ秀勝という名をあたえている）もこの頃に亡くなっているのである。これらは偶然なのかはた又陰謀なのかは定かでないが、とにかくほぼ同時期ぐらいに亡くなっているのである。（大和の豊臣秀長・秀保に仕えた藤堂高虎が関ヶ原では徳川に味方した真意は案外ここら辺の謎にあるのではないかと思われる。）そして最後のひとりであった秀次も死罪となる。こうして豊臣家は滅亡していくのである。ただし、例外として小吉秀勝の娘＝完子は、九条家に嫁ぎ、その子孫は公家社会に大きな足跡をのこし、現在の天皇家へと血統が伝えられていくことになるのである。

また、仮に秀吉が梅毒に侵されていたとしたら、その頃誕生した秀頼は誰の子なのだろうか。（・・・これはあくまでも仮説での話である。正史では絶対に否定されるであろうから・・・）

そこで仮説ついでに、もし秀頼政権が誕生していず秀次が政権を執（と）っていたなら、歴史はどうなっていたかということ、シミュレーションしてみたいと思う。

5), 仮説「秀次政権誕生」

前述したように、秀次には豪傑といわれた近江出身の武将・木村常陸介がついており、この人物は秀吉には石田三成といわれたと同じような立場にあり、石田三成より

も人物としては格は上であったように思われる。秀次にはおかしな収集癖があり、柴田勝家の金の纏や武刃者といわれた者の戦場装束をあつめていたが、そのなかに木村常陸介の陣羽織も含まれていたという。伝聞もある。

さて、関白となった秀次であるが、最初から秀吉の後継者として存在していたのではない。秀吉には多くの養子がいて、その養子全部がライバルだったからである。しかし幸運にも秀次には多くの有能な家臣や、ブレーン・人脈が存在していたのである。

前野将右衛門長康も秀次派の有力な一人であった。前野将右衛門は墨侯城以来の秀吉の家来であり蜂須賀小六とともに使えたいわば譜代衆である。その彼が秀次派にいたということは、すでに秀吉の後継者と秀次は見られていたということである。(実際にも、秀次事件に連座して前野将右衛門ともに切腹させられているが・・・)

伊達政宗も秀次と一才しか年が違わないことから、秀次とは仲がよく親交があったし、細川忠興も秀次とは借金の借り入れなどするぐらいの交流をもっていたと史書にある。このふたりも危うく秀次事件に連座するところであったが機知により切り抜けたとある。

『豊臣秀次』を姓名鑑定すると天格24，人格13，地格13，外格24，総格37となりすべてが吉数。申し分のない名前なのである。若くして頭領となり、性格は明るい。もし晩年まで生きていれば、温厚誠実な人柄が人々の信頼を勝ち取り、おそらく文化学術面の庇護者として、名君になれた人物であろう。ということである。もし秀頼が生れなかったら十中八九、秀次・政宗政権ができていたに違いないといわれている。そうすれば徳川家康の目もなく、歴史も大幅に変わったはず・・・だろう。

そうすると、当時においてもすでに秀次政権の基盤は完全に整備されていたことになる。秀吉が朝鮮侵略中に九州名護屋城から秀次宛に送った手紙(朱印状)にも、そのことが書かれており、うかがえるところである。

個条書きにすると『1. 秀次を明国の関白に就任させ、日本の関白は羽柴秀保にする。2. 秀次には北京のまわり百カ国を与える。3. 高麗総督は羽柴秀勝か宇喜田秀家をおき、九州には羽柴秀俊(秀秋のこと)を置く。4. 天皇を北京へ移し御料所として十カ国を献上する。後継の日本の天皇は周仁皇太子か智仁親王(秀吉の養子となった八条宮のこと後に桂離宮を作った)にする。秀吉自身は、寧波(ニンポー)に居を構える。』というものである。無知の産物か、天皇すらも巻き込んだこの明国征服計画書は、もはや妄想の産物としかいえない代物である。しかも、これが日本の最高権力者によって発表されたのだから冗談ではすまされないのである。滞陣中の武将たちの間でもこの一件は大いに話題となったとある。歴史は繰り返すと言うが昭和に入って中国侵略を行なった遠因も案外このへんにあったのではないだろうか。妄想的人格の持ち主が国民の支持を受けるケースはままある。ひょっとするとアジア侵攻の夢は秀吉個人あるいは一部の軍部だけの夢ではないかもしれない。

それはともかくとして、秀吉が太閤となって以降、急速に彼の老いと狂気と悲劇が

始まっていく。天正19年、公私ともに彼の腹心であった千利休を切腹させ、翌文禄元年(1592)には朝鮮出兵を決意する。そして文禄5年には、謀反の罪で甥の秀次を高野山で切腹させ、妻妾30数名を三条河原で処刑したときは、誰の目にも彼の狂気は明らかとなった。そして悲劇は彼の狂気を誰も止めるものがいなかったということである。よき補佐役であった弟の秀長も亡くなり、秀保、秀勝、さらには蒲生氏郷、大政所そして千利休と次々と歯が抜け落ちるようにして、秀吉の周りから人物がいなくなっていくのである。

秀次の側近の一人に、熊谷大膳亮直之という武将がいた。彼は熊谷次郎直実の後裔で家はかつての室町幕府における譜代の名家であり若狭の城主でもあった。その彼は秀頼誕生の時から秀次の将来に危惧をもち、それとなく用心するように秀次にすすめている。つまり秀頼誕生と同時に豊臣政権下の権力争いが水面下で行なわれたと見るのである。

もし、秀吉が没し、秀次の代になれば、秀吉付の石田三成らは権勢を喪失せざるをえない。逆に三成らの政敵であった木村常陸介らが威権の座につく。それを防ぐには、いそぎ秀次を失脚せしめ、嬰兒の秀頼の継嗣権を確立しておくことである。さればこそその謀略による対立「治部少(三成)のざん言」説もあるほどの陰謀説が世間で流布されたと考えられる。また秀吉自身も自分の老衰を知り秀頼の幼さを考えたとき(理性の梁のはずれてしまった秀吉が)秀次を殺して禍根を断とうとしたとも考えられる。

ともかくお互いの疑心暗鬼も手伝い、秀吉と秀次の溝は急速に深まり、秀次などは外出時には必ず秀吉からの襲撃に備えて供のものに甲冑を用意させていたといわれているぐらいである。事態はそれほど深刻であったことがよくわかる。熊谷大膳亮などは秀次に、座して死を待つより、むしろ逆に伏見を襲い太閤や淀殿・秀頼を殺し、一挙に政権を安定させるべきである。その兵略はこうである。と進言までしている。(関白には七手組といわれる近衛軍たる2万の軍団がいたはずである。それを動かしていたら歴史は変わっていたかもしれないのである。)

そのころになると、武将達も注視して兩人の動きを見張っていたのである。家康なども江戸に帰る際、京に残った世子秀忠に対して「太閤と関白の間に兵戦あらば、太閤に味方せよ。太閤万一にして落命すればすみやかに大阪にくだり、北政所を護衛せよ」と言い残しているぐらいである。

すでに世間がそこまで過熱しはじめている以上、秀次も動かざるを得なくなり、熊谷の意見を容れ、朝廷に白銀5000枚を進納するのである。将来、成り行きによって秀吉を倒した場合、すみやかに新政権を承認してもらう用意であった。これが文禄四年七月三日である。このことが即、伏見に洩れて詰問使がやってくる。これは死の使者である。白銀進納から二日目のことであった。

このとき、秀次が使者の要請を断り出ていかなければ、まだ時間は稼げたであろうし、その間に合戦の準備も可能ではなかっただろうか。秀次の母「日秀=とも」や北

政所のとりなしや工作も行なわれたであろうから、切腹させられずにすんだかもしれない。また、しばらくはおとなしくしておれば、いずれ太閤も亡くなり、秀次の復活もありえたかもしれないのである。なにせ、今風に『豊臣株式会社』でいえば、秀次は社長であり、秀吉は会長で秀頼は専務にあたるわけで、社長派と会長・専務派の派閥争いという構図が浮かんでくるのである。そして狂気に支配された会長を倒すことは『豊臣株式会社』を倒産から救うことであり、正義という大義名分は社長派にあったと見る事が出来るのである。

千利休という会社相談役もこうした狂気の会長の方針に逆らい反対したために切腹させられたと見るのが正しいのではないだろうか。弟の豊臣秀長も病死とはなっているが、朝鮮侵略に反対派だから、処分されたという見方もされる。秀吉の老害はそこまで浸透していたのである。こうして次々と反対派を肅正していった専務派だが、会長が亡くなると同時に、狸の常務にしてやられることとなるのである。

後日の関ヶ原の合戦時に、社長派と目された武将が多く常務側についた。これは前述したように細川忠興など秀次の疑獄に関連し、あやうく同罪となりかけたときの三成への恨み・・・実際には秀吉とその政権への恨みが、秀吉の死後、彼らをして家康に走らしめる結果となったのであることをご記憶に留めていただきたい。俗に言えば秀次事件は、世に言う『殺生関白』だから起ったのではなく、『豊臣株式会社』内のお家騒動であったわけである。つまり秀次側からいえばクーデターをする前につぶされてしまったというのが真相ではないだろうか。秀次が世間から学問好きの関白殿といわれていても、しょせんは戦国の武将であり、かつ安土の信長の気風を色濃く引き継いだ人である。死に向かっても平然と碁を打っていたというエピソードは、なにかしら信長をほうふつとさせるものがある。本市の近江八幡を開町した「秀次」公を、市民には、それでこそ開祖であるという誇りを持ってもらいたいと願うものであるがゆえに・・・。

歴史に if はないが、もし秀次が政権を打ち立てていたらどうなったであろうか。

考えられる有力な幕僚となるのが、蒲生氏郷である。彼も秀次事件の前に急死しているが、毒殺だったという説もある。蒲生氏郷の天下への野望を警戒されて石田三成（ここでも石田三成が出てくる）らに謀殺されたのではないかという話もあるぐらいだ。少なくとも、彼、蒲生氏郷は秀次とは親交があったし、千利休の高弟でもあった。蒲生氏郷は近江日野の出身で、織田信長の薫陶をて受け成長している。信長の楽市楽座・商人育成策を目の当たりにして育った氏郷は、日野、伊勢松阪、会津若松と領地が変わるたびに、城下の商人育成に努め、近江商人の育ての親ともいわれる人物である。そこには、民を富ませ自らも富むという領国経営に当たって卓越した才能を有し、いわば天下人として不足のない気質をもった人間であったことが想像される。だが、そのことがかえって時の権力者豊臣に警戒され、時の権力によって圧殺されていく悲

劇をここにみるのである。

戦国時代の親子関係の気風というものは、現代の平和に慣れた我々では想像することもできないぐらいシビアで厳しいものがあつた。例えば、結城秀康が徹底的に父の徳川家康に疎まれたのは、秀康が父をしのぐ牙を持っており、家康にとっては常時警戒を絶やすことのできない身内の敵（ライバル）だったからである。また六男の松平忠輝にしてもそうであつたがゆえの運命である。忠輝は伊達との関係から家康に冷遇されている。

話を氏郷と秀次の関係にもどそう。近江八幡城の城主だつた秀次は、商人の保護にも尽くそうと、氏郷の楽市楽座を活用した商人育成の方法について意見などを聞いている。

蒲生氏郷も秀次と同じく織田信長の業績に憧憬し信長の政治を踏襲しようとしたひとりである。

ゆえに、石田三成などは、極端に氏郷と秀次の結び付きを恐れたと思われるのである。なお、余談であるが、石田三成・前田玄以などの奉行派は、豊臣秀長・千利休及び今井宗久、津田宗及とも対立をしており、天正19年正月に千利休の最大の擁護者豊臣秀長が病死すると、同年2月すぐに千利休を失脚させ処罰し切腹させているのである。千利休に少し遅れて今井宗久、津田宗及もこの世から消え失せているが死因は明らかでない。確かなことはこれを境にして堺商人が没落していき、文治派とされる5奉行らの中央集権派が台頭し秀吉の政策決定に大きな影響力を行使するようになっていったことである。そして後は、石田らの奉行派の次の標的は、秀次を中心とする勢力であつたわけである。

お拾を中心に豊臣家の中央集権の支配を画策する石田派からみれば、氏郷や秀次は、千利休一派や徳川家康や前田利家ら分権派と同じ様に、油断ならざる強豪である。派閥で分ければ、あきらかに石田派とは相容れない立場にたつ一人であつた。この時、蒲生氏郷は徳川家康や前田利家に次ぐ天下三番目の大大名であり千利休の高弟子でもあつた。ゆえに彼・氏郷が四十歳で病死すると「蒲生殿は石田治部らの手の者に毒を盛られて殺されたそうな」という物騒な流言が民衆の口から口へと伝播していったのである。

そして、さらに追討ちを掛けるように石田ら五奉行の手で蒲生家の取り潰しの画策がされ蒲生鶴千代（秀行）に対しては太閤の朱印状による会津の知行地剥奪と跡目相続の資格喪失までが沙汰されたのである。これはその事件の前に、家康の娘と蒲生鶴千代の婚姻をめあわせる条件で鶴千代の相続の許可を関白秀次が与えたところであつた。その直後の事である。いわば真っ向から石田派は関白秀次の権限を否定する挙に出たのであつた。

秀次の側も、だまって指をくわえて見てはいなかつた。ただちに蒲生鶴千代に対し

「家督相続の件はもとどおり認める。安堵するように・・・」との通達を出した。

秀吉や石田らによって否定された関白職としての権限を、秀次はさらにもう一度はね返してのけたわけである。氏郷の遺児・蒲生鶴千代と遺領を火種にして、秀吉や石田派らと秀次の対立は、一挙に燃え上がっていくのである。

つまりこの時期、豊臣政権は、関白秀次と太閤秀吉の二重政権になっていたのである。太閤というのは関白職を隠居した者つまり会長職であるが実際の会社の運営は社長（関白職）が行なうものである。秀吉は秀次に関白職を譲りはしたものの、政策の実施にあたっては、一々関白職を通さねばならなかったため、ジレンマに陥っていたのではないだろうか。そのために関白職を秀次から取り上げようとしたとも考えられるのである。そのことに気付いていれば（気付いていたかも知れないが・・・権力の魅力に未練があったのか・・・どうか、その点はよく分からないが・・・）秀次としても早く手を打つことができ、切腹などしなくても良かったかもしれないのに・・・

秀次は史実でも、文芸・学問を愛好し公家との交際も上手で、宮中での評判も悪くはなく「文の君」と呼ばれていたと言われているのである。実際豊臣政権は公家政権である。また、秀次が秀吉と同じ異類・異形の系譜に属することも忘れてはならない。なぜなら彼もまた陰の出身なのだから。それゆえに秀頼の誕生とその秀吉の溺愛ぶりに自分の立場がどうなるか、を考えていくうち次第に心のバランスを崩していったともいわれるのは後世のねつ造とも考えられるのであるが、真実は分からない。なにせ小牧・長久手の戦いでは徳川家康に惨敗を喫し、池田恒興や森長可といった武将を打ち死にさせて秀吉に手討ちにされかかった過去が彼にあったからである。

この秀次を邪魔だと思ふようになったのが淀殿と石田一派である。秀次を排除するために謀反を企んでいると虚説をでっちあげるのである。秀吉がこれを信じたかどうかは疑問であるが、しかし秀頼のために何でもしてやりたい秀吉にとっては、その真偽はいつでもよかったのである。このあと秀吉は狂喜の沙汰ともいべき断を下すのである。

さらに、それからしばらくして今度は、秀次の実弟の豊臣三吉秀保（秀長の養子となっていた。秀長が死んだ後その遺領を相続している）の「不慮の死」（文禄4年4月）である。秀保は大和の十津川で急死しているが、秀次と木村、前野ら側近が細作を放って調べたところ、その下手人は大阪城に入ってかくまわれたという。いずれ秀保が秀次の扶翼となり、お拾（秀頼）の敵に回ることを恐れて始末されたであろうことは明白である。秀次の切腹はこの秀保の怪死からわずか3ヶ月後である。まさに泥泥の権力闘争である。

この少し前の文禄の役にては丹波少将「豊臣（小吉）秀勝」（秀次の実弟）が朝鮮に出兵途中に巨済島で病死（文禄元年九月）している。また文禄元年には、秀次の擁護者であった祖母の大政所が亡くなっている。このように秀次の悲劇は秀次を擁護してくれるはずであった伯父秀長、祖母大政所、実弟（小吉）秀勝・秀保という身内や

千利休・蒲生氏郷などの有力者を次々と失っていったことにある。また伊達政宗さえ秀次事件に連座して処罰されるどころであったのである。彼もまた一味と目されていたのである。

高野山追放の前に、秀次を伏見に召喚しながら（秀吉は）面会せず、釈明の余地を与えなかったのは、謀反の事実関係を問い詰める必要が無かったからに違いないのであり、それゆえ「謀反」はあくまでも処罰の名分であっただけということになる。その点、黒田官兵衛は上手であった。秀吉が官兵衛を警戒していると知るとすぐに剃髪して隠居し、家督を長政に譲って中央の政界から身を引つつ天下を狙ったのだから。秀次は伏見に召喚された折、側近の熊谷大膳に抗戦を献策されたが「大罪人とされようと秀吉公の御意次第」と語ったというが、これをもってしても秀次には秀吉と対決する意志がなかったことは明白である。この時期、秀次には七番隊からなる「関白衆」軍団が秀吉から預けられていた。この軍団は有事の際の出陣を予想した関白秀次の直属軍である。朝鮮遠征に全力を傾注しようとした秀吉が国内の治安保全のために秀次に総指揮をまかせたもので、秀次が存分に働けるようにと豊臣政権の軍事統率権の象徴ともいべき黄金の瓢箪（ひょうたん）の馬標まで譲ってもらっているのである。だから明智光秀と同様に本能寺を再現しようとするればそれは可能であったのである。だが、秀次はそれをしなかった・・・

三条河原で処刑された秀次の正室一の台は「秀次公には謀反の意思などゆめゆめなかった。すべては石田三成らに謀られてしまった。でもこの上は潔く死にましよう」と覚悟し『心にもあらぬうらみはぬれぎぬの つまゆえかかる身となりにけり』と詠んだのであるが、この心境は秀次も同じであっただろうと想像する。この秀次一族に加えられたむごい仕打は京の人々を震撼させ町中に『天下は天下の天下なり。今日の狼藉はなはだゆるしがたし』という落書が張られ、秀吉最大の汚点として、民衆の大非難を浴びたのである。

これは、北政所の甥である「金吾秀秋」にも云えたことである。木下家定の子として生れたが伯父秀吉の養子となり一時は秀吉のおぼえめでたきも、お拾（秀頼）が生まれてからは、豊家から厄介払いされて他家（小早川家）へ追いやられたのである。もしこのあと、関ヶ原合戦がなければ、おそらく秀次とおなじく、病死の名の下に密殺されるか、いずれは難癖付けられ左遷閉門、悪くすれば切腹という事態に追いつめられたであろう。このことの恨みが「金吾秀秋」にはあって石田方の西軍にはつかなかった（躊躇した）ということは歴史の示す事実である。

ついでながら説明しておく、また最上義光も伊達政宗と同じく秀次の切腹事件に際しては、秀次に加担していたとの嫌疑で拘禁された一人である。最上義光の二女の駒姫が秀次の側室となっており、その駒姫も京の河原で処刑されているのである。最上義光の愛娘を失った悲しみは深かったと『最上義光物語』にある程である。義光の嫌疑は晴れ拘禁も解かれたがその処置の恨みと憤り消えず、故に関ヶ原では東軍に組

みしたのである。このように当時の秀次派というべき武将のほとんどは関ヶ原合戦では反石田派になったことは記憶に留めておかれたい。

とにかく、秀吉の死後豊臣家は滅びることになるが、なぜ滅びることになったのかというと秀吉自身が築いた政権運営システムを自らが破綻させたからである。秀次の切腹後、秀頼に対して大名から忠誠の誓紙を提出させ政権を一本化させようとするが、覆水は盆には返らないの例えのとおりとなってしまったのである。

ともあれ、将来、豊家の藩屏となるはずの甥たちの存在を、お拾（秀頼）可愛さのあまり葬り去ろうとする秀吉と石田ら五奉行に対して、この時点で秀次が降りかかる火の粉は払わねばならぬとして、武力でもって叛意すれば、どういう結果になったであろうか。

おそらく太閤秀吉の生存しているうちの挙兵は失敗に終わったであろう。恐らく徳川家康らの有力大名は秀吉の味方についてであろう（それを承知していたがゆえの、以後の秀次の高野山までの消極的とも云える行動であろう、と想像するのであるが・・）しかし秀吉の死後の政権取りであったならばその結果は分からない。政権を奪取していた可能性もある。

もう一つ仮説として連想できるのは、石川五右衛門の釜茹の刑である。文禄3年8月に三条河原で五右衛門ほか一族19人が処刑されている。たかが盗賊でこれほどの刑はめずらしい、と山科卿の日記にもある。もし五右衛門の陰に秀吉暗殺計画があったとしたら、そう考えれば翌年の7月に、時間は違うが同じ場所で豊臣秀次一族の処刑劇があった理由も理解できそうである。でもこれも秀吉側の狂言だとする人もある。秀頼に跡をつがせるだけならなにも秀次一族にあそこまで残酷な事をする必要などなかったはずなのに。いまに残る「殺生関白」の名も、秀次には「ご乱行を繰り返す悪逆非道な男」でいてもらわねば、秀吉のした行動を正当化できなかったからである。事件当時から秀次に同情をよせる声が公家や民衆のなかにも多かったのも事実である。乱行や陰謀・謀反の話が秀吉側のデッチ上げであったといっても過言ではないだろう。そのときの権力者により、いつの間にか偽言が「歴史的事実」として定着してしまったからだと思う。（そろそろ全国的にも、殺生関白秀次の評価を考え直してもらおう時期にきているのかもしれない。）この時点でのターニングポイント・ifは、お拾（秀頼）の誕生を機に、一切の官位・職権を返上し、「父吉房と母とも」のいる犬山に引きこもって、時節を待つことであったと思う。それも歴史の動きを見ているからこそ解ることであるが、・・・

名目は何とでもいえよう。それゆえに秀次の母ともは弟秀吉宛に書状をしたため老臣・中村一氏にもたせたのである。「当の秀次自身、おのれの不徳はよくわきまえており、学問にせよ、武技にせよ、政事にせよ、太閤の信任に応えるべくそれなりの努力は払っているが、未熟はやはり、いかんともしがたい。この際、一切の官位・職権を辞し、一武将にたちかえり豊家の固めたる本分をつくすよう太閤より秀次にお申付

け給るまいか。・・・太閤の仰せに背くなどということはゆめゆめ、ありえず、なにとぞ誤解があればそれを解き、秀次の身柄ひとつにて老父母の手にお返しいただきたい。」だがその書状は、時既に遅く、太閤からの詰問使がすでに京に向かっていたのである。このあとの行動については歴史の示すところであるが、この書状が詰問使より先に着いており、また秀次も朝廷への献金などせず太閤に謀反の疑いをかけられるようなことをしなければ、まだまだ生き延びられる可能性はあったと考えるのである。

母「とも」のいうとおり、犬山に引き込んでさえいれば、時代は「秀次の復権」を必要としたに違いないのである。そうなれば、徳川家康の出番も無かったに違いない。なぜなら、秀吉に対する秀長の関係のように、秀頼には秀次という身内の補佐役が豊臣家と豊臣政権にはまだまだ必要であったし、また彼、秀次のまわりには、木村常陸介・重成親子、前野出雲守長重・長康親子、稲葉典通、服部春安、一柳右近将監らの勇将といわれる側近衆をはじめ、守役の田中吉政・中村一氏ら宿老連、それに伊達政宗、蒲生秀行、前田利家、細川忠興、最上義光、毛利輝元、浅野幸長らの有力武将大名や、結城秀康、小早川秀秋、宇喜多秀家らの秀吉の元養子組（兄弟衆）が付いていたからである。さらに、秀次の剣の師となっていたのは、剣聖と言われた上泉伊勢守信綱の高弟で足利義輝にも剣を教えたといわれる神後伊豆守宗治であり、刀槍術の師は、同じく上泉伊勢守信綱の高弟で、疋田陰流の開祖となる疋田文五郎である。このように、そうそうたる人物が豊臣秀次の周囲にはいたのである。ちなみに、彼らの兄弟弟子に柳生石舟斎がいるわけで、後年いわれるような徳川家康と柳生一族の関係のように、秀次にも陰の流れのような組織はあったのではないかと想像されるのである。これまた蛇足であるが、織田信長における森蘭丸のように秀次と不破伴作、蒲生氏郷と名古屋山三郎という陰間（男色の相手）の話などは世にきこえているところである。

また禁裏には顔の効く正室一の台資子の父である菊亭大納言がいた。八条宮もいる（逆に云えば、謀反すれば一大勢力となり成功も可能と思われた。それゆえの急いで秀次の処罰であったと見るができるのである。ちなみに、後年史実では秀次の守役であった田中吉政は関ヶ原では東軍についたばかりでなく、伊吹山中に隠れていた石田三成を見つけだし捕えたのは田中吉政の手の者であったとある。それほど同じ豊家の家臣であった者たちだが、秀次事件に対する恨みの根は深いものがあったと見るができる。田中吉政も近江出身の武将であることは前述のとおりである。このように近江人は秀吉・秀次政権には数多く存在した。）

このとき太閤秀吉が死に、秀頼の後見人として秀次が復権したならば、日本はどうなっていたであろうか。おそらく徳川家康は操縦しやすいと判断して賛成支持したであろう。こういったシミュレーションを考えるとついつい想像してしまっていてわくわくしてくるのであるが、それはifが起った場合の話である。この手の話は私自身大変興味があるので、また時間があれば小説風にして書いてみたい気がするが、ここではやめておくことにしよう。でも、いま私の考えている構想の概略だけを示せば、(折

角いい発想をしたので、このままお蔵入りさせておくのもおしい気がするので、少しだけ i f しよう)

これは、シミュレーションであって架空物語ではない。架空はありもしないことも書けるが、シミュレーションは実際の史実の現実在即して展開するものである。

《シミュレーション》

シミュレーションするにも色々なパターンがある。秀次が軍事行動を起こした場合、また秀吉の気が変わり切腹せずに済んだ場合、あるいは秀頼が急死した場合などである。ここでは母日秀（とも）の取りなしが功を成し、家康や伊達政宗の努力により秀吉との面談・弁明により関白職を解かれたのみで生存できたところからスタートしてみたいと思う。

ここから小説風にするとよいのだが、もうページ数も数多く費やしたので、期待を裏切って申し訳ないが、今回は、その構想の骨子だけを以下に記載するに留めおきたい。

○朝鮮出兵の中止と講和

秀次が、母ともや北政所のとりにしにより、一命をとりとめ、高野山から、八幡山に引きこもって（1595年）難を逃れて後、3年後の慶長3年（1598）8月に秀吉は大阪城で生涯を終える。この時、秀頼6歳である。

本来（史実）なら三条河原で秀次とともに処刑された秀次の娘が秀頼の正室となって大阪城にいる。（史実では家康の孫千姫がその役についている）史実でも、この秀次の娘は、秀頼の誕生三か月目にして秀吉が決めた縁談の婚約者であって、このとき秀吉は秀次に日本の五分の四を与え、五分の一を秀頼に残すことを約束しているのである。

秀次は、秀吉の死後ただちに、菊亭大納言らの人脈を使い、関白に復権し（ちなみに、豊臣姓で関白になったのは秀吉と秀次のふたりだけである）また親交のあった伊達ら武将の武力を背景に秀頼の後見人として、朝鮮出兵を引き上げさせて、明・朝鮮と和睦する。この頃の時代になると「政権は実力のある者がとる」という戦国時代の常識も薄くなり一層中央集権化が進んでおり、また国内で産出する金・銀の豊富さによる貨幣経済が発達している時期である。北政所（後陽成天皇から賜った名前は豊臣吉子「よしこ」）の助力もあり（これには母とも陰の支援による）豊家子飼いの加藤清正らの武将や秀秋・秀家ら豊家の親族衆も秀次に協力してくれることになった。また亡き弟秀保の家臣藤堂高虎や小吉秀勝の家臣団もいる。但し徳川家康は無傷で関東を領して虎視眈眈と天下を狙っているが……。また秀次には、秀吉が作った異能集団を動かせる人物がいた。例えば側近の前野長康氏であり、また父である弥助（農民とあるが実際は「つなさし」=鷹匠の配下の者と『祖父物語』にはあるぐらいだから非

農耕民である。徳川の本多正信も鷹匠であったとされる異能の仲間）である。また叔父にあたる杉原家次も元は尾張津島の行商人であったし、秀吉の継父も阿弥号を持つ時衆の徒であり方外人（世間の外の人という意味で、賤民階層の人々を指す）であった。また黒田官兵衛の祖父は広峰神社の目薬屋で財をなした近江人であり諜報組織を持っていたとされる。竹中半兵衛も鍛冶屋や木地師に影響力をもっていたという。（実際、史実では秀吉の葬儀が京都で行なわれたとき寺には異形・異類の者が多くあつまってきたとある）

これらの人々が秀吉に力を貸したからこそ、天下を望める強力な秀吉軍団ができたのである。その遺産＝異能者といわれる職能集団である非農業の人々の力を秀次は継ぐ資格を持っていたのである。繰り返す言うが、卑しき身分の者で関白までなったのは秀吉と秀次だけである。それは暗黙のなかで秀次が歴史の中の陰の者達の棟梁（頂点）に立つということである。

○重商主義の発達

ゆえに、朝鮮から撤退した秀次は、期せずしてその民衆のエネルギーを交易へ向けたに違いない。この頃、日本は異能者達のおかげでゴールドラッシュに沸き立っており、秀次は有り余る金銀を中心に流通経済に切り替えたであろう。もちろんその中核は近江商人である。堺の商人も海外に雄飛するだろう。石高では家康の二百七十万石と大差ない直轄領しか持たない豊臣政権だが、国内の経済都市や港湾、貨幣の原材料となる金銀銅の鉱山を直轄領とし、また米の売買を独占し需要の大きい畿内の米価と東北・北陸の米の相場を変動させ利益を得るなどしたに違いない。生糸の買い占めなども近江や堺の商人達の助言や指導により行なうことができた。そういったことにより豊臣政権は財政的に安定していたし巨大な利益を博していたのである。史実でも秀次は伊達家や細川家・加賀の前田家、毛利家など19家の大名に金を貸していたというぐらいであるから商才にもたけていたのである。

また、伊達政宗や蒲生秀行（氏郷の子）などは早くから海外へも目を向けており、アジア・印度方面への遠征・貿易にも熱心であった。2～3年もすればオランダ・イギリスの東インド会社に匹敵する国策貿易会社を樹立して膨大な利益を国際的環境の中で生み出していくのである。

秀次の執行する豊臣政権の特徴の一つは、このような経済活動が商人層を中心に行なわれたところにある。またこの商人達の発言権が海外進出と合せて開かれた日本人町を背景に政権内で飛躍的に増し、政権の実務層にまで参加できたのである。（これは先の秀吉時代の千利休や曾呂利新左右衛門にその例を見ることができる）秀次には呂宋（ルソン）助左衛門が味方する。

これは、史実であるのちの徳川幕府では「士農工商」の身分制度で締め付けられた商人ではこうはいかなかったのである。一方、その政敵の徳川家はどういうことにな

るかという、後の鎖国制度から推察して、関東に押え込まれたまま、農業に基礎を置く政策を遵守していたに違いなく、それはこと財政・財力の面からみて、数年もたてばもはや豊臣政権に太刀打ちすることは不可能となっていたのである。

少なくとも、今日に残る同和問題の発生は豊臣政権下では起こりえなかったのである。○アジアの大海運国に・ヨーロッパ艦隊との対決

国内的に安定した豊臣政権は、活発に海外への貿易網を広げルソン・スマトラ・シヤム・カンボジア・安南とネットワークを拡張し、津々浦々に日本人町を建設したのである。 ついにスペイン・ポルトガル・イギリスなどのヨーロッパ諸国との間にアジア貿易の利権がぶつかりあうまでの貿易国となり、アジア各地で小規模な武力衝突を繰り返していきスペイン・ポルトガルなどの拠点を次々と潰していくことに成功する。

豊臣政権では先の朝鮮の役に懲りていたので、海外貿易で入手した最先端知識を取り入れた信長並みの鉄甲戦艦を建造し大艦隊を組織する。そしてはじめにルソン・ポルネオを攻めイスパニア(スペイン)勢力を一掃する。この頃には当時の日本の軍事力・経済力は東アジアにおいて最強のものとなっており、強力なスペイン艦隊と戦っても勝利を得るのは十分に考えられるところであった。 太平洋を横断してメキシコ(西アメリカ)にも行くことが可能であった。

総督府をマニラに置き、南海総督には藤堂高虎あたりを任命し、スマトラ・カンボジアなどに点在する日本人町を結んで来たるべきイギリス・オランダなどのヨーロッパ勢との対決に備える。

一方では、占領地域に独立権を認め、時に産業の育成にも手を貸して、交易の優待権を獲得するだろう。八幡商人の西村太郎右衛門もここに登場させよう。角倉了意もいる。この人物は秀次には好意をもっていた京の大商人のひとりである。

さらに豊臣政権の勢力範囲は遠く、豪州(オーストラリア)やニュージーランドに及び日本の最前線基地となる。

そして慶長年間には、インド洋上において、豊臣艦隊は、希望峰を迂回してきたイギリス・オランダ連合艦隊と制海権をめぐって大会戦を演じることになる。・・・その結末はまだ未定である。空想は無限に空想を呼ぶが、できれば本宮ひろ志氏の『夢幻の如く』をご覧あれ。

○第三次大陸出兵

ついでに言及すれば、明国は秀吉の二度による侵略により疲弊しており半世紀後には、満州族(金の後裔)女真の長ヌルハチに率いられた清王朝に滅ぼされるのであるが、この時、明国の遺臣や鄭成功から援兵を求められる。弾む体質の豊臣政権では、この機に東南アジアだけでなく大陸進攻にも乗り出していったと考えられはしまいか。豊臣政権は一時的ではあろうが中国大陸への進攻を成功させ、朝鮮や大陸湾岸の

都市を支配下に置いた可能性はある。少なくとも香港のような権益は確保したのであろう。これは武力ではなく政略の問題である。

○国内統治

また、秀次にとっての最重要事項である国内統治はどうしたのであろうか。すでに秀吉の死亡により、淀一派の石田三成ら五奉行や秀次に敵対した福島正則らは失脚させられており、替わって文治派として登場するのが、同じ近江閥ながら石田三成のライバルであった木村常陸介・重成親子や秀次とともに殉じるはずであった側近達である。彼らは日本の近代的閣僚の基礎となり、発言権を増してきた商人とともに政権の中枢を握ることになるのである。

また、武断派とされる有力大名や家康シフトの新配置も完成されるであろう。全国をブロック制にして、大名たちの知行地を一国単位で整理し、代官を設置しつつ政治・経済上の重要部分を中央集権化していく方策をとるであろう。したがって豊臣政権が長期化すれば近代的な統一政権＝郡県制へと移行していき、支配の中央システムは近代的官僚機構をもちはじめると想像することができる。

このように i f [もし] 秀次が政権をとっていたならば、日本はアジアを席卷し、世界で最初の産業革命を経験した国となり、延長線上にいる現在の我々日本人もまた、全く別な気質をもった日本人になっていたかもしれない。・・・と結論するのである。なぜなら鎖国は無かったのだから。でも、どこかで、もとの歴史の緩やかな大河の流れに押し戻されていたかもしれないとも想像する。結局、歴史というものは「夢のまた夢」というどうすることもできない幻の流れなのかもしれないが・・・

秀次と八幡のまちづくりと、秀次の人間関係と周囲の状況について調べた。

秀次のことを述べるのならその叔父である秀吉の生い立ち、出身から述べる必要があり、これまたいろいろと寄り道をしてしまった。秀吉の出自を述べるということは、同腹の姉「とも」とその子秀次の出自にも関係してくるからである。

今に残る村雲御所の村雲は秀吉の法螺話（秀吉皇胤説）からきていることも調べていて分かったことであるが・・・。秀次の謀反・切腹事件も、通説化しているような秀次が乱暴者で「殺生関白」といわれたからでは無いことが分かってきた。つまり現代の騒動で言えば、豊臣株式会社の会長派と専務派が共同して社長派を追い落とすために、社長の女性関係のスキャンダル＝「殺生関白」という評判をでっちあげて世間にバラまいたと考える程度のものであった。史実では専務派（淀・秀頼派）が社長派（秀次派）を失脚させ、豊臣株式会社の政権をつかむことになるが、逆にここで i f を使い、会長が死んで社長派が巻き返して実権を握ったらどうなっていたかをシミュレーションしてみた。この手法はなかなか面白く癖になりそうである。また時間や機会があれば、異形の者たちと陰の流れ（これは前にも言ったかと思うが、日本の歴史の陰

の流れとも鬼とも言われた一般に我々の側の賤民史と同義である)とまた秀次のその後の政権奪取後のつづきなども含めて、小説風にして「仮説・秀次政権」を書いてみたいと思うが。いつになることやら……、

余談だが、後の鄭成功などは日本国の君主は「関白」だと思っていたと史料にあるが、もしあのおとき軍事行動を秀次が起こしていたならば、日本は関ヶ原と同じぐらいの規模で全国を二分しての戦いが起こっていたかもしれない。と考えもする。

なお、ついでのことには秀次の八幡築城と近江商人の関係について記せば、秀次が八幡山下町の町衆(商人)の生みの親であることは違いないが、八幡商人だけが近江商人ではない。水を注すようだが、五個荘商人もいれば薩摩ら両浜商人、日野商人らも近江商人の代表格である。日野には蒲生氏郷がいたが、その他の地域にはこれといった庇護者はみあたらない。強いてあげれば佐々木六角氏であり織田信長ぐらいである。つまり近江商人は秀次によって生み出され育てられたのではなく、もっと昔から「市」や保内商人を生み出したような土壌(地域環境)があったという見方は出来ないであろうか。少なくとも秀次が城下に集めた町衆は、元々は信長が安土に集めた人々である。秀次は信長の遺産を受け継いだという見方もできようが、近江商人の名を全国に広めたのは、ほかならぬ近江商人自身の努力によるものだと私は考えるものであります。事実、秀次の後に八幡城主となった京極高次のことについては当地の郷土史にもあまり詳しくは書かれていません。秀次のやり方をそのまま踏襲したとあるだけです。ですから評価も非難も無かったのでしょう。最後に、最近の朗報を一つ。それは「関白秀次」は、決して秀吉や世間の通史が言うような暴君ではなかった。ということを書いてくれる人々が表われだしたということである。彼秀次は、むしろ平和愛好の領主であり、かつ叔父秀吉よりも織田信長の業績に対して憧憬し、八幡の城下町はもとより楽市楽座の制度などその殆どを安土に学んでいるのである。これは叔父秀吉の業績を見習わずに亡くなった信長を尊敬していたという証拠ではあるまいか。こういう秀次の事跡を正しく見直していかなければならない。と言ってくれている人もいるのである。

我々近江八幡市民も、秀吉の狂気(老害)より発した秀次に対する異常な仕打に対しては、謀殺という事実をもって彼の汚名をそそいでやる努力をしていこうではないか。

『ほととぎす 鳴きつる方をながむれば ただ有明の月ぞ残れる』秀次
もっと豊臣秀次公のことを知りたければ、次の書籍を参考にしてください。私もこれらを参考にさせていただきました。

《参考文献》

- 学研 歴史群像シリーズ 3 『羽柴秀吉』学研 歴史群像シリーズ
27 『豊臣秀吉』学研 歴史群像シリーズ

- 45 『信長記』『豊臣秀長』堺屋 太一著
『秀吉』 堺屋 太一著 (PHP文庫)
『北政所ねね』土橋 治重著 (成美堂出版)
『影の系譜』 杉本 苑子著 (文春文庫)
『豊臣秀吉』 嶋岡 晨 著 (成美堂出版)『豊臣家の人々』司馬 遼太郎
著 (角川文庫)『近江商人魂』童門 冬二著 (学陽書房)
『秀吉側近99人の謎』楠木誠一郎著 (二見書房)
『豊臣秀吉の謎と真実』小和田哲男著 (ワニ文庫)
『秀吉の正体』月海 黄樹著 (徳間書店)
『豊臣秀次』(抄) 近江八幡郷土史研究会刊
『秀次』近江八幡市商工観光課製作パンフレット
『秀吉の謎』 丸田 淳一著 (学研新書)
『豊臣秀吉』小和田 哲男監修 (NHK出版)
『異形者(いぎょうのもの)』工藤かずや著 (ワニの本)
『猿飛佐助』 荒巻 義雄著 (かどかり・パルパ)
『豊臣秀吉読本』 新人物往来社編
『有明の月』 沢田ふじ子著 (広済堂)
『豊臣家の人間関係』童門冬二他 (中央文庫)
『忍者太閤秀吉』 司 悠司著 (中央公論社)
『秀吉と信長』 光瀬 龍著 (光風社出版)
『誰も知らなかった豊臣秀吉』後藤 寿一著
『石田三成』 童門冬二著 (成美堂出版)

以上、豊臣秀次に関してシュミレーション風に、述べたが、このまえにも秀次に関する考察も書いておいたので重なる文面も出てくると思うが、ご勘弁の程をお願いする。

18、織田信長の側室だった「お鍋」の方と「お鍋屋敷」

問題18;「小田は良いところ お鍋の方が 殿をまねいたこともある」今も子守唄に唄われるお鍋の方は、一代の英傑「織田信長」の愛妾であった。小田神社のある小田町にはお鍋の方は住んだといわれる屋敷跡もある。お鍋の方は数多い信長の妻妾のなかで、唯一実名の判明している女性である。天正十年(1582年)六月二日 信長が本能寺で自刃、同十五日 安土城炎上するとき、側室お鍋の方を、ともかく敵方に囚われぬよう日野城へ迎え入れた人物は誰か。

- ① 丹羽長秀 ② 滝川一益 ③ 滝川益氏 ④ 蒲生賢秀 ⑤ 前田慶次郎 □

解答・・・・・・・・

<解説>

未原稿

19、額田王の姉は鏡王女で藤原不比等の母である

問題19；六枚橋交差点を南に入るところに住蓮坊首洗池がある。住蓮坊首洗池は、後鳥羽上皇が法然上人の弟子・住蓮坊等の二人の僧の首を刎ね、住蓮坊の首を洗った池とされるところだが、その隣地に古墳らしき丘（千僧供古墳群供養塚；古墳出土の短甲・刀剣も千僧供町で保管されている。）がある。その古墳は「壬申の乱で戦死した額田王、鏡王姉妹の父（鏡大王）の墳墓である」とされている。鏡氏は新羅の王子、天日槍の従者の末裔である。鏡の里の真照寺には額田王の父の墓が残されている。額田王は「あかねさす・・・」の蒲生野の相聞歌で有名だが、その額田王の姉であった鏡王女のご存じであろうか。中臣の鎌足の妻となり藤原不比等の母となった人物である。では645年乙巳（いつし）の変（大化改新のこと）で政権を蘇我氏より奪還し、百済を支援して白村江の戦いで唐・新羅連合軍に負けた天皇は誰か。近江と深い関係のある人物で額田王の夫です。

①天武天皇 ②皇極天皇 ③聖武天皇 ④天智天皇 ⑤景行天皇 □

解答・・・・・・・・**4**

<解説>

『興福寺縁起』によれば藤原不比等の母は鏡王女（天智に召され、のち鎌足の正妻となる）とあり、そのため天智落胤説の根拠とされている。つまり落胤説とは不比等は実は鎌足の子ではなく、天智天皇の子であるというのである。『公卿補任』の不比等の項には「実は天智天皇の皇子と云々、内大臣大職冠鎌足の二男一名史、母は車持国子君の女、与志古娘也、車持夫人」とあり、『大鏡』では天智天皇が妊娠中の女御を鎌足に下げ渡す際、「生まれた子が男ならばそなたの子とし、女ならば朕のものとする」と言ったという伝説（実際に男子=不比等が生まれた）を伝える。『帝王編年記』『尊卑分脈』などの記載も同様である。平安時代まではこの伝説はかなりの信憑性を持っていたと考えられ、また『竹取物語』でかぐや姫に求婚する5人の貴公子の1人車持皇子のモデルは不比等とされている。これは、母が車持氏出身の皇子、という意味の名である。歴史学者の間では皇胤説の支持は少ないが・・・

20、海外雄飛の近江商人

問題20；近江八幡商人には「ふとんの西川」（西川産業）の西川甚五郎氏や、北海道の場所請負で蝦夷開発に貢献した恵比寿屋岡田弥三右門氏などが有名ですが、遠く海外ベトナムまで商売に行き、結果、徳川幕府の鎖国により、ついに日本に帰れなかった近江八幡商人の名前はだれですか。屋号でもOKとします。

- ① 角倉了以 ② 茶屋四朗次郎 ③ 中井源左衛門 ④ 西村太郎衛門 ⑤ 下村彦右衛門
□

解答・・・・・・・・**4**

<解説>

北海道松前町とは八幡商人の場所請負制に関わって姉妹都市提携を結んでいます。江戸時代に近江商人が蝦夷地・松前藩への知行地に商場・場所請負で進出する時期になると、アイヌと和人との衝突もおおくなり、「アイヌ勘定」という侮辱的な言葉も生まれています。不平等な交易独占に対して起こるべくして、蝦夷地ではアイヌの和人に対する反乱が occurred。江戸時代にアイヌ三大蜂起といわれる①クナシリ・メソナの戦い ②コシャマインの戦い ③シャクシャインの戦い が起こっています。

21、湖国法城の八幡別院

問題21；朝鮮通信使の休憩場所となり、書院には通信使の書が残っている「湖国法城」の額があるお寺。浄土真宗本願寺派の滋賀教区の教務所があるお寺の名前は。別名でも回答はOKとします。本堂の前に立つ親鸞と蓮如の石像が出迎えてくれます。

- ① 西明寺 ② 西光寺 ③ 金閣寺 ④ 金台寺 ⑤ 浜別院 □

解答・・・・・・・・

【解説】

八幡別院は、浄土真宗本願寺派の別院である。織田信長と戦った「石山本願寺」は、一向衆とも呼ばれたが、本当は「浄土真宗」の門徒と自らを呼ぶように気を付けることが「蓮如」のご文章で明らかであるが、真宗門信徒は、「死ぬことを厭わなかった」から強かったといわれる。その原因は正信偈の「往還回向由他力」による本願力の教え（往相回向・還相回向）にあると云われる。教義にいわく「阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて 仏となり、迷いの世に還って 人々を 教化する。」往生とは本来死ぬということではなく、生まれていくという意味で、お浄土といわれる仏さまの世界へ生まれさせていただくこととあります。「正像末和讃」には「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身にて 清浄の心

もさらになし」と、「真実の心」は虚仮不実の身である凡夫には無いと述べ、如来の本願力回向による名号の功德は十方にみちたまう。それが、浄土真宗の教えである。

なお浄土真宗の本願寺教団は、織田信長と全国で一向一揆衆として戦ってはいるが、他の真宗（仏光寺派、高田派など）教団は、織田信長や他の戦国武将とは衝突していない。唯一、戦国武将と戦った真宗教団は「蓮如」系統の東本願寺・西本願寺である。こうした歴史を踏まえて、一向一揆を眺めてみるのも面白い。

本願寺第8代門主である「蓮如」が山科本願寺を焼け打ちされ、越前国吉崎御坊まで逃れる際、近江八幡にも立ち寄っている。蓮如上人については、浄土真宗の本願寺派や大谷派では「ご文章・お文」といわれる「お手紙」が有名である。そのお手紙で蓮如上人は「本願寺門徒と一向宗（浄土宗の一派：一向俊聖上人）は違うものであり加担してはならない」と再三にわたって戒められているのをご存じだろうか。さて、彼の戒めにも係わらず、その後、本願寺教団は大阪に本拠を移し、戦国時代には石山本願寺合戦として織田信長と戦った。俗に一向一揆というが、その時の本願寺住職・門主は諱を本願寺光佐とも云われるが通常は「顕如」という僧名（法名）である。また本来の一向宗（浄土宗系）の本山は滋賀県米原市にある蓮華寺であることに留意。

「ケガレ意識」と門徒および部落問題

ものい
「門徒、物忌み知らず」を誇りに思う・・・「門徒、物忌み知らず」という言葉について考えてみたいと思います。まず、「門徒」というのは、浄土真宗の信者であることを指します。ですから門徒ですといえば、浄土真宗のお寺の信者であることがわかります。ちなみに他宗では門信徒とは言わず「檀家」といいます。

私事で恐縮ですが、最近つれあい（妻）の父が亡くなり、急に通夜や葬儀の用意をしなければならなくなりました。当世の例にもれず、葬儀社に発注依頼されていたのだが、業者は葬儀式・通夜式道具をセットにして持ってきていた。普通は式の値段を確認して、供物をどうしようかなどを相談するだけである。しかし、持参された「葬儀セット」のなかに、「忌中」の紙や、「六文銭」の紙を見つけた私は、「うち（家）は、このようなものをいらない。」と断わった。つれあいの実家も真宗大谷派の門徒であったから、真宗の葬儀にはふさわしくないと思ったからである。できれば「忌中」を往相回向・還相回向（正信偈の「往還回向由他力」から）の「還浄（げんじょう）」に変えてくれといったが、聞いてくれなかった。しかたがないので、とりあえず、セット料金に入っているので貰って置いて「忌中」や「六文銭」の紙は使わないことにしました。

「忌中」の紙を玄関に貼ることが、なんで門徒にはダメなのか。といいますと「忌中」の「忌」は「忌（い）み・忌む」の意味であり、「この家はケガレていますから、入らな

いでください」と表示しているであり、昔の人は「触穢思想」を今で言う「放射能のように考えていた」のである。この忌中や喪中という考え＝「物忌み」をしないことを生活の信条としている門徒としては相応しくないからである。以下に、その理由を述べたいと思います。

親鸞聖人は、迷信俗信に惑わされている人々を悲しまれ、すでに八百年の昔に、**（正像末和讃）** 「悲しきかなや道俗の良時・吉日えらばしめ・・・」というご和讃を作られています。

「物忌み」というのは、今ふうには「迷信」のことです。「物忌み知らず」というのは、簡単に言えば「迷信に無関心」ということですが、「忌み事」を無視する勇気も必要です。まずは、横綱クラスの「物忌み」に「大安」とか「仏滅」とかいった、いわゆる「六曜」があります。これは、もともと中国で生まれた占いの考え方ですが、その本家本元の中国でも廃れてしまっています。「大安」や「仏滅」が日本で流行したのは明治のころです。陰暦から太陽暦に変わった頃に「六曜」を暦に書き入れることが流行りました。戦後、出版の自由が叫ばれるようになって、再び流行しはじめます。つまり、先勝(せんかち)、友引(ともびき)、先負(せんまけ)、仏滅(ぶつめつ)、大安(たいあん)、赤口(しゃくく)の6種類は、もともと根拠も無く歴史も浅い「迷信好き」な人々をあてこんだカレンダー屋の商売ネタにしかすぎません。これが大きな迷信であることは、ちょっと頭を冷やして考えればすぐに分かることです。次は大関クラスの迷信です。それは「4」とか「9」とかいった数を嫌う迷信です。これは言うまでもなく、「4」は「死」に通ずる、「9」は「苦」に通ずるという語呂合わせからきたものです。結構立派なホテルでも、4号室や9号室、それに13号室という部屋がないところもあります。それほど「4」という数字が嫌いなら、「4」が縁起が悪いというのなら、自動車だってタイヤの数は4つですし、机の足だって4本なんですけど、これは一体、どう考えるつもりなのでしょう。日本には、こういった「語呂合わせ」から生まれた迷信が沢山あります。たとえば「中陰」に関するものです。「中陰」とは、ご承知の通り、葬儀のあと忌明け（満中陰）までの49日間のことですが、この49日間が「三ヶ月」にまたがるのを嫌って「35日目」に忌明けを勤めてしまう方（特に女性だった場合）が意外に多いのです。これも、「三月」が「身付き」と語呂が合い「不幸が身に付く」といって嫌われているからなのです。しかし月の初めの10日頃までに死ななければ「中陰」は必ず三ヶ月にまたがってしまうのですから、単純に言って6割くらいの「中陰」が三ヶ月にまたがってしまう計算になります。こんな語呂合わせのような「言葉遊び」に振り回されて、大切な心の整理期間である「中陰」をないがしろにすることの方が、不都合なのではないでしょうか。タイプは違いますが「交通安全のおふだ」も、みんなこの仲間です。「物忌み」とは、平安時代に陰陽道が日本で盛んになった頃の考え方で、災厄や、霊鬼から身を守るための行い事をいいます。現代でも、特に通夜や葬儀などの仏事には、いわゆるケガレ意識からくる「忌み事」として、あたりまえのように行っていることがあるので

すが、多くは死や死者を穢れた者とする考え方から来ています。しかし浄土真宗では、亡くなられた方を仏さまと仰ぎ、その死をケガレとは考えません。ですから、昔から浄土真宗の門徒の方は、この「忌み事」を必要のないものとしてきました。元々は迷信・占い・日の吉凶にとらわれずに生活してきたということから他宗の方々から「門徒」は「物忌み知らず」と呼ばれるようになりました。これは他宗の仏教信者が「仏教の作法を知らない」と批判する際に使われる言葉でもあります。現在でも初めて葬儀を出される方々は、どうしてそんなことを行うのか、意味も分からないまま行われていることも多く「忌み事」は、本当は死者を冒瀆するようなものばかりなのをご理解ください。

例えばお葬式の例ですが、葬儀の後、出棺の際に棺の蓋に石で釘を打つ「釘打ちの儀式」が行われていることがあります。これは「石には霊を封じ込める力がある」という迷信から来ており、死のケガレを石の力によって棺の中に封じ込めてしまおうとするものです。最近では、それ自体も変わってきて、金色のハンマーで釘うちをする葬儀も聞いたことがあります。「もう出てきてはいけませんよ」と、棺の蓋を固定するというのです。「帰ってきてほしい」泣きながらおっしゃっておられたご遺族が、意味も分からずに釘打ちを行う事は、あまりにも悲しく思えます。故人が生前に使っていたお茶碗を音を立てて割ることも「忌み事」として残っております。これは故人に対して「あなたが帰ってきて、ご飯を食べるお茶碗はありません。」と伝えていることだそうです。お骨を拾う時、二人で一つのお骨を拾わねばならないとする「忌み事」もあります。これは、死のケガレを分散させるためだそうです。

また、棺を霊柩車に乗せる前にグルグルと三回ぐらい回してから乗せる地方もあります。これは、棺を回すことによって死者の目を回し、今まで住んでいた家を忘れさせるためだそうです。これも「もう帰ってきてはいけませんよ」という意味なのでしょうが、故人を偲ぶはずのお葬式が、もう邪魔者扱いです。他にも、棺の中にお金を入れる忌み事もあります。昔、六文銭を棺に入れていたなごりのようですが、六文銭を入れるというのは、三途の川の渡し賃だそうです。「せめて三途というひどい世界だけは越えてくれ」といった気持ちが六文銭という渡し賃につながったのだと思いますが、結局は渡ったら帰ってくるなという発想から来ています。今は六文銭が紙に変わっています。業者が印刷した物を持ってくるからです。

出棺を終えた後も忌み事は続き、今度は火葬場への道を、行きと帰りでは変えるということもよく聞きます。「同じ道を帰ると亡くなった者がついてくる」と言って、家までの道を覚えさせないために行われているのです。何だかここまで徹底してくると、「忌み事」は故人の冒瀆にとどまらず、遺族をも苦しめるようなものに思えます。最後には、葬儀や火葬場から帰ると、家の中に入る前に塩を身体にかけるという「忌み事」があります。いわゆる「清め塩」にはケガレを落とす力があると神道では信じられており、葬儀や火葬場に行くと死のケガレがつくので塩を使ってケガレを落としてから入るとい

うことだそうです。神道の方は塩を使っても良いと思いますが、我々仏教徒には必要のないことです。物忌みはこれ以外にも、方角の吉凶、家相、手相、墓相、占い、まじない、厄払いなど、数え上げればキリがありませんが、すべて迷信俗信のたぐいです。その他、箸を立てたり、旅装束を着せたり、守り刀を持たせたり、逆さ屏風にするなど仏教伝来以前の習俗は、仏事である葬儀では行いません。（これらは決して他宗の批判をしているわけではありません。）余談ですが、鬼のイメージとして、牛の角に虎の毛皮のパンツがありますが、それは方位でいう「鬼門」の方角「丑寅」の方角から来ているものである。

浄土真宗のご門徒の方々は、この物忌みが親鸞聖人がお示しになられたお念仏の教えとは大きく異なるものであり、これらが死者を冒瀆するものであることをよく知っていたからこそ「忌み事」を行ってほしかったのです。我々浄土真宗門徒は、この「門徒物忌み知らず」という言葉を、浄土真宗の「誇り」であると受け止めて理解したいと思いますが、しかし一般的には、この物忌みが今もなお、当たり前のように執り行われているのが現実です。門徒の方のなかにも、そういった慣習・慣行に流されておられる人も見受けられます。…よく聴聞しましょう。

浄土真宗になじまない言葉として、「ご冥福をお祈りいたします」という言葉があります。冥福という言葉ですが冥とは、「暗黒。くらやみ。無知と同義語。」と出ており、迷いの世界を指す言葉です。つまり冥福を祈るとは、「死後、暗黒の迷いの世界に落ちたあなたですが、その世界での幸せをお祈りいたします。」という意味の言葉なのです。（電報の例文に「冥福」が非常に多いのでご注意ください）以上のようなものが「忌み事」と呼ばれているのですが、浄土真宗の人たち、門徒さんは自分たちの教えと大きく異なるものであり、これらが死者を冒瀆するものであるとよく知っていたから行ってほしかったのです。

しかし他宗の人たちは「門徒物知らず」といって、自分たちの習俗が迷信から来ていることさえ判らずに門徒を「うつけ」て来た言葉なのですが、それは、迷信や習俗に従わない門徒だからこそ、私達は逆に、「門徒物知らず」あるいは「物忌み知らず」を「誇りに思い」社会にも広げて変革する必要があると考えるのです。この「ケガレ意識」に基づく「慣行・慣習」の弊害の一つに「女性蔑視」「女性差別」という社会構造としての「差別意識」があります。若衆が少なくなり「祭り」の存続が心配な地域でも「女性も参加してもらおう」と意見を出してもなかなか成立しない。「抵抗勢力」や「カベ」があるといいます。大相撲で「女性を土俵に上げない」という事案がありましたが、本音は「女性はケガレている」という意識（昔は三穢といい、死穢、産穢、血穢の三つとも女性に当てはまるから女性蔑視の原因となった意識）が根本にありそれを屁理屈で誤魔化していました。女性が穢れているなら、そこから生まれる男性（相撲とり）は何なのだろう？と言いたくもなりますが、こういった迷信の「忌み事」を小さいものから地域から一つ一つ潰して解決していく、「不断の努力」こそが私たち門徒に今こそ求められているもので

はないでしょうか。今でも、宮参りは30日を過ぎてから、とか鳥居は母親は潜れないなどの迷信＝蝕穢思想が生きている地域もある。八幡祭りに女性を参加させないというのも、改める時期がきているのではないのでしょうか。

私事の葬儀のことから、女性差別の社会的なものにまで話が広がりましたが、「差別問題」や「人権尊重のまちづくり」として共に考えて見ましょう。

私たち真宗門徒は、お盆に「おしょうらいさん」をお迎えしたり、追善供養をしません。

6月に亡くなった「つれあい」の父（義父）「釈 智清」の「満中陰」が7月24日にありました。月忌、百ヶ日というのは、紙に張り出してありましたが、「8月の初盆はしないでよいのか」と親族の方がおっしゃるものだから、「浄土真宗では、「お盆」のための特別な行事はしません。」と、簡単な説明がお参りに来られた住職からありましたが、私は十分に分かっていたのですが、他の皆様はご理解されたのでしょうか不安です。浄土真宗では一般に、「先祖霊」をお迎えや送りはしないのです。なすびやきゅうりも使いません。ただし、一部の地域では真宗門徒も、慣行・習俗として「お盆」行事をしているところがありますが、この滋賀県の近辺ではしません。それは何故でしょうか？

また、先日（7月16日）京都の「祇園さん」（宵宮）を見に行きましたが、京都のお盆では、精霊をお精霊さん、「おしょうらいさん」と呼びます。このお精霊さんが各家庭に帰って来るのは8月12日の夜とかで、13日の朝の朝食より、16日の朝の朝食までを、お精霊さんとの精進料理で過ごすこととなります。精進料理は生ぐさものを避け、ダシも鰹節は使わずコンブと椎茸でとります。そして「七種」（なないろ）と呼ばれる、瓜、ほおずき、ささげ、枝豆などを供えます。でも今どき、この風習を厳格に守っている家庭は少なくなっているそうです。そして、8月16日の夜、大文字の送り火と伴にお精霊さんは帰っていくこととなります。

普段私たちの地域でも「おしょうらいさん」をお迎えするとか言っています。御招霊（おしょうらい、おしょうらい）は、日本の盂蘭盆（うらぼん）の年中行事の一つでお盆に先祖の霊があのお世から帰ってくるとされるものを迎える、または招く迎え火の一つです。「ごしょうらい」や「ごしょうらい」と呼んだり、お招霊とも書かれます。天台宗や浄土宗の家では「お盆」の行事があります。そのため、私たち真宗系の門徒は「お盆」の行事をしないことから、「門徒もの知らず」と言われています。幼い頃は、わが家では「お盆」のお迎えをしないのを不思議に思っていました。（母の実家が天台宗だったので、お盆には迎え火と送り火を焚きお飾りをし、という日本のごく普通のお盆の迎え方をしていましたのを覚えています。）

先祖が帰ってくるのに道が暗いと困るので明かりを持って迎える意味を持っている「迎え火」に対して、お盆の後にあのお世に戻って行く先祖の霊を送り出す「精霊流し・送り」や「送り火」があります。旧暦の7月15日のお盆前の13日に行なわれた行事である。京都の「大文字の送り火」や映画にもなった「精霊流し」は有名な行事です。

また、死者の霊そのものを「おしょうらい」や「おしょうらいさま」と呼び、「御招霊」とは違う漢字の表記の「お精霊」や「お精霊様」とする迎え火や送り火も京都のほか多くの地域で広く行われます。「おしょうらい」を「お招来」と表記すべきか、「お聖霊」なのか、小生はそんなことは知らない。そもそも「おしょうらい」ではなく「おしょうらい」と言っていたような気もする。多分「お聖霊」が正解だろう。おしょうらいの火で13日にご先祖様をお迎えするわけである。お盆休みが近づくなかで、「お盆」の意味を門徒として見直してみませんか？

○（京都のおばさん談）

「盂蘭盆会（うらぼんえ）」は梵語のウランバーナ（倒懸・逆さ吊り）に由来するそうですが、お釈迦様の弟子の目連（もくれん）尊者が、餓鬼となった亡母を救う物語が説かれているお経からきていると聞きます。お盆がやってくると、お迎え鐘を撞いて槇の葉やほうずきなんかをお仏壇にお供えます。13日に行う盆勧進（ぼんかんじん）というのは昔は子供らが町内を廻り米銭を貰い集めてきて、家々のかどで「おがら」を焚き「おしょうらいさん」をお迎えしたものです。「おしょうらいさん」は16日までそれぞれの懐かしい我が家でくつろぐわけですが、お仏壇にお供えするお膳のメニューも生臭さを慎みます。16日になると追い出しの湯がき汁を「かどぐち」に撒きます。家でくつろぎ楽しんだ「おしょうらいさん」は、大文字の送り火でまたお浄土へお帰りになります。……「こないして京の夏は過ぎていきます。」京都の「大文字」の送り火は有名ですが、それが「お盆」行事の一環であることを、理解している人は少ないのではないのでしょうか。なお、子ども達の「地藏盆」や「盆おどり」は習俗化された民衆のもので、宗教とは直接関係ありません。また、「分踊り」は中世賤民の芸能者：説教節が踊り念仏と融合して、江州音頭などを生み出したと発祥の地；豊郷町や東近江市では伝えられています。

～門徒は、お盆のお迎え・送りの準備はしません～

さて、私たち浄土真宗の門徒としては、「お盆」をどのように、迎えたらいいのだろうか。前述の義父の満中陰のとき、「お斎（とき）」の際にご住職に聞いてみました。

住職は「お盆」のことを「歓喜会（かんぎえ）」とも言うし、盂蘭盆会（うらぼんえ）というのも仏教行事である以上、浄土真宗も無視はできません。しかし、浄土真宗ではお盆に「死者・ご先祖」を地獄か浄土（天国じゃありません）からお帰りくださるための特別な用意はしません。

（真宗では靈魂が帰ってくると言う考え方はない）新盆にも当てはまります。（新盆の迎え方については、宗派や習慣によって、さまざまですが浄土真宗の場合は、特別に何かをしなければならぬということはありません。浄土真宗の教義では、亡くなられた方は、阿弥陀さんのおられる浄土に生まれ出るので、わざわざ現世に戻ってこられないのです。「門徒忌み知らず」と他宗派の方から言われますが、気にすることはありません。

年忌法要やお盆などにお坊さんと接する機会がありますが、浄土真宗本願寺派では、亡くなられた方への追善供養をするわけではなく、そのことをきっかけに仏道や御仏に接する機会であるとおっしゃる住職さんがたくさんおられます。

お盆という行事は仏教のものではなく（他の仏教国にはそのような行事が無い）、中国経由で

仏教が伝わる際に、シルクロードを通して伝わった他の宗教行事とミックスして、日本で独自に発展したもので、仏教の心を味わうには伝統的な意味で必要な行事ではありますが、霊魂が帰ってくると言う考え方は仏教には無いので、浄土真宗ではそのような考え方につながるお盆での特別なことはいたしません。新盆（今年に亡くなった方のお盆）でも同じことです。同様のことは、喪中ハガキにも見られます。門徒は、あえて年内に喪中（年賀欠礼）ハガキを出す必要はありません。年賀状でよいのです。私は、そうしようと思っています。

なお、お盆の行事は、宗教行事というよりも地方独自の民俗行事ともなっておりますので、日本全国一律の作法があるのではなく、地方ごとに、その土地の特産物などを取り入れた独自の飾りつけも残っています。その中には、浄土真宗では行わないことになっている提灯や灯籠等も安芸教区ではやっていることがあります。迎え火や送り火は全国的に浄土真宗では行っていません。浄土真宗は、「ああしなければいけない」とか「こうしなければダメ」ということは少ないです。ただ、他宗と比べると、「する必要が無いからやらない」ということが多いだけです。

～真宗門徒のお盆～

真宗ではお盆のことを歓喜会（かんぎえ）といい、亡き人を通して仏さまの教えに出遇わせていただく尊い仏縁と考えます。お盆の行事は「仏説盂蘭盆経（ぶつせつうらぼんきょう）」というお経がもととなっており、命の尊さや欲を離れた施しの大切さを教えてくれるものです。

しかし、一般的には盂蘭盆経にはない迷信的・俗信的な考えがはびこっておりますのも事実であり、世間で言われているお盆に対する考え（供養）の間違いを指摘し、浄土真宗の正しいお盆の迎え方をここにお知らせする次第です。

～「お盆は亡くなられた方が年に一度帰ってくる？」～

よくキュウリで馬を作り【馬に乗って早くこっちに帰ってこい】、ナスで牛を作る【牛に乗ってゆっくりあの世へ帰れ】という風習をTVなどで見ます。「慣習＝おもてなし」としてはわかりませんが、「正月も帰ってこい」と云えと言いたくもなります。何故、お盆の時だけ帰るのでしょうか？なにかしつくりときません。時間や空間や形を超えた真実のはたらきが「仏」となり目には見えないけれど常に私を包み込んでいてくださっている。そう考えてみてはいかがでしょう。（還相回向と同じです。）

～お盆の現状～

日本のお盆は、盂蘭盆（ウランバナ）と先祖崇拝が入り混じってます。地域によって様々な俗信が存在するのが特徴だ。あるおばあちゃんは「お盆の間は掃除をしちゃならん」と頑なに掃除することを拒み続けたそう。理由は「先祖の霊を掃除機が吸い込んでしまう」から。なんとなくダイソンには吸い込まれたくないものだ。他にも十三日に先祖の霊をお墓に迎えにいて、十五日に送りに行くという地区もある。お墓（墓地）が駅みたいな役割をしているらしい。迎えにいかない家の先祖は待ちぼうけをくらうのか？いつも気になるのだが、先祖と言っても十代前で千人を超える。全員、家の中に入ることができるのか？若手は駐車場待機ということになりそうで心配してしまう。「ご先祖が帰ってきているから私達はお出かけしましょう」と先祖に留守番を

させて遠出する人も増えている。盆踊りにしても「マツケンサンバ」を踊ったり、先祖を楽しませる余興みたいな印象をうける。

～歓喜会ということ～

浄土真宗ではお盆のことを「歓喜会」（かんぎえ）と言う。歓喜とは字の通り「よろこび」を意味する。我々はどんな時に「よろこび」を感じるだろう。

煩悩が邪魔してなかなかそう感じることは出来ないが、『本物の「いのち」に気づけよ！』と如来は常に呼びかけてくださっている。その壮大な「いのち」の世界を知ることが本当の歓喜（よろこび）ではないかと思う。お盆という時節、先祖を大切にすることも必要だが、自らの「よろこび」を確認することも忘れてはならないのではないだろうか。お盆は「追善供養」ではないのである。

同じく～浄土真宗と永代読経法要～について

お盆と同じ時期に我が寺では「永代経」が勤められるわけですが、浄土真宗における「永代経」とは「永代読経」の略であり、「未来永代、末永く釋尊の説かれた真実の教えである経が読み続けられ、その経が聞き続けられ、その教えに救済され続けられる」ことを願い勤まる法要である。先達・先祖を御縁にするというかたちをとりますので、「永代経は先祖への永代の追善供養」という認識が強いですが、浄土真宗における「永代経」は、「先達・先祖を御縁として私が経（教え）を頂き未来永代に伝える」ということが本義となります。勤め方は地方、寺院によってまちまちのようです。ただ基本は死者に追善供養する意味ではなく、故人を縁としてお寺に参詣し、故人を追慕し報恩の営みをするとともに、自身が聞法のご縁をいただきます。永代経懇志をあげられた場合に、その都度おつとめすることもあります。お寺では年に1回または2回、一括しておつとめされるのが通例です。

永代経法要は、毎年行われ、寺院の護持に役立っています。

「真宗教団は報恩講の教団」と呼ばれますように報恩講を重要視しますが、その真宗教団がなぜ他宗派のように、しかも追善供養と誤解されかねない形態の「永代（読）経」というお勤めをはじめたのでしょうか？これは私の私見ですが、やはり経済的な理由が大きいと推測しています。あと、他宗派が勤める「永代供養の法要」・・・（永代読経（どきょう）が、信徒の代わりにお寺が永代にわたって死亡者の毎年の祥月命日（しょうつきめいにち）や毎月の命日（月忌）に供養の読経を行うこと。この依頼の際には、永代経料が納められ、永代経の帳簿に記録されて、命日のたびに読経が行われる。）というものに追従したとも考えられます。真宗では一括して永代経をします。

真宗の永代経とは、末長くお経が読まれるという意味で、お寺が存続し、み教えがますます盛んになるようにとの思いからつとめられる法要です。毎年行う報恩講と同様に永代経も年中行事です。他宗のように追善供養のための法要ではありません、これはお盆と同じ考え方です。

「命日」と「生前」の意味について考える

ところで、話は変わりますが、ある方が、死んだ日の事を、何故「命日」と言うのだろうか？

普通は「死亡日」というのだが、仏教ではいわないのだろうか？また「葬式などで生前お世話になりました。」という言葉を使うが、よく考えてみると、生前＝「生きてる前」「生きる前」という表現もおかしいのではないか。意味は「死ぬ前」のことだから「(死) 亡前」ではないのだろうか。というような質問をされた。本当にたわいもない話なのだが……

この質問に対して、「浄土真宗」流には、門徒として、どう答えたらよいのだろうか。考えてみました。個人的な見解であるから、皆さんでご異見等がある方は、ぜひ和讃講や仏教壮年会、あるいは仏教婦人会、尼講などで論議してみてください。以下は私見です。

「ご命日」と言えば、故人が亡くなった日を言う。毎月または毎年の忌日(きにち)を指して「亡き人の死亡日」を思い浮かべます。それならなぜ「死んだ日」ではなく、「命の日」と言うのだろうか、つまり、浄土真宗では死というものに出会い、その日は「自分の命を振り返り、考える日」という仏の願いが込められた日という意味なのだと考えます。「命日」＝亡き日は、私が生かされていることに感謝する『命の日』だと気付かされた日、そんなことに気付く機会の日にさせていただくことなのです。

「命日」は、命の日と書きます。これは、私どもに先立って亡くなった方が残していってくださった本当の「贈りもの」だと思います。命日をご縁に仏事を勤め、その仏事に出席した私どもに、「どうか、あなたがこの世に生を受けた、その命の意味について明らかにしてほしい」と、問いを投げかけられているということ、それが「贈りもの」という意味です。法事は、命の意味について明らかにする日です。「往生成仏」という言葉を真宗では使いますが「**お浄土に生まれて命輝く日**。と私は解釈しましたが、間違っていればご指摘ください。

また命日というのは『灌頂経かんじょうきょう』に死亡の日を「命過日めいかにち」とあり、過は過ぎるということで、一期の寿命が過ぎ去った日という意味からこれを略して「命日」というとありました。ご参考までに……

また、「生前」と言う言葉は「死前」ではないのかという質問のこと。たしかに赤ちゃんは「生後」何ヶ月と言います。故人なら「生存中」とか「存命中」と言う言葉が適切ではないでしょうか。あえて「生前」とは如何なることなのか？「後生」に対する「前」なのだろうか。死の反対語は生、だから生と死の背中合わせは「前側」と「後ろ側」ともとれます。つまり「**生まれる前**」ではなく、「**前の生**」です。私は、これも「**浄土に生まれる前**」というように解釈しましたが、いかがでしょうか。

「忌中」のつづき

和讃講で「門徒モノ忌み知らず」の浄土真宗の教義に関わることを提起し、「清め塩」だけでなく「忌中」張り紙のことを書き、態度で示そうよというようなことを言ったところ、「忌中」を問題にすると、「年回の〇〇回忌」の「忌」も問題になり大変なことになるという意見が出てきた。ズバリその通りである。そう指摘した人は「忌中」の問題が「忌中」に留まるものでないことを感じとったのである。それは直截に言えば、「忌中」の紙一枚のことなら、玄関に張ろう

が張るまいが、他のものに変えようが大したことはない。ところが、「〇〇回忌」が問題となると、お寺の「飯」の問題に直結するということだ。親鸞聖人大遠忌しかり、門徒の家の〇回忌しかりである。「忌中」を問題とし、それを改めることを提起した時に「忌中」の問題が「忌中」とどまるものでないという感覚はなかったわけでない。しかし、どういう問題に発展しようと、目の前に「おかしい」ということがあれば、「まず止めることからしかはじまらない」という思いから（これは差別・人権問題に共通することである。清め塩問題は納得だった）の話題提供であった。今日でも、その方向に間違いはないと思う。この問題＝「忌中」論争は、そのことが部落差別の「穢れ意識」につながる問題であるとする考え方と、つなげて考えるべきではないとする考え方もある。私事だが6月につれあいの父が亡くなり、9月に次男の結婚式を行なったが、喪中（忌中）で延期するという考えはなかった。

再び「門徒忌み知らず」について

昨年（2011年）に金照寺の先々代住職「釈龍山」老師の50回忌法要が、11月23日にありました。前日の22日は通常の報恩講でありました。龍乗前住職が編集された「龍山師」の思い出の「冊子」が参加門徒に配布されました。至洸住職で6世を数えるとなっていました。「龍山師」が法隆寺に勤めていたことも初めて知りました。金照寺へ入寺した経過もなんか複雑な歴史をもっていたので新鮮な驚きでありました。

また朝の報恩講のお勤めに、今年度は年番なので夜の和讃講でのお勤め以外に初めて参加しました。「正信偈作法」での御勤めは、前に私が練習したいと言っていた「宗祖讃仰作法（音楽法要）」と同じであった。やっぱり、和讃講や仏仕でも練習は必要で、いざという時には役に立ちます。私は楽譜を見ながらであったが、尼講や老和讃講の人が戸惑わず歌っていることに少々驚きを感じた。普段から尼講やお講で練習しているのでしょうか？

私事ですが、昨年6月に私（釈俊正）のつれあい（釈久願）の父（釈智清）が亡くなりましたが、「忌」は気にせず9月に私の次男の結婚式を行ないました。そして今回も「年賀はがき」の季節になって「喪中葉書」は出さず正月の「年賀はがき」を出すことにしました。一般的には1年間は「喪に服す」として「喪中葉書」にするそうですが、熱心な先人達の念仏相続のおかげで、迷うこともなく、そのように決めました。私たちは「門徒モノ忌み知らず」といって「忌」（卜占祭祀＝雑行雑修自力の心）を気にしません。それが浄土真宗の教えですから。門徒の皆さん「領解文」を声に出して再確認してみてください。

門徒の皆さん、「年賀欠礼ハガキ」の再考を！

真宗門徒の親戚から「年賀欠礼・喪中葉書」が来ました。葬儀を出して初めて迎えるお正月の年賀状は「喪中」であることから遠慮するのが慣例のようですが、「喪に服する」という「忌中」や「喪中」の習慣も思想も仏教（特に浄土真宗）には存在しません。私は浄土真宗の立場から、往生浄土は不幸なことではありませんので、「年賀状を欠礼すべき」ではなく、「年賀状を出す方向で考えるべき」と解釈しています。さらに、故人の葬儀を浄土真宗の儀式にて執行されながら、年賀欠礼の挨拶状に「喪中」を引用することはおかしなことです。浄土真宗の教義からすれ

ば、故人は「阿弥陀如来さまと同質の仏さま」であり、故人を「不浄な者」とする「忌中」や「喪中」のケガレ観念は、道理に合わないことになります。そこで、世間に流されないひとつの策として、私が今年に出した「年賀状」を掲載いたします。「なるほど、浄土真宗では年賀欠礼は必要なかったのですね」と認識を新たにさせていただけたら幸いです。

真宗門徒であれば、そのご縁を大切にされて信仰にふさわしい表記を使用しご縁深い方々に故人の遺徳が偲ばれる年始の挨拶状を差し上げてください。受け取る側としても、そのほうが嬉しく思います。下記例を門徒の皆さん参考にしてください。

【例文】

慈光のもと、念仏ご相続うるわしく慶賀に存じます。

昨年「釈〇〇」が浄土往生し「満中陰」を7月に迎えました。私たち家族にとっては寂しい年でしたが聞法と仏縁を深くする年でもありました。私たち夫婦はお念仏のご縁に遇えて俱会一処の生活をするなかで、夫婦協議のうえ年賀欠礼（喪中）葉書は出しませんでした。私たちは「門徒モノ忌み知らず」といって「忌」（卜占祭祀）もあまり気にしません。それが浄土真宗の教えですから。また昨年9月には〇男「〇〇」が結婚式を挙げました。新しい年を家族一同力を合わせて歩んで参ります。今年もよろしくお導きくださいますようお願い申し上げます

なお今年は親鸞聖人750回大遠忌法要と俊正の還暦が重なったので記念して、お寺（金照寺）境内に等身大の「親鸞聖人像」を寄進建立いたしました。

「ケガレ」意識と「差別」 ～ハレとケ～

映画「もののけ姫」はインパクトのある物語だった。特にハンセン病患者や鍛冶師（タタラ）が登場する「エボシタタラ」。異民族（蝦夷）としての「アシタカ」、天朝とアサノの侍たち。ジコ坊に代表される謎の組織「師匠連」。彼らこそ中世日本の民衆の象徴ではなかろうか。H24年のNHK大河ドラマは「平清盛」である。松山ケンイチ（平清盛）が、貴族以外は人間として扱われなかった中世社会のなかで、どのような動きをするのか今から楽しみである。

さて、新年早々「ケガレ」の話で恐縮だが、「ケガレ」を説明するには民俗学でいうところの「ハレ（晴れ）」と「ケ（気）」の意味を知らなければならない。「ハレ」とは正月行事や祭りなどの「非日常」のことで、「晴れ着」「晴れ舞台」という言葉で残っている。「ケ」は毎日の日常のことである。「ケガレ」とは「ケ（気）が枯れる」＝日常でなくなることをいう。この「ケガレ」には「こと」としてのケガレと「もの・ひと」のケガレの二種がある。「こと」（出来事）としてのケガレには、通夜振舞いで酒や清めの塩で厄災を祓うという行為がつく。中世ではこれら祓いを担ってきた人が陰陽師、鉢叩き、千秋万歳、猿回し、春駒、節季候などの宗教者や芸能者である。ひな祭り、節分豆まき、なども災いを祓う行事である。ハレによりケガレを除去しケにもどすのである。ところがキヨメは死牛馬処理や刑執行も担っていたため、「もの・ひと」そのものが「ケガレ」とされ「浄一不浄」思想が加わりキヨメ＝ケガレ＝不浄とみなされるように変化したのである。現代の三昧聖の「納棺師＝おくりびと」もそうである。「死」は非日常の「ケガレ」であった。それが「死」を扱う人も「ケガレ」が（放射能のように）うつる危険なもの

だったのである。中世ではケガレ=穢れはうつる (=触穢思想) と考えられたので、「忌中や喪に服す」という慣習が生まれた。49日の忌明けもそこに由来している。「ひと・もの」については「穢れ=不浄」になり人や職業そのものが差別されるようになったのである。これが部落問題の最大のポイントです。ケガレには「こと(できごと)」としての「ケガレ」、言いかえれば「ある状況を説明する概念」としてのケガレと、本来は存在しないはずの「もの」や「ひと」自体をケガレとする概念、即ち「不浄」とみなすケガレがあります。ケガレを処理することをキヨメ・祓えと言いますが、その対象が違うことによって、同じキヨメの行為であっても、それを行う人々に対する差別意識も変遷していくのである。雑芸能を担った万歳や猿回しなどの「こと」としてのケガレを祓う人への差別意識は簡単になくなったが、「もの・ひと」である夙や散所民=部落のケガレ=不浄はなくならなかったのである。もう一度歴史的に価値付けを教えていかなければならない。差別意識の解消は、作りだされた「異(ちがひ)」をただす必要がある。

「ちがひ」の違い・・・差別と人権・同和教育

よく「同和教育」と「人権教育」はどこが同じでどこが違うのか?という質問を受けることがある。まず「差別の定義」だが(差別とは)「ある集団ないしそこに属する個人が他の主要な集団から社会的に忌避・排除されて不平等、不利益な取り扱いを受けること。その差別の表れ方はその社会の文化と歴史によって異なるが、差別される側の就業機会はせまく、他集団成員との自由な通婚が阻害され、しばしば居住地域まで限定されるという共通性がある。」一方、差別する側にとって「被差別者は自分たちと違う存在、である。この場合違うという認知が差別意識の出発点であれば、明確な理由で、ある人たちが差別の対象となってることの認識から出発して、それが違うはずだ、という意識をまねき寄せる場合もある。」いずれも自分たちとは違う、と言う認識が差別意識を生むのである。現実上の、あるいは架空上の差異に普遍的、決定的な価値づけをすることが差別なのである。そこで「違い」と「異い」について考えてみたい。人種・男女など一般に「人権」として取り扱いされている「違い」はもともとの、今あるちがひ(違い)であり、それらは互いの「違い」を「豊かさ」に変えていく学習が必要である。一方創り出された(る)ちがひ(異)は、「ちがひ」の誤りを認識していく学習が必要である。そこで、人権問題と同和教育で必要とされる学習の違いをあげてみた。「同和教育のコンセプト」では、もともと同じであった人々を「ちがう」存在であるとしてきた根拠を明らかにする学習(部落史学習)が必要である。「ちがう」として排除する考え方を維持させてきた社会意識・システムを変革していく学習が必要である。排除に基づく差別の実態を克服する取組みが必要である。の三点を挙げてみた。また「人権教育のコンセプト」では、お互いの「ちがひ」を認め合い理解しあうことを通じて「ちがひ」を「豊かさ」に変えていく学習が必要である。「ちがひ」を持った個人が集まり、豊かな社会・集団が出来るという実感を持たせる学習が必要である。排除に基づく差別の実態を克服する取組みが必要である。このなかで重要なことは、被差別部落の起源を江戸時代の身分制度に求める「近世政治起源説」は誤りであることは今日の部落史研究の深まりのなかで明らかにされてきている。そして創り出された「ちがひ」の根拠を「ケガレ意識」に求めることが多くなっている。このケガレという問題は歴史というより民俗・宗教の範疇に入る問題であるが、

もろもろの「差別」の要因として「ケガレ意識」が色濃く反映していることは確かである。……そのため、あえて「忌・喪」と係わって「ケガレ」と「差別」の問題を取り上げた次第である。以上長々と説明したが、私の現在の「仕事＝生涯学習」と関連する専門部分も多少あったので、ご了承ください。余談だが、こういう話をするに「あなたの講演」を聞きたいという人もあった。法話に繋がるなら本堂でやってみたい気もする。以上、くどくど書きましたが、もう一つ大事なことは、女性、子ども、障がいのある人、同和問題、外国人、HIV 感染者・HIV 感染者等、高齢者等が国内の人権課題とされるなかで同和問題はわが国固有の人権問題であり人権問題の牽引役となって他の人権問題を押し上げてきたこと。また他の人権課題は世界に共通した課題であることなどが挙げられよう。性悪説に立てば「差別心」は誰にでもある。それを出すか出さないか。気付くか気付かないかの差である。だから不断の努力が必要なのである。 合掌

2 2、近江八幡の春の火祭り

問題 2 2 ; 近江八幡市の宮内町の日牟礼八幡宮には「左義長まつり」と「八幡まつり」の二つの有名な「まつり」がある。そのうち「左義長まつり」は商売人の祭りといわれ、「八幡まつり」は十三郷（上ノ郷、下ノ郷）の農業用水の水利システムを軸にした農民の祭りだといわれる。その起点となった鷹飼町「井の島」の水源は今無いが、「祭り」だけが伝わっている。「八幡まつり」は第 1 日（4月 1 4 日）を「松明まつり」といい第 2 日目（4月 15 日）を「〇〇まつり」というが、近年は若者の減少で担ぐ人の確保も困難な状況となっている。第 2 日目の八幡まつりを別名、何んと呼んでいるか。

- ① 篠田火まつり ② 農業まつり ③ 太鼓まつり ④ 日牟礼まつり ⑤ てんびんまつり □

解答・・・・・・ **3**

<解説>

2 3、市内の干拓地の歴史

問題 2 3 ; 西の湖内湖の水郷巡りは、観光資源の 1 つで有名であるが、市内には、あと 4 つの内湖があったが、戦後の食糧増産運動により埋め立てられ今では干拓地となっている。大中干拓、小中干拓、津田内湖干拓とあともう 1 つの干拓地はどこか。（

- ① 日野川干拓 ② 安土干拓 ③ 野村干拓 ④ 水茎干拓 ⑤ 琵琶湖干拓 □

解答・・・・・・

<解説>

24、昔、組合立の蒲生中学校が近江八幡にあった

問題24；安土町の平成大合併より以前の昭和大合併により、旧近江八幡市が誕生したが、その副産物として旧八日市市と旧近江八幡市の組合立による「中学校」が創設されていた。その中学校は滋賀歴代最強中学校といわれ、漫画の舞台（宮下あきらのコミック本で実名が使われ発禁本となった）になったり、他校にも一目置かれていたり、いろいろな伝説をもった中学校の名前は。今の50歳以上の世代の人にはわかるでしょう。

- ① 八幡南中学校 ② 市辺中学校 ③ 日野中学校 ④ 蒲生中学校 ⑤ 船岡中学校

□

解答・・・

<解説>

25、「三方よし」の教訓

問題25；八幡商人が代々継承してきた経営理念であり「売り手よし」、「買い手よし」、「世間よし」から成る。商取引において、当事者の売り手と買い手だけでなく、その取引が社会全体の幸福につながらなければならない、という考えを何というか。近江の武将石田三成の旗印だった「大一大万大吉」に通じるものがある。

- ① 先義後利 ② 三方よし ③ 四方よし ④ 一人は万人のために、万人は一人のために
⑤ 儉約・堪忍・正直 □

解答・・・**2**

<解説>

近江商人なら誰でも知っているのが「三方よし」という言葉である。また、近江商人には八幡商人のほか、日野商人と五個荘商人が有名である。時代的には、八幡商人と日野商人は同じ頃の時期だが五個荘商人は明治期頃に活躍しているのが大きな違いであろうか。またその近江商人屋敷も「八幡表に奥の日野、五個荘の庭」といわれるように、八幡商人は、屋敷の表に金をかけ、日野商人は奥座敷に金を使い、五個荘商人は庭だということである。これはそれぞれの屋敷を見学すれば一目瞭然である。

26、近江八幡の金田教会で育った若林信康

問題26；近江八幡市内の教会の息子で若い時から、市内の同和地区に入り込み解放運動にも熱心であったフォークの神様と云われた人。「チューリップのアップリケ」で有名なフォークシンガーの人の名前は誰か。

- ① 高石ともや ②岡林信康 ③はしだのりひこ ④よしだたくろう ⑤さだまさし □

解答・・・・・・・・[2]

<解説>

27、初代全国水平社委員長の南梅吉氏のこと

問題27；市内の被差別部落に生まれ、若い時から部落改善運動に取り組み、大正11年、西光万吉ら奈良の燕会青年と共に全国水平社を立ち上げ、創立大会で初代委員長となった近江八幡出身の人物の名は。

- ① 南梅吉 ②松本治一郎 ③駒井喜作 ④坂本清一郎 ⑤朝田善之助

□

解答・・・・・・・・[1]

<解説>

解説が未完成の所がありますことをお詫び申し上げます。